

「せんせい、私たちの気持ちをよく聞いて」 —民族的少数者からの提言—

〈国際教育研究委員会〉 中間報告

目 次

はじめに—民族共生の教育を歩もう— (3)

I. 学校体験を証言する

母と息子のはなし—アイヌとして生きるということ— 北原きよ子 (9)

苦悩から立ちあがって—在日韓国・朝鮮人として学校に学ぶということ—

李 喜 奉 (49)

自分の中に流れている血—おしつけないで!— 任 璞 (113)

「中国を好きなんだ」—もっと知りたい!— 李 凤 梅 (127)

「お父さんとは一緒にでかけない」—定住難民として日本に生きる—

シンカムタン・レック (143)

「がんばって、がまんしなさい」はイヤ

—日系南米人のアイデンティティと日本の学校 豊住マルシア (158)

II. 提起されている問題を考える

单一民族学校から民族共生の学校へ (175)

アイデンティティ崩壊の危機 (181)

学校は子どもたちをどう励ませるか (185)

マジョリティが変わる可能性 (190)

国民の論理・住民の論理—アジア共同体づくりの視野のもとで (194)

討 論 (199)

Ⅲ. 資 料	(205)
(1) 日教組方針	(205)
(2) 日韓外相会議「覚書」教育協定	(205)
(3) 地方自治法	(207)
(4) 自治体の外国人教育方針リスト	(208)
(5) 国際条約	(209)

①国際人権規約(209)／②人種差別撤廃条約(210)／③教育における差別を禁止する条約(212)／④子どもの権利条約(213)／⑤移住労働者とその家族の人権保護条約(215)

はじめに

——民族共生の教育を歩もう

〈主題を選ぶ〉

私が国際教育研究委員会の委員長を依頼されたとき、即座に、日本における〈民族共生の教育を考える〉ことを主題にしようと決めた。私の気持ちのなかでは、これこそ国際教育の研究のさせまったテーマとして、強く意識されていた。

国際教育研究というと、ふつう、日本以外の国の教育動向に目がいく。社会主義体制の崩壊と教育、E Cの統合と教育といったようなテーマがすぐ浮かぶ。私も知りたいが、今回は禁欲しようと思った。

国際教育運動は大きく再編成され、教育インターナショナルが発足した。日本の教員運動に大きな思想的影響を与えたF I S Eは影が薄くなった。国際教員運動を歴史的に総括する時期にあるが、それも見送ろう。

カリキュラム改革がイギリスやアメリカで大きな課題になっている。日本の「産業化と教育」に負けるなという気持ちが体制側に働いているのが、ひとつのきっかけである。中国や韓国も日本を意識してカリキュラムの手直しを行なっている。私は最近大学院で「学習指導要領の比較研究」をやり、韓国、中国、フランスなどの学習指導要領を翻訳し、比較した。面白い発見もあるが、教育総研に持ちこむのは控えよう。

あるいは評価の比較、具体的には通信簿の比較研究は、日本のそれを改善するために必要であるので、教育総研には格好なテーマである。海外からの帰国生徒の通信簿を手がかりにするのがよい。個人的には着手しているが、これも抑えよう。

これらは研究するにこしたことはないが、日本に住む子どもの生き死ににすぐかかわってくることではない。

むしろ、今、私の目の前に、何百、何千という他民族の子ども、外国籍の子どもが苦悩にあえぎ、生き死にの境をさ迷っている。99

パーセントの日本人の子どもに包囲されて、その非国際的・閉鎖的心性のために、これら他民族・外国籍の子どもは1パーセントのマイノリティ、民族的少数者として差別され、いじめられ、泣いている。

日本人の子どもの心性を国際化して、マイノリティの子らが笑顔で、心を開いて生き、学べるようにしなければならない。このような民族的他者に開かれた教育、これを〈民族共生の教育〉と呼ぶが、それを創り出さねばならない。

これこそ日本の国際教育が直面しているもっとも緊切な課題である。内なる国際化なくしてなんで国際教育をや、である。もとより、わが日教組には取りくみの先頭に立ってもらわなければならない。

〈認識を変える〉

日本社会は多民族社会である。1億2千万人のうち、1パーセントはマイノリティの人びとである。アイヌ民族—5万。外国人登録をしている外国籍の人びとは在日朝鮮人—70万、在日中国人—14万をはじめ約100万。中国帰国者—1・2万、インドシナ難民—8千、アジア人労働者および日系南米人—60万。優に1パーセントを越える。私たちにとって必要な日本社会認識は、日本社会が多民族社会であるという認識である。

これに伴って、日本の学校も多民族学校になっている。小、中、高の在学者はそれぞれ916万、518万、546万、合わせて2080万。そのうち、マイノリティの子らはアイヌ民族—5千弱、在日朝鮮人—9万、在日中国人—1万のほか、中国帰国者やインドシナ難民、日系南米人の子らが1万人以上在籍している。0.5パーセント強であるが、小・中・高のほとんどの学校にマイノリティの子らが学んでいる。

教職員にとって必要な学校認識は、日本の学校が多民族学校としてあるという認識である。単一民族学校という常識の呪縛から自らの学校観を解放しなければならない。

学校にマイノリティの子らが学んでいるという民族的事実に気づけば、学校において民族共生の教育、いいかえれば、内なる国際化の教育をすることが、課題として必然化する。

〈日本の学校の歴史とマイノリティ〉

マイノリティの子らの在学に気づくと、日本近代学校史にたいする見かたが異なってくる。今まで見えなかつた側面が浮かんでくる。教育史認識も変わらざるをえない。

日本の学校には日本人の子どもだけが学んでいるのではないのである。歴史をふり返ると、マイノリティの子らが来学する三つの波があった。

第一の波は、いうまでもなく、先住民のアイヌ民族の子らが来学するようになったことである。その歴史は1870年代から始まり、今日に至る。

第二の波は、朝鮮人の子らが学校に姿を現すようになったときである。1930年代のことである。それ以降今日まで、在日朝鮮人の子どもは日本の学校に学ぶマイノリティのうちの最大多数を占めつづけている。また、在籍している学校数もきわだって多い。ここに、在日朝鮮人の子らにかかわる日本人教師の教育運動が起こされる直接の契機があろう。

第三の波は1970年代以降である。文部省流にいえば「日本語教育が必要な外国人児童・生徒」が急増した。中国帰国者の子、インドシナ難民の子、80年代に入って日系南米人の子。これらの日本語のできない子らを迎えて、学校現場が対応にせまられて動き始めた。これが、今日、外国籍生徒を意識化した正直な契機であろう。

このようにふり返ると、日本近代の学校にマイノリティの子らが在学していなかった時はないのである。なのに、私たちは単一民族学校という曇った眼鏡をつけて日本近代学校史を見てきたから、この子らの存在を見すごし、この子らの声を聞くことをしてこなかつた。まことに一面的な、というより日本人本位の大民族主義的な教育史認識であった。

〈マイノリティの声を聞く〉

このように歴史と現在を捉えると、マジョリティである日本人側においてもっとも欠けていたのは、マイノリティの声に耳を傾けるということであった。無視して存在を見なければ、その声に耳を傾けようもなかつた。

学校の教職員、教育研究者もまた、その圧倒的大多数は日本人で

あった。今もそうである。マジョリティゆえのこの傲慢な誤まり、それに由来する無知を共有する。

マイノリティの子らが学校でどのような体験を味わってきたのか、教職員によってどのように扱われてきたのか、まわりの子らからどのようなめにあってきたのか、その具体を私たち教職員は深く、ていねいに聞いてこなかった。だから、その子らが学校や教職員やまわりの子らにたいして何をしてほしいのか、どう変わってほしいのか、その思いをよく知らないできた。

このような無視、そして無知を正すには、どのような第一歩を踏み出したらよいであろうか。

いうまでもなく、無視してきたマイノリティの声に耳を傾け、その学校体験を具体的に知ることである。学校や教職員やまわりの子たちにたいする望みを知ることである。その肉声を聞き、体験と望みを記録することから歩き始めるしかない。

教職員の側が、かりにも、マイノリティへのわが無知を棚上げして、学校への適応を先に説くようなことをしてはなるまい。こうすれば、アイヌの子らに犯した誤まり、在日朝鮮人の子らに犯した誤りに引きつづいて、三たび、ニューカマーの子らに誤りを犯すことになる。

〈学校体験の話〉

以上のように考えて、私たちの委員会ではマイノリティの人びとの学校体験史を聞くことから始めた。これを最重要視した。

このような趣旨を理解してもらって、お話をして頂いたのは、話を伺った日時の順にいうと、次の人のびとである。

李喜奉（リヒボン）さん。在日朝鮮人。

三女の母。神奈川県在住。2月22日。

李鳳梅（イファンメイ）さん、任璞（レンパー）さん。中国帰国者。

李さんは日本の高校卒、任さんは高校在学中。

東京都在住。3月26日。

シンカムタン・レックさん。ラオス人（インドシナ定住難民）。

二子の父。神奈川県在住。4月5日。

豊住マルシアさん。日系ブラジル人。

日本語指導員。神奈川県在住。4月30日。

北原きよ子さん。アイヌ民族。

一男の母。埼玉県在住。5月11日。

アイヌ民族、在日朝鮮人、中国帰国者、ニンドシナ定住難民、日系南米人から一人づつお話を伺ったわけである。一人ひとりの体験談である。個別的な体験であるから、すぐにそれぞれの民族の子らの経験として一般化しないほうがよいと思うが、にもかかわらず〈共通の運命〉を体現しているように感じられる。

第一部はこれら六人の肉声を記録したものである。

〈われらが仲間〉

ここで委員会のメンバーを紹介しておこう。5人で構成している。

李喜奉さん。娘たちが日本の学校のなかで苦しむ姿に共苦することをとおして、学校と教師の問題性に気づき、PTA活動に取り組み、社会へ発言するようになった。「オモニの奮戦」を必要とする学校に変えるために奮戦している。

榎井縁さん。ニューカマーの生活や識字の現場を足で歩いて知り、詳しい。『多文化・多民族社会の進行と外国人受け入れの現状』、『もっとあなたに出会いたい』など、在住外国人と共に暮らすための本を編集・執筆している。神奈川につづいて大阪を歩いている。

岩田忠さん。葛西中学日本語学級創設以来17年間、中国帰国生徒とつきあい、苦労を共にしてきた。『日本語学級の子どもたち』はじめ、多くの記録を綴っている。『教育評論』にも書いている。この春、不当配転され、提訴中である。

笛川孝一さん。アジアの花嫁の実態調査に取り組んでいる。法政大学の社会教育の教師。社会教育研究者のアジア交流の先頭に立ち、韓国、フィリピン、インドネシアなどを訪ねている。住民の論理が民族共生の糸になるという。本委員会の事務局長役。

小沢有作。在日朝鮮人教育にかかわって30年。民族共生の教育に余生をかけている。『共育ちの道へ』がアドバンテージサーバーから出ている。これをみると、小沢が被差別少数者とかかわる実践から学んで考えを形成していく様子がよくわかる。

それぞれが自分の現場をもっている。そこから考えようとしているのが取り柄である。第二部では、これら5人が、第一部の肉声から何を課題として汲み取ったか、記している。

〈今後の計画と私の望み〉

本委員会の発足にさいして、私は三つの作業を計画した。

- ① 親と子の声を聞く。それをとおして、われら何をなすべきかを考える。
- ② 日教組・各県教組と相談して、在学する民族的少数者の教育実態調査を行いたい。
- ③ 各教組、自治体等で出しているアイヌ民族や在日外国人にかかる教育指針などを集め、これまでの歩みがわかる資料を作りたい。また、これらマイノリティの在学者の数字を民族別、都道府県別に調べておきたい。

第二年度は②と③に重点を移したい。②に取りくむとしたら、日教組、各県教組の協力が必要である。これをお願いしなければならない。

これらを踏まえて、民族共生教育について提言を行いたい。私の希望はこれに日教組が耳を傾けてくれることである。アイヌ民族や在日外国人の子どもたちの自立の教育について、またこれにかかる日本人の子どもたちの連帯の教育について、日教組が堂々とした本格的な方針を打ち出すことが、この子らの未来を明るいものに開いていくこうと信じるからである。

(小沢有作)

I 学校体験を証言する

母と息子のはなし —アイヌとして生きるということ—

北原きよ子

「母さん、よくぐれないと生きてるよね」

こんにちは、北原きよ子でございます。お前はおてんばな女の子だって母が言いました。それは私の小さいときからの悩みでした。それに加えて、おっちょこちよいなものだから、地図を持っても必ず反対の方向に行ってしまう。本当に私は狩猟採集民族の子孫であろうかと（笑い）、日々悩んでいます。

17才の息子が、去年あたりまでたいへん私に厳しくて、「本読むな、昼寝するな、飯つくれ」って言うものですから、私は反抗したくて反抗したくて。なんて言って反抗したらギャフンと言うだろうかと思って、考えた末に「ぐれてやる！」と言ったら、「すでに母さんぐれている」と言われた（笑い）。全然効き目なくって。だけど生まれてから47才になる今日まで私が生きてきたことを、子どもが側で聞いて育ってきて、彼はこの間言ったんです。「母さん、よくぐれないと生きてるよね」って。そうか、少しあはわかってくれたかと思っています。

I 日本政府の責任を問う

私の親は樺太生まれです。母は両方とも樺太アイヌの子孫です。同化政策の無惨さ父は白老のアイヌの母親と、岩手のシャモの父親の間に生まれました。そういう父母から私が生まれました。

母は今77才になるんですが、ちょうど同化教育の真っ盛りのときに教育を受けさせられたために、神武、綏靖、安寧、懿徳という歴代天皇の名前をつい最近までスラスラ言えちゃっています。アイヌには『カムイユーカラ』とか『ユーカラ』という伝承文学があるんですが、本当に頭の中に入り込んで、それを語る。『ユーカラ』の

方はどの民族にもある国造り物語であるとか英雄伝であるとかで、これは節をつけないで語っていく。長いものになると一昼夜もかかる。ですから母が、124人、実際にいたかどうかわからない天皇の名前をああやってスラスラ言える、あの暗記力を持ってしたらば、一昼夜かかるユーカラを覚えることは不可能ではなかっただろうと思います。

私は本当に、日本の明治以降の政府がアイヌに対してやった同化政策の無惨さ、これは私は孫子の代まで、日本政府の責任として追及していきたい、というふうに思います。

いろんな方とアイヌに対してやられた同化政策についてお話すると、「それは朝鮮や台湾に対してやったことと同じですね」と言っています。だから私はいつも言うんです。「同じなんじゃなくて、アイヌにやって成功したことを、台湾や朝鮮にやったんだ」と。

アイヌは数が少ないっていうのも、日本が敗戦になってもそのまま国民としておかれ、解放されなかったから。そういう点では、朝鮮や台湾は、本当にきちんとした戦後処理はなされていないけれども、その国の人たちは独立を回復することができた。その結果、民族としてのアイヌを孤立させることができている。

そういう中でアイヌは強引に国民に組み込まれて、戦争にとられる義務だけは平等に与えられて、ほかのあらゆることは平等に扱われていない。そして劣等なる種族アイヌを教え導いて、立派な皇国の臣民にしようという、そういう教育方針のもとでやられてきた。その結果として子どもが生まれてきたことを呪い、親を呪い、そしてアイヌに生まれたくなかった、シャモになりたかった、そういういつて思春期に悩み続けながら大人になっていく。同じことを、自分の子どもから言われる立場になっていく。そういう世代を繰り返して生きていく、という悲劇。それをわかってほしいと思います。

日本はアジアの各国に対してきちんとした戦後処理をやらなきゃいけないし、国民が主権になった今、それをやらせるのが国民一人ひとりの責任だろう。しかし、その前に忘れないでほしい。アイヌがそういう歴史を背負って、そして日本の国民として今いる、ということを。

樺太でも北海道でもそうですが、アイヌと朝鮮人のカップルって多いんです。そしてその中で生まれた子どもたちは、どちらにいってもいじめられるわけです。私のところも、叔父がそうでした。

アイヌと朝鮮人
一生活保障をしない
引揚政策

母方の祖母がつれ合いに先立たれて、あの当時、夫に死ななれば再婚しなければ食べていけないという、そういう状況の中で、何度も結婚するんです。その何度もかの相手が朝鮮人であったために、叔父が二人、半分朝鮮人ということです。

その叔父は、戦後北海道に引き揚げてきた中で、中学で優秀な成績をおさめながら、卒業式の総代から、卒業式の当日にはずされて、町の有力者の子どもに差し替えられました。東京に行って勉強したいって言うから、「頑張って勉強しろ」とうちの母が励まして、それで三鷹に出てきました。三鷹で一生懸命頑張りながら、なかなか思うようにいかず新興宗教に走って、その中で突然死んだ。もう一人の叔父は、50代です。今、北海道にいますけれども、四人の子どもたちを育てながら、非常に苦労して生きています。

私は小学校のときから心が痛かったことは、私を「アイヌ、アイヌ」っていじめる子どもたちが、私をいじめないとときは朝鮮人の子どもをいじめている。私は自分がいじめられないからホッとするというんじゃなくて、私がいじめられないときに朝鮮人の子がいじめられている、そのことのつらさ。泣きました。。

小学校5年のときに、樺太から叔母たちが帰国しました。私のいとこは本当なら中学生なんだけれど、帰国のハンディがあるだろうからということで、私と一緒に5年生になりました。そのいとこが、とってもかわいい利発ないっこが、いじめられるのを見ながら私は泣きました。

日本の政府は引き揚げさせても何の生活の保障もしないで放り出す。それはうちの親たちが引き揚げてきたときも同じです。昭和33年に引き揚げてきた叔母たちも同じ。そのため、叔母たちは夢にまで見た日本での生活は如意、子どもたちの不幸。その中でどうやって生きていくのか。自分の力でこの不幸をはねかえしていくと、必死になってたたかった叔母ですが、結局、アルコールにのまれて死んでしまいました。残されたいとこたちのその後の人生を思うとき、私は涙が出ます。どうぞ負けないで強く生きていってほしいと思わないときはありません。

II 学校時代

私は、1946年に北海道の余市というところで生まれました。45年 いじめにあうの8月15日に緊急引き揚げ命令で、樺太から北海道に渡された親た

ち。北海道に着いても、住むところも食べるものも仕事もない。そういう状況の中で北海道の生活をスタートさせました。私の上に兄と姉がいて、そのほかにさっき話しました叔父二人、母方の祖母がいました。それだけの人数がいながら、支給されたのは、何を原料としてつくったのかわからない、重たくてゴワゴワして、ちっともあったかくない軍隊毛布たった二枚でした。そういう生活をスタートさせたと聞かされています。ですから、生活はとっても苦しいものでした。でも私は小学校に上がる前、生活が貧しくっても、父さん母さんが働きに行ってていなくても、私は寂しくなかったし、つらくなかったです。幸せでした。

小学校へ上がるとき、一生懸命、親が苦労してジャンパースカートを買ってきて、新しいゴムの赤い靴を買ってきて、ランドセルを買ってきました。ランドセルはボール紙を芯にして、その上に薄い布をコーティングしたものでした。ほかの子たちが、自分のは豚革だとか牛革だとか言っているときに、でも私には、その言っている意味がわからない。自分の持っているランドセルと友だちのランドセルの材質の違いも全然わからない。ただ持っているものは同じ、同じランドセル持ってる。喜びにあふれて学校に行きました。

でも、何もなかったのは入学式の日だけです。次の日から私に浴びせられたのは、やはり「アイヌ」という言葉でした。アイヌということは私は聞いていました。何であるかはわからないけれど聞いていました。でも友だちが何で「やーい、アイヌ」って言うのか、全然わからない。友だちは「やーい、アイヌ」って言って、私がキヨトンとしてるとおもしろくない。だから髪の毛を引っ張って、「やーい、アイヌ」。殴って「やーい、アイヌ」。けっとばして「やーい、アイヌ」とやって。そして私が戸惑ったり困ったりしている、その場を見ておもしろがってワーウー囁き笑って、みんなでサッと逃げていく。そういう日が続きました。

だからアイヌが何であるかわからないけれども、自分はいじめられているということはわかりました。「どうして親たちは、あなたに『アイヌ』ってことを教えなかったの」と思われるかも知れませんが、親たちにそんな余裕はありませんでした。

私はいじめがあると知って、学校の行き帰り、友だちと一緒にならないようにする以外になかったのです。だから朝は、ゆっくりゆっくり歩いているから、遅刻の常習者でした。たぶん担任の

先生は、「あの子は毎日毎日遅れてくる」と思ってらしたと思います。

帰るときは一番先に教室を飛び出した。ものすごく柄ばっかり大きくて走ることも遅い私は、運動会でいつもビリっつけっぱかりだったんですけども、ともかく一生懸命教室を飛び出して走って走って、もうここまで来たら友だちが絶対追いつかないというところまで走り続けて、そこからはゆっくりと普通の歩き方で帰りました。

友だちは道草をして帰ってくるから、一時間も二時間も、私が帰ったあとから帰ってくる。そうすると近所のおじさんが、「お前は学校に行かないで、どっかでいたずらして帰ってきたんだろう。こんなに早いはずがない」と私に言ったことがあるんです。「私はちゃんと学校に行った」と言っても信じてくれない。あとで、自分たちの子どもが二時間も三時間も道草をして遅くなるということがわかつて、自分たちの子どもを叱りつけたなんてこともあります。

私が小学校に入ったのはニイカップ（新冠）というところなんです。ニイカップにあるその一筋の通りは今、「サラブレッド銀座」と言われていて、それくらい競争馬の産地として有名なんです。かつてはハイセーコー、今はオグリキャップとかいう馬が、競馬のことは何もわからないんですけど、ニイカップの産です。

ニイカップに御料牧場というのがあります、それをつくるときにアイヌを立ち退かせています。立ち退かなければ、家に火をつけて焼いてしまうと脅かして。冬のさなかに雪の峠を越えて、アイヌたちは出て行ったわけなんです。その跡につくられた御料牧場。

戦後、全部じゃないんですけど、一応解放されることになりました。そのときにシャモの御料牧場の雇い人たちが、「土地を自分たちに」と願書を出しました。それから義務人夫という、ふだんは自分の田畠を耕しながら、御料牧場から呼び出しがあったときには自分の田畠をそっちのけにして駆けつけなければならないっていう、そういう人たちがいたんです。その人たちも「土地を自分たちに」と運動しました。そのときにアイヌも、あれはもともと自分たちの土地なんだ、自分たちに返してくれ、ということを道庁にかけあいました。道庁は卑劣にも、中央政府には「アイヌはこのことで上京するけれども、会う必要なし」と連絡をしておいて、「ここじゃ返事のしようがないから、東京へ行け」というふうに妨害をしました。やっと5戸のアイヌにだけ返された。あとはほとんどシャモたちに分け与えられたわけです。

そこへうちが引っ越して行ったわけなんです。だからシャモはアイヌに対して非常に憎しみを抱いてたというわけです。そういう土地柄であったんです。そのことを私は知る由もないことです。そのことが私にたいするいじめになったということは、今になってわかったことです。

小学校3年くらいのときに、社会科の見学で、御料牧場だった当時、天皇が来たときに天皇だけが使う玄関を見に行きました。私は、天皇って何であるかよくわからないけれども、同じ人間なのに、たった一人の人間、それもいつ来るかわからない人間のために、なぜそんなにお金をかけて玄関を一つつくらなくちゃいけないのか、疑問をもちました。子どもの感覚で、それだけのお金があったらたくさんの人間が何年も生活できるじゃないかと感じました。

小学校三年のときから夕飯の支度は私の仕事でした。お米半分、麦半分のご飯で、一日一回しかご飯を炊きません。それを炊くのが私の仕事だったんです。こめびつを底をガラガラ、ガラガラかき回してやっとかき集めた米。それでもお米を研ぎながら、この場はいいけれど明日はどうなるんだろうか、そう思って私は暮らしていましたから、そういう私の生活実感から、天皇が来たときだけに使う玄関というのは、本当になんとも不思議で、大人ってなんとおかしなことをするものだと思っていました。

ニイカップにトド岩というところがあります。海の動物のトドがたくさん寄ってくるところなんです。それを私が小学校のときに、ハンガンダテというふうに呼んでいました。それは九郎判官義経の判官なんです。なぜか北海道には義経伝説というのがたくさんあります。これは、不埒な人が「われは義経であるぞ」といって、アイヌを騙したんだと私は思ってます。それはともかく、義経が流れてきて、アイヌの女性がかくまった洞窟がそのハンガンダテである、ということで、遠足なんかでは私たちそこへ行かされたんです。そのあとはトド岩といって、今はまた変わった名前をつけています。

小学校の先生が、なぜハンガンダテであるかっていうことを授業のときに教えてくれたんですが、先生が信じていたかどうかはわかりませんけど、とにかくそういうふうに話をしてくれた。そしてそのついでのように、自分がアイヌの古老から聞いた話ということで、

天皇用の玄関はおかしい

いろんなことを話してくれました。

その中で、ニイカップのアイヌとビラトリのアイヌは山一つ越えただけの違いなんだけど、とても仲が悪くて、ハンガンダテに義経神社があったのに、ビラトリのアイヌは「義経が来たのはビラトリだ」と言って押しかけてきて、神社を持って行ってしまった。だからビラトリに今、義経神社があるけれど、もとはニイカップに義経神社があった。そういうようなことを聞かせてくれました。

いったい先生はどういうつもりでそんな話を私に授業の中で聞かせてくれるのか。聞いてる友だちはみんな、先生の話よりも、それを聞かされてる私の方をチラッ、チラッとうかがって見て、目配せし合っているわけです。いったい何のために先生はそんな話をするのかというふうに私は恨みました。

大変な生活でしたから、親戚も決して経済的に余裕があったわけではないけれど、兄も姉も親戚のところに一人ずつ預けられたりして、私と一緒に暮らしていることはほとんどなかったんですが、2ヶ月間だけ小学校で兄と一緒にになったことがあります。

そのとき、兄は朝ご飯がすむと小学校にすっ飛んで行くんです。それは授業の前に遊びたいわけです。兄はやっぱりいじめられていきましたけれど、決して負けていない兄でしたから、メチャクチャなことを言う上級生を大人の背も立たないくらい深い用水の中に投げ込んで、逃げて帰ってきたりとか、それくらいやんちゃな兄でした。人生に向かってもそういうふうに立ち向かっていった兄でした。

その兄がある朝、授業がはじまる前に屋内体操場で鬼ごっこをして遊んでいたときに、入り乱れて遊んでいるわけですから、ぶつかったわけです。そうしたら、ぶつかった方が「なんだ、このアイヌ」と言ったわけです。兄は怒って「このアイヌとはなんだ」と言って、大喧嘩をした。そこへ、誰かが呼びに行って兄の担任を連れてきたんです。

兄の担任は25、6のまだ大学を出たてくらいの若い人でした。兄は勢い込んで「先生、こいつ俺のことをアイヌって言ったんだ」と言ったら、「アイヌにアイヌって言って何が悪い」とこう言ったんです。それはね、正論なんです。だけどアイヌが北海道におかれてきた状況の中で、その言葉がどういうふうに使われているかということを教師がなぜわからないのか。兄が訴えたかったことはそのこ

「アイヌといつて何が悪い」

となんです。それに対して教師はそういう答をした。

兄は怒りにふるえて、そのまま飛び出して裸足で家に帰ってしまいました。それっきり学校に行きませんでした。小学校5年でやめてしまいました。両親は、そんな馬鹿な教師に教えてもらうことなんかないから、学校なんか行くことないって言いました。

中学になって、また私は引っ越しするんです。ともかく忙しい人生でした。こっちに2ヶ月、あっちに3ヶ月というふうに、小学校だけでも10回くらい引っ越しをしました。学校が変わらないだけで、引っ越しをしてるんです。中学になるときにまた引っ越しをして、そこがビラトリの奥だったんです。

そこではクラスの3分の2くらいがアイヌの子どもたちでしたから、ほかの子どもたちは「アイヌ、アイヌ」という言葉は使いませんでした。その代わり何があったかというと、アイヌ同士がアイヌを侮辱しあうんです。「やーい、ペナポリのアイヌ、ペナペナした人間がいるからペナポリ」。言われた方は「なんだ、お札ないところだからオサツナイ」とか言って。オサツナイというのは「乾いた沢」という意味です。ペナポリというのは「踏のある沢」という意味です。踏のある土地という地名です。シャモの子どもたちはそれを高みの見物して喜んでるわけです。代理戦争をやらされたわけです。

そのころ、全国学力テストというのが行われる。担任の先生がウタリの、ウタリというのは「同胞」という言葉なんですが、ウタリの子どもたちに向かって「お前たちがいるからこの学校のレベルが下がる、明日は学力テストだからお前たちは休め」と言ったんですね。

私は一生懸命勉強してました。授業中だけはいじめられないから、授業中だけが私にとっての落ち着ける時間だったんです。だからというわけでもないんだけど、ともかく親も先生も「よい子になりなさい、よい子になりなさい」と言う。よい子になればいじめられないかと思って、一生懸命勉強した。だから私に向かって教師はそう言わなかったけれど、ほかのウタリたちにそういうふうに言ったんです。学校のレベルがお前たちのために下がるからお前たちは休め、と2、3人の子どもたちに言ったんです。なんてひどいことを言うんだろうと思いました。

ペナポリのアイヌの子とオサツナイのアイヌの子

アイヌの子は休め

山形出身のその教師は、のちに結婚して生まれた子どもさんが障害児で、僻地でお医者さんがいない土地で障害児をかかえて苦労されたということは知っていますけれども、でもウタリの子どもたちに向かってああ言ったことは、生涯許せないと思います。

高校にとても行けない経済状態でしたが、私はそのときだけは涙ながらに訴えて、高校に行かせてもらいました。育英会の奨学金を受けながら。学校はとても通学できないところにあったものですから、経済的にたいへんだったんですけど学校の寮に入ったんです。

学校の寮では、ここがあなたの部屋ですと言われたところに荷物を持っていったら、すでに荷物が入っていました。学校側の配慮としては、同じ出身中学の子ども同士を同じ部屋にした方がいいだろうということで部屋割りをした。ところが先輩は私と同室になることを嫌がって、私が入るべきところに勝手に自分の好きな子を入れてしまった。私の行く先がなくなっちゃったから、私は全然違うグループの部屋に入りました。それだけでも飽きたらなからしくて、みんなで何ヵ月間も口をきかないということをされました。

高校の教師たちは、無関心な教師もいましたけれど、「アイヌ、何で高校に来た」という態度をとる教師もいました。その教師はほかの生徒たちに対しても、何かというと履いてるスリッパをぬいでほっぺたをひっぱたくという、そういうとんでもない教師でした。

私は、北海道の教育がどんなにアイヌの子どもたちを傷つけて、傷つけて、傷つけるようにしたか、教師自身が自分たちのやってきたことを振り返ってほしい。何を自分たちはしてきたのか、子どもたちを教えるとはいってい何なのか、そういう反省を一度でも持つてもらいたい。

みんながみんなそういう教師だったわけではないけれど、総体としてそういう教師たちであった。教師たちは北海道で生きるアイヌの子どもたちに、どんなに生きる勇気を失わせるようなことをしたのか。それは本当に、心にとり返しのつかない傷を負わせて、学校を巣立っていかせた。それが教師のやることなのか。もし教師としての魂があるならば、そういう自分を許せないはずだ。今からとり返しがつかなくても、反省することによって、同じことをあとから来た者に繰り返させないということはできるはずだ。私はそのよう

「アイヌ、なんで高校にきた」

生きる勇気を失なわせる教師

に思っています。

私は北海道で、先生たちの教育研究集会に何度か出席しました。あのころは確か40人学級をというふうに言っていたと思うんです。先生たちがなぜ40人学級と言うのか。その話を聞いて、なるほどなあと私は思いました。一人ひとりの子どもに、その子どもの生活から何から把握して、なに故にその子は戸惑っているのか、つまづいているのか、何を求めているのかということを教師がしっかりつかむためには、人数が多くてはできないんだ、行き届いた教育をするために必要なんだ、そういう先生方の訴えがよくわかりました。

だから私は、できないながらも署名用紙をもらってきて、自分の知ってる限りの人に頼んで署名してもらったりしました。そして教育研究集会を聞きに行って、そして、何か意見はって言われたときには、今もそうですが、うまく話せないながらも、自分が先生たちに何を願っているのか訴えました。それは私のあとに来るウタリの子どもたちが私と同じ悲しみに泣かないように、先生たちにわかってほしいということです。それを訴えたいために私は通いました。

人生のスタートの時点で、暗い影を持つ子どもを育てないでほしい。それが私の心からの願いです。生まれてこなければよかったと思う子どもたちを育てないでほしい。頑張れば道は開けていく、世の中はそういうふうにして発展してきたんだよって、希望を語る教師であってほしい。

III 社会に出て

23才のときに、あるところへ面接試験を受けに行きました。

教師は希望を語ってほしい

私は日本が本当に民主主義の国になったならば、アイヌに対する差別はなくなるんだと思っていました。また、沖縄があのように米軍支配下にあることに対して、私は本当に沖縄から基地がなくなるようにという訴えに共感しまして、そういうデモ行進に呼びかけられれば、昼休みに一緒に行ったりしました。実はそういう民主運動の中で、自分が論理的に詰まってくると「アイヌ」と口に出して差別する人がいました。

就職差別を受ける

そこで私は再び、自分はどうやって生きるのかと思いました。岐路に立たされて、私はやっぱり自分の育った土地に行って、つまりアイヌのたくさんいる土地に行って、そこでアイヌと一緒に、ウタ

りと一緒に自分の生きる道をさがしていこう、そう思って田舎へ帰ったんです。

田舎じゃ就職できないことを覚悟して戻ったんですけど、案の定そうでした。そういう中でやっと見つけた就職口の面接の最後に、あなたは給料をいくらほしいかと言うから、私はその町の給料の相場を調べていきました。私は中途採用で条件も悪いということも考慮にいれて、それよりも低い金額を言ったんです。そしたら、そんなに高い給料は払えないからよそへ行ってくれと言ったんですね。そう言われば、私は何も言いようがないから、しかたなく帰りました。

私がそこを出てまだその辺にいるころ、面接した社長が「あれはアイヌだったんだ。アイヌを雇っちゃ店の沽券に関わる」と言って笑い飛ばしたんです。

なんで私が社長が笑ったことを知っているかというと、もちろん聞こえたわけじゃない。その会社は、私の今までの学校で受けたいじめ、就職した先でのいじめ、アイヌと一緒に働くのはいやだと言って、雇い主がそういう理由では首にできないから、いろんな理由をつけて首にする、そんなふうにして何度も何度も首になりながら、一生懸命働いてきた、その私の体験を聞いた友だちが、自分のところの社長は人格者だからそんなことはないから、ちょうど欠員ができたから来てごらんなさいよということで、紹介されて行った所でした。その結果がそういうことだった。あまりな言葉に友だちはショックを受けて、その晩、泣きながら私のところに来て「ごめんなさい、ごめんなさい」と泣きながら、私に謝って教えてくれた。

そのときに私は、どんなに頑張っても私についてまわるアイヌっていうたい何なんだろう。図書館に行きました。図書館にアイヌのことを書いた本がない、本当にはない。その中でやっと見つけだした本の中に、旭川人権擁護委員会が出した本がありました。その中に、北海道旧土人保護法というものがあるということが出ていたんです。

私は小学校のときにアイヌっていじめられて仲間外れにされたとき以上のショックをそのとき受けました。私たちは「旧土人」と呼ばれる存在なのです。11月の寒い日でした。川から吹き出てくる風よりも、心の中に吹く風が寒かったです。でもそこから目をそむけては、自分の生きていく道は見えてこない。思い直して私はまた図

「旧土人」の呼称に
心がひえる

書館へ行って、その本を読み続けました。

北海道ウタリ協会、今はたいへん組織力が高くなっていますけど、就職差別の訴えを退けられるその当時は本当に低かったんです。そのころ、ちょうど静内支部というところの総会があり、今も理事長をしていますが、本部の理事長の野村さんが、そのとき来賓としてきました。私は、若いのになぜウタリ協会に入るのかって珍しがられながら、自分からウタリ協会に入りました。ウタリ協会っていうのはアイヌの権利を守るところだと、私は信じた。

ところが、総会で話されたことは、中身のないことばかりでした。わずか1時間足らずで終わろうとしました。それで、「これで終わります」と言ったとき、私はびっくりして手をあげて言ったんです。

「私はこういう就職差別を体験した。これは私一人のことじゃないはずだ。もっともっと同じことに耐えながら生きているウタリはいるはず。ウタリ協会は就職差別を取り上げてください」と言ったんです。そうすると野村さんは、「昔はそういうことがあった。でも今は、この町の人はみんな人格者だ。あなたの思い違いだ。元気を出して働きなさい」そう言うんです。私は、「そんな思い違いなんてとんでもない。現に私が、半月前に体験したことなんです」と言っても、取り合ってもらえませんでした。そばにいた静内支部の男性たちも、みんな異口同音に、この町は住みいい町なんだから頑張って働け、そう言つたんです。それで終わりになっちゃった。私はもう、本当に納得できなくて納得できなくて。

それで帰ろうとしたら、旦那さんが総会にこられないその代わりに、奥さんたちをよこす家庭がいくつかあるわけなんです。その奥さんたちは、席はいっぱい空いてるのに、どんなに言われても中へ入ってきて座らないんです。入り口の方に固まって、肩を寄せあって話を聞いているんです。そのおばさんたちが帰らないで、下で待っていて、私が降りていくと、「おねえちゃん、おねえちゃんの言うこと本当だよ。自分には子どもがいるけれども、自分の子どもたちも同じことを味わってるよ。おねえちゃん、負けないで頑張ってね」って言つたんです。

20数年たった今、野村さん、国連の人権擁護委員会にも行って、「アイヌは差別されている」って訴えたんです。声を高らかに訴えたんです。私は、あの人が差別の現実に立ち向かっていくというふ

うに姿勢が変わったのならば、私はそのことでもって、過去に彼が私に対してとった態度を許そうと思う。また、私は、彼がウタリ協会の一員であるならば、いつまでも過去のことを持ち出して彼を責めようと思わない。だけど彼は責任ある立場にいて、世界に向かって発言している以上、彼は過去の自分の言動に対して責任を負わなくちゃいけない。たいへんな責任を背負って行動している彼だからこそ、あえて私は今度は言おうと思っています。

野村さんはアイヌの中で成功した人物です。町議員を何期もつとめてきた人です。古くから自民党の白老支部の役員もつとめてきた。それをされるのはかまわないんだけれども、本人がそういう町の名士として遇されていて、なんというのか、つまり差別されない層というのがあるんですね。内心では本当は差別してるんですよ。だけど私たちみたいにストレートに、皮膚を突き破るような、突きつけられるような形の差別をされない。

たとえば、ニブダニ（二風谷）というところはアイヌの人口が多くて、シャモの方は少数者。だからそういうところでは、子どもたちは差別を知らないわけです。ところが一歩、ニブダニを出たときに、たいへんな嵐が吹き荒れているわけです。いきなり嵐に遭遇するために遭難しちゃう。そういうことってあるわけですね。だけどそこを出ないで一生を終える人は、差別の壁というのは、それほど切実に悩んだり怒ったりしないまま終わってしまうわけです。萱野茂さんなんかがよく、「ニブダニのアイヌは強いから」とおっしゃるから、「萱野さん、それはないんじゃないですか」ってね。ニブダニのアイヌは強いからじゃなくて、ニブダニの地域性じゃないかと言ったら、いや、そうなんだと。

野村さんに限らないけれど、あの世代は、これは日本政府の同化政策の巧妙さだと思うんですけど、どっかで明治天皇はアイヌだったという説が根強く信じこまされています。どこでそういう教育がされたのか、突き止めたいと思っているんですが、そういうことがあるんですね。

貝沢正さんというこの間亡くなった方は、野村さんよりかなり年輩なんです。彼は、“五族協和”というスローガンのもとに満蒙開拓を募集したときに、応募していくんですね。満州で日本人が中国

安全地帯の被差別感覚

差別の深さを知る

人にひどい侮辱を加えるんです。それを見て、五族協和というスローガンは嘘だということを知り、彼は怒りを覚えて帰ってくるわけなんです。

貝沢さんはニブダニなんだけれども、ニブダニの外でアイヌ差別をうんと体験して、理想を満州に求めて渡っていった。ところがやっぱりそこも、現実は違って差別があったというのです。

そういういろんな波をくぐり抜けて、貝沢さんは自分で働いて土地を買いとり、一生懸命畑をつくっては洪水で流される。木を植えては洪水で流される。そうしながら木を植えて木を植えて。それで亡くなるときに、「百年、この木を切るな」と遺言して亡くなられた。

「百年木を切るな」という遺言には、どれほど北海道の木が乱伐されていったか。そのためにどれだけアイヌが苦労したかという、そのことを子孫たちに教えたいという彼の願いなんだろうというふうに、私は思うんです。私は貝沢さんに対して、本当に哀惜の念がやまないんです。

野村さんに対して憎しみの一念、というわけじゃないですよ。町会議員にしても、何期かつとめると不文律みたいに、副議長になるとか議長になるとか、みたいですね。それが、野村さんが副議長になる資格を有しながら、副議長にされないままできたということはあったみたいです。最近になって、それが実は差別だったんだと、彼自身が自分を語った数少ない言葉のひとつです。それはありますね。それは私は、彼から直接聞いたんじゃなくて、「野村さんは、今になってそのことが差別だったっていうふうに気がついたみたいだよ」というふうに人から聞かされたんです。

IV 同 行 者

私は結婚しないと思いました。10才のときに、私が子どもを生んだならば、その子もやっぱりアイヌと言われて泣くのか。そう思ったとき私は、自分が女であると漠然とわかったそのことに、本当に悲しくて泣きました。絶対結婚しないと思いました。

でも年を重ねて、20をいくつか過ぎた頃からは、そうじゃない、生きていって自分で希望をつかむんだ。そして、それを一緒につかめる人をさがすんだ。そういう人が見つかったら結婚するんだ。そういうふうに思うようになりました。そういう日が自分の生涯のうちに来るかどうか、確信はありませんでしたけど、そう思いました。

・ご主人と、というと若い人に叱られますが、ご主人との出会いを　　出会い
話して頂けませんか。

彼はカメラマンなんです。彼もやっぱり原体験、どんな差別も許さないという原体験があります。小学校1年のときに、トモエ学園は群馬県に学童疎開で移りました。その中で、理想の教育を掲げた校長が実はどんなことをしたか。それは極限状況におかれた人間のしかたのない一面もあるけれども、彼の子ども心を非常に傷つけたわけです。

敗戦になって、そのまま群馬の吾妻郡の岩島というところに彼は残るわけなんですね。ところが田舎だから受け入れないわけです、疎開っ子、疎開っ子といって。学校にいじめがあって、いろいろな体験の中で、彼は差別を憎むのね。大人がどれほど子どもの心を傷つけるかっていう原体験があるんですね。

ところが、彼もご多分にもれず、アイヌは北海道にユートピアをつくって住んでいると思って、取材にきたわけです。折しも私が採用拒否になって落ち込んで、いつ死のうかと時期を選んでいたときでした。

1970年・・ですね。あの時代にフラリと北海道に取材にきて、アイヌの写真撮りたいけど誰か紹介してといっても、紹介する人もいなければ、応じる人もいないんです。彼は本当に困り果てて、それでいろんなつてを頼って、あの人に聞け、といって私のところにきました。私はウタリ協会に若いのに自分から入って、黙ってればアイヌだとわからないかも知れないのに、なんでわざわざ苦難の道を選んで会に入って、と珍しがられた存在でした。それで、「あの人ならば」ということで紹介されて來たんです。

私は彼にいろいろ話もしたし、取材にも応じた。そのときは、死のう死のうと思いながら生きていたわけですね。いつ死ぬか、どこで死ぬかということを、いつも頭の片隅で思いながら。だからそういう気持が言葉に出ちゃったと思うんです。彼はフリーのカメラマンだったから、発表誌も決まらないまま取材にきてたわけです。で、「それが発表されたときに私はこの世にいないかも知れない」と、私は思わずポロッと言っちゃったんです。「どうして?」と言うから、どれほどの血の涙を流して生きてきたかということを言わざるを得なくなった。彼は本当にびっくり、たまげちゃって、「この世にこ

れほどひどいことがあるのか」というひと言からはじまり、ともかく勉強したいなら東京において、ということになりました。

ところが東京にきても、彼は、カゴに入れて私を外に出さないんです（笑い）。珍しいことに恋されちゃって。職住接近のいいところにアパートを借りてもらったんです。職場には歩いて3分で着くところ。彼の友人がやってるちっちゃな広告会社で。

広告会社というのは、朝何時から夕方何時までっていうものじゃない、私も入ってみてはじめてわかったんですけど、ともかく、朝、みんなゆーっくり来て、それからじっくり、仕事をしてるんだか遊んでるんだかわからないようなことをしていて、さて、世間の会社は5時になって店じまいする頃になってから、そろそろエンジンがかかってくるみたいなところ。

うちの亭主は、自分はフリーのカメラマンでいろんなところとおつき合いしながら、そういう実態がわかってなくて、5時になったら私がアパートに帰ってくるものと思って待ってるわけです。アパートの前で。1時間待っても帰ってこない、2時間待っても帰ってこない。で、自分の友だちに怒鳴りこんで、お前のとこは労働基準法違反だ（笑い）・・友人は友人で、私にいろんな世界を見せたくっていういろいろやってくれているわけなんです。一生懸命やってるのに怒られて、一体何なんだ、という感じになっちゃった。すっともんだの揚げ句に結婚したということです。

●彼のどこを見込んで結婚したんですか？

正直な人

いいと思ったところねえ。困ったなあと思ったところはいろいろあるんだけど（笑い）。彼はいい年をして、世間ずれしていないんですね。好意で、彼としては思いやりで言ってるんだけど、新宿駅であろうと東京駅であろうと、どこであろうと、「おしつこ大丈夫？」って大きな声できくんです（笑い）。私、恥ずかしくって、もう消え入りたいくらい恥ずかしかったですね。で、言ったらば、だって乗り換えてこれからずっと行く途中、トイレがどこにあるかもわからないところで行きたくなったら困るから、かわいそうだから今からきいてあげたんだ、って（笑い）。

それでお手洗いに行こうとすると、ハンドバック持つててあげると言うの。トイレは絶対に汚いという脅迫観念が彼にはあるんです。だからそこへハンドバック持つていったら置くところがないし、変

なところへ置いたらバイ菌がつくって。だけど「持ってやる」と言
われても困るんですよね（笑い）。

お母さんに溺愛されて、靴下を洗濯したら折り返して、つま先まで折り返してしまってあるんですって。はくときつま先にはめて、スーッとこうやればいい（笑い）・・そういう育てられ方して。

父親が自由奔放に生きた人です。女房子どもをほったらかして中国をうろついて歩いてみたり。そういう中でお母さんが、五人の子どもがいて、三人が男の子で二人が女の子で、りゅうぞうっていうんですが、りゅうぞうだけがかわいかったわけじゃないんでしょうけど、とにかく五人の中なりゅうぞうを一番手塩にかけたみたいですね。だから貧しいながらも、洗濯した靴下を折り返して置いておいてくれるみたいな、そうやって育てられてるから、いろんなことわからないで育ってるんですね。

一緒に歩いて、キャバレーの呼び込みありますね。一緒に歩いてることを呼び込みの人が気がつかないで、うちの旦那に声かけるんです。「いい子がいるよ」って。そうすると、そばに寄ってって、「ほんと、どんな子？」って（笑い）。向こうは私がそばにいるのに気がついてあっち向いたのに、わざわざこっち向かせて聞く（笑い）。私は、この人は私より10も年上なのに、一体何を見て、世の中を生きてきたんだろうと思うんです。キャバレーの呼び込みの言うことを真に受けて、「いい子」って「いい子」の意味もわからぬいで。珍しい人物だと。

私は、この人の「わかる」っていうのは本物だと感じたんですね。本物とにせ物
私に満座の中で恥をかかせた、つまり自分が論理的に詰まったときに、アイヌを持ちだして私をへこませようとした、その人もうちのりゅうぞうと同じ昭和11年生まれなんです。その人は、私がその会社に入社したときに、私が何も言わないのに、「ここの会社ではあんたのことをからかったりするような人はいないから、安心して働きなさい」と言ってくれました。その人が、論理的に詰まったときにアイヌを持ちだして私をやっつけた。本当に幻滅をしました。
どれほど長い年月、時間をかけてつき合おうとも、にせ物はにせ物。

じゃあなぜ、もしかしたら違う人間だったかも知れない、たまたまそうじゃなかったというだけですんでるのかも知れないし、そこら辺はよくわからないけれど、でも、その「わかる」と言った彼の

その言葉に嘘はないって感じさせるものが、言葉数は少ないんだけど、その中に込められている深さみたいなものが共鳴しあったんですね。

彼はそのときに自分の原体験を話しました。トモエ学園の小林先生という校長は、疎開する前は非常にいい校長だったのに、疎開先で生徒たちにイモをつくらせて、みんなお腹がすいてるから、もう少しで収穫というので楽しみにしているときに、校長は家族でこっそり食べてしまった。小学校1年生にとっては本当にショックな体験ですね。

でも黒柳さんの『トットちゃん』の中にはそういう姿はない。あの人と一緒に群馬に疎開してなくて、縁故を頼って青森に行っちゃってますから、知らなかつたということもあるんでしょう。あるいはある程度年が上だから、知ってはいながら、すべてあからさまに書くわけにいかないということもあるでしょうから、みんな今でも、トモエ学園の小林校長はどんな立派な人だったのか、思ってるかも知れないですね。

私はそんなことを怒ったってしようがないって言うんだけど、「黒柳さんはずるい」と言って、怒ってるんですね。知らないはずがない。校長のことをあんなに立派に書いてずるいって。

彼は、最初のうちは「かわいそう、かわいそう」だったんだけど、あるときからパン？と突き放すようになった。私も、突き放されてくじけてないで、むしゃぶりついていって、「私の思いはこうなのよ！」「あなたがわからないのは、あなたがおかしい！」と言って揺さぶる。

そういうふうにむしゃぶりついていくようになつたけれども、最初のうちは突き放されてうろたえちゃいますよね。

●突き放すってどうするの？

たとえば、理屈でわかっていてもくり返し当たってくる冷たい風に、私は外では理性で耐えながら、うちへ帰って甘えをだすわけですね。「日本なんかひどいんだから。シャモなんかひどいんだから。みんなひどいんだから、わかんないんだから」とだだをこねるわけです。そうするとバーンと突き放すわけです。

私はいろんな人と会ってきて、たしかに裏切られたこともあるけれども、人生の節目節目で、私を励ましてくれた人がいるわけで

裏切る人・信じられる人

す。じゃあ、あの人も信じられないのか。この人も信じられないのか。あなたはあの人の前に行って、そうやって言えるか！というふうに言って突き放す。そういうふうに日本一般、シャモ一般とあの人に言ったら、あなたはどれだけあの人の人格を否定することになると思うんだ、とバン！と突き放すんです。いつまでも甘えてるな、ということですね。

V わが子と学校

私が子どもを生んだのは1976年です。「おめでたです」とお医者さんに言わされたときは、私は嬉しいだけは思いませんでした。北海道に住む人たちがいろんなことに取り組んで、アイヌの子どもたちの現実をなんとかしようと一生懸命努力しています。そのことを私は見聞きしてよく知っています。だけれどもなかなか変わらない世の中。全国教研集会にも実践の報告がされていることも聞いています。だけれども変わらない世の中。その中に私は命を生み出して、どうやって育てていったらしいのか。

でも私は信じようと思いました。いっぺんに世の中は変わらないけれども、必ず変わっていくものなのだ。この子を育てていくとき、たくさんの問題にぶつかる。そのとき私は子どもと一緒に問題を乗り越えていく。その勇気だけを持って、この子を生もうと思いました。

男の子が生まれました。——赤ん坊は育てられると思ったんです。ところが大間違いました。赤ちゃんて時をかまわず泣くんですね。本当に私は、忙しいときはたたんで押入にしまっておけないものかと（笑い）思ったりしました。育児書通りにミルクを飲んでくれない、眠ってくれない。こっちが睡眠不足になっちゃって。本当に育児書通りにミルクを飲まなかったら死んじゃうんじゃないかと思って。本当に本当に、心配で心配で。今日はまだこれだけしか飲んでない、あと何時間しかないのに半分も飲んでない。この子死んじゃったらどうしよう。そういう意味で本当に母親になるっていうのは、生んだだけじゃ母親にはならないんですね。

でも本当に生んでよかったと思わせられることもありました。実際にわんぱくな子どもで、そのわんぱくぶりはたいへん頬もしくて。自分が体験できなかった幼い頃を、わが子が見せてくれている。親

バカを発揮していたときもありました。今、埼玉県に住んでいますが、小学校ではずいぶん先生たちの手を焼かせました。本当に恐縮しながらも、やることはおかしくて、おかしくて、本当に笑っちゃうっていうそういう子どもでした。

たとえば、泥んこになって遊ぶ子がいい子ですと言われると、わざわざ泥の中に入つていって、服を泥だらけにして。全身泥だらけになるまで徹底的に泥の中に入りまくって（笑い）、それで帰ってくる。休み時間に泥だらけになって、それでそのまま教室に入つていって「先生、どうだい」と言わんばかりに見せる（笑い）。先生の方が、あまりのことなどうやって対応していいか、といった類のことから。

人とふれあおうとするやり方が非常にユニークであつたり。小学校1年生のとき、となりに並んだ女の子が好きになって、女の子はいやだって机を離していくと、うちの子は机を持って追っかけていく（笑い）。そういうのを聞くとほほえましくって。先生はあまり目にあまらなければ注意しないで放っておくんだけど、授業中に机を持って追っかけ回すから（笑い）、授業がちょっと成り立たなくなつて、先生としてもどうしようかって困っちゃう。

いろいろユニークなことをやってくれた。小学校の中学生くらいになると、お掃除が終わったからと先生を呼びに行くんですね。そのときに、先生が障害児学級の担任なものですから、一生懸命話をしていると、トントンとノックをするところまではいいんですが、「先生、ちょっと」というふうにお願いをしないで、指で呼んだり（笑い）。小学校卒業の記念写真をとるとき、先生とこんなふうに肩組んで、先生が「お前、いいかげんにしろよ」と（笑い）。そういうふうに、昔だったら、とんでもないガキだって言われるんだろうけど、それほど悪い子どもだとは言えない。

ところがやっぱり、それを理解されない先生たちがおられた。小学校の3年、4年、5年までは、本当に手に負えない子どもで、どこかに転校してってほしいと担任の先生が願っているらしいというのがよくわかった。

私は恐縮して、いったい親としてどういう注意をしたらいいのか、先生と話したいということで出かけて行つたら、先生の方は、抗議に来たと勘違いされて、「何月何日はなにをしました」と取る

反抗児に仕立てられる

に足らないことを全部、レポート用紙何枚にも書きつけてあって、相づちを打つ間もなくベラベラベラっとまくしたてられました。こっちはもう目の前が真っ白けというようなことがありました。とてもその先生とはコミュニケーションが取れませんでした。

それだけじゃなくて、子どもをそれから毎日居残りさせるんです。となりの子どもと喧嘩したといって、となりの子と一緒に残すんだけれども、となりの子には「あんたはかわいいから帰っていい」と言って帰らして、うちの子は暗くなっても、とにかく自分が学校にいる間は絶対に帰さない。

だから子どもは反抗する。課題を出されたって反抗してやらないわけです。やらない限り帰さないって言うと、ますます子どもは反抗する。それをどうやって解決したらいいか、本当にコミュニケーションがどれなくて困った。

またその先生がどういう申し送りをされたのか、次の担任が戦々恐々として、あの子がどうして自分に受け持たされたのか、かなわないと言って、職員会議でもめたとか（笑い）。そういうようなことがいろいろありました。うちの子はそんなに手に負えないほどひどい子どもではないはずなのにと思いながら、それが親の欲目というので、先生からすればどんでもない子どもだって言われたら、私は反論のしようもないということになりました。

ともかくだいたいにおいて、かわいらしいに属することしか見当たらないんです。そのところを先生がうまく受けとめて、サラリとかわしてくれれば、そこで済んで次の段階に進んで行くのに、そこを「ダメダメ、ダメダメ」と言って廊下に立たせたりするわけです。そうすると、「あ、またあいつ立たされてる」といって学校中で評判になっちゃうような対応をするんで、子どもはよけいエスカレートして、じゃあ、今度何をやってやろうか、みたいになる。どんどん、どんどん、先生との間が険悪になっていく。

6年生の担任の先生が家庭訪問に来られたときに、「おたくのお子さんは、言われてるほど悪い子じゃありませんよ」とのつけから言われて、じゃあ一体、学校でどういうふうにこの子は悪いと思われてるのか、本当に切なく思うほどでした。

中学へ行くとそれがピタッと変わった。話に聞く、戦前の日本の軍隊教育というのはこうもあったろうかと思うような、学校の雰囲

学校の管理体制

気がすごいんです。だからうちの子、私が何か用事があってちょっと名前を呼んでも、ピクッ！とした。非常にわんぱくなようでいて、非常に神経質な子なものだから、何ヵ月もたたないうちにすっかり変わってしまった。名前を呼ばれただけでピクッと、全身で反応するような子どもになっちゃった。

一体何をこの子はこんなにおびえているんだろう。いろいろ話を聞いてみると、ジャージーに陸上選手がつけるようなネームをつづられて、ジャージーの色で学年がわかるようになっている。遠くから見ても、どこの中学の生徒で何年生だということがわかるような形。もしも本屋へ行って万引きでもしたら、すぐ学校に、「何色のジャージーを着た生徒で、名前は◇◇で書いてあった」と電話がくるような、そういうシステムになっているんです。

先生たちは、全部がそうじゃないけれど、とにかく子どもたちにビシビシ体罰を加える。とくに校長なんかの態度は、体罰の問題は新聞沙汰にさえならなければいいという。そして子どもたちに、学校であったことは外で言っちゃならん、やられるのはお前たちが悪いんだ、それを言うのは恥と思え、とそういうふうに口止めをするわけです。だから子どもたちはうちに帰っても言わない。

私は小さいときから、よく息子とおしゃべりをする関係ができるたものですから、かなり変わったといつても、よそのお子さんに比べれば割とよく話してくれる子どもだったので、学校の様子がおいおいにわかってきた。

ジャージーのゼッケンには、本当に最初私は、それを着せられているのを見たときに、「うちの子は囚人じゃない」と言って、学校に怒りに行きたいくらいショックを受けたんです。つまりなぜそんなことをさせるかといったら、学校の目的は、非行防止という名の生徒管理であるということです。それに対してPTAの役員は何も言っていない。また、問題提起しても受けとめてくれない。

一面でうちの子はあまりにも馬鹿正直すぎるところがあるから、学校ぐるみで先生の言うことが正しいこと、それに従わないのは悪い子ということになって、友だちをうちの子が排除するようになっていたんですね。これは困ったことになったなあとと思いました。

登校拒否も起こってました。うちの子は登校拒否しなかったですが、学年で何人、学校全体で何人とか。それを学校の方はいっさい秘密にして言いませんけれど、長欠の形の登校拒否はずいぶん増え

ていました。それは子どもから聞いて私は知っていたんです。

私はそのときに、登校拒否する子どもたち、その親たちは本当に悩んでいるだろうけれども、一面、登校拒否する子どもは学校のやり方に対して正常な反応をしてるんだ、むしろ拒否をしないで黙々と学校に通い続ける子どもの将来の方が心配だと思いました。うちの子どもも、文句も言わずに通い続ける方なので、本当に心配しました。将来この子はどうなっていくんだろう。人の言うことをそんなに受け入れて、批判精神のない子どもになっていくということは、一体どういう人間になるのか。

VII 差別事件

中学2年のときに、毎年合唱祭というのがあるんですが、あるクラスが『アイヌに捧げる小さなレクイエム』という歌を取り上げたんです。元号を使うのいやなんんですけど、昭和63年のことでした。

「母さん、4組が合唱祭でアイヌの歌を歌うらしいよ」と最初は子どもが言ったんです。だから私は、アイヌのことが教材に使われることは本当に少ないので、アイヌのことを子どもたちが知つていくようになればどんなことでもいいというふうに思っていましたから、どんな歌を歌うのかと期待を持っていました。子どももそういう期待を持っていました。私は「そう、どんな歌を歌うんだろうね」と言うと、「知らない」と言うから、「じゃあ、先生に頼んでどんな歌詞か書いてもらってきて」と子どもに言ったんです。

だから子どもは次の日頼んだんです。4組の担任は社会科の教師だったんですが、自分のクラスの子どもたちの歌う歌の名前も知らなければ、中身も知らない。頼んでも、子どもが切実に頼んでいると思わなかったのか、聞き流してしまう。

私はそのとき、関東ウタリ会の事務局をやっていました。職業相談員もやっていました。そのほかに東京都ウタリ実態調査という、都内に住んでいるウタリの実態調査をやっていました。関東ウタリ会はその面接調査を委託されていたという関係で、連日、東京都内を、方向音痴で、地図を見れば絶対、反対方向に行く人間が歩き回っていたんです。だから子どもに学校の様子を聞いたりするのがあとになっていました。子どもは「先生に頼んだけど、先生、わかんないし、書いてくれなかったよ」と言う。すぐに電話すればよかったんですが、そういう余裕もないままに、どんな歌を歌うんだろうな

『アイヌに捧げる小さなレクイエム』

あという期待を持っていたわけなんです。

ところが、あと合唱祭まで2週間くらいというときに、「北原さん、こういう歌があるの知ってる？」とまったく別のところから聞かされました。それは『アイヌに捧げる小さなレクイエム』（中村千栄子作詞、1976年）という曲だった。詞を見たら非常にひどい。“瞳の中に漂う忘却の歌 黒く黒く繁った胸毛をふるわすレクイエム”何が、誰が主語なのか、まずわからない詞です。誰が誰を悼んで歌うのか。明治政府以来、お上も学者も口を揃えて言ってきた、滅びゆく民族アイヌという、それをそっくり歌にしたような中身の歌なわけです。しかもレクイエムです。ええっと思って。合唱祭で歌われる歌というのはこれじゃないだろうね、と思いながら、確かめてみたら、この歌だったんです。

私はあきれかえってひっくり返りそうになりましたけれども、気を取り直してすぐ学校に連絡して、話したいことがあるということで時間を取ってもらいました。それで合唱祭で歌われる歌が、私たちアイヌが自分たちのアイデンティティーを守って、そして子どもたちに未来を渡していくこうとして悪戦苦闘している、その私たちの願いに水をかけるようなひどい内容なんだ、決してアイヌを理解することにはならない、とんでもない歌なんだということを、いろんな資料を示して話をしました。2時間以上かかりました。

ところが、学校の方の回答は何かというと、合唱祭まで時間がない、だから別の歌に差し替えることはできない。しかし、同和教育の中でアイヌのことをちゃんと教える。それから人権講話で校長が話をする。合唱祭のときにナレーションを入れて、子どもが誤解をしないようにする。こういうようないくつかの条件を出してきて、こうするから歌うことを了承してほしい、と言ってきたんです。

関東ウタリの会の中では、これは北原さんの子どもだけの問題ではないと。当然そうなんです。うちの学校だけで歌われる歌じゃなくて、これは音楽の副教材を出している出版社が7社、カワイ楽譜にはじまり7社が教材集の中に入れているわけです。だから、たまたまうちの子が行っている学校で歌われるけれども、ほかの学校で歌われていないという保証はないし、全国でどんな実態かもわからない。それに、何よりもうちの子どもが、その歌を歌われることによってどんなに傷つくかということを、ウタリ会の人たちが本当に心配をし、怒ったわけです。

どうする、でも私はこれは学校と話し合いをして、とにかく理解を、お互いに理解を深めあう以外に解決する道はないです。絶対やめてくれと言えばやめるかもしれない。そのことで、その場は終わるかも知れないけど、それは一時的なものにすぎなくて、根本の解決にはならない。であれば、根本的に解決するまでに、どんなに時間がかかっても話し合いを重ねる以外にない。私はそう思って了承をしたんです。

案の定、思った通りの反応が子どもたちの中に表れました。部活の中で、うちの子は柔道をやっていたんです。柔道の練習って一人で練習できません、相手がいなければ。ところが柔道部員が13人という奇数であるために、先生が一人はいらなければペアで練習ができるないという実態があったということは事実なんですが、とにかくうちの子と練習をしたがらない。練習してもらえないわけです。相手になってもらえない。それだけでも非常に疎外感を味わって、くやしい思いをして、一人で受け身の稽古をしていた。

そのうえ今度は上級生が、「あいつに『アイヌ、何で日本にいるんだ』って言ってみろ」と下級生の部員に教える。今の学校のいじめのパターンとしてよく現れている事件だと思ったんです。言われた方は、それを言わなければ上級生からいじめられるから、うちの子に向かってわざわざ言いに来たわけです。「アイヌ、何で日本にいるんだ」って。

ふだんからそういうふうに仲間外れにされて、くやしい思いをしていたうちの子は、そのことでカーッとなっちゃったんですね。あんまりしつこくしつこくつきまとって、そう言い続けるものだから、殴ってしまったんです。

学校の帰りが異常に遅いので、これは何かあるって、私たち夫婦は感じたんです。そのとき、学校から何も連絡はないんだけど、とにかく今日は異常だぞ、ということを感じたんです。中学までは歩いて5分くらいですから、夫がまず、とにかく今うちへ向かって帰ってきているかも知れないからということで、歩いて迎えにいったわけです。ところが途中でも会わない。とうとう学校の前まで行って学校を見ると、校舎がほとんど真っ暗になっていて、一部だけ明かりがついている。その明かりのついているところを目指して行っ

差別発言

学校の対応

てみたら、そこは職員室だった。

職員室の前で、10人近くの先生にうちの子が取り囲まれて、何か叱られている。夫が「どうしたんですか」と聞いたらば、うちの子が暴力をふるった。暴力をふるわれた子には担任がついて、親に今謝りに行っている。本人にも謝りに行くようと、先生たちは言っていたところだったんです。

でも、なぜ殴ったのかということを全然聞いていないんです。こういうことだったら殴ってもいいという、そういう正当な理由があるとは私は言いません。けれども13才の子どもが、日頃からいっぱい鬱屈している思いの中で、執拗にそうやってからかわれて、こらえきれずに手をあげてしまった。その気持ちを聞いてやらずに、殴ったんだから、お前が悪いんだから、謝りに行け謝りに行けって、教頭からクラス担任、副担任、部活の顧問、副顧問、相手の担任、学年主任、ぞろりと揃って。

そんな10人もの先生に囲まれて言われたら、どんなに気丈な子だって泣きたくなりますよね。「僕が悪かったです」と言わなかつたら、先生は許してくれない。涙を浮かべて「悪かったです」と言おうとしたところへ、うちの人が行ったわけです。

状況を聞いて、ちょっと待ってください、ということになったんですね。そのとき私ちょうど、子どものことの心配をしながら、体調も非常に悪かったものですから、横になってたんです。すると電話がかかってきて、ちょっと学校へ来てほしいということです。すぐ私、行きました。まだ先生たちは子どもを取り囲んでいて、そこにうちの人が立って、いっぱい人がいるという、そういう構図なんですね。その異様な雰囲気に、私は本当に呆然となつた。

とにかく職員室に入って椅子に座って、そこではじめて暴力をふったんだと説明を受けた。ちょっと待ってほしいと先生たちにいって、子どもに「どうして殴ったの」と聞いたらば、子どもはなかなか言わなかったんですけども、やっと言ったのは、「アイヌ、何で日本にいるんだ」と何回も何回も言って、僕は無視しようとしたんだ、何回も何回もついてまわって言われたんだ、だからくやしくってやっちゃったんだ、と言つたんです。

私は、先生たちは親御さんも相手に謝りに行ってくれと言うけれど、また謝りに行くことはやぶさかではないけれど、その前に、今回の事件の背景について、学校が責任を持って相手の親に説明をし

てほしい、その上でなければ行かない、と言いました。子どもにも、君が謝りたいと思うなら謝りに行っていい、だけど父さんも、母さんも、君が謝る必要はないと思っている、でも、君は自分が謝りたいのなら行きなさい、と言いました。

そうすると、なんていう非常識な親なんだという目で、先生たちは見てるわけです。校長は出張でいなくて、教頭だけだったんですね。教頭は、我れ関せずという顔をして、成りゆきをただ見てるわけです。口だけは非常に丁寧なんです。「口は重宝なもの」とはよくぞ言ったものです。言葉はたいへん丁寧ではあるけれども、つまりは、面倒くさいことを起こしてくれた、またこんなわけのわからないことを言う親だから、こういう子どもができるんだ、という態度です。「いや、おっしゃりたいことはよくわかります」と言いながら、顔にはそう書いてあるんです。

本当に、この教頭め、と思いました。何ヵ月か前、私はたくさんの資料を持って学校にお願いをした。その私の気持ちを、あのときこの人は「わかった、わかった」と言いながら、何もわかっていないかった。わかっていないからこそ、平氣でこういう態度がとれる、と、怒りに燃えながら、そこで怒鳴ったってしようがないから、ともかく条理を尽くして、こうではないかと話しました。私たちが思うことを、非常識と思われますか？と尋ねると、いいえ、そんなことはございませんと答える。私たちは、そのとき、3時間くらいかかるってやっと家に帰ったんです。

最終的な処理は校長が先方には、うちがものすごく謝っている、悪いと思っている、というふうに伝えていました。うちには先方の親御さんが申し訳ないと言っているといってきた。こういう嘘についてたんです。

うちの亭主は教師に対してはあのように言ったけれど、うちの子が殴ったその相手に対しては、悪いことをしたということで、いつか折を見て「ごめんね」と言うつもりでいましたが、たまたま買い物に行く途中で会ったわけです。うちの子が「あの子がそうだよ」と言うものだから、そばに行って「ごめんね、殴って」と言うと、「いいえ、僕、悪いことをしたんだから」というふうに謝ったんです。

その子は、父子家庭で、親御さんがしょっちゅう息子を殴ってい

差別する子も心に傷をもっている

たらしいんです。それで荒れてたこともあった。そのうえ、学校へ行って上級生に押さえつけられた。そういう環境の中にいた子だから、本当にたいへんだったと思うんです。そういうことも、このことがなければわからなかつたことなんです。

その頃、私がいろいろと相談した相手に、学童保育の指導員さんがいました。実はあの子が、学童保育にきていたころ、お父さんがしょっちゅう殴るということが、その子にとってとてもつらいことになっていた。お父さんにそのことを話したら、もう殴らないようになると言ったけれど、完全に殴らないようになったわけじゃなくて、やっぱり殴ったものだから、鬱屈していたものがあった。そこへ殴られて帰ってきた事件があったものだから、いろいろたいへんだったみたい。早いうちに何とかしなくてはと思っていた矢先、夫が出会ったということでした。

このでき事はすぐに学校内に知れ渡って、生徒たちはさまざまリアクションをするわけです。家に偽名の電話をかけてきます。私たち夫婦は、子どもの交友関係を把握しているという自信はあるけれど、すべて把握してるとは言いきれないわけです。だから電話をとって、「〇〇ですけど、◇◇くんお願ひします」と言われたらホッとして、「〇〇くんからよ」というわけです。ところがそれは偽名なんです。うちの子が電話にでると、「ふざけんな、てめえ。大宮まで来い」というような脅迫をするんですね。それから、「アイヌ、日本から出て行け」といって電話を切ったりする。そういう電話が何回かかってきたか。

私たち夫婦は子どもに対して、「アイヌのおかれている現実をよくわからない子どもたちが、おもしろ半分にやってることなんだから、それで電話をかけることなんだから、このことにいちいち君が神経質になったりしないでいいんだよ。時間がたてばわかることなんだから」というふうに言って、子どもも「うん、わかったよ」と言っていたわけです。

あのときも、たまたま夫が電話をとったら、「〇〇ですけど、◇◇くんお願ひします」とはじまったわけです。ところが、その電話の声が近所の子どもの声だったんです。「佐藤です」と言ったんだけど、どうも山田くんのような感じで。夫が「山田くんじゃないの?」と言ったら、正直なもので、「はい、そうです」って。それで、か

差別電話

けてきた一人がわかって、学校に連絡をしました。

すぐ学校がその子たちを呼んで、今まで何回かあったその電話もお前たちがやったのか、と聞いたら、違う、今日はじめてだという。ダイヤルを回す係と、呼びだす係と、相手が出たら言葉をいう係と、と役割分担をして、じゃんけんで決めていたんですね。たまたま、呼びだす係をさせられていた子が近所の子どもだったから、声がわかった。「山田くんじゃないの？」と言ったら、「はい、そうです」と言ってわかっちゃった。でも、今日がはじめてで、今までのことは知らないと彼らは言い張るから、私たちは信じることにしたんです。

同じ人間がずっとやってきたということじゃなくて、いくつかのグループがそういうふうにしてうちに電話をかけてきていたということは、大いにあり得る。

だからその子どもたちのやったことのみが問題なんじゃなくて、学校が職員全体としてこのことをどのように受けとめ、その中から子どもたちに何をどう指導していくのか、という教訓を引きだすことが必要なんです。なのに、そうしなくて、場当たり主義に管理的にやってきた。そのツケが、子どもたちをこんな行動に駆りたてている。

やった子どもたちも心の傷を負うわけです。自分たちがいろんな形でほかの子どもたちからいじめられている。その憂さ晴らしみたいなことで、うちの子どもにそういういやがらせやからかいをする。それは、そのときはうっへん晴らしになったりするかも知れないけど、心の傷として残っていくものである。性格を歪めてしまう。そういう意味ではその子どもたちも被害者なんだ。

でも、こういう私の考え方、先生たちの気に入られないんですね。何を生意気にえらそうに、教師に向かって何をほざくか、というようなことで気に入らないらしいんです。

私から言わせれば、先生は学校を出るといきなり「先生」と呼ばれる存在なんです。世の中にいろんな先生と呼ばれる職業はあるけれども、学校の教師以外に、資格をとってすぐに教室に立って、先生と呼ばれる存在はそうないでしょう。先生と呼ばれるに値する人間になるために、ほかの職業の人たちはいろんな苦労をし、人生経

学校全体の教育課題
にしてほしい

験を経て、先生と呼ばれる存在になってくるわけです。ところが学校の教師は違う。そこに大きな落とし穴がある。それに先生たちは気がつかない。自分が先生だと思っていたら、大きな間違いを犯すことがあるんだということを、なぜ気づかないのであるのか。先生たちが気づかないのでいけないのであるのか、それを気がつかせない教育システムに問題があるのか。そこら辺はよくわかりませんけれど。私が常々思っているのはそういうことなんです。

出世主義に凝り固まつた、教頭試験に受かって校長になろうと、そのコースを自分は選んでいくというような立場に立っている先生は別として、本当に教育に情熱を傾けている先生ならば、年月を経れば経るほど父母に対して謙虚になる、物事に対して謙虚になる。それが先生たちを見てきての私の実感なんです。

いじめる子どもたちもまた被害者なんだっていうことは私の実感なんだけれど、これは小学校以来、ずっといじめられてきた私の実感でもあるわけです。いじめてる人間の方だって心に傷を負って生きていくんだというふうに。実感からでている言葉なんだけれども、それがなかなか気に入られなくて、なんて生意気な、知ったかぶりのしゃばり女め、という受けとめ方しかされないというのは、本当に情けない。日本の教育も、私の子どもがでた学校のそこだけを見てそう言っちゃうと、先生たちに対してたいへん冒瀆になるかも知れないけど、私は子どもの育っていく過程を見て、受けとめた実感がそうです。

VII アイヌとして生きる

- 息子さんは、アイヌであることを隠さなかったようですが、アイヌであることを、どのように教えられたんですか。

小さいときから、母さんはアイヌよって教えたんです。それ以上のことは教えない。彼が小学校3年くらいになったときに、関東ウタリ会の横山さんが、『アイヌって知ってる？』という子ども向けの本を書いたんですね。それを買って私はうちへ置いておいたんです。彼は本が好きですから読んで、ああそうか、アイヌってこういうもののなかっていうことを、彼なりに理解をしたようです。けれどもそれ以前に、4才のときから関東ウタリ会に行ってから、歌や踊りをやってるわけです。それがすごく彼はすきだった。

彼が将来、自分はアイヌなのかシャモなのかという帰属意識を

アイヌ文化を伝える

どっちにとるか、といったときに、私は選択の自由のある社会を、というふうに思っています。ただ、シャモの文化は黙ってても彼の中に入ってくるけれど、アイヌの文化は意識しなければ伝わらない。そういう思いでアイヌ文化を一生懸命伝えてきた。だけれど彼が将来どの道を選択するかは彼の自由だと思っていて、押しつけてきたつもりはありません。

彼は『アイヌって知ってる?』という本を読んだときに、「僕は父さん大好きだけど、父さんもアイヌだったらよかったなあ」とつぶやいたことがあるんです。私はうーんと考えたけれども、これはやっぱり時間をかけなくちゃという感じをもちました。「父さん好きだ」というところでまず、いいんだって私は思っていたわけです。父さんが悪いことをしたわけじゃない。そのことを願うことだけを彼が続けてくれればそれでいい。

彼はこの間、「僕は、『アイヌもシャモも好き』からはじまって、シャモがいやになって、そしてまた『アイヌもシャモも好き』だ。いやなアイヌもいやなシャモもいるけれど、『アイヌもシャモも好き』というところに自分は戻ってきた」そういうふうに語ってくれたんで、ああよかったですと思いました。

『カムイユーカラ』を覚えたとか、ウポポというのは歌のことですが、ウポポを覚えたとか、イフンケ・子守歌を覚えたとか、そういうことなんかも、彼の中に「アイヌ好き、でもシャモの話も好き。日本昔話大好き」という、「両方好き」を作った。そしてその中に入ることが自分が安らげる今の情景になっている。その中で言えた言葉じゃないかなあと理解してます。いくつくらいでこう思ったのかわからないけれど、話してくれたのはつい最近です。

最近彼が言ってくれたことですが、「僕は中学校のときにはいいやなことがあった。だけど母さんの子どものときのこと、それからウタリ会の子どもたちのこと、そのことを思ったとき、僕よりもっともっとつらい苦しみをくぐり抜けてみんな頑張ってきたんだと思ったら、僕はこれで学校へ行くのいやだとか言っちゃいけないんだと思ってた」というふうに言ったんです。親としては必死に支えてきたつもりだけど、そうか、そういうふうに考えてたのかって。

父親が、暴力はいけないというたとえに、「泥棒はいけないけれども、ジャン・バルジャンのような場合はいけないとは言えないんだ」と

苦しみをくぐりぬける

言って聞かせました。彼は図書館で『レ・ミゼラブル』を借りてきて、それを一生懸命読んで、父さんの言わんとしたことは何なのかということを、一生懸命理解しようとした。その読んでる姿を担任が見て、担任もこれを読んで、何とか息子と言葉を通わせあおうと努力されてたわけです。ところが、息子には、先生から声をかけられるのは、その時点ではうっとうしくてうっとうしくて。また彼にとって不幸だったのが、小学校の5年6年、中1中2中3と、担任が、算数・数学の先生だったんです。彼、数学大っきらいなんです(笑い)。この世に数学というものがなかったらいいというぐらいに。

●息子さんの友人関係ですが、中学校時代、高校時代、いろいろ理 解してくれるような友だちはいらしたんですか？ アイヌ語を習う友人

中学のときはちょっと無理だったようですが、高校になってからはできたみたいですね。千葉で国民文化祭があって、そこへうちの子と横山さんの娘さんと二人、カムイユーカラをやりに出たんです。それを11時のNHKのミッドナイトジャーナルの中で5分くらい放映されて、それを高校の一緒に柔道をやってる子たちが見た。「おい、次郎太」、次郎太というんですが、「次郎太、なんでテレビに出たんだよ」ってね。「俺、かっこいいからさ」って(笑い)、ふざけて答えていた。

そのうちにNHKから柔道部に話を聞きにいきたいという話がきた。私は本人に聞いてくれって言ったんです。本人はかまわないよと言う。顧間に話したら顧問もOKということで取材をした。うちの子はとぼしいなりに、アイヌ語の知識を一生懸命柔道部の仲間に教えた。「ここにちは」というのは「イランカラプテ」だと、「ありがとう」というのは「イヤイライケレ」だと。それくらいしかまだ言えないんだけど、それを押しつけるんじゃないなくて、ちょこちょこっと言ってみたりする。それがどこか記憶の端に残っていると「アイヌ語を覚えた」と友だちが言うものだから、NHKの取材を行った人が「君？アイヌ語を覚えたっていうのは。ちょっと話してみて」と言われて、話せなくてね(笑い)。ふだんはわんぱくな連中が、ドキドキ、ハラハラ、ワクワクして取材を受けたりしていました。それを非常に自然な形でやってるので、それを聞いて私、ああ、あいつはなんていういい友人関係を築いてこられたんだろうと思いました。

- ですが、このように生きることのできるアイヌの子どもはまだまだ少ないのでしょう。

アイヌとしての自覚の道

ウタリ会の会員の中でも、親はウタリ会に行くけれど、子どもは自分のことアイヌと思ってない子はいるわけです。それをどういうふうに自覚させていくか。

たとえばウタリ会でサマーキャンプに行ったりするときに、子どもを連れてきたりするわけです、そうすると、みんなが「アイヌ、アイヌ」と言ったりしてるわけです。言葉の端に。子どもが考えて「ねえ、母さんはアイヌなの？」て聞くんです。「うん、おじいちゃんがそうなんだからそうなんじゃない」って言って。「そうすると私もアイヌ？」と気づいていく。そこからその家庭はどういうふうにして乗り越えていくのか、わからない部分がまだまだあります。

それからたとえば、親が自分の願いを込めてアイヌ語で子どもに名前をついている家庭もあります。それを漢字に置き換えて、親だけがわかる、あるいはそのまわりの者だけがわかる。これは「海」というアイヌ語なんだとか、そういうつけ方をしている。ですが、ストレートにアイヌ語でつけて、戸籍も片仮名で届け出たりする。そうすると子どもが成長していく段階で、なんでそうつけたの？と聞かれたときに、子どもが答えられるような支える態勢に、親がずっといるのかという問題が生じる。そこまで考えてついているかどうか。そういう家庭も入れて、本当にいろんな家庭があります。

うちなんかは、まったく坪田譲二の世界みたいな名前をついているから、長男なのに一体なんで次郎太なんだ（笑い）。みんなが疑問をもつようです。「次郎太だから、次郎太だよ！」ってうちの子は答てるみたいです。

アイヌ語でつけられた子どもが「なんでそうなんだい？」って言われて、「海だから、海だよ」ってスーッといえるようになるか、それとも「なんで親はこんな名前つけたんだ」と思うか、そこら辺が非常に難しいなと思う。本名宣言みたいなことが民族を守っていくために絶対不可欠な条件なのか、ということを合わせていつも思うわけです。

私は赤羽の駅をよく利用するので、最近は会わないんだけど、朝鮮の学校の生徒がハングル語で話し合って、私なんかは、「ああ、いいなあ。自分の言葉で友だちと議論し合えて」というふうに思って聞いているんです。私はだから、ほかの人と違う関心で耳を傾け

ているんですが、耳を傾けてると向こうが気がついたときに、ハッとして、みんなして口を閉ざしちゃう。そんなときに、ああ私、悪いことしたのかなあ。あの子たちはどういう思いで口をつぐんじゃったんだろうかと心配になります。

●朝鮮人として見られていると意識したんでしょうね。在日朝鮮人が何かアクションを起こすと、日本人から「意識しすぎる」といわれる。でも、自分は不当に差別されていると、意識するのは、当然ではないでしょうか。

「意識するな」というのは、私もそう言ってる人が、自分が抑圧されていることに鈍感にさせられている証拠なんだと思う。

私は高校の担任に、「私はアイヌだから、アイヌとして生きたい」と言ったときに、「そんなに意識しなくたっていいじゃないか」と言わされたのね。私はそのことで何年も何年も悩んだ。

だってアイヌアイヌって、私が意識したくなくても、みんなしてアイヌと意識させておいて、今度私が意識して、じゃあ卑屈じゃなくて前向きに明るく生きていきたいと言ったらば、そんなに意識するなって言うわけです。一体なんだ。どっちにしろっていうのか、日本の社会は、と思いました。

決してその担任は悪い人じゃないんですよ。だからよけいに始末が悪い。つまり同化政策を振り返ってみて、あれはよかつたんだとか悪かったんだとか、一度も立ち止まって歴史を振り返ってみたことがない人の世界なんです。「意識することはないじゃないか」というのは、そういう世界の人の言葉です。

気になることをもうひとつ加えますと、今、22、3才になってる子が中学生時代に作文を書き、それが人権週間の賞に選ばれたんです。それ以降、いろんなところで作文が実名で引用された。そのことが非常にその子にとって負担になっている。

ところがそれを教師が指導に使うでしょ。その子は「自分はアイヌということでおじめられて、だから人の痛みがわかる人間になった」というふうに書いてある。感想文を書く子どもたちに共通していることは、そのところを捉えて、でも、あまり意識しすぎていると記す。作文指導が決して教師が期待するようなプラスの成果にならないんです。そういう問題があります。

意識しすぎるという言葉

アイヌの少女の作文にかかわって

全国コンクールで優勝した作文だから、いまさら匿名にしても
しようがないと言わればそれまでですが、私は先生たちが教材化
するとき、実名を出して教材化することには細心の注意を払ってほ
しいと思うんです。

その子はそのときはそういうふうに思ったけれど、しおちゅう
揺れるものでしょ。ところが、あの作文のあの子ということで、ど
こに行ってもそう言われた。それは非常な重荷になる。そのとこ
ろを教師は気がつかないで、たいへんいい作文だから、ぜひ子ども
たちに理解をさせたいという形で指導をしている。そのところが
もうひと工夫、ふた工夫ほしいなと思うのです。

VIII 共生の教育をめざそう——単一民族国家観をのり越える

1986年当時の総理大臣だった中曾根さんが、日本はアメリカに比
べて知識水準が高い、なぜならば日本は単一民族国家で、教育に手
が行き届きやすいからだという発言をした。そのときに、私は関東
ウタリ会にはかって、あの単一民族国家発言というのは中曾根さん
の専売特許ではないけれども、発言のもつ意味がどれだけ重要な
ことかということは、常々私が思っていたことなんですね。それで、も
ういいかげんに日本の政府のお偉いさんたちにこういうことを言う
のをやめてもらいましょう、そのためには何をするかと、中曾根さ
んに手紙を書きました。

だけどあの人は、ほめられたことは「やあ、こういうほめられた
手紙が来たよ」といつてすぐ記者会見するかもしれないけれど、怒
られた手紙については知らなかったふりをする。中曾根さんに限ら
ず、政治家ってきっとそうだと思う。それでは議員には、私たちが
この国に住む人たちにわかってもらいたいことは届かない。公開質
問状にしよう、ということで公開質問状を出したんです。

そのときに、梅原猛とかの学説なるものを、中曾根さんが得々と
して自分を擁護するために開示してくれました。梅原さんていうの
は、本当に珍しい学説を次つぎと考えだすというか、発明するとい
うか。発明なんて言ったら、本当の発明家に怒られるかも知れない
けれど、とにかく、思いついたことをしゃべってそれが金になると
いうのは、あの人は幸せな生涯をやってるなあ、と私は思うんで
すね。

中曾根発言

アイヌは原日本人だという。原日本人でもいいですよ。けれども、アイヌの人たちが差別されていると思っているのは、アイヌの人たちの勘違いだと、こう梅原さんは言うわけです。

勘違いに何世代にも渡って、嘆き苦しみ、自殺した人もいる。勘違いで私たちはそういう悲劇を繰り返してきたのか。

現実に、アイヌの就学の時期をシャモと同じ6才とするには、劣等なる種族アイヌには早すぎる。だから8才とするのがよからうなんていう、明治のお役人の文書が残っています。また、分離教育をした時期があって、そのとき、アイヌの学校の教員はほかの学校の教員より給料が安かったんです。待遇が悪かった。だからアイヌの学校の教員になるということは、先生たちにとって、嬉しいんですよ。できれば給料の、待遇のいい学校の先生になりたいわけです。

そういうふうにしてお上が振りまいてきたアイヌ蔑視の思想。そのように明確に蔑視をしながら、日本は单一民族だと言い張っているわけです。都合のいいときだけ单一民族になり、この国の政治家たちのそういう姿勢が、どれほどこの国に住む、アイヌをはじめほかの民族を苦しめてきたか。私たちは何も勘違いで、悩み苦しみ、死のうとまで思いつめたり、実際に死んでしまったりしてきたわけではない。

アイヌがいないとも言いました。アイヌがいないと言われたら、私たちはどうすればいいのか。私たちは、幽霊なのか。幽霊が子どもを生み、子どもを生みして存続してきたのか。それにしては、私たちちゃんと足がある。悪しからず。なんて冗談言ってる場合じゃないですけれど（笑い）。

中曾根さんは、何とかかんとかうまいことを言って逃げきりました。なぜ彼が逃げきれたかという点に、この国の大問題点があるんですね。ここのところをクリアしない限り、民主主義はこの国には訪れない。民主主義は向こうからやってくるものじゃなくて、自分の手で掴みとっていかなければならぬものだから、この上どんなに、口のうるさい女、あほたれ、ばかたれと言われても、私はめげないで言い続けます。ともかく、アイヌ黙れ、女黙れ、ブス黙れ、よくもそれだけ並べてくれるとと思うくらい、攻撃が激しいです。そのうち、47になって白髪になってきたから、「ババア黙れ」がきっとでてくると思う。

そういうことがきっかけになって、何が幸いするかわからないんですが、私たちは一生懸命アイヌ語を受け継いでいきたいと思ってるんですが、詩集や何かは本を見てわかつても、言葉はどうしてもできないんです。たとえばトランプをつくって数の数え方を覚えてみるとか、カルタをつくって、カルタで言語を覚えてみようとか、いろんなふうにわからないなりに努力してみたけれど、なかなか定着しない。

ところが中曾根発言で、民族というのはまず共通言語をもつこと、共通の経済基盤のなかで暮らしていることとか、社会科学だか何とか科学だとかの規定があって、その規定に当てはめると、アイヌは民族に該当しない。こういう理論がでてきた。私は学者に民族であるかないか決めてもらわなくたっていいと思う。

私たちの民族としてのアイデンティティーを奪っていった当事者が、お前たちは民族じゃないというのは、一体これは何の罪といったらいいのか。これほど人間に対する冒瀆があるか。言葉を奪うということは、民族の魂を奪うこと。そのことを国をあげてやってきていながら、私たちが言葉を話せないから、お前たちはアイヌではない。民族ではない。民族として主張できない。権利はない。本当になんと都合のいい、この国の論法か。

だから私は開き直る以外なかったです。自分がアイヌだと思ってるんだから、私たちはアイヌなんだ、アイヌ民族なんだ。あなたたちに決めてもらうことではない。社会科学だか何とか科学だか知らないけれど、それは人間社会を研究して、あとからでてきたものでしょう。社会が変わっていく以上、その規定は変わっていかなくてはならないでしょう。無理やり他民族が言語を収奪した。そういう状態になったときに、それを社会科学でなんと規定するのか。納得のいく説明をしてくれない限り、私たちはアイヌ語を話せなくたってアイヌ民族なんだという主張を取りさげない。

こういうことを言っては失礼かも知れないけれど、学者っていうのはえらいんだけど、中には学者ばかというのか、そういう方がいらっしゃいまして。私たちを呼んでシンポジウムを開かれるんです。そこで、言葉を話せないので自分たちは民族だと主張しているのは、世界中で日本のアイヌだけだと言うんです。たとえばイスラムにおいては、一家族が古典のイスラム語を取り戻すという決意のもとに社会から離れたところで生活をしていても、その中で言葉を復活さ

アイヌ語を知らなく
てもアイヌはアイヌ

せている。アイヌにはそういう例があるのかと、お尋ねになる学者先生がいらっしゃいました。その先生も日本に住んでいたら、日本のアイヌがどういう状態なのかご存じないはずもないだろうに、何をおっしゃりたいのかと思いますね。

話をもどすと、千葉大学でアイヌ語を教える先生が、関東ウタリ ユーカラを覚える会にアイヌ語を教えにきてくれるようになったんです。

うちの子は『カムイユーカラ』を二つ覚えたんです。『カムイユーカラ』はわりと短いお話で、節がついてるんですね。「カムイ」は日本語で「神」と訳されたりしますけれど、これはとても日本語に訳すことのできない概念なんです。千葉大学の先生の言葉を借りて表現すれば、人間の力の及ばないもの、つまり自然、それがカムイなんだと。その『カムイユーカラ』、おもに動物が主人公になる物語なんですけれども、これは節がついてるものなんです。その一つ一つの物語に、一つ一つ違う節がついているわけです。それをうちの子が二つ覚えたんです。

私の母親は、私がアイヌのことについて調べることにずっと反対だったんです。そういうことをやって絶対に幸せにならないって。兄弟もみんな、私はアイヌじゃないと言ってそっぽ向いて生きています。その中で私だけがアイヌにこだわって、ずっと20何年かやってきたわけですね。母親に対しても、とっても言っても聞かないからしょうがないとあきらめっていました。

ところが、孫がおばあちゃんに『カムイユーカラ』を語って聞かせた。これにびっくりしちゃったんですね。これを聞いて「いやあ、あれはおらの血統だ」って言って(笑い)。何をいまさら「おらの血統だ」って思うんですが。

(節をつけて歌って) これは『ホタルの婿選び』っていうカムイユーカラです。『ホタルの婿選び』の場合は、語り手が誰であるかは話の一番最後にわかる仕組みになっています。“私は大海原のすみずみまで照らしながら、私にちょうどいい婿さんがいないかとさがしに出かけた”というふうに物語ははじまるんですね。大海原のすみずみまで照らすんだから、どんなに大きな動物だろうか、神様だろうかと思うわけですね。ところがホタルの光(笑い)。これはホラでもなんでもなくて、一つのおもしろい表現だと思うんです。

カムイユーカラ、二
篇

ホタルが気に入って結婚することになるのはカジキマグロなんです。なんでホタルがカジキマグロを気に入るのかというのは謎なんですけれど。ただ、カジキマグロがとれる季節とホタルの飛ぶ季節が同じなんです。そういうふうにして物語を楽しみながら、どういう獲物がどの季節にとれるのかということを教えている。

(また、歌って) こういうのもあって、これは『青鳩が鳴くわけ』という物語なんです。外で、悪い声で騒がしく鳴くものがいて、一体あれは何なんだと思ったら、実は、侍のちよんまげ、ちよんまげが青鳩になった。だけど青鳩は、何で自分が青鳩になったかわからぬために、それを知りたくて夜も昼も変な声で鳴き続ける。それで人間のカムイが、お前はこういうわけでちよんまげが青鳩になったんだと教えてやったんだよ、というような物語なんです。その中に、家に帰ってみたら妻がいない。ずっと遠くまで超能力みたいに働かせて見てみたら、東の海の向こうにいく船があって、船頭が、わが妻を横抱きにかかえて船をこいで逃げていく。自分は羽をはやって、妻を取り返そうと追っかけ追いついて、船の上で大格闘をやって、自分も瀕死の重傷を負いながら妻をとりかえして帰ってくる。と、そういう物語なんですね。

これなんかはアイヌとシャモ、シャモというのは「となりの人」という意味ですが、となりの人が出会った。最初はなごやかな交流だったが、欲張ったシャモのため対等でない関係に社会が変わっていった。そういう妻をも盗んでいくシャモに対する愛のレジスタンスの物語だというふうに私は理解してるんです。

そういうふうないろいろなお話がたくさんあるんですね。これなんか小学校の低学年にテープでもいいからとにかく聞かせて、それで、今のお話はこういうふうなお話だったのよと言うと、子どもたちは本当に目を輝かせて聞くんですね。静かにしなさいって言わなくたって静かにする。私のこの下手くそな『カムイユーカラ』でもみんな目を輝かせて、このおばさん、いま何をしゃべろうとしているんだろうと、こんなになって、聞くのね。

民族共生のカリキュラム

これから日本が、もし共生を考えていただけるならば、小学校の低学年には『カムイユーカラ』を聞かせたり、あるいはアイヌ文様を見せたりしてほしい。アイヌ文様の成り立ちは何なのかということは音楽の教材としてもやれるし、国語の教材としてもやれるし、美術

の教材としてもやれる。そしてある程度発達した段階で、はじめて歴史を教える。アイヌとシャモとの交流の歴史を教える。そういうふうに立体的に教材化していくと、子どもたちに抵抗なく理解をさせられるんじゃないかな、と思っています。

なぜかというと、歴史だけをパッと教えると、子どもたちは自分たちの先祖がアイヌに対してそんなひどいことをしたのか、自分は、日本人がきらいになりました、という拒否反応を見せる。あるいは、弱肉強食は世界中のことなんだから日本人だけが悪かったんじゃない。アイヌは劣ってたんだから、やっつけられてもしょうがなかつたんではないか。シャモの子どもたちはこういうふうにでも思わなかつたら自分が救われないのね。

その心に、そうではなくて、どんな国のどんなところに生まれようとも、お互いに尊重しあって生きていくということはこうすることなのかな、ということを汲み取ってもらうためには、こういう立体的なカリキュラムが必要だろうと思っています。

苦惱から立ちあがって —在日韓国・朝鮮人として学校に学ぶということ—

李 喜 奉

1、行き逢えない、行き悩む

準備が丁寧にできていないものですから、紆余曲折すると思いますが、お許しください。私と両親と祖父母という三代の生活史をお話しえければ、在日韓国人の現実がわかつていただけると思いますが、それではとてもとても長くかかりますから……。きょうはやはり教育総研ということですから、わが子三人の場合を事例に出しながらお話をさせていただきます。ただ私は親の立場にありますから、親の願い、苦惱といったものも、お話しできればと思います。また、背景として、私の親のこと……在日一世の思いにも触れたいと思います。

私は1953年、秋田県に生まれました。北部の小さな町です。私から見ますと、そこは何かお互いを縛りあっていいるような閉鎖的な村社会でした。内側においては助け合って自衛するという義理人情があるのですが、お互いを監視し合って秩序を守る……ですから“他所者”に対しては容赦なく排除していくというようでした。隣町に中国人強制連行で知られる花岡鉱山があり、また、その隣に朝鮮人強制連行で知られる小坂銅山があるのですが、それもあってか、あたり前のように朝鮮人を劣等者として見て、抑圧・疎外するというような空気でした。私はその町で18才まで過ごしました。ふり返って一言で表現するなら、「拠りどころのない生活、出口なしの存在」でした。

それでも私の場合は在日同士がめぐり会い結婚できましたから幸運でした。20才で結婚したのですが、私の場合、結婚というものが私が私になるための大切な契機であったと思います。ところで、初めて胎内に子どもが誕生したとき……単純に喜べないです。不安が重くのしかかってくる……この子の将来を思い描くと……喜びと

結婚一夢を架ける

不安がせめぎあって……苦しくなるのです。ですから妊娠中は精神状態が悪くなったりしました。やはり、自分の子ども時代を振り返るのですね。わが子はすぐすくとのびやかに育っていくだろうか、「生まれてきてよかった」と言える人生を送ることができるだろうか……と悶々と悩むわけです。私は子どもの時分に「生まれてきて、あんまりいいことない」と、そんなふうにして大きくなりましたから、葛藤するわけです。けれども二人は、よくよく話し合いました。そして、やはり「夢を架けようよ」ということになりました。夫は、「自分たちの子どもの頃と時代が違う、国際化というじゃないか、民族差別なんかなくなるさ」と励ましてくれました。

子どもとはじめて対面したとき、ほんとうに“宝”だと思いまし 長女の誕生た。授乳室に行くたびに、ようやく生まれた命がいとおしくて、熱い涙を流しました。何があってもこの子を守る、私も生き直しをする覚悟でがんばらなくてはと思うと、涙が止まらないんです。それを看護婦さんは不思議そうにのぞいていましたが……私はそのとき、胸のなかで呪文のように唱えていました。「親の轍を踏ませない」「絶対に、卑屈にはしない」と。それからの私たちはただ、「人間として正直に、まっすぐに生きていってほしい」と願って心をくださいて育ててきました。

ところが現実は想像をはるかに超えて厳しいものでした。たとえば名前です。朝鮮人として生まれたものが朝鮮を隠しては人間らしく生きられないというのに、サラリーマンである夫は日本名を名のらざるを得ませんでした。日本名は就職時の条件だったのです。就職ばかりではありません。本名ではアパートも貸してくれませんでした。20年前のことですが、実は今日でも状況はことさらには変わっていないんですよ。在日韓国人の9割が通名を名乗らざるを得ないという事情、その背後の問題について気づいてほしいと切実に思うのですが、日本人にとっては、私たちが日本名を名のるということがあまりにも了解済みのことで誰も不思議に思わないのですね。不思議に思わないということが、実は差別の根深さを物語っているのですが……どうぞ、小器用に使い分けていると思わないでください。私たちはそのため血管までが分断されるような痛みをかかえています。

そのようななかで、わが子が誇りをもって生きていかれるように育てていくというのはたやすいことではありませんでした。私自身

二世であり、実は民族固有の文化環境から全く切り離されたところに生まれたという苦悩、何よりも自分自身、在日が喪失してしまった民族性を回復しているという途上にあるので、わが子に民族的なものを用意してあげられないのです。それでも、民族の歌、踊り……舞台がかかれば、幼い子の手を引いて出かけました。本屋という本屋を歩き回り朝鮮の物語を手に入れる……惜しまず努力したと思います。ですから子どもたちは、どこでもいつでも「私は、韓国人よ」と言うんですね。ところが実際には本名を名乗れないのですね。その矛盾は、時に影を落とさずにいました。

その長女が4才になって幼稚園に入りました。幼稚園入園というとき、ふつう小学校のことまで考えないかと思いますが、その頃から我が家では、小学校をどうするかということを夫と真剣に話し合うようになりました。なぜかといいますと私たちの場合、民族学校か日本学校のどちらかを選択しなくてはならないからです。私も夫も民族教育を受けることができなかったということがハンディになっていますから、わが子には文化的アイデンティティの保持のためにもぜひとも民族教育を受けさせたいと思っていたわけです。けれども実際には、民族学校に通ったことがないので、その実態がわかりません。一方、日本学校ですが、その頃ちょうどマスコミでは“教育の荒廃”が書きたてられていました。

選ぶといっても単純ではありません。民族学校と一口に言っても祖国が分断されていますから、北か南に帰属するどちらかの学校を選ばなくてはならないのです。少しの資料や情報を集めるのですが、北の場合、「金日成の教示・政府の政策を徹底的に身につけるとともに、共和国の教育文献に深く学び在日の具体的現実に適用していく」とある。つまりイデオロギー教育が先行するとあります。一方、南の場合、反共教育というだけでなく、日本の文部省の指導に従ってカリキュラムをつくり“同化”教育を実施しています。私たちにとって祖國は一つのものであるのに、これではどちらも選ぶことはできません。迷い悩み、結局は日本学校を選ぶのですが、これは最善というのではなく苦しい選択だったわけです。ただ私たち夫婦と違う点は、わが子を本名で入学させたいと希望していたことです。

民族学校か日本学校
か

ところで話が変わりますが、長女の就学を前に私たちは新しい土地、横浜へ転居します。念願の脱サラです。生活の安定のためとい

うこともあります、何よりも子どもたちのために本名一つの生活になりたいと自営業に転じたのです。ただ現実はなま易しいものではありませんでした。企業のなかの点である以上に壁は厚く、下請け孫請けの零細企業企業主は本名を表に出せないということを思い知らされました。決意も虚しく、夫は間もなくのうちに本名を断念しなくてはなりませんでした。

1979年12月、引越ししたのですが、私は早速、就学予定の小学校の校長先生に面談を申し込みました。実は1979年9月9日、「上福岡事件」というのが起きるのですが、それがやがて民族差別によるものであったとわかり、私は焦燥にかられていたのです。それはどのような事件かといいますと、在日三世の林賢一君という13才の少年が12階建てマンションから飛び降り自殺—「いじめられて学校に行くのがいやになって、生きるのもいやになりました。ぼくは自殺します。さようなら皆さん。」という書き置きを残して自死したという事件です。その事件は私たち夫婦の胸ぐらをしめつけました。これからわが子を本名で入学させようというのに、これが日本の学校の現実というのであれば、娘はつぶされてしまうとたじろいでしまったのです。

この上は日本学校の実情というものを実際的に知らなくてはと校長先生に面談を申し込んだわけです。その人は快く承諾してくださいました。ところがその方のお話というのは私の気持を逆撫でするばかりです。いいえ、笑みを絶やさず穏やかな口調で、一見、リベラリストに見えるのですが、ちっとも私の気持を汲みとってはくださらないので。私は在日韓国・朝鮮人が今、どのような実態にあるのか、暮らしのことを少し引きながら、今日でも日本社会には朝鮮人蔑視が根強くありますが「こちらの学校では心配ないでしょうか」と尋ねますと、その校長先生は「それは思い過ごしですよ。今どき日本の社会には差別なんてありません。ずっと昔には、部落とかそういう差別もあったんですけど、それは今はいんですよ」とおっしゃるわけです。そこで私は自分の小学校時代のことを少しお話しして、さらに最近知った上福岡事件に触れるのですが、差別なんてありませんと断言されるのです。そのきっぱりとした態度に私はあらがい反論するのですが、それでもその人は「そんなことは絶対に起きません」とにこやかに受け流すのです。その上、私を悟

校長先生との面談

すように「今の時代は民族とか国家という枠の中で問題を見ないで
しょう。私もコスモポリタンとして考えていきたい」とおっしゃる
わけです。私からしてみますと、国際法上、人はいずれかの国家に
帰属しなくてはならないというのに、やおらコスモポリタニズムを
もってきて、友好的に終止符を打ちたいとする無神経さに、その人
の人間観をかいま見てしまいました。この人は、在日朝鮮人が日本
国民でないために負わされてきたマイナスの現実の一切から目をそら
してきた人だとわかって、内心、苛立ちました。

一事が万事、その人は喉の奥に異物がひっかかっているかのよう
に不明瞭な言い方をしました。一時間以上話して「ああ、この人に
は言葉が通じない」と嘆息するのですが、それでもやはり、娘はこ
の学校に就学するわけですから、核心に触れる具体的な質問をした
わけです。「娘を本名で入学させたいのですけれど、理解されるも
のでしょうか」するとその人はまたしても外して答えるわけです。

「となりの子どもと同じく、仲良くやっていただくのが一番です」
と。私の方は、その“同じく”を意味深なものととらえて反芻する
んですね。長女が生まれてわずか6年間のうちにも私たちには理不尽
な差別に何たびも逢ってきました。あの時の痛みがさまざまな想念
となって、私の内部を駆け回ります。押さえて、私は最後の質問を
しました。「この学校に在日韓国人、朝鮮人の子どもは在籍してい
ますか？」その人は即座に「いいえ、一人もおりません」と答えま
した。あとで入学後知るのですが、うちの子以外に4人もおりまし
た。その人は善良そうな人柄に見えましたが、「朝鮮人」のことと
なるときわめて鈍感な人であるわけです。

帰宅して、夫と話し合いました。夫もまた先程申しましたように、
現実には本名では仕事がとれない、日本社会の抜きがたい朝鮮人差
別というものを肌身で感じているわけです。自分が学生の頃、想い
描いていたような社会ではない、ここは折り合いをつける他ない、
と言います。私たちはその時は、それが子どもを守ることになると
思いました。不可解と思いながらも、私たちもまた大波に呑み込まれてしまったわけです。

1980年4月5日、長女パンミは入学式を迎えるました。その入学式
当日、私は呆然と立ちすくむ羽目におち入ります。新一年生の名簿
に名前がないのです。入学前の説明会の時も漏れていきましたから、

「入学式当日はくれぐれもこのようなことがありませんように」と念を押して帰ったのに、またもやなからつのです。下駄箱もありません。机もありません。しょげかえる娘がたまらなく可哀相でした。それでも私は全身のほてりを押さえて自分に言い聞かせました。

「第一日目でくじけては、先がどうなるの……。これはあくまで単純な事務上のミス」と了解しようとした。けれどもさすがに先のことが案じられて、すぐに担任の先生に面談を申し込みました。しかしこれもまた、取り込み中とのこと、あっけなく断られてしまいました。

それからは、親の杞憂がめくるめく現実のものとなっていきました。子どもが小学校に入ってはじめての日曜日のことです。朝早くチャイムが鳴りました。夫があわててパジャマ姿のまま出ますと、玄関から甲高い女の子の声が聞こえてきます。「おじさんは韓国人ですか？」夫が「ああ、そうだよ」と答えますと、その子は息せき切って「おばさんも韓国人ですか？みんな韓国人ですか」と聞きます。「ああ、そうだよ」と答えると、その子は一目散にかけだしていきました。その翌日からです。事の発端はその、一人の女の子のささやきでした。「くにみちゃんは韓国人よ、おばあちゃんが韓国人と遊んではダメだって」にはじまるのです。「え？ 韓国人？」「韓国人って何？」「わたし、日本人？ 韓国人？」クラス中がざわめいたようです。

4月の下旬に集団下校が終わるのですが、その頃からいじめられるようになりました。6才か、7才というのに、大人の目から隠れて、校門を出てから数人でいじめるのです。それは、足を蹴ったり、押したり、ランドセルをひっぱたりという程度だったのですが、わが家は女の子ばかりですし、またおっとりしている子ですから、それは手荒なことに思われて面喰って、泣いてばかりいたようです。

娘は、「学校の帰り道にいじめるんだよ」と訴えました。

そうしているうちに、クラスメイトのお母さんから電話をいただきました。「お宅のお子さん、きょう泣いたんですって。ぞうきん投げの的にされたんだって」。また遊びにやってくる仲良しの友だちは「邦美ちゃん、毎日、毎日、泣くんだよ」と言います。5月に入ると、娘の様子が、いよいよおかしくなってきました。よく笑う、よく喋る娘が、何かに怯えるように黙り込んでいます。あんなに外遊びが好きだったのに一步も外へ出なくなつたのです。

これは放ってはおけません。夫と相談して、一週間娘に隠れて尾行してみることにしました。その頃には娘も逃げ隠れがうまくなっていました。追いかける子どもたちは何か、探偵ごっこか警察ごっこというように喜々として探しています。つかまると皆で囲んで「見つけたぞ」とはしゃぎながら、蹴ったり、ひっぱったり、転ばせたりというようなことをやるのです。3人か4人なのですが、やっぱり娘はわんわん泣いてしまいます。

その時私は、一度も飛び出してはいきませんでした。子どもは子どもの間で揉まれて強くなっていくものという素朴な思いがあって、むしろ娘には「韓国人といって恥ずかしいことはひとつもないのよ。気持ちを強くもってがんばりなさい」と叱咤激励していました。私には“学校”というものがまったく見えていなかったのです。今、振りかえりますと、あのとき飛び出して大人の強権で一喝すれば、「いじめ」は水際のところで押さえられたかなと……そんなときにも他の子の身上を思んばかり賢明であろうとした自分は間違っていたのかなと搖れ動きます。

娘が一人ではとうていかないません。5月中旬、2回目の学級懇談会の後、私は待ちかねたように担任の先生に相談をもちかけました。「このごろ娘が、学校に行きたくないと訴えます、韓国人といってからかわれたり、韓国人とは遊ばないといって仲間はずれにされる、と言います。本人のたどたどしい表現ではどこまで本当かわかりませんけれども、ただ私も、下校時に殴られるところを見たことがあります。先生はご存知でしたか？また、教室の中でそういう場面をご覧になったことがありますか？」というようにならずねたわけです。実はそのときに、ズックを片方隠されたり、給食袋を隠されたり、土曜日、男子トイレに閉じこめられて、2時頃まで帰ってこなかつたことなどは話しませんでした。現場を目撃していないことをつかれて、被害者意識と言わされたらとりつくしまがないと思ったからです。私自身、子どもの頃、差別への異議申し立てをすると、いつも「被害者意識」と逆に非難され、結果、孤立させられたという苦い経験がありますから、慎重に出ていったわけです。

その先生はこう言されました。「いいえありません、一度Aさんがみんなの前で、『○○さんは韓国人なんだよ、先生知ってる？』

日々くじかれる、
日々おとしめられる

と言ったことがあって、そんなことはどうでもいいでしょう、といなしておきましたけれども」というように言われたわけです。ただこれは後にわかったんですけれども、実は何度もこの先生は教室の中でいじめられるところは見ていた、ということです。私はその人の「どうでもいいでしょう」に言葉を失ってしまいました。そんな私をその人は怪訝そうに見て、さらに言ってきました。「なぜ、おたくは、韓国人だということを教えたんですか?」もう、その言葉に私は愕然としました。体内が震えます。けれども娘の“明日”のことを思い、気をとりなおして、努めて穏やかに装って切り出しました。「私は日本で生まれた二世ですけれども、学校は全部日本の学校でした。自分の体験では隠すということは、自分を卑下するということでした。私は大きくなってから朝鮮の歴史を勉強するようになったのですが、いまでは朝鮮人として誇りを持つようになりました。ですから、自分の子どもに朝鮮の文化や伝統、いろんなことを教えたいんです。朝鮮を正しく教えるのは親の責任だと思います。今は日本名で通っておりますけれども、この子に歴史教育ができるようになりますたら本名に変わるつもりです」というようなことを話したのです。

するとその先生は鼻でフンと嘲るようにいちべつして、「そんなに立派なお考えがあるのなら、それはご家庭でやって下さい」ときっぱりと言われるわけです。次から次、驚く言葉です。

憤慨やるかたなく、打ちしおれてしまいそうですが、けれどもやはりこれだけはわかっていたみたいと思い直して、在日韓国人68万人の歴史的な背景、自らの意志で好んでやってきたわけではないということをですね、話しました。そしてなぜ三世が日本学校に通うことになったのかと切り出しますと、途中その人は話の腰を折って、「ちょっと待ってください。私はテレビのニュースを見ても新聞を読んでも、さっぱり韓国のこととはわかりません。また興味も関心もないんですよ」とたたみ込むように、苦々しい表情で言われるのです。あまりの言葉にうろたえてしまいました。すると、さらに追い打ちをかけるように「このクラスにはくにみさんよりもハンデのある子がたくさんいるんですよ。母子家庭の子、共働き家庭の子、みんな大変なんです。でも皆さん、がんばっているんですよ」と言われるのでした。

重苦しく、わびしく、暗たんとします。やっとの思いであなたの

前に立ち、在日の違う生活、違う気持ちについて少しでもわかっていただきたいと訴えているのに、なぜこんなにも尊大な態度で断ち切ることができるのでしょう。その場を結局はおずおずと引き下がりました。けれども思えば思うほど、明日からのわが子のことが心配になります。私の言動が、かえって娘の立場を苦しくするのではないかと。私はすぐに手紙をしたためました。ただただ詫びるという手紙を書きました。親は子のためなら土下座もしますし、卑屈に甘んじても子を守りたいと思います。

親にとって、学校は敷居の高いところですね。子どもをそのような見えないところに託すということ自体悔やまれ、私の頭の中はぐちゃぐちゃになりました。

その後、子どもたちの「いじめ」は執拗さを増し、エスカレートしていました。はじめ学校の外でやられていたものが、堂々と校内でやられるようになりました。

それからまた、「韓国人のばか」というように、はやし立てられるようになりました。私には考えがあって、子どもに「あいうえお」も、足し算、引き算、まったく教えずに送り出していました。ですから小学校に入ったとき、スタートラインがみなさんと違っていたようです。足し算の問題で、先生が指したとき娘はまちがえたそうなんですね。で、それから「韓国人のばか」と言葉を投げてくるようにならざるを得ません。この韓国人のばか」というセリフが、実に子どもを深く傷つけるのです。なぜかと言いますと「韓国人のばか」という言い方は、算数ができないひとつのことではない。自分という存在がまるごと否定されるように耳を刺すわけです。娘は「韓国人のばか」と言われる事が、なによりも一番いやだと言っていました。

この頃のことを長女が絵日記に書いていますから、どうぞ見て下さい。「6月22日 きょう、こだいらもとおみくんがいじめました。そしてとてもくやしかったです」「6月23日 きょう、がっこうでいじめられませんでした。それでよかったです。それから、きゅうしょくがたのしかったです」と書いてあります。怒っている娘の表情、囲むいじめっ子の表情がよく描けていると思います。この子は、毎日、学校のことばかり綴っています。

実は、その頃、私は3人目の子を身ごもっていました。日も夜も

エスカレートしていく「いじめ」

なく長女のことでの気を病むためか、状態が悪くなつて「入院するよう」にと命じられるのですが、病院を2度変えても入院はしませんでした。「この子を誰が守る？」という想ひでした。そういうなかで夏休みになり私は三番目の子を出産しました。産後の肥立ちが悪く、8月中、長女・次女を秋田の実家に預けました。事情を知った親・きょうだいが同情してくれて、娘はそこで、たいへんに鍛えられました。また、遅れがちだった算数も毎日復習し、そちらの方も大丈夫になりました。

2学期、娘ははりきって登校していきました。ちょうどその頃、道の途中で担任の先生に偶然に会いました。そのときに私は、思いきって声をかけました。「1年生ですから心は柔らかいし、みんないい子だと思います。お願ひがあるのですが、よかつたら学級文庫に朝鮮の民話の本を数冊置かせていただけないでしょうか」とお頼みしたんですね。するとその先生は、憮然とした表情で「それはよしましょう、○○さんが朝鮮人であることは、ほとんどの子が知りませんよ」と言われます。あんたんとしてしまいます。いったい、この人にはどのような言葉をもってすれば通じるのだろう、と。

ただ私も二学期になってから、安堵するようになつてきました。それまで泣いてばっかりいるような娘が、反撃に出ていくようになったのです。私も一度見たことがあります。わが家はちょうど、学校の通学路に面しているのですけれども、ある雨の日、外から女の子数人の争う声が聞こえます。もしやと思って窓からのぞいてみました。すると、娘が3人の女の子に囲まれて、かさで打たれてるんですね。素手ではないのでそのときばかりは飛び出そうとしたのですが、娘の声が聞こえるわけです。「韓国人、韓国人で言うけど、あんたたち韓国知ってるの、見たことあるの！行ってきたことあるの！」と渾身の力で叫んでいます。言われる子どもたちは、モジモジするばかりです。娘はさらに、毅然として「知らないんだつたらなんにも言わないで！」と叫ぶのです。これを見て単純に喜びました。ああ、もう、負けてばっかりはいない、と喜びました。

ところが、それは束の間のことだったのです。間もなく最悪の状態がやってきました。10月の中旬あたりから、一日中頭が痛い、体中が痛いと訴えるようになりました。親は気づかいながらも「がんばるのよ。いつまでも気に病まないで」と励ますだけです。そのう

追い込まれていく娘

ち夜になって、突然、夜驚症のよう泣き出す。幻覚を見たと言つて怯えます。毎晩のように夫と話し合います。「わずか7才の子が……これではつぶされてしまう。もう生きる自信をなくしている」「学校で起きる問題なのだから学校に変わってもらう他ない。もう待てない。その理由をきちんと聞いてきてほしい」と夫は言います。

本来ならば夫が直接駆けつけたいのでしょうか、脱サラ後の夫は、日本国の国籍条項に拒まれて、金融機関融資状況は厳しく、はじめた会社が立ち往生しておりました。早朝から、ときには深夜まで、その不利な分を埋めようと、生活に追われる毎日でした。否応なく子どものことは私が一切をみていました。

10月下旬、学校に行きました。突然の訪問で先生も驚かれたかと思いますが、そのときの私はもう平静を装うことはできませんでした。緊迫した表情で、娘の近況を説明しました。そして、「なぜ娘はこんなにもいじめられるのですか？拒絶される理由を教えて下さい」と迫りました。すると、その人はあいまいな顔つきをしてまたもや「さあ、わかりません」と言って、その場から立ち去ろうとするのです。

私は小走りで追いかけて、「あんなに小さい子が生きる自信をなくしているんですよ。親としては、もう待てないんです。答えてくださらぬのなら、このまま校長室へまいります」

とたんにその人は振り向き、顔色を変えて言されました。「おたくのお嬢さん強くなつたんです。以前はやられたらただ泣いているばっかりだったのに、今度はハッキリ主張するんですね。すると生意気になったというので、もっと強く、もっと大勢でかかっていくんです。要するに悪循環ですね」と言われるのです。まるで他人ごとのように平然と言われるわけです。さらに、こうも言われました。「一般的に言って、いじめられる側に問題が多くありますね。子どもたちに嫌われるというのが、すぐ泣く子、消極的な子、暗い子なんですけど、くにみさんはこのすべてが当てはまります」と、評論家みたいなことをおっしゃるわけです。

さすがに私は抗議しました。「先生、娘はもとから暗い性格じゃありません。おしゃべりで、よく笑う子です。生まれた赤ちゃんの世話をよくします。金魚の世話をよくします」。

すると、その先生は「家の中では誰でもいい子になれます。外でどのように振る舞うかが問題です。親は意外と子どもの実態を知ら

ないんですよ」と、その口元は薄笑いに歪んでいるように私には見えました。私はそれでも校長室へは行きませんでした。担任が欺かれたように憤っては、かえって娘を苦しくするからです。自分の不甲斐無さに涙が後から後から流れます。その頃の私たちの生活というのは、闇にぬりつぶされているというようでした。不幸が群れをなしてやってくるのに、私にはたたかう術がないのです。その頃のことを、娘が作文に書いていますから、読みます。

『学校に入ってからのこと 1年2組 しまだくにみ』

学校に入ったときは、まだなにもしりませんでした。だんだんわかってきたころ、おともだちができました。その子は○○○○という女の子でした。まだ一人しかできませんでした。あそぶのをきめるとき、○○さんはなに人?とききました。わたしは「かんこく人」といいました。すると○○さんも「わたしはかんこく人」といいました。あした学校へ行くと、じゅうちょうにえをかいていました。そのうちに先生がきました。そしておべんきょうがはじまりました。それでおわると○○さんが、みんなにわたしのことを「かんこく人」といっていじめるようになりました。

わたしは学校に行くのがきらいになりました。それでときどき、頭をぶたれていたくてねむれません。でも学校に行きました。ときどき学校にいくとき、こわくてからだがふるえます。

みんなみたいになかよしがほしいなと思いました。それでときどき、みんながあそぶのを見ていて、いいなと思いました。

12月になると、娘は目の異常を訴えるようになりました。凹レンズや凸レンズに入ったようにものが見えるといいます。あるものが突然アリのように小さく見えたり、突然、怪物のように大きくなるといって怯えるのです。12月中旬、私は担任の先生に連絡帳で面談をお願いしました。すると「教師は暇そうに見えて、これでなかなか忙しいのです。時間がとれませんから次回にしてください」との返事でした。目の前で日ごとわが子が押しつぶされていくというのに私はただ手をこまねいて見ているしかないので。私には、その背後にあるものすら見えているというのに何の手だてもないので。あの時の苦しみといったら……心臓がえぐられるような痛みでした。そして3学期、今でも鮮明に覚えています。1月10日の夕方のこ

とでした。「頭がいたいよ～。頭がいたいよ～」と叫んだかと思うと、娘は気絶して倒れてしまいました。目を覚ますと「目が見えないよ～。目が見えないよ～」と泣き叫びます。私はその翌日娘を連れて、大あわてで大学病院に行きました。二才のとき誤って自転車から転落したときの後遺症かと思うと気がせきました。ともかく脳神経外科に行きました。すると、すぐに眼科に回されました。

「お母さん、これは典型的な心身症です。狭窄症といいます」と言われました。そのときに初めて、心身症というのはどんなものかということを教えられました。わずか7才の子どもが…打ちのめされました。夫に話しましたら、「とにかく事実だけは伝えておかなくては」と申します。夜、電話を入れました。するとその人は事もなげに「遠視の間違いじゃないですか」と言われます。

「いいえ心身症の典型的な症状だと言われました。家庭と学校の連携で、環境を改善してくださいとお医者さんが言われました」と申し上げると、その人は言下に「そうですか、私はお話を聞くだけしかできませんが」と言って電話を切られました。やりきれない憤怒が錯倒します。そのとき、私は二度とこの人とは口をきくまいと思いました。それから数日後、私ははじめて校長室を訪れました。校長先生は「全く知りませんでした。もっと早く打ち明けていただければ…。申し訳ない」とひたすら詫びられました。

二年生になると、担任の先生が変わりました。この方は、子どもが大好きという人で「私は灰谷健次郎が大好きです。彼の本にあるようなクラスを作りたいんです」と後でお聞きしたことがあります。とてもやさしい感じの先生です。

新しい出会い

ところで、私は第1回目の学級懇談会で、学年学級代表委員を引き受けことになりました。思いがけない場面に遭遇してしまったからです。担任の先生が席につくなりつづつして、泣き出されたのです。30代後半の男性教師です。目を疑いました。と、その先生はすぐに退席され、10分程で戻ってこられましたが、ところが、グッと下を睨んだまま顔を上げられません。これを何やら険しい目つきで注視する人たちがいます。やがて先生は下を向いたままボソボソと話はじめました。「きょうは、PTAの委員を選ぶということに決まっています。だからそれをやって下さい」教室の中はやおら騒然となりました。ヒソヒソ話をするばかりです。それらの光景を

目のあたりにしながら、私の気持ちはせき立てられました。私の想像力はいつのまにか娘の姿に重なっていました。20分経過し、30分経過し……。私は、ついに「PTAは未経験で何もわかりませんが、もし私でよければ……」と踏み出しました。まさに、踏み出したという感です。

実は、私は、娘をとりまく閉鎖的状況から、学校教育のあり様が疑問になり、半年前から、地域の教育運動に関わるようになっていました。当然のように社会教育にも関心をもち、PTAについても学習をはじめました。ただ「PTA」というとき、書物によって知った限りでは、厄介に思われて、実は乗り気ではなかったのです。けれども、一教師を、ここまで追いつめていく「学校」とは何なのか、“ほんとうに”知らなくては、と思いました。

案の定、その人は一年前、親の“いじめ”にあい、心身症に陥られ、ようやく復帰されたばかり（組合を通して知りました）とのことです。横浜の緑区の住宅地の中にあるその小学校は受験過熱していて、「算数の授業がヘタ」なその教師では私学受験に不利といわれ、12、3名の親が担任から下ろそうと、愚弄な監視・突き上げをくり返していたということです。名簿を調べますと、何と、そのうちの5、6名の親と、このクラスで再会ということになっています。

生後8カ月の子どもを背におぶい、私の奮闘がはじまりました。 0才児を背に奮闘
「まずは、先生に元気になっていただかなくては」と、思いました。根気よく先生へのアプローチをはじめました。「卑俗な欲求の親ばかりではありません。声高に言う人など一握りです。きっと先生の誠意はわかってもらえます」と、話し込んでゆきました。一方、まつとうな世論をつくらなくてはと、それまで疎遠だった親の間につながりをつくろうと、時間をさきました。こうして、私の行動は、民族差別とたたかう以前に学校の民主化、地域の教育運動にかかわっていくということになりました。

とはいっても、長女の状態は深刻なままでです。ようやく第2回目の懇談会の後、個人的な相談を切り出しました。その日先生は第1回目とは違い、はりきっている様子でした。それでも私は、娘を厄介な荷物と思われないように、手短に済ませなくては……最小限理解していただきたいことを、2、3分でお話ししようと言葉を用意していました。

「娘は現在、目が不自由です。自信をなくしてクラスの輪の中に入って行けません。自分は韓国人だから嫌われると思い込んでいます。これからは親としても、娘が韓国人として誇りをもって、明るくふるまえるように努力しますので、よろしくお願ひします」というように申しました。

それに対して先生は「日本の子どもも韓国人の子どもも、同じようにわけへだてなく、区別しないでやっていきます。わたしは絶対にいじめは許しませんから、心配はいりません」というように言われたわけですね。私の反応をひとつも疑わずに満面笑みでおっしゃるのですが、私の方は内心困惑していました。「区別しないでやっていきます」に躊躇したわけです。在日韓国人の子どもを日本人として育てていくことが娘のためには良いと考えているのかしら？不安がないわけではありませんでしたけど、ただその先生の善意はじゅうぶんに伝わってきました。

担任の先生が変わってひと月もたたないうちに、うずくまっていた娘はみるみる変わっていました。元の、よく笑う、よく喋る娘に戻っていました。

空転し、途方に暮れるわが家にも、ようやく平穏が戻ってきましたが、私の方は安堵していました。日本人の胸深くに沈澱している深層のところに、ぬきさしならない朝鮮人差別を見てしまったからです。

地域・P T Aで活動するかたわら、私はさまざまにアンテナを張っていくようになりました。そういう中で、横浜市の教員山本すみ子先生にめぐり合うことができました。山本すみ子先生は関東大震災における朝鮮人虐殺の実態調査、資料化でよく知られている人ですが、横浜市内の在日朝鮮人の教育問題に尽力されてきた人です。他に後藤 周さん、今本陽子さんがいます。山本先生は「是非パンミさんのこれまでのことを詳しく聞かせてください」といわれ、長時間にわたってわたしたちの話を聞かれますと、すぐに動いてくださいました。まず、横のつながりを辿って担任の先生と連絡をとつてくださいました。

教師との間に厚い壁を感じ、打ちひしがれているわたしにとって、山本先生との出会いは衝撃的でした。在日が歩いてきた険しい涙の道、苦汁・辛酸を吸みとる方なのです。日本人にもわかる人がいるとの思いは、私の日本人観、日本史像を揺さぶりました。山本先生

とのつながりで、さらに小沢有作先生も知ることになります。求め続けることの甲斐を思いました。そしてまた学校の外で“教師”と真摯に向き合うことによって、学校体制の問題、教職員集団のあり方の問題、組合のなかでのエゴイズムの問題、また教育行政の管理・統制の問題に触れることができました。

ある日の夜、唐突に先生から電話がありました。「いやあお母さん、すみませんでした。ぼく勘違いしていました。山本すみ子先生知っていますか?」と朗々と言われます。「はい」と申しますと、「今、長いことお話したんですよ。ぜひ家庭訪問をするのがいい、と言われたので、ぼくさっそく明日にでも行きたいんですけど」といわれます。私も嬉しかったですね。

朝鮮の家庭料理をたくさん作ってお待ちしました。ところが、実際座られると先生は緊張されて会話になりません。もう、お帰りになるというその時、私は民話の本を3冊差し出しました。「先生お願いです。これを置いてくれるだけでいいんです。読まなくても結構なんです。学級文庫の隅に置いていただけないでしょうか」とお願いしたのです。

すると、その方はたいへんまじめな方だから、すぐに自分で読まれたようです。そして、なんておもしろい本なんだろうと。朝鮮のお話はユーモアにあふれていて、こんなにおもしろい話があるとは知らなかったと言って、自分が好きになったものですから、さっそく子どもたちにも読んで聞かせてくださったようです。それからというもののクラスの子どもたちが「朝鮮の本を貸して」と言うようになりました。娘は大喜びです。「先生がね、朝鮮の本読んでくれたから、みんながくにみのうちに本借りに来たいと言っているよ」と言います。

こうして3年生になるのですが、この先生は実は、「パンミさんともう1年つきあいたい」と言わされて、クラス替えがあったのですが、長女を担任してくださいました。それまでの担任の先生と娘のかかわりを娘の日記（学校で書くもの）から読んでみたいと思います。

「きのうお母さんがねないでつくってくれたお手紙を、先生にわたりました。そしたら先生がお手紙に書いてあったことを、1時間目の半分使ってお話してくれて、よかったです。それで、読んで

パンミの本名宣言

くれたおかげで、毎日遊んでくれなかつた人が休み時間にいっしょに遊んでくれました。本当によかったです」と思いました。

これに先生の返事が書いてあります。「先生は、みんなに話しているとき泣きそうだった。泣いたらみんなに笑われるから…。まだまだ続きますよ。これからも気を強く持って頑張ってください」という先生のお返事です。こんな人なんです。子どもと一緒に泣くような先生なわけです。

そのような目に見えて目に見えない先生の励ましに支えられて、娘は本名を名のっていきます。その時の思いを書いた作文がここにありますので読みます。

「

名前 キム・パンミ

3年生になって、私はキム・パンミと呼ばれたいなと思いました。なぜかというと、1、2年生のときずっと『しまだくにみ』といっていましたが、2年生の終わりごろになって、早く本当の名前で呼ばれたいなと思うようになりました。3年生になってはじめての日、先生が井上先生だと知ったときは飛び上がるほどうれしかったです。なぜかというと、これでキム・パンミになれると思ったのです。やつたー！やつたー！と思いました。

それから2日たって、思いきって言いました。『先生、3年生になったからキム・パンミでいいですか？』そのとき、むねの中はドッキドッキしていました。すると先生は落ちついた顔で、『いいですよ』と言いました。うれしくてたまらなかったです。こんなにすぐわかつてもらえるとは思ってなかったからです。すると先生は、やっぱり2年生のときみたいに話してくれました。みんなにわかるように話してくれました。するとみんなはちょっとおどろいたみたいだったけれども、いっしょにけんめい聞いていました。よかったです、本当によかったです。

それからみんなは私のことをパンミと呼んでくれるようになりました。呼ばれると、心がなんだかくすぐったくて嬉しくてたまりません。私はみんなに韓国のこと、わかってほしいです。そして私みたいに好きになってもらいたいです。だから私は、韓国語を一生懸命勉強したいです。」と書いています。

実はこのとき、本名になることはそんなにスムーズにできたわけ

ではないのです。何しろ私たち夫婦が、両親が揃って反対して、説き伏せていたのですから……。そのことを振り返って娘が卒業文集に、書いていますので、それを読みます。

「韓国人であるということ 6年2組 キム・パンミ

小学校3年生の始業式の日、私は本名宣言をしました。きのうまで『しまだくにみ』であったものを、突然、『私は日本で生まれましたけど韓国人です。今日からキム・パンミと呼んでください。』と自己紹介したのです。なぜ本名にしたかというと深いわけがありました。1、2年生の頃ひどくいじめられたからです。韓国人、韓国人と言ってはやし立てられたり、あげくは韓国へ帰れと言うのです。頭を強く殴られたり、おなかを足でけられたりしました。たいていの場合、けんかで負けたからといって、くやしまぎれにやってくるのです。突然びっくりしたし、なによりも痛いので、私は泣いてばかりいました。すると今度は泣き虫といってからかわれました。今思い返すと、私は弱虫でした。

そのころは、学校から帰ると本ばかり読んでいました。あるとき“サラム”という小さな本を見つけました。そこには在日韓国人の子どもの作文がのっていました。難しい漢字もあったけど、一生懸命読みました。どれも本名宣言するまでの苦しい道のりを書いていました。

それから私は、自分がふたつの名前を持っていることの意味を考えるようになりました。私は韓国人であることを隠したくはありませんが、『しまだくにみ』では、日本人のふりをしているようでおかしいと思うようになりました。そこで私は両親に、『明日から本名で行きたい』と言い出しました。ところが不思議なことに、両親は反対だと思います。とくにアボジは反対しました。『小さなおまえには難しいことだが、日本人は韓国を歪んだ目で見ている。おまえがもっと賢くなれば自分の力で過ちを正して行ける。大きくなるまで待ちなさい。』と言うのです。

けれどもその時私は、本名を名乗れば、何をされようと負けない勇気が持てると思ってゆずりませんでした。けれども本名を名乗るようになっても、いじめはなくなりませんでした。私も強くなったり、味方してくれる友達も少しできて、なぐられることはなくなりましたが、陰険なやり方でやってきました。げた箱の中に、『死ね、

韓国人』という手紙が入っていたこともあります。

3年生の3学期からは、オモニがつくった教科書で韓国の歴史を勉強するようになりました。そしてはじめて、それまでのモヤモヤしていたものがわかるようになりました。昔、日本が韓国を植民地にしていたのですが、韓国人は土地も奪われ、たいへん不幸だったそうです。特に日本にやってきた韓国人は、ひどい貧乏をしていたそうです。そのときの暗い状態そのままを、今の韓国だと思っている人が多いのではないかでしょうか。それは大きな誤解です。つまり日本人は、まちがいから差別の気持ちを持っているようです。

ところで私は5年生になって、民族舞踊を習うようになりました。また6年生になって、週に1回韓国語を習っています。今ではクラスメートに『韓国語を教えて』と言われると、とても嬉しくなります。6年間を振り返って、いじめられて閉じ込もってしまったら、それは私の負けだと思うようになりました。そういうときはクヨクヨしないで、しっかり話し合えるようにしたいです」

このことを、担任からの電話で知ったとき、実は私たちは手をとつて喜びあいました。あれほど反対していた夫が「私たちを越えたんだね」と言いました。その日は、二人、夜を徹して話し合いました。本名を自ら名のったわが子を親として、どのようにささえていくのかということを話し合ったわけです。まず第一の行動は、表札を本名一つにするということです。実はそのために大家さんから立ち退きを命じられたのですが、それも覚悟の上でした。そして、もう一つ、わが家から地域・学校に向けてミニコミ紙「アンニョンハシムニカ」を発行していくことを決めました。

「これはM小学校に通う、在日韓人家庭からの小さな通信です」と始まります。そして、「私たちはこのささやかな通信を通して、海を隔てたとなりの国、朝鮮半島の風土・文化そして朝鮮の心を紹介していきたいと思います。また日本に在住する、在日韓国・朝鮮人70万人の生活と、気持ちについても紹介していきたいと思います」と書いています。

これまでの2年間、苦汁をのんで思い知らされたことは、日本人はいまだに朝鮮人を差別する、そして朝鮮人を歪んだ目で見ているということでした。ですから私は、朝鮮を朝鮮人を見る目を変えていただかないと、子どもにかぶさる差別はなくならないと思いまし

わが子をささえると
いうこと

たから、「私は差別はしていません」と言われる日本人、日本社会に、私たちの方から歩み寄って日本人の心に届く言葉で「朝鮮のこころ、在日朝鮮人の気持」を伝えていこうと考えたのです。

また夫の方は、未だ「韓国人のバカ」と呼ばれる娘を励ますために、同学年の学習の遅れがちなお子さんを集めて毎週日曜日、補習塾を始めます。もちろんボランティアで無料です。そのときには当たり前のことと思っていたのですが、これを三年間休まず続けたのですから、すごいことだと思います。

そしてやがて私も、毎週金曜日わが家を解放して、「アンニョンハシムニカ子ども会」というのをはじめます。朝鮮のお菓子を食べたり、歌を歌ったり、本を読んだりするわけです。

その頃のことを、今振り返りますと、ほんとうによくやったものだと思います。私の活動の範囲はいつの間にか多岐にわたるようになっていました。「横浜民族差別と闘う会」、そこから「民闘連」、また在日同胞主体の教育運動を組織しなくてはと「在日同胞の生活を考える会」を足場に奔走するようになりました。何よりも足元が大切なですから、地域に教育懇談会運動として「出会いの会」「緑、教育を考える会」などつくりました。

何が私を駆り立てたのか。それは無数のオモニたちの声です。たくさんのオモニたちに出会い、つながるようになりました。知れば、彼女たちの境遇、環境は私以上に厳しく深刻でした。日常茶飯事、まとわりついてくる民族差別ばかりではありません。生活苦からの家庭生活の破綻…。家族離散…。知った以上は、その抑圧とたたかわなくてはと思いました。

ところで娘には本名になったことで、新しい問題がもち上がっていました。名字がキムなので、「キムチ」と呼ばれるようになってしまいました。さらに「キムチくさい」とまでいう子が出てきました。

そこで私は、何度か学校に出かけて担任の先生にお話ししました。「本名を名乗るということがどんなにたいへんなことか、わかっていただきたいんです。私たちは元から本名を名乗りたくなかったのではなくて、日本の社会には本名を名乗らせない構造的な要素が層をしてあるんです。ですから、たくさんの朝鮮人が、朝鮮人とわかつたら、あしづまに差別されると考えて、自らを隠して生きているのです。娘が本名を名乗るということは実は、そのような差別と毎日毎日向き合っていくということなのです。娘が誇りをもって名乗っ

た本名ですから、是非とも正しく呼ばせてほしいのです」と訴えました。

ところが、その先生は、「お母さん、遊び半分のからかいというの、いじめとは違いますよ」と笑われて、意に介しません。

そういうなかで、あるトラブルが起きました。3年生の11月のことでした。娘が通う小学校で演劇鑑賞会があったのですが、それは広島の「原爆」をテーマにしたものでした。同じ人間どうしが憎み合い殺しあう戦争に衝撃をうけた子どもたちの話題は、ひとしきり戦争ということになったようです。

そんななかである女の子が叫んだそうです。「日本と韓国が戦争になつたら、パンミちゃんはどっちの味方になるの？」と、その声を聞いて周りに子どもたちが駆け寄ってきて、パンミを注視したようです。娘は、その空気がただならぬものに感じられて、うつむいてしまったわけです。とうとう娘は、泣いてしまったらしいんですね。するとさっきの女の子が待ちかねたように、「やっぱりパンミちゃんは敵になるんだ！」と叫んだらしいんです。

その日、帰ってきて、おやつを食べないんです。晩ご飯も食べません。ほんとうに心配でしたが、かぜかなと思って、早く寝かせました。ところがベッドを覗くとシクシク泣いているんですね。私が、「どうしたの？何があったの？」と聞きますと、あふれるように涙を流すのです。そして、とつとつと、その日のでき事を話してくれました。「あんなとき私は、何で返事をしたらいいの？」と訴えるわけです。「みんなは日本と言ってほしいんだ、だけど私は、韓国を敵にできない、でももし私が、『韓国』と言ったらみんなは私を敵だと言う」と言います。たったひとり違うというのは、こんなように、自分自身の本当の姿を押し殺して、全体に折りあっていかなければ受け入れてもらえないわけですね。違いは排除するという集団なわけです。娘はそのハンデをひとりでかかえてさいなまされるということであったわけです。

その翌日、起きてベッドで叫ぶんですね。「オモニ、目が見えないよ、目が見えないよ」と言います。以前心身症を経験していますから、「ああ、とうとう来たんだな」と力が抜けていくようでした。それからは学校をしばらく休ませました。

1月24日の学級懇談会で思いがけない発言がきっかけになり長女の問題を話し合うことになりました。私はそのときもP.T.Aの学級

委員だったのですが、学級PTAだよりのために、毎回テープに記録していました。たまたま丸ごと収録しているわけです。これを読みますと、子どもたちの背後の眼差し、親の意識がよくわかります。

その背後で動くものー親の意識

「私は3年2組の子どもたちの状態に、まったく何ひとつ文句はありません。いい状態です。3年生の1学期と比べると、子どもたちはどの子もいい顔になった、めざましい成長です。もしお母さんの方に不満があるとすれば、それは私の未熟さだと思います」というようにまず、先生が挨拶されました。

そうしましたらすぐに、あるお母さんが発言したんですね。「昨日子どもが、『平和のために』という作文の宿題を持って帰りましたけれども、それについて話し合っているうちに、パンミちゃんが心の病から目が見えなくなった、と申しました。子どもの話ではちょっと要領を得ませんので、先生の方から説明していただけないでしょうか」と言われるんですね。

先生が、「パンミさんが突然学校で、目が見えなくなったと言うんです。驚きました。パンミさんは1年生のときいじめられて、実は苦しんでいたんですね、韓国人ということですね。それで今でもたいへん傷つきやすい。そして3年生の2学期、パンミさんはどこにでもあるようなゴタゴタに巻き込まれて、苦しんだようです。それで目が見えなくなるという事態が再び起きたわけです。そのゴタゴタは100分の1くらいの作用なんですが、そういうものが引き金になって起こってしまったんです。いいですか、これだけはわかっていただきたいんですが、3年2組の子どもたちのせいになったわけではないんです。3年2組の子どもたちは100分の1くらいの作用でしかなかったわけなんです」。

それに私が反論しています。「先生、本当にそうでしょうか。今の状態が突然起こったわけではないはずなんですからけれども。私は自分の子どもが本名になって以来、いろんな亀裂があって、それが娘を追いつめていったと思っていますけれども」と言っています。

すると先生は言い直されて、「ええ。ですからそれは、10分の1だっ

ある日の学級懇談会

たか、あるいは5分の1だったかも知れませんが、しかし3年2組の子どもたちが直接の原因ではないわけでしょう。やはり1年生の最悪だったときの傷がそうさせたんでしょう」。

司会であるはずの私がさらに反論しています。「いいえ、それは違います。その説明では、はじめて知る方がなんのことやら理解できないと思います。韓国人として誇りを持っていきたいという願いから、娘は自分から本名宣言をしていったんですけども、でもまわりの子どもたちは無理解で、はげまされるというよりは、むしろくじかれることが多かったです」。それで、本名を名乗るまでの苦労と名乗ってからの苦労というのを話しています。

沈黙を破るように、あるお母さんが発言されました。「あの、私がいつかお尋ねしたいと思っていたんですけど、いつもならなり手がないんですね、学級委員て。李さん自分から進んでなってくださったんですけども、お子さんのことと、学級委員になったことって関係あるでしょうか?」というように、卑俗に結び付けられたんです。そのお母さんは、学級委員になったということは、わが子意識からではないか、というように推測したわけですね。

私は答えて「質問の意味がわかりかねますけど」といいました。するとその人は即座に「つまりパンミちゃんを助けたいから、学級委員を引き受けたわけでしょう?」と聞いてきました。私は「パンミひとりのためになったということでは決してありません。自分の子どもが追いつめられていくのを見て、今の学校には問題があると感じた。子育てというのは、ひとつの家庭の中に閉じ込もっていてはできない。私は全体が少しづつよくなるために、PTAのお手伝いをしたいなと思いました。全体がよくなればわが子の状況もよくなると思ったことは確かです」と答えています。

またもや同じ人が、「私はキムさんの態度、はじめから納得できなかったんですけどね。なぜキムさん、みんなの前で韓国人だということをだすんですか?『アンニヨンハシムニカ』という新聞もそうだし。もし私が主人の仕事の都合で、アメリカに行くとかフランスに行くことがあれば、私は自分を日本人なんて言いませんよ。よその国に住まわせてもらっているんだから、すべてその国に従います、と言いますよ。それは当然ですね」。

それに対してある方が、「それはあんまりな言い方じゃないでしょ

一挙に冷笑の中へ

うか。韓国の人人が日本で苦労しているということは、みんな何となく想像がつくと思いますよ。それにアメリカ人やフランス人に対する態度と、韓国人に対する態度って違いますよ。民族差別ってありますよ、日本人に」

またもうひとりの人が、「私は娘から、お母さん、キム・パンミちゃんていう韓国の子どもがいるよ、と聞きましたとき素直に喜びましたよ。ただパンミちゃんが、韓国の名前で通っているということが当たり前に感じていて、そんなに苦労があったということは思ってもみませんでした」

そしてまた別の方が、「うちは、『アンニョンハシムニカ』をいただいてとても喜んでいるんですよ。このクラスが国際色豊かになっていいですよね」と続いています。

今度は別の方が、「私思うんですけど、ちょっと意識しすぎじゃないかしら。私は小学校から大学まで、ずっとミッション系の学校だったんですけど、同級生に韓国籍の人がいたんですね。でも差別なんてひとつもありませんでした。その人は日本の名前だったし、日本人と変わるところは何もありませんでした。韓国のことば一度だって言ったことはないですよ。素直で明るくて人気者でしたよ。李さんとはタイプが違うみたい。確かに、うちの娘があるおうちに遊びに行ったとき、そのおばあちゃんが、韓国人と遊ぶんじゃないよ、と言うんだけどなぜ?と聞いてきたこともありましたけど、いまだにそんなおかしなこと言うおうちがあるのかしらと思いましたけど」。

それに対して私が反論しています。「ちょっと説明させていただいているいいでしょうか。Tさんは同級生の明るさということをおっしゃいましたけど、それは明るい方だと思いますけれど、でもその方の表面に見せなかった深刻な部分ていうのがあったはずですよ。たとえば、日本人のように振る舞いたいから、まわりの日本人が、その人を日本人だと思いこんでいるとします。けれどもたまたまそんな中で、韓国や韓国人のことが話題にのぼって、その人たちが、『韓国っていやあね』、とかいう話になったとき、その方もおなじような顔で同調してしまわなければならなかったんじゃないでしょうか。そのときのその人の胸の内って、日本の方たちは思ってみたことがありますか?そのときの屈辱というものは、実は言葉では言い尽くせない、はかり知れないものです。そういうふうにして暮ら

しているのが私たちの現実です。理解していただきたいんですけど、本名で生きていくというのは、人として正直に生きてていきたいという表明なんです。韓国人であることを口にしない、隠すというのは、卑屈になるということなんです。ですから、意識しすぎとは言いますけれど、韓国人として生きていく以上、日本人の中に埋没しないように、より意識して生きていかなくちゃいけないんですよ」

すると一番はじめに発言した方が、「ちょっと聞きたいんですけど、李さん、子どものときつらい思いをしたことがありますか？」唐突に言われるんです。私は即座に「はい」と言いました。するとこの人が、アハハハ、と笑ったんです。「ああ、それでわかりました。それですよ。その気持ちがパンミちゃんにうつっているんです」。それからさっきの、自分の友達は、日本で明るかった、と言った方は、「そうそう、そういう意味の意識のしすぎと私は言ったんです」と言われます。

すると、あちらからもこちらからも口々に言ってきます。「そうですよね、そういうことってありますよね。本当は些細なことなのに、親が深刻になって根掘り葉掘り聞くから、その揚げ句子どもが本当に深刻になっていくこと、ありますよね。李さんの場合。自分が差別されたっていうことを娘さんにかぶせているんじゃないですか？」「そう、私もそう思います。さっきの意識というのは、李さんの被害者意識です。そういうこだわりをいつも持っていて、神経をピリピリさせているんです。だから子どもにちょっとしたことがあっても聞き流せばそれですんでしまうのに、逆に深刻にさせてしまいます」、「子どもって親に敏感に反応するから、親次第でしますます思い込むでしょう」と次々、非難が続きます。

そんな場面でさらされる側の気持ちわかりますか？囲まれるのです。さらされて一拳に冷笑と侮蔑の中に落とされるのです。こんなとき、どんな顔と声をもって批判していったらよいのか……。私だって本当は痛みのためにすり泣きたいんです。でも、そのとき、娘はこの人たちに囲まれているんだと思いました。ですから、込み上がってくる感情を噛み込み噛み込み反論していきました。

「ちょっと待ってください。私は今とても困っています。みなさんはなにか想像でものを言っていらっしゃるんじゃないですか？何を根拠に？つらいことがありましたか、とたずねられたから『はい』と返事をしましたが、その『はい』から、みなさんどうして一様に

同じようなイメージを持つんですか？それも揃ってマイナスのイメージですね。ひとこと申し上げますけれど、私は娘のようにつらい思いをしたことは一度もありません。むしろ私は、Tさんの同級生に近い子ども時代でした。

私は実は在日韓国人としては至極まれなことです、経済的には困ったことがありませんでした。けれども日本の社会の中にあってはどちらを向いても朝鮮のよさが見えてこない、見えないばかりか、朝鮮はいつも差別される要素として迫ってきました。目をそらさずまじめに生きようとすれば苦しいのです。私は正直に『YES』と答えただけです」

そこで、はじめて発言する人ですが、「先生、先生にお聞きしたいんですけど、先生はいじめられているところを見たことがありますか？どういうふうに指導しているんでしょうか？」と言いましたら、「いやあ、あまり見ていませんね。見えてこないですから。いじめは教師から隠れてやりますからね。見えたらぼくは指導しますよ。絶対に許さないと指導しますよ。でもうまくやれるかどうか」というふうに答えています。

ここで、また、私が発言しています。「みなさんは深く考えたことがないと思いますけれども、実は朝鮮人を差別するということは、明治の時代からずっと政策としてやられてきたことなんですよ。このクラスに実際に、韓国人のばかとか、キムチくさいとあげつらう子どもたちがいるわけなんですよ。それは、いじめる子どもだけの問題じゃないと思います。それを見ている子どもが、それをどうやって感じていくか、という問題もあると思います。だからやっぱり、こういうことが実際に起きているんですから、この問題をどういうふうにしてクラスの中で解決していくか、ということは、ちゃんとクラスの中で取りあげてほしいと、私は親として願っているんです。私の娘はこういう状態の中で、ああ、韓国人はいじめられてもしかたないんだなとあきらめていく、それが親としては一番つらいです」と反論してますね。

2時半からはじまって、5時半になんでも終わりません。普通ならバタバタと立っていくんですけども、誰も席をはずしません。そこで私がまた発言しています。

「ここで考えてほしいのですけど、いじめの問題ってうちの子に

出会い、触れ合い、
伝えあう

限らないですよね。今1年生にダウン症の子どもがいますけれども、やっぱりいじめられて泣いていますよね。それから、この学年にも知恵遅れの子どもと自閉症の子どもがいますけれども、からかわれたり殴られたりしていますよね。いじめの問題というのは、この学校の中にある問題です。そういう中のひとつとして、うちの子どももあるんですけど、そういうことがあってもいい、ということでは困ると思うんです」

すると先生が、「みなさん、5時半になりましたよ。もう遅くなりましたから、そろそろこの辺で」と言われました。するとまた別の人気が、「井上先生が、心の教育にたいへん熱心な方だとうかがっていたんですけど、パンミちゃんのお話を聞いていましたら、思いやりというものを本当に育てていないですね。パンミちゃんをいじめていく状況が3年2組にある、ということですよ。そうすると、3年2組はみんないい子、なにひとつ問題がない、ということにはならないと思いますよ」というように言っていますね。

すると先生が、「ああ、それは…」とひどく口ごもって、しばらくたって、「はっきり言いますけど、ぼくはそれには憤慨しますよ。心外だなあ。だいたいこういう話になると、だれだれが悪い、あるいは教師が悪い、学級経営が悪い、と言うんですよね。ひとつお願いしますけど、どうかお母さんたち、ぼくを先入観を持って見ないでください。それだけはお願いします」と言っています。

そこで、あるお母さんが私に言われます。「お母さん、気を楽にもってね、気持ちをやさしくするんですよ。悪く考えるときりがないんですけどねえ。だから李さん、こう考えたらどうですか。お嬢さん、苦労した分賢くなるんですもの、よかったですありませんか」。するとまた別な方が、「そうそう、李さんは意識しすぎるの、なんにも韓国人なんていったって変わらないと思えばいい、韓国人といったって日本人と同じ人間、変わらないんだと思えばいいの。そう考える心の広さがほしいのよね」といいます。

それに対して、はじめて口を開く方ですが、「そんなことおかしいですよ。私それには反対です。李さんの韓国人としての立場は李さんにしかわからないんですよ。意識しすぎるとかしないとか、そんな端でとやかく言うことではないですよ。今私たちは初めて、李さんから話を聞いたんですよ。でもこれは、李さんとパンミちゃんにとって、ごく一部分にすぎないと思います。私たちは実のところ

何もわかつていなければなりません。パンミちゃんが目が見えなくなったり、それまでに3年間というプロセスがあったんですよ。そのあいだの苦しみといったものは、私たちは推しはかったってわかるものじゃないとおもいますよ。それを被害者意識だなんて、私、許しません」といわれました。後で知ったのですがこの方は実は、お子さんが中学校で、不良という烙印をおされていて、実は悩んでいらしたんです。おつきあいをするようになって知ったのですが、ご夫婦とも夜間中学から夜間高校を出られて、お父さんは夜間大学まで出ておられる。そういう方です。

すると、あるお母さんが、「涙で顔がグシャグシャになったと書いていますね、「李さん、本当にごめんなさい。私これしか言えないんだけど、本当に申し訳ありません」と言われています。今度はある方が「私は李さんのお話を聞いて、とてもわかるような気がします。なぜなら私は、重度の身体障害者を持つ親だからです。4才の息子が脳性マヒです。違うということがどんなに苦しいか。先日、行政に、施設の改善のために行ったんですけどね、さっぱりダメですね。みんな、レジャーのための施設だとスポーツセンターを作つてほしいという要望は山積みなんだそうですけど。その人たちにとって、私たちの存在というのはまったく気にならないらしいんです。少しの声では、向こうに聞いてもらえないんです。日本の社会つて弱い者をどんどん押しのけていっているように思うんですけど。ですから李さんのことだって、その身にならなければわからないことじゃないですか」と言われています。

最後にある方が、「あのう」と手をあげまして、「こういう話題って、学級懇談会の場ではタブー視されてきた問題だと思うのに、でも話し合わないと絶対わからない問題ですから、きちんと取り上げていただきたいんです。ですから、この次全員出席ということで、もう1回やってくれませんか」と提案しました。一同拍手で、そうしましよう決まりました。

ところが、この発言の人が、先程申し上げた「担任下ろし」を画策したグループの中心的な人だったのです。この人は、この発言の後で同じような立場にある人に声をかけて、次回の学級懇談会では心身症にまで追い込んだ学級経営の責任をとるということで、担任から降りてもらいましょうと根回しするのです。私はよもや、このような話し合いの渦中で“親の卑俗な欲求”がうごめいていたとは

想像だにていませんでした。

それでもこの学級懇談会は私の見る目を変えてくれました。人と出会い触れ合い伝え合うということを体験しました。葛藤を超えてわかりあえる人が見つかりました。身がすぐむような偏見に満ちた声も聞きましたが、そのお陰で問題のありかが見えてきました。とにかく話し合ってわかりあえる人がいるという実感は大きな喜びでした。疲れはしましたが、これが「手ごたえのある苦労」というものなのかと思いました。

ところで、何が娘をそこまで追いつめたのか思いあぐねた担任の先生は、その後、クラスで1時間の話し合いをもちます。子どもたちに、「目を閉じて、……。これまでパンミさんをいじめたことがある人は手をあげてください」と言ったそうです。長女はそのときとても知りたかったので目をパッチリ開けて見ていました。すると、たった一人あげなかっただけど、他、全員あげたといいます。パンミは目を白黒させました。自分をいじめる子は、5人かな10人かなと、思い浮かべていたのに、全員が自分をいじめたというのですから。

ところで、手をあげなかっただけの一人というのはA子ちゃんといいますけれど、実は一番しつこくいじめてきた子なわけです。先程の演劇鑑賞のあと、「どっちの味方になるの」と叫んだのがA子ちゃんなのです。そのことを話し合うと、子どもたちは、「僕だけがやったんじゃない」「私もやったけど、○○さんもやった」と口々に言つたそうです。42人から受ける方は大変です。やる方は滅多にやらないといつても、受ける方は、毎日毎日ということになります。

また、その後、Aちゃんと一緒にやしたてたという女の子のお母さんが、わが家へ詫びてきました。そしてそのお母さんの説明から、あの日のいきさつを知ることができました。実は、数日前に場面を想定して、計画的にやられたものだったのです。それは教会の土曜学校の場で練られたそうです。

そのA子ちゃんについて知る範囲で、少し説明しますと、お父さんは歯医者さんです。代々お医者さんとのことです。A子ちゃんは週に6ヶ所、7ヶ所、日によっては1日に2ヶ所おけいこや塾に通っています。ですから、夕食が夜11時になることがあるといつていました。なぜかといいますと、9時までお母さんも付き添つてびっち

僕だけがやったんじ
ゃない

りやっていますから、それからおうちに帰ってお風呂に入って、食事ということになるそうです。食事の用意ができていても、宿題が終わらなければ、食べさせてくれないと、その子がいっていました。

ご家庭は敬虔なクリスチャンで、教会に通ってらっしゃるわけなんですが、A子ちゃんにとって、教会の土曜学校が息抜きの場であったようです。そこに二人のお友達を誘って行ったというわけです。そのときにA子ちゃんが、「パンミちゃんて、先生にチヤホヤされていない? ちょっといい気になってるよね。こらしめてやろうよ」と言い、そこで知恵を出しあって計画したということです。

そして、2月14日学級懇談会が持たれます。40人中36人が出席しました。私は司会者なんですけれども、前日と当日に電話が入ります。「私は今回は担任の責任の問題を追及しますから、李さん、司会しっかり頼みますね」。もうひとつは、「心の問題ということで話し合いをしたいというお手紙をもらいましたけれども、でもあの先生は心の問題を盾にして、学力指導は手抜きをしています。そのうえ心の問題もこんなもんだとしたら、今回きちんと叩かなくちゃなりませんから。司会よろしくお願いします」。

まず、はじめに先生はこのとき、組合の社会福祉研究部会で発表したレジュメを全員に配ってくれました。韓国人だといつていじめられて打ちひしがれていた子どもが、自分との出会いでみると元気を取り戻してきた。自分としては、韓国人の○○さんを励ますためにさまざまな取り組みをしてきたというようなことが書いてありました。

そして、話はじめました。「3年2組がうまくいってないと知らないでくださいね。いじめにはいろんな形がありますが、深刻な問題は教師としては入っていくんですけども、小さいいじめもありますよ、こぜりあいのような。そういうものにまで、教師は顔を出すべきではない。子どもがナマのままでダイナミックにぶつかりあうというのは、必要なんです。たとえば、あいつは生意気だからちょっとやれ、というような。もちろんパンミさんに対してやっていた、韓国人だからどうのこうのというものは許しません。でも、いじめのない子ども関係なんてありえないということはわかってほしいんですね」と言われました。

そして、「これまでの経過を李さんから話してください」と言わ

緊迫する学級懇談会

れます。私は、「いいえ、先生の方からお願ひします」堂々めぐりをして、結局私がかいづまんで、10分くらい話しました。

すると、すぐに、あるお母さんが「実は今、李さんのお話を聞いて胸が痛みます。実は、自分の子もパンミちゃんをいじめたことがあるんですよ。私はショックです。実は私自身、子どもの頃とても苦労したんです。私もいじめられたんです。私は、子どもたちには人をいじめてはいけないと。人の痛みなんてわかるものじゃありませんけどね。でも、人のつらいところをいじめちゃいけないって、それはいつも話して育ててきたんですよ。で、私は子どもを放任する方の親ですけどね、それだけを心にとめて育ててきたんですけどね。それに息子は登校班でいじめられてつらいんですけどね、自分自身がさんざんな思いをしているのに、まさかよその子をいじめてるなんて、考えられませんでした。話し合いましたけど、息子はパンミちゃんを嫌いじゃないし、軽い気持ちでからかったと言っていました。自分もみんなから、『メガネザル』ってからかわれてるから、からかったんだと言っていました」と言されました。

続いて、Bさんが発言しています。「先生、私先生にお願いしたいんです。先生は常日頃、何よりも心の問題、心の教育が大切だとおっしゃっていますが、先生の心の問題の取りあげ方っていうのが、実は子どもたちにわかりにくいんじゃないでしょうか。先日も『平和のために』という作文の宿題を持って帰ってきましたけど、パンミちゃんの心を考えるというのが平和のためという作文の宿題では、かえって子どもたちにはわからなくなってしまうんですね。3年生ですから、何かあったそのときに、具体的な場面で即座に対応してもらわないと、子ども達にはわからないと思うんですよ」この方は実はもと教師の方です。

続いているお母さんが「パンミちゃんをとくにいじめたお子さんの名前を、先生はご存知のようですがけれども、やはり今回の問題は、いじめた子どもをどう指導するかだと思うんですよね。その親には知らせてくださったのでしょうか」と発言しています。

先生は黙ってしまわれます。それで私が、娘の近況について手短かに説明しました。

そこでA子ちゃんのお父さんが発言されました。「この種の問題はことが重大なだけに、綿密な事実経過を知る資料と、その背後関

無知の善意

（中略）

係を知りていなくては、じつは安易に考える種類の問題ではないのです。ともかく今は、ここに集まってこられた人々の間に意志の疎通をはかることが肝心と考えますから、ここにある資料に基づいて、質問したいと思うのですが。ここに、『本名を名乗る』とありますが、おたずねしたいのですがこれは娘さんの自由意志によるものですか？あるいは親御さんの意志でしょうか？」

それで、私は、本名を名乗るまでの糺余曲折を話ました。すると、A子ちゃんのお父さん、「それを聞いて安心しました。日本に住んでいる韓国人の多くは日本名を名乗っている。つまり隠してきているわけですからね。おたくのお子さんは、ご両親を越えたというわけですね」と言われました。

私は、この方の「隠して生きている」という表現に引っかかりましたから、本名を名乗りたくても名乗れない日本社会である、ということを説明しました。就職差別の例をとって。するとA子ちゃんのお父さんが、「あ、そうですか。たいへんに厳しい状況に生きているということがわかりました。しかし、日本の差別的な状況は歴史の中で政策的につくられてきたものですね。庶民はまた戦争の被害者であったということを、区別していただきたいんですね。そういう中で防衛しなくてはならなかつたでしょうね。しかし、過剰防衛ということもあるんじゃないでしょうか。子どもを差別から守ろうとするあまり、子どもに民族差別の話をあまりたくさん聞かせていくと、このプリントにあるような歌が出てくる、この歌詞といったものは悲愴ですね。これではかえって子どもを歪めてしまうのではないかと思うのですが」。

私がこれに対して、何か誤解があるようです、と反論しています。「むしろ私は、前回も思いましたけど、みなさんの方に私に対する先入観があると思ってならないんです。日本の中で本名を名乗って生きていくことは、私たち韓国人の場合には自分の誇りを回復していくということだと思います。でもそういうことって、ここで手短にお話できることじゃないですね。いつか機会があれば、じっくり話させていただきたいと思います」。

すると、A子ちゃんのお父さんが「民族差別といじめ、いわゆる誰にでも起こりうるいじめは区別した方がいいと思っています。それなのにおたくの場合ではそれをいっしょくたにされて、これもそれも民族差別と言ってしまっているんですよね。それでは娘さんは

絶望してしまうでしょう」と言っています。そこで、私が、「先ほども申し上げましたが、やはりわたしどもの家庭生活がどういうものなのか、みなさんにお話する機会がなかったんですし、ですからみなさんにおわかりにならないことはたくさんあるはずですから、どうぞ先入観をもたないでお話していただきたいんです」と言っています。

そのあとにあるお母さんが発言されています。「実は私は、ある社宅の寮の管理人をしているんですけども、自分の子が『管理人の子』と言ってからかわれるんですよ。それから炊事を担当している方なんですけれどもね、その方の場合は、『炊事婦の子』と言ってからかわれるんだそうですよ。このあたりの家庭の教育ってどうなっているんでしょうね。こういうことってよくあるんじゃないですか」というように発言されています。

するとBさんが「私は最後に発言させていただきますけれども、この度のことは、やはり学級担任の責任という問題は避けられないと思います。いつも心の問題を何より大事にしていくとおっしゃつていながら、こういうことでは困ると思います。ですからね先生、今回のことときちんとご自分の責任として捉えてくださいね」と発言しています。それに対するお母さんが、「ちょっと待ってください。そういう先生の気持ちのもちようというものについて言われたら、困るんじゃないでしょうか」と発言しています。

もうこのときに5時を過ぎていたんですね。時間が遅くなつたので、私が最後に、「ちょっとすみません。私の方からみなさんにお願いがあるのですけれども。私は実は今日は、とてもたいへんでした。たった一人で自分の立場を説明するといつても説明できるものではありません。ですからせひ一度、こういうことについてきちんと捉えていらっしゃる、しかるべき先生にお話をしにきていただいたらいいと思うんですけども、いかがでしょうか」と提案しました。

結果6名を残し賛成、ということで学習会を企画することになりました。

ところで、私はこの直後、ほぞを噛んでいます。「学級経営の責任をとってください」と詰問をした人と他数人が、その後校長室にゆき、「担任から下ろすように」談判したそうです。私はうかつにも、学年末に成り行きの一切を悟ります。

そのようなことがあったからと思いますが、この後先生はすっかり憔悴されて、私との話も避けるようになっていきました。

それでも学級懇談会の翌月3月に、都立大学の小沢有作先生にお願いして講演していただきました。「違いを通して問題を発見する」という題でした。すばらしい講演でした。これが親の間に大きな反響を呼びました。そしてPTAの運営委員会でも取り上げられることになり、翌年にまたもう一度、全校あげての小沢有作先生の講演会が開かれました。「生きることを励ますこと、ささえること」というタイトルでした。PTA主催の講演には、先生たちは一度も来られたことがないのですけれども、このときには数人が来てくださって。

実はこれでようやく、学校が働きだしたなと私には見えました。それまで孤独なたたかいであったと思いますが、こうしてPTAの中に仲間ができ、クラスの中に親しく率直に話せる人ことができたと思っています。

ところで、今回の学級懇談会の記録を読んで、私自身ギョッとしています。もう一步も退かないという気迫でしゃべっています。今振り返って、なぜあそこまでがんばったのかと思います。やはり在日二世だからと思います。自分自身の被差別の体験がよみがえってきたのです。無力なために押し流されてしまった過去のいやしがたい屈辱がオーバーラップしたんだと思います。私が子どもの頃、被差別を感じたとき、たった一人で震えて、そして祈りました。「思い違いであってほしい」。そのうち、「思い過ごしに違いない」と思い込みたいために、その屈辱を胸のうちに呑み込みます。そして、その事実すらなかったように押し隠してしまいます。一人では反駁していく言葉も持っていないからです。ただその場をじっと我慢して過ぎるのを待つということだったわけです。ところがわが子もまた、いわれのない差別を受けたとき、私は今度こそ、問題の本質を明らかにしなくてはと思いました。また、日本中いたるところに泣き寝入りをする在日の子どもがいると思うと、私は「負けはないぞ」と決意していました。

たとえば、同じ小学校3年生の頃、私にはこんなことがありました。クラスの友だち7、8人で外遊びをしていて途中ある子の家に行くことになりました。私も誘われるままについて行きますね。す

学校が動き出した

ると玄関にお母さんが出てきて、「ああ、そこのあなた、あなたお帰りなさい」というのです。なぜ私だけがあげてもらえないか。その理由が小さな頭ではわからなくて悩みました。一度や二度ではないのです。あのときの大人たちの、ねめずり回すように私を見る眼差しは、今でも忘れることができません。

あの頃の自分自身を振り返ると、文字どおり東奔西走で…狂気の沙汰という忙しさでした。PTAにしても、消費者運動にしても、また民族差別を撃つ運動、在日の権益擁護、政治犯釈放の運動にしても、地域ばかりでなく、中央にもかかわるという生活でした。

そのような学習の中で、自分の子どもに降りかかる問題というのは、実は日本の学校教育全体の問題だと気づいていくわけですね。そして、また、先生とのコンタクトがうまくとれない、先生が取り組んでくれない、取り組めないというのもこれは日本の教育行政が悪いと気づいていくんですね。ですから、現場では教師に対して要求していきましたが、その一方で、とりわけ行政闘争には手抜きせず取り組みました。「横浜の民族差別と闘う会」の仲間とは力を合わせてねばり強くたたかっていきました。幼い子どもをかかえて、疲労困ぱいするのですが、けれども、そういう苦労のなかで、問題の中心が見えてきたと思っています。

次女 佳林の場合

そういう中で、次女が同じ小学校に入学します。この子は入学時から本名ですから、親としては楽観していました。長女の場合は韓国人であるのに日本名を名乗らされて、それなのに韓国人として振る舞い、その矛盾の中で苦しんだと思いましたから、今度は大丈夫と思っていました。その上、この子は快活で、やんちゃな子ですから、多少のことは乗り越えていくと楽観していたわけです。また、担任の先生も、自ら次女を持ちたいと希望された方でしたから、なおのこと安心しておりました。

ところで話しあは脱線しますが、私はその先生に後でお尋ねしました。

「どうしてうちの子どもの担任になりたいと思ったんですか？」

“カンコク”を武器にしていく子どもたち

と尋ねましたら、「李さんのPTAでの言動に関心を持ちました。この親となら一緒にやれると思ったんです」と言われました。私はたしかにその頃、民族差別の問題をクラスの外で出したことはありませんでした。PTAの民主化のために学習会を企画したり、また子どもの問題にしても「いじめ」の問題、「障害」児の人権の問題、学力不振児の学力保障の問題について発言していました。それらはわが子をとりまく問題と通底していると考えていました。この方はPTA学年学級委員会担当にまでなってくださって、PTAと職員室のパイプ役ということをていねいにやってくださいました。ところがその先生の熱意、誠意をよそに問題は、思いがけない方向で次々起こっていったわけです。

はじまりは、名前です。私は娘の名前をカタカナで「キム カリン」と書いて送り出しました。この学校は名札をつけますが、それ以外のものもすべてカタカナにしました。私は、この子を外国人として、韓国人として理解していただきたいために、カタカナでやっていたわけです。

子どもは目に見える違いに目敏いですね。「変なの、こいつカタカナだぞ」ということになったようです。それでキムという名字なのでキムチと呼ぶ。次女は赤毛なのですが、それをかけて、やがて、「キムチキムチ、まっかっか。くさいくさい」とはやしたてる子が出てきました。ただこの子は、負けてはいないんですね。もみあい、やりあっていたようです。また、自分としては理不尽なことを感じたのか、すぐに担任の先生にも訴えたようです。「先生なんとかしてちょうだいよ」と言ってくるんだそうです。

この先生はとてもまじめな人ですから悩まれました。「自分としては、最初見たときに異質と出会うんだから、当然葛藤は起ころうと思っていた。ところが問題というのは、子どもらしい好奇心とばかりはいえない。子どもたちは、その違いをいつの間にか弱点としてとらえて行動していく」と言わっていました。また、二学期も後半になると、「カリンさんが傷ついていると知っていても、正直なところその瞬間、私はどう対応していいか、わからないんです」と言われました。それからまた「ぼくはいつも問題が起こってから、しかもお母さんに指摘されてはじめてこの深刻さに気づくんです」と言われました。カリンとの間にこぜりあいが起きると、やがて「韓国帰れ！」というせりふが出てくる。いつの間にか「カンコ

ク！」を武器にしてゆく子どもたちの変わり様…。その背後が見えないと悩んでいたようです。

私はその先生と何度も話し合いました。またその先生が仲間内でやっている学習会に呼ばれて、4回連続、日本の中の在日韓国人問題ということでお話しさせていただいたこともあります。一生懸命だったと思います。けれども「わかっていくほどに抜け道がないように思われるんです」というように嘆かれました。そして、一年を終えようとする頃には、「教育が国家に支配・管理されている。そして今、市民意識が疲弊しているとき、そういう中で民族差別が起こっている。民族差別の事象だけ捉えても、問題の解決にはならない。やはり私たちは学校の民主化ということでがんばらなくてはならないんじゃないかな」と言われるようになりました。はじめなために、一歩あとずさりしようとはなさいませんでしたが、そのためには気の毒なほどに憔悴されたように見えました。

その頃の次女の様子がよくみえる作文がありますので読みます。はじめに、私との交換日記ですが、読みます。これは2年生の6月に書いています。

「オモニに教えてもらいたいことがひとつだけあるの。聞いて。いつもどうしたらすてきなゆめが見られるのかなあ。カリン、悪いゆめを見ると次の日には、なんだかねむるのがふるえたくなるくらいにこわくなっちゃうんだもの。そんなときって、大声でキャアキャアとうるさくしたくなってムズムズしちゃうから。どうしたらいいゆめ見られるのかなあ。教えてください」。

その頃から、次女も夜中に泣き叫ぶようになりました。「○○くんがナイフで刺すよ」なんて寝言を言うことがありました。また、次女が4年生のときに書いた作文ですが、ふり返って書いていますから読みます。

ひとり、韓国人ということ

「ひとり韓国人だということ 4年 キム・カリン

私が韓国人だということはみんながよく知っていると思います。けれども私が韓国人だからといってからかわれたり、いじめられたりしたことがあることは知らないと思います。『韓国人』といじめられたとき、私の胸ははりさけそうで悲しくて悲しくてたまりません。けれどもぜったいに泣かないことに決めています。なぜかとい

うと、また次の日もおもしろがってからかわれるのはいやだからです。それに、泣いて弱虫にみられたらもっと韓国をけいべつするかも知れません。だから本当は泣きたいのに、反対に大声で叫んだりします。

韓国人と言われたとき、私はひとりぼっちだなあ、さみしいなあと思います。韓国人と言われたとき、『あなたは私たちと仲間じゃない』と言われたような気になります。もちろん、韓国が話題になるのはいやではありません。少し前、金子先生がソウルオリンピックで何がいちばん心に残りましたか？と聞いて、みんないろいろ感想を言ったとき、みんなもソウルを見たんだなあと、とてもうれしくなりました。

私は日本で生まれたけれど韓国が大好きです。だから友達にも好きになってほしいのです。小さいときのころをふり返ると、とくに1、2年のころ、よく男の子にいじめられました。私の名前をおもしろがって、『キムチ』と呼ぶのです。『ちゃんとキムと呼んで』とたのむと、『日本で生まれたから日本人じゃないか。韓国の名前を使うなら韓国に帰ればいいじゃん！』と言うのです。悲しくて、くやしくて、たまらなくて、家に帰ってオモニに話すと、クラスのみんなに手紙を書いてくれました。『カリンは日本で生まれ柿の木台に家があるのですから、帰る家はないのですから。帰る家は柿の木台にしかなくて、とても悲しくなります。またキムという名字はおじいちゃんのそのまたおじいちゃんと、なん百年も続いた名前で、誇りを持っています。遊び半分でからかわれるとさみしくなりますから、名前を正しく呼んで下さい』という内容でした。

でも、やっぱり私はキムチと呼ばれたし、けんかをするとくやしまぎれに『韓国に帰れ』と言わされました。まわりの男の子まで呼んで、『韓国は戦争の時、日本人に悪さをしたんだ』と言われたときには、心がひっくり返るほどびっくりしました。その子は2週間くらい毎日毎日言ってくるし、ほかの男の子たちにも言いふらすので、私は学校にいくのがいやになりました。その頃から男の子が大嫌いになりました。何か別のことでけんかをしても、差別されたくないから、絶対に負けないと心に決めました。3年生になってクラスがかわっても、間もなくすると、またからかわれるようになりました。私は絶対に許さないと思って大声でどなったし、ときには殴ることもありました。いつのまにか私は男の子から、『きょうぼう女、お

とこ女』と言われるようになりました。私だって本当はきょうぼうにはなりたくない。ふつうの女の子のように楽しく遊んでいたいのに、毎日のようにけんかになるのです。

ときどきそんな私がいやになって、学校をやめたいなあと思いました。でも一人でも二人でも友だちがほしいから、次の日はがまんして学校に行きます。そのうち女の子が、『カリンちゃんて、きょうぼうね』と言うのを聞いてしました。そのとき胸がつぶれるほど、悲しくなりました。男の子にきらわれて、そのうえ女の子にまできらわれたと思いました。女の子に、『遊ぼう』と誘って、『え、今日はちょっと…』とことわられたとき、私はもうきらわれたんだなあと思いました。

去年の秋のことです。私は妹を連れて、クラスの女の子と一緒に第一公園に遊びに行くと、Mくんのたん生日だということで10人くらいで野球をやっていました。私たちがすみの方で遊ぼうとすると、『じゃまだからだけよ』と、らんぽうに言されました。私は負けたくありませんでした。『いいじゃない』とがんばっていくと、いつのまにか私だけがかこまれて、『韓国人は知能指数が低いんだ。韓国人は韓国へ帰れ』と言ってなぐったり、体にボールを投げつけたりしてきました。

私をなぐったのは4人でしたが、もうそのときにはいくらがんばっても無理だと思いました。すると5才の妹がラケットを持って走ってきて、『おねえちゃんになにをする!』と言って、ラケットをふりまわして叫びました。するとみんなはもっとなぐってきました。あのときほど悲しくてくやしかったときはありません。

あとで考えてみると私だって悪かったです。せっかくのみべくんの誕生日をみんな喜んで野球をしていたのに、私たちが割り込んできたからです。それにしてもなぜ私だけあのとき、『韓国人』と言つていじめられるのでしょうか。ふつうのけんかではそんな言葉は出ないはずです。それからあのとき近くでは、何人かのクラスの友だちがそれを見ていたのに、まったく気にもとめないで遊んでいるのを見て、私はひとりぼっちなのかなあと思いました。

私はひとりぼっちと考えてしまうのですが、本当にひとりぼっちだったら学校にいかれません。だから友だちがほしくて一生けん命でした。きょうぼうだからきらわれるのだから、おこつたりらんぽうになんかしないと思いました。でも相変わらずからかわれるから、

がまんするのがたいへんでした。少しの間、グッとがまんしてもやっぱりおさえきれなくなってしまします。

テレビのニュースで北朝鮮のスパイ事件が出たとき、『カリンちゃんもスパイ？』と言った子がいました。そんなときどう話したらいいのか、やりきれない気持ちになります。日本人もどろぼうがいて新聞にのっても『〇〇ちゃんは、どろぼう？』ときく人はいないと思います。私が一番言いたいことは、みんなと同じようにつき合ってほしいということです。私の気持ちはみんなと同じです。みんなと仲良しになりたいということです。でもやっぱり日本人ではありません。私には韓国の血が流れているからみんなと違う点はたくさんありますが、友達になりたいという気持ちはみんなと同じだということです。1週間前女の子4、5人と帰っていたとき、『キムさんの正しい名前の発音をしてみて』と言われて正しい韓国語で発音すると、喜んで練習してみせたのに、分かれ道に来ると急に大きな声でまちがえた発音をしました。私があわてて、『それ、ちがうよ』と言うともっと大きな声で合唱でもするかのように叫びました。私はムカムカしてきたけど、泣き顔を見せたくないで走ってその場からにげ出しました。

あとで考えると悪気はなかったと思う、でも私はきずついた。私がきずついたとは思ってもみないでしょう。おかしいからさけんのか、私をからかいたくて叫んだのかわからなくなりました。私は、みんなが悪気がなくて言っていることなら、私ががまんすればいいんだと思ったりしましたが、ときどきがまんする自分がみじめで悲しくなります」。

この作文を読むと、いつも涙がこみ上がります。なぜ嫌われるのか、小さい頭で悩んでもわからないのです。囮まれて、さいなまれ、たった一人でがんばるしかない。この作文を読まれた方は「しっかりしている、だいじょうぶ」などと言われますが、親としては、わが子の緊張が伝わってきて、不憫でならないのです。9才か、10才の子が、なぜここまでがんばらなくてはならないのでしょうか。なぜ、ここまで反省的に生きなくてはならないのでしょうか。他のお子さんのように適当に身をゆるめてすごさせたいというのが親の思いです。

実に8枚にわたる原稿ですが、これを一気に書き上げるにはわけ

親の願いどおり韓国を表現する佳林

があります。1、2年生の頃、名前をからかうという、いかにも卑小に見えた問題でしたが、野放団に扶植され続けて、次女は3年生になった頃から、上級生のグループに暴行をうけるようになりました。あんなに愛らしく、活発だったのに、4年生になった頃には、打ちしおれて、おどおどするようになってしまいました。両親の願い通り、真実な天真な朝鮮人としてふるまうために、たたきのめされてしまったのです。

次女は、長女とはタイプが違い、積極的に行動する子でした。朝の会の歌のリクエストがあれば、まっ先に手をあげて韓国の歌「サントッキ」を推薦したといいます。ところが自分ばかり得意満面になって歌うので皆、きょとんしてしまう。それではと翌日、模造紙にカナをふって大きく歌詞を書いていきます。けれども皆のとまどいは同じだったようです。習いたての韓国語を仲良しの友だちに喜んで教えてあげる。すると、傍で見ていた子が「こいつ、おかしいんじゃないの！韓国、韓国って偉そうにするなよ！」となじる。

はじめて母国を訪問した3年生のとき、小遣いの全部をはたいてクラスメイト全員に買った民芸品を配りながら、韓国を話題にすると、大半は喜んでくれたが、2~3の男の子が「そんなにいいんだら、韓国帰れよ！」と邪険に言うのだそうです。言う方は無頓着に「帰れ」と言ったのかと思いますが、言われた方は在日三世であり、帰るべき“家”がないことも知っています。帰れとは「排除」のせりふです。無惨なやり方で、ちりぢりに裂かれて、放り出されていくというのに、このとき、わが子には、一人の味方もいないのです。

子どもたちにとって、「カンコク、カンコク」というのは、とつておきのしっぺ返しという武器となっていました。そのけんかには勝っていても「カンコク」と言われたとたんに、それが胸に突き刺さってうなだれてしまう。そして、後になって決意するのです。「この次には、絶対に負けない！」と。道理を並べて相手を屈伏させることなどできませんから、もうそのくやしさを腕力に込めていくのです。「ふつうの女の子のようにしていったのに…凶暴おんなと呼ばれる」……見た目には粗暴ですが、心の中では泣き叫んでいるのです。

そんなとき、せめて、担任の先生お一人でもいい。娘を援護射撃する人が一人でもいたら、こんなに深刻にはならなかったと思います。

3年生になってクラス替えがあり、担任の先生も変わりました。私はいつでも担任が変わるたびに個人面談を申し込むことにしていましたが、その方は「私は個人面談はしない主義です」と背を向けられました。私はクラスが替わるたび、担任が変わるたびに新しい出会いにやり場のない慣れをかみしめることになります。いつも、全く前年のことが引き継がれていないのです。ですから担任が変わる度にゼロからの出発です。学校のあり方というのは、個人に対して冷たいものですね。

面談を無下に断られたのですが、それでもあきらめずにたってのお願いですと申し入れました。ところがその方は、「大丈夫です。私はプロです。心配はいりません」ときっぱり言われるわけです。そのおっしゃりようがあまりに尊大でとりつくしまもなく、私は断念しなくてはなりませんでした。

けれども予想できるんですね。これからいっそうひんぱんに起こるであろう錯覚と誤解が……。親としてどうささえていくというのか、またもや厚い壁が立ちはだかります。

やはりといいますか、一学期の後半にはいじめや暴行がエスカレートしていきます。この頃には、夫と私のあいだで子育てをめぐって衝突もしました。「これでは完全なパニックじゃないか。佳林までパンミの二の舞を踏ませるのか」「我々の教育と日本学校の現実はあまりにも隔たっている。佳林からしばらく韓国を遠ざけよう」と夫が言います。私は「いや、それではあの子は死んでしまう。佳林にとって韓国は誇りなのよ」と訴え、ゆずりません。自営業になってからの夫は、日本人経営者と比べて格段の制約をうけるのですから、脆弱な経営基盤では、不利な分を長時間労働、低賃金労働で埋め合わせる他ないという苦しさの中にありました。「わが子の将来」を思えばこそ、耐えてがんばっているわけです。子どもに降りかかる民族差別の問題には私以上に敏感だったと思います。

八方塞がり、出口なしと思われたのですが、そういうなか、11月、一斉の個人面談がありました。一人、わずか15分というのですが、私はその日をじりじりと焦り、待ちました。それは、まさに対決というような緊迫したやりとりになりました。私は彼女を糾弾し、彼女もまた声を荒げて反駁してくるというようでした。とうとう彼女は、「韓国って意識しすぎると思いますよ。ことさら韓国っていわ

またもやゼロからの出発

なくてもいいんです。黙って座っていれば問題は起こらないんです」と言われました。それに対して私は、日本社会の法的差別、排外の意識にまで言及し、その先生を困惑させてしまいました。あの場面はいまふり返っても壮絶だったと思います。

ところが、その人は、実ははじめて誠実な人だったのです。その翌日、「カリンちゃん、一番つらいことは何?」と尋ねたそうです。

すると次女はこう答えたんだそうです。「先生にいじめられたくないってこと」。その先生はそのひと言に突き動かされてしまったようです。その夜、先生から電話があってそのことを知りました。

ちょうど、その日、朝刊にチマチョゴリの高校生への暴行という記事が出ていたのですが、「きのう、きょうの新聞を読んで真暗な気持ちです。○○ちゃんもその中にいるんだとはじめて気がつきました。○○ちゃんの言葉には愕然としましたが、私、これまで本当に可哀想なことをしました」とひたすら詫びられるのです。心なしで弱々しく聞こえる受話器の向こうの声に、目頭が熱くなりました。ようやく心が通い合えるようになったと思いました。間もなくその先生と二人、じっくり話し合う機会ももてました。先生から誘ってくださいました。「個人面談の申し込み断ってしまったこと、すみませんでした。正直に言いますと、私、保育園のお迎えの時間があって、帰りを急いでいたのです」私はその理由をはじめて理解しました。「そうだったんですか。そのように仰っていただければ、私もここまで悩まなかつたのですが…」お互いに正直に向かい合って、子どものこと、生活のことを語り合っていました。

その後、先生から度々お電話をいただくようになりました。それほどトラブルが多いということなんですね。目の前でスパイと言われている。そこで、授業を1時間つぶしてみんなで話し合いをする。それでもスパイはスパイと呼ぶ子がいるということでした。

その先生は取り組まれてはじめて、差別の根が深いことを知り、思うように進まないと悩まれ、嘆かれましたが、けれども私には、見事な成果がなくても、その人の変容が本当に嬉しかったのです。とくに最後の学級懇談会の先生のお話には胸打たれました。

「私は今日みなさんに謝りたいんです。カリンちゃんのことでは知っている人が多いと思いますが、ずいぶんとつらい思いをさせてしました。私、きのうの自習の時間に何気なくクラスを見回していたんですね。そしたらカリンちゃんに目が止まって、私はカリ

ンちゃんのことをいろいろ考えました。結局は何もわからなかった、何もしてあげられなかつたなあと思ったんです。そのときにふと、となりのAくんに目が行つたんですね。そしてはじめて気づいたんです。あら、私はAくんのことだって考えてみたら何もわかっていないかったと気づいたんです。私は実はその日まで、子どものことはよく見えていたと思っていました。でもよく考えてみると何も見えていなかつたんです。原点にかえらなくてはと、気づきました。これもカリンちゃんのおかげです」と言わされて涙を流されたんです。

それを見て、ほかのお母さんたちはキヨトンとしてしまつて。それでも、涙で顔をぐしゃぐしゃにされて、「李さん、本当にありがとうございました」と言われたんです。私も泣いてしまつました。その先生と対角線に見つめ合いながら。胸の共鳴版が鳴り合つたと思つました。

ようやく学校に“変わり目”のきざしが見えてくるのですが、佳林をとりまく状況は一向によくなりませんでした。男子の暴力というものがやまないのです。それがモグラたたきのようなものなんです。教師がダメだというとやめるのですが、すると今度は、あっちから、こっちからと、ひょっこり出てくるのです。ときに6年生の男子が数人でかかってくるということもあって、次女は暴力に怯えていました。5年生になるころにはすっかり懐疑的になり、悲哀にねじれていくというようでした。

ところでカリンが5年生になる時、3番目の子が入学しました。学校が変わる学校が変わつたということを、この3番目の子の入学で実感しました。

と言いますのは、本当に有り難いことなんんですけど、長女・次女を担任された先生の中で、正面から取り組もうとされてもうまくいかなくて悶々と苦しまれた先生が何人かおりましたが、その人たちみんな3番目の子の学年にいらしたんです。この学校は組合が強いですから、学年までは本人の希望が通るそうなのです。

あまりの驚きで、思わず「相談されたのですか？」と尋ねましたら、学年態勢でちゃんと支えていこうということになっているとのことでした。担任する教師だけがそのクラスを背負うのではなくて、この学年に起きる問題はこの学年全部の問題として、お互いに抱えていること・悩んでいることを出しあって、支えあっていこうとい

うように話し合われたそうです。

この学年に、重度の内臓疾患があるお子さんが一人と、また、朝鮮人の混血のお子さんが一人、LDのお子さんが一人、またうちの子がというように、社会的にハンデのある子がいたのですけれども、それらを学年の教師集団で討議し支えあっていこうということになつたそうです。

お聞きしたところでは、職員会議のもたれ方も変わってきたということです。それまで事務的伝達であったものが、お互いに子どもたちの姿や様子が浮かびあがるような実践を出し合うようになり、話し合う職員会議になってきたとお聞きしました。

三女は、長女が4年生のときに担任してくださった方になりました。私は、この先生には教えられることばかりで、心を尽くしていただいたと感謝しているのですが、先生が仰るには、「私はパンミさんを担任していたときにいろいろお母さんからお話をうかがいました。お母さんの親の思いとしてはわかるような気がしたんですけども、本当には民族差別ということがわかりませんでした。それに実際に問題が起きたときには、私は何をどうしていいのかわからなかつたんですよ。でも私はそれじゃあいけないと思って。今度はパンミちゃんの妹さんで何でもやってみようと思っているんです。お母さんも知恵を貸してくださいね」と言われるのです。

その先生の長女のときの対応がどうだったのか。たとえば、ある子が長女の給食袋を隠したんだそうです。長女はもうおとなしいばかりではないんです。やつた子がタジタジになるほど容赦なく抗議したそうです。あなたは悪い。人間まるごと悪い。なぜなら何ヵ月前にも私を韓国人とか言った。それに3年生のとき私を「キムチ」と言ってからかったことがあったとか言いつのっていったようです。その騒ぎに先生がやってきて、話しましょうということになったそうです。そこで先生は、「そうですか。それはよくないです、悔しかつたでしょう。だけれどもパンミさん、今は給食袋を隠されたことでとても困つたと、それで2度とこんなことはやってほしくないということですね。だから今ここで何年前とか何ヵ月前の話を全部持ってくると、○○君は頭がパンクしますよ」そのように話してくださつたらしいんです。

私がいつも感心しましたのは、即、手を打たれるということです。私は心の傷を過剰に包み隠して、かたくなになつてがんばつてしま

う娘が、この人によってどんなに慰められたことか、導かれたことかと感謝しています。

よく10時過ぎにお電話を下さいました。赤ちゃんの声が聞こえるんです。小さいお子さんがいるんでしょうね。で、私、「先生、泣いていますよ」とか、「いいですよ、すぐにお電話くださらなくても」とか言うのですけれども、「いえいえ、心配でしょうからね」と仰るんです。そういうことがありましたのに、自分としては足りなかつたと言われる。頭が下がる思いです。

ところでその時すでに、公団団地に入居が決まっていましたから、1学期間で転校するのですけれども、それまでの間、いろいろ取り組んでくださいました。朝の歌で朝鮮のうたを歌うことになりますと、「カナちゃん、もし楽譜があれば、お母さんから借りてきてもらえますか?」と声をかけられる。その翌日には伴奏入りで皆が歌うというようでした。また、その朝鮮語の歌詞も模造紙に大きく書いて、教室の前に張り出してくださって。それからまた数日しましたら先生からお電話をいただきました。「お母さん、カナちゃんからもきっとお話が行くと思うんですけどね。うちのクラスで毎日、『お話大好き』という時間を持つんです。それでみんなに読んでほしい本をおうちから持ってきてちょうどい、と話しました。是非みんなに読んであげたいので、韓国の絵本とか民話の本があったら貸してもらえないかな、と頼んだんですよ。でもカナちゃん忘れるかもしれないから、明日持たせていただけますか?」

また1学期でさよならをするんですけども、そのときにクラスのみんなが「カナちゃん元気でね」という文集をつくってくれました。きょうここに持ってきてましたから皆さん見てください。どれもこれもほほえましいんです。チマチョゴリを着ている絵が何枚もありますね。「お誕生会のとき、韓国の歌を教えてくれてありがとう」とか。「カナちゃんの声はきれいだね、韓国の歌ありがとう」とか。「韓國のお話たのしいね、ありがとう」と。どの子もどの子も、「ぼくのこと忘れないでね」とか、「学校に遊びにきてね」と書いてあります。朝鮮と素直に出会っているんですね。

わたし、これを手にしたとき思わず涙ぐんでしまいました。長女・次女のとき、朝鮮人として生きるというあたり前のこと geki kureba、命が萎えていくようななかで、それでもわが子のために奮い立ち、

「朝鮮が好きになつたよ」

挫折か再生かをかけてたたかってきた道のりが走馬燈のようにぐるぐる回りました。

子どもたちが朝鮮と出会う、触れ合って、そんなにむずかしいことではないんですね。朝鮮の歌をみんなで歌った、チマチョゴリに手を通してみた、朝鮮の民話を一つ読んでもらった、それだけで朝鮮が好きになるんですね。無垢の柔らかい子どもの心は、みんな知りたがり屋だとわかりました。その7年前、長女の場合、大人の反発の声が陰でささやかれて、子どもの世界にひずみをつくりましたけれど、何よりも先生が曇りのない目で会って、朝鮮もまた、かけがえのない個性として表してくださると、みんな好きになるんだと、わかりました。

はじめての転校

1学期が終わって、次女と三女は同じ横浜市内の小学校に転校することになりました。次女は転校が新天地を開くというように考えていてとても楽しみにしていました。ですから転校しますと、一生懸命明るく振る舞うんです。けれども内心では自分の心の傷を見られまいと、隙を見せないようにと緊張していましたから、親としてはそれが心配でした。ただ本人には決意があったようで、理想を描いて行動していたようです。転校してすぐに生徒会の役員に立候補しますし、また、運動会では、女子初の応援団長になるとか。何でも自分から立候補して進んで行くというふうでした。

新天地を開きたい

もともと社会問題には関心があって、テレビのドキュメンタリー番組をよく見るんですが、そういうこともあって、教科書通りにやる社会科の授業ではよく発言したようです。

ですから、転校してすぐに、人目についたと思います。先生も正義感が強く、積極的に行動することを讃めました。それが鼻についてたのか、一人の女の子Cさんが、韓国・朝鮮をあなどるようなことを言ってきました。「韓国は何でもものまねする国なんだって、お母さんが言ってた」。次女は、その根拠はわからないまでも漠然と「違うよ」と抗議したようです。が、その子は「今、食べてるポッキーだって、テレビも自動車もみんなそうなんだって。韓国は遅れてい

るから泥棒みたいに真似するんだって」……またもや大人が背後からささやくのです。そのC子さんはアメリカから二年前に帰国し、帰国してからはさんざんいじめられたそうなのですが……次女よりも4カ月前にこの学校に転校してきました。C子さんは、なぜなのか、まとわりつくように、朝鮮蔑視をくり返しやってきました。

次女は思いあまって、担任の先生に一部打ち明けたそうです。すると先生は、「カリンさん、韓国のこと大事ですけど、学校ではいろんなことをやらなくちゃならないんですよ。だからたくさんやる中のひとつですからね。でもカリンさんが調べて発表したいことがあれば、是非みんなに教えてくださいね」と言わされたようです。本人はその言葉に納得していたようです。

6年生の社会科は歴史なんですけれども、次女は、もう、古代史のころから憤慨するわけです。教科書に書かれている、奈良の都、その当時の国宝、広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像など写真に載ってるわけですが、次女はそこに、朝鮮百濟渡来のもの、新羅渡来のものと書いていないとン怒るわけです。

それを手を挙げて発言するらしいんです。「先生、まちがっています」というように。ただその先生は転校したとき、いろいろお話をしていましたから、そういう態度については否定的ではないんですけども、その先生は知識がなかったようです。「カリンさん。カリンさんがそう思いたいのはわかりますけどね、でも事実は違うんですよ」と言われたそうです。そう言われて、後じさりしないんです。たとえば教科書の中に、漢字は中国から伝わったと書いてありますが、それを歴史書で調べた上で実は漢字は中国でつくられたけれども、それを伝えたのは朝鮮人の王仁（ワニ）という学者であるときっぱり発言するわけです。

その頃から、クラスのなかに、ただならぬどよめきが起きたようです。先のC子さんはきっぱり反論してきました。「とんでもないまちがいです。あれはまちがいなく中国から伝えられたものです。それは本にも載っているでしょう。カリンちゃんは嘘つきです」とうちのお母さんは言っているよと言うわけです。その後、C子さんと反目し合うようになったようです。次女は負けてはいませんでした。

たとえば、豊臣秀吉が登場すると、待っていたように手を挙げて、

社会科の教科書に憤慨

「豊臣秀吉を英雄のように書いていますが、秀吉は昔、私の国、韓国を侵略して、國の人々はとっても苦しめられました。だから韓国ではこの人を英雄とは見ていくなくて、嫌っています」と意見を述べたそうです。

日韓併合のときはなおさら強く出ます。ところで、関東大震災も教科書では取り上げていますが、横浜では山本すみこ先生たちの尽力のおかげで、横浜における朝鮮人虐殺について触れるようにという指導になっているんです。ですから本来なら先生から話されることなんでしょうけれども、その先生は教科書を読んだあと、やおら、「カリンさん、関東大震災のことについて、知っていることがありますか?」と尋ねたそうです。「はい」と答えると、「じゃあそのことについてちょっとみんなに話してくれませんか?」と。

このときには次女は、いわゆる予習できちんと調べて、ノートをつくっていたわけじゃありませんから、頭の中のイメージを即座に言葉にしたようです。うちに本や写真集がありますから、それを見たときの印象ですね。それはたいへん残酷な場面ですよね。地震があったとき、朝鮮人が井戸に毒を入れたというデマを流して、たくさんの朝鮮人がむごたらしく殺されたこと。生きたまま火に放り込まれたり、トビ口を頭に打ち込んでひきずり回して、なぶり殺されたこと。「実際にそういう残酷なことを日本人はやったんだそうです。うちにも写真集や証言集がありますから見に来てください」と発言したようです。

すると、その次の日にC子さんが女の子たちに一生懸命話していったそうです。それは、カリンに聞こえるような大きな声だったそうです。「きのうカリンちゃんが、関東大震災のことについて言つたことは嘘だ。カリンちゃんは作り話をした。カリンちゃんは日本人を憎んでいるから、ああいう作り話をするんだよ」。

たしかに担任の先生も面食らっていらしたようです。史実を知らないので、大げさに言ったととったようです。在日韓国・朝鮮人の子どもがいるんだとはじめから知っているのですから、ご自分も予習をしていただけるとよかったです。私はその先生に、大阪・奈良・京都などで苦心してつくられた歴史の副読本数冊をさしあげたり、お預けしているんですよ。分厚い専門書じゃありませんから、その気になれば、楽に学習できるんです。教科書がまちがっていると、たった一人でがんばっても報われるはずありません。

今度の学校もやはり、受験加熱の高い学校で、クラスの3分の2くらい私学を受験するんです。しかも学力は市内でトップということです。みんな塾通いをしていますね。それも有名進学塾です。

そういうことが背景にあるのかと思いますが、6年生の2学期11月におぞましいじめが起きるんです。占いが流行っていたようですが、その頃はC子さんが中心になっているグループからいじめをうけて、意氣消沈していた頃なのですが、そのC子さんのグループが、次々と誘ってくれたそうです。娘は彼女たちのねらいなど思いの他で、これでやり直しができるかも知れないと、喜んで出かけて行ったようです。メンバーは同じなんですかけれども、3日間続けて3軒のうちに呼ばれて行ったんですね。

そこで「分身さん」が行わされたそうです。「このクラスでいちばん嫌われているのは誰ですか?」と。すると10円玉が靈の力で51音の上を動いて、そして「キ・ム・カ・リ・ン」と差すのだそうです。また「このクラスで一番早く死ぬ人は誰ですか?」と言うと、また、同じように出るんだそうです。それを3日間やられたわけです。

娘にとって、「分身さん」など初めてのことですから鵜呑みにしてしまったわけです。それから数日たって、娘は発作を起こしました。「息ができない」ともがいて、転げ回るんです。

数日後、病院へ行きました。心身症だと言われました。「過呼吸」という症状だそうです。とにかく学校に行かせるのはやめなさいと指導されました。学校を休ませておしゃべりするうちに、「分身さん」のことがわかったのです。これは問題ですから、私は早速学校に行きました。知った先生は青ざめ「これはただちに手を打ちます」と言されました。

先生はグループの子どもたち一人ひとりと、かなりの時間をかけて面談されたそうです。それでK子ちゃんの気持ちもわかりました。K子ちゃんは、「先生、私眠りたいんです。毎日1時になんでも2時になんでも眠らせてくれないんです」と逆に訴えたそうです。受験勉強に追いたてられていたようです。11月でしょ。私学受験のために、朝も5時6時に起こされるんだそうです。

先生は、これはまたこの子がたいへんだというので、家庭訪問されたようです。ところが、お母さんはキッパリと、「親というのは子どもの将来を誰よりも考えて、よかれと思ってやってるんです。

次女までも心身症に

学校のことは先生にお任せします。でもうちに帰ってきてからのことについては、先生、関心を持っていただかなくてけっこうです」と言わされたそうです。それで、先生は私に「どうしてもK子ちゃんのお母さんにはわかってもらえませんでした。K子ちゃんもつらいんです。お母さん、K子ちゃんにも同情してあげてください」と言われるんです。問題のありかが見えているというのに担任の先生はもう諦める他ないと額を影らせます。絶望です。私たちには、緊張を緩めるために学校を休ませる以外に手はありませんでした。瀕死の息を吐き、呼吸困難に喘ぐ娘を介抱するとき、私は娘の命が削られていくと、本当に思いました。そして、この日本にこの子が生きられる場所が果たしてあるのだろうかと考えると、胸の奥が疼いて悶々としました。

在日韓国人と日の丸・君が代

そのような抜け道がないと思われるたたかいの中で、次女は1990年2月28日朝日新聞に「君が代歌えません」を投書しました。読みます。

「君が代」歌えません

音楽の先生が不意に「宗教か何かで『君が代』歌えない人、手を挙げて」と聞いてきました。思わず周りを見てしまいました。みんなきよとんとしています。いっそう私はあせりました。…ようやくの思いで私は言ってしまいました。「あのう、私、歌えません。」これを聞いて数人の男の子がざわめきました。とたんに私の心はぐらりとゆれました。私は韓国人なのに、なぜ日本で生まれたんだろう。それが知りたくて歴史の本を読んでいくと、そこには目をおおいたくなるような事実がたくさん書いてありました。

1910年、日韓併合が公表された時、「朝鮮全土は土地をたたいて泣き声に満ちた」というのに、日本ではのき並み、日の丸が飾られて、花電車まで出たこと。村をおそった時、その証（あかし）に日の丸を張りつけていったこと。土地を奪われて、名前まで変えられて、その上、日本語しか使ってはいけないと強制されたこと。それ

「君が代 歌えません」

らに胸がつまるようでした。

それから私は日の丸を見るたびに祖國の人たちは「何を思うだろう」と考えるようになりました。私は日の丸を見上げることがつらいです。

去年の卒業式の時、となりの友だちは「君が代」をどんな気持ちで歌っているんだろう、歴史を本当に知っているんだろうかと思いました。歌詞の意味を知ってしまった私は、とても「君が代」を歌うことはできないのです。

これは次女が、朝日新聞の「ひととき」欄に投稿したものですが、全国に大きな反響を呼びました。93通の手紙が寄せられ、他に海外から韓国から十数通ありました。どの人も「日本の国家に挑んでいく12才の少女の英知」と讃えるのですが、けれども何がそうさせたのか……在日韓国人の現実にはあまりに思いがいたらないようで、複雑な気持ちでした。あの投書は、12才の在日韓国人の子どもが、屈辱から這い上がりたい思いで、脱出路を見つけたいと、ようやくの思いで書いたものなんです。その状況を少し説明させていただきたいと思います。

卒業式の練習のとき、音楽の先生が「君が代 歌えない人、手をあげて」と尋ねたのがそもそも始まりです。娘はようやくの思いで手をあげて、「あの～、私歌えません」と言ったそうです。ところがその意志表明に対して、音楽の教師は何の反応も示さなかったそうです。娘は帰宅後、その場の様子を憤りをもって伝えました。

私は不安になり、さっそく担任の先生に手紙を書いて、翌朝持たせました。「なぜ私たちが在日しているのか…。歴史のうなりのなかでほんろうされ、在日を余儀なくされているからです。それはとりもなおさず、日本の侵略戦争の結果です。かつて朝鮮人は植民地支配のもと、天皇の名のもとに、口では言い尽くせない抑圧・屈辱・陵辱を受けました。私たちの立場ではとても天皇を讃える『君が代』など歌うことはできません。どうぞご理解ください。また、このために佳林が疎外されないためにも、クラスメイトの皆さんに、正しく伝えて、佳林の立場、心情が理解されるようにご配慮ください」というような内容でした。

その翌日、朝の会で担任の先生は「このクラスには君が代を歌えない人がふたりいます。ひとりは宗教上の理由から、もう一人は国が違うためです。もし韓国の国歌というのなら、佳林さんも喜んで

歌うと思いますが……。それぞれの立場に違いがあるということを皆さんも理解しましょう」と話されたそうです。わずかに2、3分の説明だったそうです。

帰宅後、娘は「大人はずるい」と訴えました。「ものわかりのいいような態度で、本当の理由を言わなかった。知っているのに言わない。許せない」とくやし涙を流しました。

それから2、3日すると娘は、真剣な眼差しで話しかけてきました。「君が代のことを投書していい？私の口からみんなに話したいけど、きっと『またか』って言うに決まっている。新聞に載せたら、みんな『へえー？』って読むと思うんだ」と言いました。相談を受けた私の方は、12歳の子どもの投書を新聞社が取り上げるだろうか、見込みはないと思いながらも、本人のひたむきな気持ちに打たれて「皆にわかるように、自分の気持ちを正直に、正直に書きなさい」と励ました。そのようにして書かれたわけですが、これが幸運にも掲載されたわけです。

ところがそれからが大変でした。遠くからのまぶしいほどの激励とは反対に、地域では辛らつな仕打ちを受けました。「君が代」齊唱のとき、娘が着席したままいると先生が「歌わなくてもいいから、みんなと一緒に起立しなさい。それが礼儀というものです」と言わされたそうです。周りのクラスメイトたちも口々に「何をここまでこだわるの！」と非難したそうです。くる日もくる日も愚弄を楽しむように、口実をつくっては娘をいたぶったようです。

この時期しきりに「自分は一人ぼっち」だと言っていました。疎外感に押しつぶされそうになって、心身症の過呼吸がいよいよ高じて呼吸困難になりました。その頃、娘が叫んだせりふが胸に焼きついています。「私は死んでも君が代を歌わない。もし歌ったら、私は差別に負けたことになる」と叫んで泣き伏したことがあります。

日の丸・君が代を忌み嫌う……それは次女ばかりではありません。わが家では皆がそうです。3番目の子も去年あたりから意見表明するようになりました。たとえば、祭日の日、街を歩くとしますね。路上にも、商店街にも、デパートにも日の丸の旗がはためいています。それを見て三女は言うんです。「やだね、オモニ。お祭りの日だっていうのにとんでもない旗が町じゅうに出てるよ」(笑)と、素朴な疑問なんです。私は勿論反日教育なんかしていないですよ。

ただ、日本のご家庭と違う点はあると思います。子どもと正直に

向き合って、祖父母の生き越してきた人生、両親の……わたしたち夫婦の歩いてきた道を正直に話します。英雄伝ではない、庶民の苦しい紆余曲折ですから、カッコいいことなんてありません。不体裁なことばかり……。でも何でも話します。それは親の責任と思っています。たとえば皆で「きけ わだつみのこえ」という映画を見ます。その後で話題になる。その時、その時代、同時代を生きた在日韓国人一世の父のことを話します。子どもは知りたがり屋です。自分につながる歴史の証言をとても聞きたがります。どのような話なのか、一つ例に出してお話しします。

私のアボジは朝鮮人としてはまれであるわけですが、私が生まれた時には、すでに日本の長者番付に載っているような人でした。パチンコ王と言われたことのある人です。けれども子どもの時分、私は決して幸せではありませんでした。経済的な困窮はまぬがれても家庭生活が破綻していて、さいなまれる毎日でした。私が中学生になった頃にはアボジが毎晩のように荒れるのです。アボジはいまだ癒えることのない傷口をいくつも胸のなかにたたみこんでいるので、それが時に吹き出してしまうのです。

アボジは3歳のときに両親に連れられて日本に渡ってきました。けれども早くに父親を亡くしてしまいます。幼い子どもをたくさん抱えてハルモニ（祖母）は路頭に迷うのですが、人に教えられて朝鮮餡を売るということで生計を立てることになりました。ですから、その暮らしの貧しさといったら極貧なわけです。顔が映るようなおかゆが日に2度、醤油など、それに塩を加えて2倍にして使ったそうです。

それでも男子には学問がいるというので、学校にはやってくれたそうです。ただアボジが申しますには、学校に行くといつても教科書も買ってもらえない。鉛筆一本さえ持っておらず、いつもボロをまとっていたので、「朝鮮帰れ」と石つぶてをくらう学校生活だったそうです。二度の食事にもこと欠くぐらいですから、弁当など持たせてもらえない。昼休みのベルが鳴ったかと思うと一目散にかけ出して行ったといいます。グランドの隅の木の下でじっと待つのだそうです。その時のひもじさ、みじめさといったらなかったといっていました。

ところが、高等小学校2年のある日のこと、どうしたことかお弁

アボジのこと

当を持たせてもらえたそうです。その日は朝から心が弾んで……待ちに待った昼休みです。喜びいさんで弁当の蓋をあけると……麦メシと、そのわきにおかずのキムチが詰まっている。ところが箸をもって口に運ぼうとしたその時、突如担任の先生がツカツカ走り寄ってきて、アボジの前に仁王立ちになると……みるみるうちにその顔は鬼瓦のようになって、そして、いきなりアボジを椅子から蹴落とすと、その椅子を持ちあげて、背中といわず、体中を殴りつけたそうです。「この神聖なる教室で～！天皇陛下の御真影のおわします御前で、キサマ～！くさいものなんぞ出しあって。教室をけがすのか～！」と叫びながら、殴ったというのです。アボジは無我夢中で逃げ出しました。その日を最後に二度と学校には戻らなかったそうです。

あの時代の日本で、12、3歳の朝鮮人の少年が家長として社会に働きに出るといつても差別と偏見の中で、その苦労は並大抵ではなかったと思います。やおやの丁稚、染物屋の下働き、運送屋の荷運び人……転々としたようです。アボジは幼いなりに考えたようです。差別に負けないためには金を増やす。金さえ殖やせば人間としてまっとうに扱われる……日本人に後指差されないように、それはそれは遮二無二働いたそうです。

思えば長者番付のトップといつても選挙権は言うに及ばず、当時国民健康保険にさえ加入できませんでした。それからまた税金対策であったかもしれません、アボジは県や町の施設や学校に莫大な寄付をしていくのですが、背中から追いかけてくる日本人の言葉は「第三国人が！」「人の国でデカイ面しやがって」の罵声だったわけです。

一度こんなことがありました。私が小学校3年生のとき深夜、泥棒が入りました。被害はたいしたことがなかったのですが、被害届を出したのです。ところが、その翌日から3、4日、我が家は家宅捜索される破目になってしまふのです。篭縛といわず行季のすべてをひっくり返し、4、5人の刑事がことごとく調べます。アボジは民族団体にも寄付していましたから、何か疑われたようです。アボジは「これでは被害者なのか、容疑者なのかわからない」と憤慨し、その後何があっても警察に頼むようなことはしませんでした。

アボジはこのようにいく度もいく度も足元をすぐわれることがあったのです。先程、荒れると申しましたが、家庭内暴力です。決

して子どもには手を上げないのですが、その有り様は、わたしの目には破壊と憎悪……何といったらよいか、すさまじい光景でした。60才を目の前にしたとき、ハタと自分の人生をふり返ってたまらない気持ちになってしまったのです。同じ人間として生まれたのに、誰がアボジをここまで歪めてしまったのか……。私たちきょうだいは、何よりもアボジから教育が奪われたことを嘆きました。アボジは何によって自分が歪められたのか見えないのではないかと思います。それが見えないために、目の前のオモニに苛立ち、オモニを責めたてるのです。オモニはされるままに耐えていました。オモニが多くを語らないために、かえってオモニの苦労を思ったものでした。今お話ししたことは、アボジの人生のなかのほんの1コマです。アボジには今でも触れれば血が吹き出るような記憶が無数にあります。アボジのように国家権力のために人生を狂わされた人は無数にいると思います。

私はこのように、歴史を生々しくぐり抜けて生きてきた人々の話を機会があれば子どもたちに話します。当然歴史的事実についても語ります。過去を忘れて、明日はないですから親の義務と思っています。事実を知った以上、君が代を歌うことはできなくなります。やはり娘たちは、歴史の学習という以前の感情で……両方の祖父母の“今”をつぶさに見ていくから、「私のおじいちゃん　おばあちゃんをいじめた権力」その正体を憎んでいますから、子どもたちは身にしみて思っています。天皇制は悪いんだと。

長々と話してきましたが、ここで親の葛藤についてもお話ししたいと思います。これまでの私の話し方では、やもすると、前を向いてりりしく進んできたように聞こえるかも知れませんが、そんなことはないんです。何度、「もうダメだ！」と泥沼にはまり込んだかもしれません。長女が一時とはいえ失明したとき、本気で思いました。

「明日、無事で目を覚ましてくれるだろうか」と、そして、悲愴にも「この子を20才までは何としても無事に育てる」……とつぶやいたものです。本気でわが子の自死を怯っていました。正面からぶつかっていくと、日本人の朝鮮人に対する感度というのは戦前から少しも変わっていないと実感させられます。それはもう、死をも思わせる厳しい現実です。

長女ばかりではなく、次女までも……呼吸困難におち入ると背中

嘘の人生　まっぴら
ごめん

をさするのですが、時に夜中じゅう、夫婦交替でということもありました。夫が、私に涙など見せたことのない夫が泣くんです。そして、私を責めるんです。「どうして、こんなにまっすぐに育ててしまったんだ」、「どうして、上手にかわす生き方を教えないんだ」と。私には夫の気持ちがわかるだけに、泣くばかりです。でも胸の中で反問するのです。（あまりに社会の底辺を見てしまったのです。人間のなかに悪魔を見てしまったのです。私は自分の子どもたちに、私以上に、弱い立場の側に立って社会的に生きる人になって欲しかった。世の中の不条理に立ち向かっていく人間になってほしかった。なぜ、それが間違いなの！朝鮮人として生まれたものが朝鮮を隠しては人間らしく生きられないでしょう。なぜ、それが間違いなの！）……けれどもあの時ばかりは私もくじけてしまいました。流れに逆らって、しかもたたかって生きる生き方を無防備な子どもにさせるとは、親として失格ではないのか……。心臓が刺し抜かれるような痛みです。弱気になった私は、とうとう長女と次女に胸の内を打ち明けました。

「このごろオモニは、あなたたちにとって、ダメな母親だった、間違っていたんじゃないかなって考えてしまうことがある」。すぐに二人は吹き出していました。私が粗こつ者なので、またヘマをしたなと思ったようです。「冗談の話じゃないのよ。あなたたちは本名を名乗って学校に行ったでしょう。…みんなにわかってもらえないでさんざん苦しい思いをさせてしまった。それも頑固に名前をカタカナで書いてね。違いを突き出してたたかわせてしまった。在日韓国人の大半は、自分をくらませて、実利にさとく生きている。オモニだってそういう生き方を教えられないことはなかったのよ。なぜって、アボジもオモニもきょうだいは皆そうでしょう。でもね、オモニはあなたたちに夢を架けて育ててきた。人の道をまっとうに歩いてほしいと思った。差別を許さない生き方をしてほしいと願った。でもあなたたちにとっては、先に進めば先に進むほど、壁がどんなに厚いのか、高いのか見えてくる。オモニの願いというのはあなたたちにとって酷だったのではって、このごろ悔やんでいるんだ。このごろカナがね、『私にも歴史ちゃんと教えてよ』って迫ってくるの。教えていいものなのかどうか……。親でありながら、みつともないけれど今、悩んでいる」

すると次女が挑むように、「オモニ、本気でそういうこと考えて

いるの、冗談じゃない」と言いました。そこに長女が切り出しました。「私は、今の自分が大好き。いろんなことがあったけど、本名になって、自分が本当に考えていることをぶつけたから相手が見えてきた。日本という国について考えたら、世界の中の日本、世界の中の韓国についても考えるようになった。もし、そうしていなかつたら…自分をあざむいて生きることになる」と言いました。続いて。次女は、「私は、人一倍苦しんだけど、苦しんだから本物が見えてきたと思う。嘘のある人生なんて真っ平ごめんだ」といいました。

聞きながらただただ「ありがとう、ありがとう」と涙ぐむばかりです。在日をどう生きるのか……模範解答などありはしない人生を、糺余曲折てきて……でもそのとき、わが子は“親を越えた”と思いました。そんなわが子を私は誇らしく思っています。

先程、次女の八方塞がり、の場面で途切れていますから、その後が気になると思います。近況を少しお話しします。次女は公立に進みませんでした。民主教育で知られる、日の丸も、君が代もない中学に入りました。歴史教育を正しくやってくれる学校なので親が勧めました。中学一年の地理で、在日韓国人問題を十数時間もやります。けれども、次女はここでも埋もれる存在ではないですね。おかしいと感じると、考えるとアクションを起こします。親としては、そのカリキュラムに感謝しているのですが、次女は不足だと言って注文すら出します。

民主的な学校には、民主的な人が集まると次女は幻想をもっていましたようですが、やはりここも日本社会の一隅です。子どもたちの差別感や排外の意識は、外とあまり変わらないようです。

次女は入学早々から、悶着を繰り返しました。けれどもあっぱれなのは、学校の体制です。次女のように、体ごと直球を投げる子どもを受容しようという度量の広さがありました。子どもたちの騒乱の背後にある民族差別の根深さについては、すでに承知していました。次女は、よく観察し、鋭く人を非難してしまうのですが、どの先生も受け立つといいますか、喜んで子どもと議論するという気風があります。

次女は毎日のように自分を実験し、周りを観察し、問題点を発見してきますから悩み多いようですが、親として今日では“先が見える苦労”と感じています。ここに最近書いた作文がありますから

「意識しすぎ」

部分的に抜粋してみます。題は「私の主張」です。

「日本人であれば誰も民族だとか国家なんていうかたくるしいことを意識することがないと思う。でももし何かの理由で突然、外国で暮らすことになったらどうだろう。周りの人たちは奇異な目で見てくるかもしれない。興味本意でものを言ってくるかもしれない」

たった一人、異質であるという不条理を憎み、不遇を訴えるだけだったのに、自分のことしか見えない、自分のことからしか見ないという思考から逃げ出して、日本人の側、マジョリティーの側を見てみよう想像力を伸ばしています。

「私はもがいてももがいても抜け道がないような学校生活のなかで、いつも探していたのです。差別や偏見のない人間関係。私という人間を韓国人だからという見方ではなく、金 佳林という固有名詞の在日韓国人と見てくれる友達関係を探していました」中略

「私は相手の素朴な質問に困ることが度々ありました。『なぜ韓国人なのに韓国語話せないの？』という話になったとき、私にはてつとり早く説明をするのはむずかしいのです。結局、私は順序よく話すことになってしまいます。……略…… ところでこんなことを何度もかするうちに、私は相手の顔色の変化に気づきました。いかにもうっとおしい様子を見せたり、興味がないという態度を見せるんです。みんなにとっては、私のやったことではない。今の自分には関係のことだというのかもしれません、それでは私の立場はどうなるのでしょうか。もし『日本人の侵略』がなければ、私は韓国で生まれていたと思うし、小学校の頃、あんなにいじめられることもなかったのです」

娘は中1の頃よく嘆いていました。「日本人は無知が過ぎるよ！やられた方は知っているというのに、やった方は知らないでいいの！」と。日本と朝鮮の埋めようのない溝がこの子にとってはタブーではないのです。話せばきっとわかってくれる。もし、反発されたら自分の出方が悪かったんだと逡巡しました。

紛れもなく朝鮮人であるとわかっていても、この子は在日三世であり、祖国に抱かれたことなどないのです。一世のような「遙かなる山河」への想いはないし、また二世のように祖国の命運にかりたてられるということはありません。それなのに日本に差別されつづけてきた朝鮮を背負っているのです。小学校6年ころ、よく聞いてきました。「私は、私の性格が嫌われるから“チョーセン”と言

われるの？それとも朝鮮人が嫌いだからはずされるの？」娘は自尊心が首をもたげて“逃げる”わけにはいかなかったのです。自分が朝鮮に帰属できるものではないのに、在日するという自分の実感に徹底して自覺的であろうとしています。

「私の場合、どうしても周りの人たちとの間に“壁”を感じてしまっています。何度も何度も『意識しすぎ』と言われるけれど私だってできることなら韓国人ということを意識しないでリラックスしたい。でも、これまで突然、不意うちで『韓国人！』と言って痛めつけられたことがあったのだ。そんなときの屈辱は口では言いあらわせないものだ。だから私はいつも四方八方にかまえてしまうのです。なぜって、あんな目にはもう、絶対あいたくないです」

“意識しすぎ”とは、親も子も、しじゅう言われます。けれども意識しないで、日本の朝鮮、朝鮮観に同化してしまっては大変です。内なる朝鮮を、自分で自分を抑圧することになってしまいます。差別されるから、その抑圧とたたかわなくてはならないのです。たたかうためには意識して抗がっていかなくてはなりません。これは在日韓国人が問題なのではなくて、そうさせる日本社会の根本の病理が問題であると思います。

「〇〇中に抱いた夢は、私の勝手な幻想だったのです。何もかもゼロからはじまるのだし、私自身も、〇〇中の中でもまれて変わっていくのだと思います。最後に、私はみんなに知ってほしいことがあります。私は強いタイプの人間に見られがちですが、実はそんなに強くないのです。私だって『絶対に弱音なんかはかないぞ』『何だ、これしき』と思ってみるけど、でも本当はすぐその後からベソをかいているのです」娘は小学生のとき、あまりにも多くのことを学びすぎたのだと思います。コンプレックスが濁るように沈んでいるのですが、それを見てとられたくないから心に鎧を着せてかたくなになって努力してきました。でも、もう、その鎧を脱ぎたいと言っています。自分と正直に向きあって、ゼロからはじまりたいと言っています。

この作文は、2年生の夏休みの宿題で書いたものですが、これを読んだとき、私は「もう、だいじょうぶ」と思いました。いまでも、本人は毎日のように悶々としていて、時にSOSを発するのですが、夫は「美しいなあ、人の何倍も人生を感じて生きているよ」と意に介しません。ほんとうに長くなってしましましたが、最後に明る

い話題でまとめたいと思います。

わたしの変化、マジョリティが変わる

三女は現在、小学校4年生ですが、すくすくと元気に育っております。友だちがたくさんいて学校が大好きです。やはり、長女・次女の体験を教訓にしているお陰と思っています。先程触れましたが、三女は次女とともに1年生の2学期早々、いまの小学校に転校しました。転校ということで私は夏休み中に校長先生に面談を申し込みました。ところが転校前というのでとまどわれ快い返事をいただけません。私は思いあまって教育委員会に談判しました。そちらの骨折りがあってようやくこぎつけました。校長との面談が終わると、私はその場ですかさず担任になる予定の方とこそ、是非面談したいと申し入れました。これには、なおさらのことしり込みされます。私は、確信をもってその必要を説きました。2、3日たって、ようやくOKの返事をいただきました。

その日私は、自重しなくてはと自分に言い聞かせながらも、やはり期待をもってドアを開けました。それがおかしかったんです。その人は憮然として座っていて、私があいさつしてもニコリともしません。そして開口一番「まだ担任もしていない生徒の親との面談なんて、僕は非常に心外です」と、ぶっきらぼうに言います。私は、その人が一目で好きになりました。正直な人だと思いました。

私は長女、次女に起きたことをかいづまんで話し、上二人のようなことを繰り返したくないと話していくのですが、その人はあらぬ方をみて、それが抗議とでもいうように耳を貸してはくれません。それではと、私は次女の作文「一人、韓国人だということ」を読みはじめました。やおらその人はこちらに向き直し、真剣な表情に変わっています。そして「ほんとうにそんなことがあるのですか？許せません」といつの間にか義憤をもってこちらを見つめています。

やがて、「具体的に、私に何をしてほしいと言うのですか？」と言われます。てっきり早いハウツーなど何もないのにと弱りながらも「むずかしいことじゃありません。自己紹介のあと、ちょっとつけ加えていただきたいんです。『カナちゃんは海を超えたとなりの国、

相手の痛みに寄り添うということ

韓国の子ども、韓国人です。でもカナちゃんは日本で生まれましたから日本語しか話せません。それでもカナちゃんは、おじいちゃんおばあちゃんの、生まれた韓国が大好きで、大事に思っています。韓国は日本に一番近いおとなりの国です。仲良くしましうね』これだけを話していただければ有り難いです。何よりも望みたいことは先生に知りたがり屋になってほしいということです。見た目には日本人と同じに見えるかもしれません、暮らしは違うんですよ。是非、わが家に遊びにきてくださいね」といいました。

ところが、その先生は転校した翌日には、わが家を訪ねてこられます。「キムチ、キムチ」といつからかわれて泣きましたがだいじょうぶですか?と尋ねられるのです。それから毎日のように夕方になると自転車こいで汗だくだくでやってこられます。こんなこともありました。「知っていますかお母さん。カナがきのう団地内で水鉄砲で追われながら『韓国人は帰れ!』と呼ばれたんです。これからそのやった子の家に行ってきます」険を寄せていましたから、その時は私の方がなだめました。「先生、その程度の摩擦はよくあることです。違いと出会って子どもたちは好奇心からどよめいているんです。衝突はあたり前です。どう越えていくか……ゆっくり時間をかけてわかっていくというのでいいんです」私も変わりましたね。元からこうだとよかったです(笑)。

ところが1時間後、その先生はしょげた様子で再び訪ねてきました。「お母さん。だめでした。その子のお母さんはフィリピン人で日本語がわからないんです」私は絶句していました。「それでは、カナよりもその子の方がしんどいんですよ」小学校2年生というその男の子は、人知れず「フィリピン帰れ」と石を投げられたことがあるのではと、思いました。私は、その子のお母さんがどんなに心細く毎日を送っているのかと、私の母のかつての姿を語りながら話しました。そうして、その子の担任の先生も交えて、三人で話し込みました。

これは、よいきっかけでした。この小さなトラブルを通して、この学校には、ニューカマーといわれる、ペルー人、ブラジル人、韓国人との混血の子どもが多数いることがわかり、その子たちのかかえる問題も浮かび上ってきました。「民族差別なんて今どきありませんよ」と言ってのけたその担任の先生の目は否応なく開かれていたようです。

そのようなこともあって、その先生、弱冠28才の方ですが、しばしばわが家を訪ねてくださいました。そのおり、私が心にかけたことがあります。それはその人の話をよく聞くということです。実は私は小沢有作先生に叱られつつ教えられるのですが、人は自分の内面と共に鳴するとき、はじめて他者の声を聞くのだと言われるのです。自分のことを話すよりも、相手の“いたみ”や“つらさ”をよく聞きなさいと言われたとき、わが身を振り返って、なるほどそうだと思いました。ですから私は、機会をみてはその先生の生いたち、小学校時代、中学校時代……ご両親のことなどを聞かせていただきました。お聞きすると、その人にも胸の底にしまい込んできた屈折がありました。親と接するとき身構えてしまったり、子どもに対して強く出るので、体罰教師などと陰口をいう人がいましたが、その人にしてみればかつての心の傷がいまだにうずくことがあり、防衛のために過剰に構えすぎて、こわばってしまうのだとわかりました。私はこの先生の内面を汲みとりながら、“子ども”的問題を話し合っていくようになりました。

この先生もまた、「カナのお陰で、見る目が変わりました」というでき事もあります。転校して2ヶ月が過ぎる頃には、三女もまた、「キムチ」「キムチくさい」とからかわれることが多くなったようです。ある日、くどい調子で言われ、三女は思いあまって担任の先生に「とってもくやしい。もうこういうことはやめてもらいたいんだ」と訴えたそうです。

その翌日、話し合いということになりました。昨日のことを説明した後、「カナちゃんの気持をみんなの前で話してください」といわれ、三女はひとしきり泣きながら訴えたようです。続いて先生が「『キムチ、キムチ』とからかって、嫌がって泣いているのにやめなかつた子は誰ですか？正直に手をあげてください」誰も名乗らないわけです。「先生は、実は誰なのか知っています。でも、自分から名乗って謝ってほしいんです」……とうとうその先生はその子の前に立ち怒鳴りました。そして泣いて机にしがみつくその子を教壇につき出して、皆にむかって謝らせたのです。ところがそれが済んだとき三女は先生のもとへツカツカと走り寄り、「先生、あんまりだよ。ひどいよ。〇〇くん、カナよりも悲しいよ」と抗議したというのです。

その日の夕方、家に立ち寄られて、腑に落ちないと言われる所以

す。その日は時間をかけて話し合いました。人の前にさらされるというのがどんなに痛いか、さらされるという屈辱はなかなか癒えるものではないのでは？……と、その先生のかつての不幸な体験もたぐり寄せながら話し合いました。話し合っていくうちに、その先生は、〇〇君に与えた苦しみが、かつての自分が味わったものと同じものだったと気づかれたようです。

その後、その先生は、目につく子どもばかりでなく、みんな一人ひとりの内面をくみとるように努力されるようになりました。叱咤激励、ときにはお尻のひとつも叩けば、子どもは伸びるとかたくなに信じているような人でしたが、子どもの内面を覗くようになると、強制はできなくなりました。宿題も、できた子には偉かったねといい、やってこない子には、何日かかっても、できたら偉いよ、とうようになりました。またクラスに勉強がいちじるしく遅れていて、運動がとても苦手という子がいましたが、やがて、その子をクラスの中心に据える取り組みをされて、その子はみるみるうちにがんばり屋になっていきました。その先生が、最後の日に言われたのです。

「僕、カナと出会って変わりました。僕は差別を許さない、子どもと一緒に歩く教師になります」と。

私は何度も、挑んでは打ちひしがれ…………、もう日本社会は変わらない、この溝は私には埋めようがないとあきらめたことがあります。けれども、この日本のなかに無念のまま声をあげない「在日」が何十万人、何百万人いると思うと、誰かが差別の枕を抜かなくてはならないと、思いなおして前に進みました。それはとりもなおさず、自分の弱さと脆さとのたたかいでもありました。たたかいながら、実は自分自身が変わっていくんです。社会を見る目、人生を読む目、人とのかかわりの質……変わりました。そうして、あきらめずにノックを続ければ、マジョリティも変わるんだと実感できるようになりました。

そして、やはり子どもたちに「ありがとう」といいたい。子どもたちのまっすぐにものを見る目に、衝き動かされ、何度も、自分の人生を読み直しました。不遇にあっても夢を追わずにはいない子どもたちから、たくさん元気をいただきました。

自分の中に流れている血

—おしつけないで！—

中国帰国者三世(高校1年)

任 璞

私は三世なんですけど、祖母が日本人で、若いときに中国に行つて祖父と結婚して、7人くらいの子どもを生んで。戦後、お金がないから日本に帰ってこれなくて、そのまま中国に残ったんです。でも、おじいちゃんとおばあちゃんが関係がうまくいかなくなって、日中が国交を回復して、おばあちゃんが離婚して、娘3人連れて日本に帰ってきたんです。そのとき祖母の長女と私の父が中国に残ったんです。

私の父・母・兄、そして日本

祖父はあまり長生きをしなくて、父が10何才くらいのときに死にまして。父の一番上の姉が地方に強制労働に行って、だから兄弟は強い絆で結ばれているんです。私の母は、天津の港町で生まれて、9人兄弟で、8番目の一一番末の娘として生まれました。母も「下放」として地方へ行って、父と知り合って、恋愛結婚をしました。それで兄が生まれて。それで、私は小学校にあがっていないときに、一度日本に来る手続きをしたんですけど、その途中に祖母が日本で死んだので、父も日本へ来ても親孝行する人がいなくなっちゃったから、やめたんです。実は、父は、その前に、私が生まれる前に、父だけがひとりで1年間くらい日本に滞在して、仕事をしてアルバイトをして、おばあちゃんが日本に来てからの借金の返済をして、家庭があるから帰ってきたんです。

私が小学校3年のときに、また日本に行こうと言って、というか、一番上の兄が日本にいるから、中国にはもう親戚とかいないから、じゃあ日本に行こうかと言って。

日本に来て、○○寮という施設に住んで。そのときに小学校に入つて、「日本人嫌い……」て、日本語学級にいました。私はいじめられたことはそんなに記憶

にないけど。でもありました。今思うとやっぱり悲しいです。小さかったからよくわからないけど、馬鹿にされるっていうか。でも、私は気が強いからすぐ言い返しちゃうけど。私は、中国にいるとき、日本が中国にすごいひどいことをしたという事は、映画とかテレビとか、漫画本とか見て知っていました。日本人は中国人にすごい悪い事をしたんだなあって。だから「日本人嫌い」とか思ってたんです。普通の中国人の子と反対なんだよね。みんなほかの中国人は、最初に来て、日本人なんてどうなのか全然わからないから、興味津々だったようですが。私の場合は日本人嫌いだった・・・。自分が日本人であるということが、なんというか・・・。で、日本に来て、分析っていうか、自分の中に流れている血って中国人の方が多いんだなと思って嬉しかった。少しは救われたんだなあと思ったんだけど。

で、日本に来て日本語学級で友だちもできて。きのときは結構楽しかったなあ。日本語学級の先生、おもしろい先生だったんです。夏に来て、半年後に普通の学級に入って。最初はやっぱり、みんなこっちの事がよくわからないから興味で「こっちに来て」なんていわれたんです。で、「自分の名前は中国語でなんて言うの」と言って。教えてあげたんだけれど。

ある日、教室で鬼ごっこしてたんですけど。たぶんじゃんけんで負けて鬼になったんです。そのとき、感じたんです。みんな違うんだよね、私を見る目が。普通の子と違うっていうか、冷たいっていうか。「あいつは中国人だ」みたいな目をしてて。むかついて、見てくるなら見返してやる、にらんでやると思って。冗談じゃない、私だって同じ人間なんだから、なんでああいうふうに違う目で見られるの、と思って。

そのとき、私は、日本語少しわかってたし、数学はすごく好きっていうか、得意だったから、私は。得意なものでみんなを見返してやろうと思って。小学校は、最初にいじめられたときに、自分はにらみ返したから、そのあといじめられなくて済んだと思っています。

でも、中国の友だちがそのときすごくいじめられたんです。その人は、バスで通っていたので、うちに帰るとまた別の小学校の人がいるんです。その人に石を投げられて。「戦争で負けたのは、お前ら中国人のせいだ」とか言って。私たちちはその頃小さかったから何

「戦争で負けたのは
お前ら中国人のせい
だ」

も言えなくて。家に帰ると外に出ないというか、いつもテレビ見てて。言葉はテレビで習ったというか、最初は見ててもつまらないから。漫画とか好きで。志村けんは、言葉ができなくても映像を見れば笑えるから。そういうのが毎日で。いつも普通学級の授業が終わって、掃除とかが終わったあとに日本語学級にいて、みんなで下校時刻まで、同じような友だちが一緒に遊んで。で、下校時刻になって、じゃあ一緒に帰ろうかと言ってバスで帰っていました。

小学校は4年生からクラブがあるから、3年間全部中国クラブで。私のふるさと—中国
そのとき何で中国クラブに入ったかというと実は先生に頼まれたこ
とがきっかけなんです。やっぱり中国人の子がいないと成り立たな
いし、やっぱりこれは日本人の人に中国のことを知ってほしいクラブ
だから。言われて3年間ずっと。

クラスから2人いて、○○さんという女の子と◇◇君という男の
子、あの2人はすごくやさしかったというか。○○さんて子はグルー
プに入ってなくて1人だったから、一緒に入らないかって誘って。
◇◇君はなんだろう、わからないな、日本人の中にもそういうおか
しな子が、というか。3年間ずっと一緒にいて。

あのとき何を思って腰鼓（小さい腰にさげる太鼓）をやってたか
よくわからないけど、やっぱり同じ中国から来た子が練習がきつく
て「やだー」とか言ってたけど、でも自分はいやだっていうか、そ
ういう感情は全然なくて。私はこれを習うんだって思って。中国で
も腰鼓をやっている人を見たら、すごくうまいなあと思って。今か
ら思うと、やっぱり自分は中国が好きなんだ。中国って今ゴタゴタ
だけど、政治はメチャクチャだけど。人も変わってくるけど、やっ
ぱり「金、金」って思うようになってくるけど。でもやっぱりそこ
が私のふるさとで。だからいい方向になるように導いてあげたらと
か思って。

小さいときから、日本人から「中国」とか言われると、すぐ身が
ピンとなって。何を言っているのか、もし悪口だったら、私黙ってい
ないから。先生でも何でも、もし悪口を言ったら私は反抗しちゃう
し。汚いとかね、そりやあ日本よりきれいじゃないけど。でも人は
やっぱり。

前に中国で住んでいた団地、チチハルっていうんだけど、そこに在
日朝鮮人がいて。二家族いるんだけど、私より年上でみんな女の子

だから、みんなでちゃんとやってるし、私はあの子たちを見下すようなことは絶対してないし。二ヵ国語できるからすごいなあと思って。おねえちゃんみたいな子だったし、いじめたりはしてないつもりなんだけど、あの子たちはどう思ってるか知らないけど。

だから中国って言えないんだよ。汚いとかそういうのだけで決めつけられないんだな、自分の心の中で。汚いから嫌いとかそういうのじゃなくて。やっぱり人から「中国はいやなところ」なんて言われたくないし。そりゃあ自慢できるきれいなところじゃないけど。

わからないけど、中国をなくしたら私は今まで頑張ってこられなかっただし。やっぱり中国人の血を引いてるのかな、それしか解釈できない。じゃあ日本人の血だって少しは入ってるじゃないの、と思うかもしれないけど。日本は中国より豊かだし、私がいなくてもちゃんとやっていけるじゃないかなと思う。でも中国をやっぱり助けたいし。日本を特別扱してないんだよね、みんな同じ。普通の國の人と同じ。

高校1年間、ずっと地理でやってて。地理はいろんな國の人についていろんなことを習うから、それについて知って。私にとって日本は世界の中の一つであって中国は違うんだ。やっぱり特別な存在かな。私はもし死ぬのなら中国で死にたいなあと思って。やっぱり中国人。。。さっき中国人てひと言では言えないって言ったけど、なんで、戦争でみんな日本人にいじめられて、日本人を恨んでないのか。みんな考え方って普通の人はできないと思う。やりきれない感情ってどこにいってるのか。もしも私があの人たちだったら、私は日本人のせいじゃないなんて言わせない。軍国主義のせいなんて言えないわ。だって軍国主義って日本人がつくったんだよ。みんな心を持っている人間で、私はすごく嬉しくって。中国人ですごいなあ、やっぱり中国人であってよかったなあって。中国人の血を引いて嬉しいな。

6年生になってから、父がもう日本にいたくないと言って帰りたいと言って、仕事もやめて。で、パチンコに行って、貯金とかもおろしてつかいこんだりするようになりました。母は、中国に帰ったら子どもが勉強について行けないし、やっとこっちに慣れたのに、帰ったら子どもの将来はどうなるのと言って。それに自分は自信がなかったし、中国の勉強だって漢字とかあるし。帰っても慣れてな

両親の離婚

いというか。日本で生活できないから中国に帰ってきたんだと、そういうふうに見られたくなかったし、それにこっちにやっとなじんできた、言葉も少しづつわかってきたのに、帰るなんて。だから反対だった。でも父は自分の意志を押し通そうとしたの。それで暴力をふるって。それが毎日続いたから、母は離婚する事にしたんだけど。離婚しようといつても父は賛成してくれなかったから、裁判に持ち込んで。で、裁判で離婚が決まったんだけど。6年生の2学期の頃に引っ越ししたんです。うちに父がいない間に。それで〇〇寮というところにいました。家賃も安くて、水道・電気・ガス代とか免除されるから。

兄はそのとき中3で、すごく大事なときだったんだけど、兄は両親のもとで育ったのではなく、兄が離乳期のとき、天津のおばあちゃんがかわいがってそっちで育ったんです。日本に来て、私は小さかったからそんなにいろんな事を考えないで、ただ自分の毎日の事で精いっぱいだったから、まわりは全然目に入らなくて、でも兄はそのとき6年生だったから、すごくいろんな思いをしたんだなあと。

兄は中1・中2のとき喧嘩とかもしてたんだけど、中3になって高校に行きたいと言って、だからすごく真面目にやって。で、高校も受かって、でもその中3のときに父と母が離婚したんですが、そのときは高校に行きたい一心に一生懸命やったんです。でも離婚してからずっと3人で暮らすんだけど、うちが狭いから、四畳半の部屋で、台所も狭くて。とても3人じゃ狭くて暮らせないから、兄はあまり帰ってきてないし。でも高校は入ったから。

それで私が中学校に入って、兄が高1になって、サッカーを始めて、バイトもしてて、自分でお金を調達して。うちは母は、本当はそんなにしゃべらない人だけど、会社で何かあるとグジャグジャ言って。兄はそれを聞きたくなくて、喧嘩になって。母は口癖のように「うちはお金がない」「たいへんだ」と言って、兄はそれがいやで。兄の立場から言えば、「じゃあ俺に高校をやめろというのか、働いてこの家を助けるというのか」というふうに思ってしまう。母はどういうふうに思っているか、そのときはそういう気持ちはないつもりだったんだけど、やっぱり日本の社会に不満があったものだから、私たちにぶつけるしかなかったし。

兄は悩んで、高2のときに中退して。で、私が中1のときに兄は

兄の葛藤

高1で、高2ときに中退したから、そのときに「お前は頑張っていいところに入るんだよ」って…。「僕たちは何をしても認められないけど、でも勉強はちがうんだよ」って。勉強ができれば先生にも認められるし。じゃあ自分は頑張って自力でいい高校に入っている大学に入って、お金をいっぱいもらえる仕事について、おにいちゃんを苦労させないよいにしようと思ったんです。

それで中2のとき兄が高校やめて「お前は絶対、いい高校に入るんだぞ。いい大学に入るんだぞ」と言って。私もお母さんたちを幸せにしたいから、自分にできることって勉強しかないんじゃないかなと思う。それに将来、日本人に認められる事といったら学力しかないんじゃないかなって。で、国籍を変えたときも、やっぱりそういう、中国の国籍だと差別があるから将来の事を思って日本の国籍に変えて。それは小学校のときのことだったけれど。

中3になってすごく不安だったけど、入試の競争率が激しいというか、上は上で競いあわないとダメなんだから、テスト前とかすごく緊張しました。でも先生に、「ここで泣いたって点数は上がるものじゃないし、やるしかない」と言われて。それで好きな科目を5にしようと思って。だから頑張って。

それにそのとき、中国人の生徒にはいい子もいるけど、やっぱり悪いことをしてしまう子もいるから。でも自分は悪い子たちを嫌いとかそういうのじゃなくて、みんな不良になっているけど本当はすごくやさしいんだなと思うことが多いです。中学校にも日本語学級があるから、みんな放課後集まっておしゃべりとかしてて。みんな心の慰め合いしてて。あの子たちも将来たいへんだろうと思うけど、でもやっぱりここでくじけちゃったら将来はないんじゃないかな。自分の今できることっていったら、学校でいい成績をとって、いじめられても我慢するしかないんじゃないかなと思って。

そのときに、クラスでは日本語がすこしできていたから。それに頑張っていたから友だちもできて。友だちは、「中国語もできて日本語もできて、こんなに真面目にやっててすごいねえ」とか言って。「将来、通訳になるの?」と言うけど、自分では、中国語ができる日本語ができる、そんなにすごいことだとは……。だってふたつとも中途半端なんだもの。中国語は10年間くらいしかしゃべってないし、わからないことがたくさんあって。たぶん日本語だって、普通

「お前は絶対、いい高校に入るんだぞ」

のことわざとかよくわからないし。そういうふうに思われたくないなと思って。言ってもたぶんわかってくれないからしようがない、と思っちゃう。

で、高校入って。自分の力で高校に入ったと思ってたんだけど。自分は努力して、と思ったんだけど、やっぱり高校には日本語学級がないから。高校に入って、中国人て言われないように、みんなに知られないようにしようと心に決めてたんです。なぜそういうふうに決めてたかよくわからないけど、たぶんそれがみんなに知れ渡つたら絶対にいじめられて、それに「両方できていね」とか言われたくないし。全然わかってないのにそういうふうに軽々しく言ってほしくないなと思ったし。それに、たぶんいじめられても自分はまたにらみ返して。中国から来たということを何で言わなかったのか、やっぱり言わない方がそういうゴタゴタがなくて、人並に日本人みたいに、普通の人として生きていけるかなあと思って。でもやっぱり、小学校とか中学校の3年間でああいう目にあわされたから、自分の性格は環境によって変えられたっていうか、変えさせられたというか、情けない話だけど。でもそういうふうになっちゃった。

中国人といわれないように…

中学校でも思ったし、自分は中国にいたらこんな子じゃないのに、こんな話をしないような子じゃないのに……。私、中国にいたときクラスをまとめる役だったから、すごくみんなに好かれたっていうか。きびしい子っていうか、真面目だったから。みんなとすごく仲よかったですから。だからすごく日本のせいで私、こんなになっちゃったと思って。でもやっぱり、もし日本に来なかったら、自分はこんな人を思う心がなかっただろうって。中国にいたって、普通の人間として目覚めるべきものは目覚めるべきなんだから、こんなつらい思いはしないですむんだろうと思うけど、自分が寂しい思いとかしてきたんだから、人にやさしくなるよりも私は楽しく生きたかったな、と思って。

中国にいたらこんな子じゃないのに

自分は、両親も離婚しちゃって父の親戚も少ないので、祖母について日本に来たおばさんたちは、全然連絡もなくて、迷惑みたいに思ってるみたいだからそれは悲しいな、中国人として。あの人たちとは小さいときすごくつらい目にあっていたからしようがないけど、でも自分はそういうふうになりたくないなと思って。母の方の親戚

は中国人だから、母はひとりぼっちだし親戚もいないし。兄は中退しちゃうし。将来っていいたら、学歴がないから普通の会社に入れないからやっぱり肉体労働でしか生きられないし。母はもともと身体が弱くて、日本に来て父がすごく暴力をふるったものだから身体がますます弱くなつて。

今、兄は会社の寮で一人暮らしをして、母と二人しかいなくて。母の仕事は制服をつくる工場でずっと働いていて、そこですごくいじめられて。手が器用だから、みんなが1日に制服を10枚くらいしか仕上げられないのに、母は早いから15枚とか。なんでそんなに早いのか知らないけどできちゃって。でも身体が弱いから、裁縫って座っちゃいけないっていうのもあるから、だから1日つっ立ってたら足がむくんですごく疲れて。だから仕事はできるんだから、少し座っていいんじゃないのと思ってて。でも座ると上司から、一課長かな?—注意されて。その人は母が仕事ができるからいじめるんです。自分の立場がないというか、そういうふうに考えているかわからないけど。それから、うちの母が、しょっちゅう風邪をひくから身体もついて行けないようになって。なぜ風邪をひくかというと、暑いと窓を開けて風がきて冷やされて、で、風邪をひいて、体調が悪くなつて。その繰り返しから。仕事でもいじめられるしやめようかと言つてやめたんです。

母は私が中3の3学期に、仕事をやめたので私は高校に受かった時点で、校則違反かもしれないけどアルバイトを始めたんです。本当は、中2の夏休みに部活をやりながらごまかしてバイトして。あんまりお金稼げないから、制服のお金とか母が出してくれて。でも母は失業保険で生活がやっとで苦しいっていうか。

兄は中退してから肉体労働の会社に入ってずっと働いてたけど、母と同じ時期に仕事をやめ、フラフラして……中国人同士で。日本の会社に失望したんじゃないかな。私も、兄が高校を中退したことについてすごく後悔したから、兄は帰ってくるといつも「勉強どう?」とか聞いて。私が「テストでこんな点とったんだよ」と言うと喜んでくれて。「高校に受かったよ」といったらすごく喜んでくれたから……。でもやっぱり、兄は自分の将来についてすごく悩んだんじゃないかなと。これからもずっと肉体労働でいくんだなとか。でも学

孤立を深める兄

校をやり直しするなんて、うちは経済的にできないし、それに勉強だってそんなにわかるものじゃないし。だからすごく失望して。自分が兄の立場だったら、これからどうしようどうしようと思うんだろうな。それで追いつめられて会社もやめちゃうんだろうな。兄はそんないろいろからまた投げやりなことをやるようになってしまったんです。もうしようがないじゃない、それ。中国から来た人だってそうなんじゃない、日本語はわからないし、勉強したって言葉の上で馬鹿にされるし、いじめられるし。だから不良になっちゃうのもしょうがないんじゃない。

日本人とかそういうふうに見たくないけど、でもやっぱり一部の人がそういうふうにしてるんだから。彼らは全然こっちの考えを理解していない。でも小さいからわからないと日本人の子どもを弁護するのはおかしいんじゃないかな、だって私たちだって同じ年だもの。おかしいよ、日本人が日本人を弁護するのは。「小さいから無理だよ」とか言って。教えるべきじゃない。それで許されるなんてひどいよ。だって大人の人は、悪いってわかってるのに、自分たちの日本人の子は寛大な目で見るんでしょ。私たちはどうなるの、私たちの方が立場が弱いんだよ。なんで私たちには寛大な目でみてくれないの。ただ違う民族なだけで、おかしいよ。

やっぱり私は無口な方だから、自分が何やっても母には言わない。人を許す心だからいつもそれで喧嘩したり。すごい喧嘩したあとに「お前はお父さんに似て、どうしようもないんだ」と言うから、それで母を憎んだりして。それは私は二人の間の子どもなんだから。私は一個の人間なもの、ちゃんと自分の個性があって、そんな、似てるとか似てないと言うのはおかしいよ。何か日本人に見られているような、普通の一個の人間として認めてくれないんだもの。「中国人すごいね」とかいわれることがあるけどふざけるなと思った。別に中国人だって、日本人と同じように悪い人っているけど、それは人間だからしようがない。どの国にもいっぱい悪い人がいて。

で、高校になって、クラスの人はみんな私が中国人だって知らない。でも同じ中学校から来た男子生徒が二人いて、その二人は自分をどう見てるかよくわからないけど、ちゃんと馬鹿にしてないという目つきだから、すごく感謝してるというか。友だちにふいに知られたことがあったけど、その子はすごくやさしい子で、私が「言

わないで」と言ったら、秘密を守ってくれたんです。でもやっぱり、万が一みんなに知られたときの覚悟はしておかないといけないかなあと思って。でもたぶん大丈夫だと思う、いじめられても。自分たちには目標があるから。今はいじめられてもそんなに心に残らないというか。どうしてこうなっちゃたのかなあと思う。答はわからないけど、何だろう、人を許しちゃうっていうか、何でも許しちゃうっていうか。なぜ許しちゃうのか自分でもわからないんだけど、すごく腹が立つのに言えないとか。この人もつらいのかな、そういうふうに思っちゃう。

で、兄は仕事をやめたんだけど、去年の夏。前にもいったように母は去年の年始に仕事をやめてその年の春私が高校に入ったんですが、母は花粉症と、歯周炎という病気で、日本で治療してもなかなか治らず、苦しんで、中国で治すために帰るといって帰っちゃって。私は一人になっちゃったんです。高校に入って落ち着かないし、お母さんと喧嘩別れするし、まわりの環境も今までと全然違うし、全然友だちもいないし。自分だけ中国人で。お先真っ暗というか……。どうして自分だけこんな目にあわなきゃいけないのか。すごく泣いた。父はこっちの電話を知ってるからよく電話してくるし。何で自分には誰もいないのか……。つらくって、つらくって、死のうと思ったことも何回もあった。でも死んだら負けちゃうし。いやだ、死ぬの。幸せになりたい。こんなつらいのいやなんだもの……。何で自分がこんなつらい目にあわなきゃいけないの、返してやりたいとか思って。でも死ねなかった。死のうと思った瞬間に、人間てやっぱり生きる本能があるから。自分で理由をつけて、ここで死んだら何のために生まれたんだって。やっぱりお母さんにも親孝行してないし。それに世の中にはつらい子たちだっていっぱいいるし。私は服着て、ちゃんと食べたいものは少しでも食べられるしとか思って。世界中にはそういうものもなくて餓死する人もいるんだから、まだまだ幸せな方だよとか。我慢しなきゃとか。母が行っちゃったものだから一人だから、おにいちゃんはときどき帰ってきて。1回すごくやばいことやったからゴタゴタあって、先生がうちに来て、おにいちゃんと話し合って。「妹がこんなに頑張ってるのにフラついていいのか。妹を大学に行かせたいんだろ。自分の夢である大学に行かせたいんだろ。だったら少しでも妹の力になってあげなきゃ」

死んだら負けちゃう
……

と。おにいちゃんはたぶん、妹が大学に行って、いい職場について、私が会社でも聞いて、「お前のもとで働こうか」と冗談で言うけれど。でも、おにいちゃんはここで生きがいを見つけたんだから、ちゃんと働いてほしい。

中学校のときは先生がそばにいて、試験前になると、放課後そばについてわからないところを教えてくれて。冗談を言い合って、遠慮なしに自分の疑問をぶつけられるから。でも高校に入って、担任が女人で、50才くらいなんですが、あまり、私の立場にたってくれないんです。面談のときも一方的に、勝手に決めつけて。殴ってやりたい、馬鹿野郎と言いたくなつた。でもそれを言つたら……言えないし。何で我慢しなきゃいけないのと思って。この間、通知表をもらって。私、社会科がすごく好きだから、すごく頑張ったから。3がついてたから、納得いかなくって、悔しくって。担当の先生に文句言って。「私、通知表をもらって、内申の得点について納得いかないんですけど」と言って。で、先生がさがしてちゃんと見て、「あ、これは……。手違いじゃないの」と言って。ふざけるな、手違いなんかするんじゃない！だってもし私がそこで言わなかつたら、私の努力が終わりで、そのまま3について。そりや人間だから手違いはするけど、でも何で？ 390何人もいるのに何で私だけなのよ、と思って。おかしいよ。木曜日で担任が休みの日だったから、文句を言いに行けなくて。でも、どこでどう手違いしたのか知らなくて。あっちは何考えているのか知らないけど、私は努力してとつたんだから、もらって当たり前じゃない。何が手違いなんだ。それで済む問題じゃないんじゃない。

中学校のときの友だちだった子は、親が仕事で日本に来たから、もう完全な中国人で。小学校のとき日本語学級で知り合いになったけど、一度喧嘩したけど、でも悪い子じゃないし考えも合うから。あの子が引っ越しちゃって、太田区かな？ たから中学校も違つて。やっぱりそのとき中国人てみんなに知られて、なまりがあるから。あの子は理科が好きでテストで100点とつたのに、やっぱりいつも、理科はクラスでトップだったみたいだし、授業中はきちんとやってると言ってるし、内申もらつたら4だった。自分では納得いかないと書いて。「どうしよう」と電話がきて、「言つたらどう」と言ったんだけど、「でもやっぱり無理だよ」と言って。私たちは努力しても

「このくそ先生！」

認められないのかなあ。このくそ先生！とか思って。日本人を恨んだりした。今度通知表をもらって、私もこうなっちゃうのかなあ。でも私は黙っていない。言うもん。自分は言わないと済まないタイプみたいだから。だからあの子すごくかわいそうだなあ、と思って。

で、母が中国から帰ってきてまた、仕事をさがし始めたんです。新聞をとるとアルバイト募集の紙がついてくるから、それを見て電話したりして。それで私が代わりに電話して「中国人」と言うと、主任の人が、「やっぱり前にも中国人を雇ったんですよ。そうしたらその中国人はきっと働かないものだから」と言って断るんです。で、思ったんだけど、人間いろいろな人がいるんだから、何で会わないで決めつけるのかな。日本人だって悪い人いるじゃない。ヤクザだっているじゃない、の人たちだって法律に違反してて、それでも生きてるじゃない。の人たちだって必死なんでしょう？仕事ができないからクビになったのはしょうがないけど。でもなんでみんな決めつけるの、中国人とか外国人とか。おかしいじゃない、自分のこと考えてみなさいよ、と思っちゃう。だから悔しかったけど、自分は何の力もなくてそう思うだけで。日本人の考え方を変えられないし。どうすればいいのかよくわからないし。で、今は母が掃除の仕事をやっていて、朝5時半に起きて6時頃にはもう出かけて、3時までその掃除の仕事がある。帰ってきてご飯を食べて、5時から2時間くらいの掃除の仕事を日本橋の方でやって帰ってくるのが8時頃。やっぱり身体が弱いから風邪ひいて。「今日は疲れたよー」とか言って。聞いててつらくて。期待されると自分はできるのかなとか。やっぱり自信がないから。勉強でも違う環境だから。高校に入ると全部自分でやらなきゃいけないし、わからないと学校へ行って先生に聞かなきゃならないし。

「中国人はきちんと働かない」

私は中学校で日本語学級だったから、まわりの先生も、努力すると「頑張ってるね」と励ましてくれたりして。だからそれですごく自信がついて。あ、日本人てやさしいんだなと思って。本当はやさしい人もいるんだなあって。日本人にもいい人がいるんだなあとと思って高校に入ったから。だから担任を見てがっかりしちゃって。なんだ、こいつに何がわかるんだと思って。そんなに特別、「私たちすごいつらい思いをしたんだ」と言うつもりないけど、やっぱり

そういうふうに簡単に言われたら、冗談じゃないとか思っちゃうし。担任が前に中国の子をうけもってその子が大学に入ったそうなんです。担任が私にその子の家庭っていうのは両親がいて、その子一人っ子で。その子の親は、日本に来るのは子どものためで、で、子どもはちゃんと親に恩返しをした。つらい思いをしたけどちゃんと頑張ったんだよ、と、私に言うの。で、「その子は中国語ができなかつたけど、英語で頑張って大学に入ったんだよ」と話をして。冗談じゃないと思って。一緒にするなと思って。なんで一緒にするの。そりやあ、うちは離婚してるよ、でも母は一生懸命生きているし。そりやあ両親がいた方がいいかもしないけど。でもうちはそういうふうにできないからしようがないじゃない。なんでそういう理想的な家庭っていうのを私に押しつけるの。うちは違うんだから。それに私は英語が好きでないし、嫌いじゃないけど。なんでそんな、短大とか私立とか、親がちゃんとお金を出してくれたとか。うちはそういう条件はないんだから、言ったってしようがないじゃない。その子は真面目にやったかもしれないけど、でもその子だってちゃんと不満を持ってるわよ。あなたが知らないだけじゃない。私だってそうだもの。なんで私のこと知らないくせに、「頑張らなきゃいけない」って、あんたに言われなきゃいけないの。

で、その担任は私を、離婚したから母親しかいなくて、失業保険だったから、おにいちゃんもちゃんとやってないし、やっぱり「この子はダメかなあ」とそういうふうな目でいつも監視されてるみたいで。私がもしも爆発したら……でも爆発したって何も解決しないし、自分のできることしかないし。あの人がそう思うなら、その人の関係を変えるしかないし。今どう思っているかしらないけど。でも先生なのに、なんでそういうふうに思うのかな。離婚してるからとか。それに私に言うの。「このクラスにだって、つらい人たくさんいるんだよ。みんな頑張ってるんだよ」「あんたも頑張らなきゃいけないんだよ」とか。そういうふうに言われると、「あんたに何がわかるの」と言いたくなる。

で、一人、小学校からずっとつき合っている女の子がいて、日本名で〇〇っていうんだけど、その子と同じ小学校で、同じ中学校だったし。高校は違ってて、あの子は商業に行っちゃって。同じ高校に行きたかったけど無理だった。で、あの子は高校に入って自分は中

「言えないよ」

国人だって隠さなかったから、すごくいじめにあって。商業だから女子が多くて男子が少ないから。その子のクラスは男子がいなくてまるで女子校みたいな雰囲気だから。いじめられたと言って。すごくつらい思いして。いじめられて、悩んで私に言ったの。私は、「やっぱりいじめられてるんだから、中国人の友だちに言って何とかやり返さないと、またいじめられちゃうよ」と言って。そいつは「言えないよ」と言って○○さんと自分を重ね合わせちゃって。私、その子に、「じゃあしようがないから、いじめられたらなるべく口答えしないように。それしかないんじゃない」と言って。あいつも本当は負けず嫌いなんだけど、やっぱり中国人とか言われると黙ってたんだろうな。私がもしもそういう目に合わされたら、どうなるんだろう。やっぱりあっちは人数が多いんだから、すごく恐かったんだろうなと思って。でも黙ってたみたいだから、あっちもつまらないと思ったみたい。今はいじめはないけど、でもきのう電話したら○○さんが言ってた。「これからクラス会をするから心配だ」って。

今、高校卒業後のこといろいろ考えているんですが、こんなふうに思っています。将来の夢

こんなことを話すのかっこうつけてるかもしれないけど、やっぱり人間で弱いから、人間の役に立てたらと。中国人だけじゃなくて、今、人がしてることでいけないこと。やっぱりしちゃいけないんだから、どんな利益になっても人間としてしちゃいけないことはしてほしくないから。だからそういうこと、よくわからないけど。

ボランティアとか青年協力隊とかああいうのをやってみたいんです。

中国では、自然にまかせて稻とか作っているけど、もっと能率よくできるような水路とか、井戸の掘り方とか、今の生活に直接役に立つ学問を身につけたいなと思っています。

「中国を好きなんだ」

——もっと知りたい！——

中国帰国者二世

李鳳梅

李鳳梅です。今23才です。日本に来て、今年で12年目になります。中国から山形

私のおじいちゃんとおばあちゃんは中国にいたんですよ、開拓団 ——あっという間の日々

で。そこでお父さんが生まれて、終戦のとき、おじいちゃんが戦争に行って戻ってこなかったんですよ。で、おばあちゃんは中国で再婚して。日中國交回復になって戻ってきて、うちのお父さんも1回見に来て、家族みんなで来たんです。

そして、私は小学校5年生のときに、家族6人で、両親と兄と姉と私と弟の6人で、日本へきました。最初は山形県の酒田市というところへいって8ヶ月くらいそこで生活しました。山形にいるときは、最初は平仮名とかも全然わからないから、そこから勉強しました。私と姉とか弟は、直接、小学校に入って日本人のクラスに入つたんだけど、平仮名もできないから、何もわかりませんでした。ただ数学のときは計算すればいいんだから、それだけ同じなのでそんなところをてがかりにして少しづつ日本語を覚えていきました。

でも、山形だと日本語学校も週に2回しかなく、仕事もなかなかみつからず、それで家族で東京に来ることにしました。最初は墨田区にアパートをみつけて、そこで4年間くらいずっと生活しました。

最初に日本に来たときは、私なんかは中国の田舎で生まれてそこで育って、で、日本の国っていうのはあまりわからなかったんですよ。引っ越しができて嬉しいっていう感じで日本に来たんですよ。

なんていうか、中国のすごい田舎から出てきて東京とか見て、車とかいっぱい走っているところで、ビルがいっぱい建ってて。ただおどろきであっという間に過ぎてしまったんだと思うんです。

東京に出てきて、墨田区の小学校に入ったんです。私は東京と地方って全然違うなあと思ったんですよ。うまく言えないんだけど、

山形から東京
——話す相手がいない

6年生のときに東京に来てからすごくいじめられ、仲間外れにされてしまいました。存在感がない、誰からも無視されて、1年間くらいずっと無視されました。最初だけ、新しい転校生が来たから最初の1週間くらいはおもしろがって話しかけたりしてくれるんだけど、そのうち言葉がしゃべれないというのがわかって、鬼ごっことかしても鬼ばっかりやらされるし。

なんか東京の子って、クラスの中でいじめられる子がいないとどうも気がすまないというか、絶対にそういう子が存在するんですよ。

で、私が入ってくる前はいじめられてる子が2人くらいいたんだけど、私が入って、誰が仲間外れにされているのか全然知らなくて、その子たちと仲良くなったら言われたんですよ。「その子たちと遊んだら、そのうちに仲間外れにされるよ」というふうに言われて。で、そんなに日本語もしゃべれないし、そのうちに私がその子たちの代わりになって。学校に行っても全然話す相手がいないから、話しかけても日本語が変だから、「話しかけないで」とか言われて。いつも一人で。そんなふうに過ごしてたんです。

そのとき苦しいからとかつらいとかわからないです。それを考える余裕もないというか、毎日その日その日を過ごすだけで精いっぱいというか。親とか兄弟も、みんなあんまり日本語ができないし、親も仕事も決まってないし、日本語学校に行きながらアルバイトをさがしていてみんな自分のことで精一杯だったんです。仕事をしてるときもつらい思いをして、で、家に帰って喧嘩したりして。私もあんまり親に言えなかっただし、親も絶対わかってくれないと思って。家に帰っても話す人がいなくて、学校に行っても誰も話す相手がない。今になったらすごいひどいなと思うんです。

そして学校の先生に、私が毎日毎日つらいというか、ひと言話すとそのたんびにクラスの人にはねされるんですよ。言葉の発音が変だから。で、後ろから追いかけて家までついてくるとか。私はその頃背が大きかったんですよ。で、殴ってきたりはしないんだけど、遠くから後ろに何人かついてきて、ずっと何か言って。で、追いかけると向こうが逃げるし。すごくずるいなあと思って。一対一だったらいいんだけど、団体対一人ですよ。

で、親が見かねて1回学校に手紙を書いて。担任の先生に書いたんですよ、私が仲間外れにされているっていうことを。今でもその

「話しかけないで」

ことをはっきり覚えてるんですけど、そうしたら先生はクラスの人には、私が一番うしろに座ってたから、私の名前を言わないで、「いじめている人、手を挙げなさい」と言ったらクラスのみんな手を挙げて。それだけなんですよ、クラスの人に何か言うとか、いじめっていうのは悪いことだよ、ということも教えないで。で、「あなたは声が小さいんだから、もっと大きな声を出せばいいんだから」と言って。そんな、声が小さいというのは、日本語ができないから自信を持って話せないんですよ。もともと声が小さいということもあるんだけど、自信を持って話すこともできないし、相手から「話しかけないで」と言われたりすると、やっぱりそのあと話しかけるのにすごい勇気がいるんですよ。考えて、「今度、何を話しかけよう」とか思って、「また無視されたらどうしよう」とか。そうしたらどんどん、話しかけられないというか、ずーっとひとりになっちゃうんですよ。ひとりでいろいろなことを考えたりして。

で、そういうふうに過ぎていって。東京に行ってから1年間、小学校6年生のとき、すごく長かったなあと、今になって思うんだけど、そのときはそういうことさえわからなくて。

私は小学校を卒業するときに、中学校に入ったら我慢するのはやめようと心に決めたんです。自分から声をかけようと。少し環境が変わったから、新しい学校の生徒も入ってくるし。日本人で、一番最初、たとえば新しい職場に入るときとか、新しいクラスになるとき、最初がすごく肝心なんですよ。最初に入るグループがあって、もしどこにも入れなかったら、そのあとも入れないんですよ。日本人で何か、すごく団体意識が強くて。もしそのグループのなかに入って、またほかのグループの人と話したりしたら、もうそのグループから、「もういいや」という感じで入れてくれないっていう、そういうのすごくあるんですよ。一昨年、中国に留学しに行ったとき、そのことをあらためて感じました。小学校のときもすごくそうだったけど、中学校のときもそうなんですよ。日本人で何かグループがあると、もうそのグループだけで行動して、ほかのグループとつき合えないというか、「つき合っちゃったら、私いやだよ」という感じで。何かやきもちみたいなのがあるんですよ。

我慢するのをやめよう

で、中学校に入っても、やっぱり小学校の人がすごく多くて。みんな、いろんな人に言うんですよ。「あの子は中国から来た人だよ。

あの子は小学校のとき、1回だけ人を殴ったことがあって、あの子は恐い子なんだよ」とか。背が大きいから、向こうも私を殴ったりできなかったから。そういうふうに人に言ったりして、後ろから、あの子はなんだかんだと、悪口を言ったりするんです。そういうとき私たちは言い返せないんですよ。だって直接言われたわけじゃないし、もし何か言い返せば、言葉で勝てないし。ずっと我慢して。中学校に入ってしばらく1ヶ月くらい我慢してて。やっぱり追いかけられたりして全然違うクラスの子でも、私のところに来て、まねしたりするんですよ。一回給食のときに、ちょうど牛乳を配ってて、私のまねしたあとすぐ逃げちゃうんですよ。私は腹が立って牛乳瓶を投げちゃったら、ほかの子がケガして。

でも、そのとき先生に救われたんです。中学校1年生のとき、私が爆発して人にケガさせて、すごく泣いたりしたとき、先生が私の気持ちをわかってくれて、この子はこういう思いをしてきたんだというふうに受け止めてくれたんです。学年集会をやって、いじめをしちゃいけないんだよとか、あと、私に日記を書くことを勧めてくれて。なんていうか、人と話すみたいな感じで、少しづつ書いててそうしたらあまり爆発しなくなりました。先生にみんなに読んでもらったりとか、してもらったりもしました。あと、先生が、学年便りに私の文章を載せてくれたことがあって、すごく嬉しかったんですよ。そういうのが自信につながるんですよね。

ひとりだけ、初めて日本人の友達ができました。その子はいろんな人から好かれてる女の子で、みんなと話して、みんなと冗談とか言って。学校のときって「〇〇ちゃん」で言いますよね。私の場合はいつも「さん」だったの。「ちゃん」が言えないっていうか、相手の方も私に対して言わなかつたの。それがなんでなのかわからないけど、話をしないから多分わからないんだと思う。「さん」だとすごい距離感があって、「ちゃん」だと何となく親しみがある……で、私に対してはみんな、いつも「さん」だった。その女の子はいつも私のそばにいてくれて、時々「この子はなんで私と一緒にいるのかな」と思つたりするほどでした。いつもそばにいてくれて、2人で話したりして。ずっと一緒にいてくれて、3年間ずっと同じクラスで。で、先生も、私とその子が仲が良いというのがわかつて、クラス分けのときも同じクラスしてくれて。先生がすごく大事なんですよ。でもやはり、普通の日本の子と話はできなかつた。

でもその子とはどういうわけか普通に話ができて、その子は私の初めての日本人の友達でした。

中学校を卒業するときこんな文章を書きました。日本は私のお父さん励みの場所——中国さんの国だから、自分の祖国だと思えたらいいなあ、そういうふうに書いたんですよ。そのときにはじめて気がついたんだけど、私も日本を好きになろうとしてるんだなあってわかって。それまではつらいことがあるときとか、いろんなことを考えるんですよ。中国のことばっかり考えていたんです。ああ、中国に帰れたら、私はこうじゃないのに。こんなにつらい思いじゃないのにとか。親のこと憎んではばかりだったし、親と喧嘩ばかりしていたので、すごく悲しかったんです。中国の私が生まれたところはすごく小さい村なんだけど、そこだけが私にとっての中国で、ほかのところは知らないから、なんか、誇りだったし、そこを思うだけで元気がでて。ああ、私が大きくなったらいつかそこへ帰るんだ、そこにいたらこうじゃない、とかね。夢みたいなところというふうにして。やっぱり小さいときに日本に来たものだから、中国のことをあんまり知らないし、励みの場所だったなあ。

中学3年生のときに、進路のことがありました。やっぱりその頃になると、少し日本語を話せるようになって、でもやっぱり授業をやってて、普通に日本語を聞いてそのままおぼえられるんじゃなくて、もういっぺん教科書を見ないと覚えられないというか、2回とか3回やらないと。だからそこが日本人との差があって。で、進路のことも考えてどうしようかなと思って。日本では、高校くらい行かないと、と普通に思ってて、行かないとどうも恥ずかしいというか、親もそういうふうに思ってて。私もあり勉強してなかつたから、というか、「日本と中国」そういうことばっかり考えてて、すごく苦しいというか、中学校に入ってから苦しくなって、いろんなことを考えて。小学校のときいじめられてたのに、そんなに苦しいというのはわからなくて、そのとき多分そういうことが言えなかつたから、中学校に入ってからいろいろなことを考えて、日記をずっと書いて。私はこれからどうやっていこうとか、進路のことも考えて。私のテストの点数も低いし、私はもう生きていけないだとか、もう死んじやつたほうがいいかなあと、そういうことを考

死んじやつたほうがいいかな

えてて。

中学校3年生のときに自殺をはかろうと思って、で、死ななかつたんですよ。その頃はまだ日本語はあまり上手じゃなくて、友達もあまりいなかつたし、成績も悪いし、親も仲が悪いし。いろんなことがあって、どうしようかと思って、中国にも帰れないし、中学生だからお金もないし。もう生きていけないと思うと、そのことばかり考えて、で、死のう死のうと思って、中3のときに1回……ガスをつければ死ねるものだと思ったんですよ。今になって考えると、ガスコンロつけたって人が死ねるわけじゃないからね、でもそのときはすごく真剣で、今日私は家に帰って、こういうふうにしよう、死んだらこうなんだ、とか。授業をやってるときもそればっかり考えて。でも死ななくて。それまで中国の友達がいなくて、日本人ばかりの学校だったから。

中学校2年生のときに、はじめて中国の子どもと知り合ったんです。でもうちの親に、「あんまり中国人とつき合うな」と言われたんですよ。なんていうか、中国人と一緒にいたら中国語話すし、言葉はダメだというんです。それで、ああ、私は中国人とも一緒にいられないと思って。

私は、高校は、中国から、引揚げてきた二世のクラスのある学校 二つの名前 にいくことができたんですが、高校に入ったとき、やはり死ななくてよかったですと今でも思う……そのときはじめて、私は「李鳳梅」でもあって、日本の名前は「熊谷かおり」なんだけど、「熊谷かおり」でもあるんだなあって。それまで日本の国籍に入るのもいやだったし、親は勝手に日本の国籍にして、私の意志なんて全然なくて。私は「入るのいやだよ」と言ったのに、でも親の方で勝手にそういうふうにして。で、ずっと日本の名前で学校に通ってて。自殺未遂したあとに私は、「李鳳梅」でもあって、「熊谷かおり」でもあるんだなあと思ったんです。そのときはじめてそういう考えが生まれてきて。

高校に入って、中国から引き揚げた人の子どもがいる学校だったんですが、私はずっと中国の子どもとあまり遊んだりしなかったから、中国語もあまりできなくて、でも日本語もそんなに上手じゃない。学校に入って、中国の子どもが10何人くらい同じ学年で、その

私は中国人？

頃は日本に来て5年くらいで、「もう中国語がそんなにできなくなつたの」と言われて。恥ずかしくないの、という感じで言われて。ああ、中国語を話さなきやと思ったんだけど、でもやっぱり、たとえば電車に乗ってるときに中国語を話すとか、そういうのは恥ずかしいと思ったんですよ。あとデパートに行ったときに、友達が中国語を話すと、あ、ちょっとやめて、という感じで。なんていうか、日本人に、「この人は中国語の人だ」と思われるのが嫌だったんですよ。そういう気持ちはあるな。中国のこと、いつも誇りに思ってるんだけど、でもそういうところもあるんです。一時期、電車に座るとき、日本人はちゃんとこういうふうに足をちゃんとして座るでしょ。でも親がちゃんとそういうふうに座らないとき、すごくいやだと思った時期もあったし。そういう小さいことまで日本人と同じような感じにした方が日本人見えるし（笑い）、すごくそういうことを気にしてたなあ。親もそう。今でもそうだな、親は。私は今では少し開き直ってるけど、私はこういうふうにしたいんだからこうすると。たとえば日本では人が死んだとき、こういうふうにするんだよ、というのがありますね。そういうのをすごく気にしてた。

高校に入って中国の生徒がいて、私と同じように親が日本人だったり、片方の親が日本人だったり。その子たちと、高校1年生のときは元気にすごしました。中国クラブを作ったり、文化祭で日中戦争の展覧会をやったりもしました。私が入った高校には、中国語ができる先生は3人いたんです、でも先生って別に中国語ができるから生徒に好かれるわけじゃないし、できなくても好かれる先生はいるんですね、ある先生は中国語が話せるんですが、中国語で悪口言うんですよ。その先生、女の子の前で言わないような、すごい悪い言葉とか平気で使ってたの。最初はその先生は知らないんだと思って、でもそのうちわかったの。ちゃんと辞書を調べて。なんかすごく馬鹿にされてるっていう感じで。中国語をそういうふうに使って、生徒にもそのうち嫌われるようになって。高校の先生は、どうもいつも言い訳してたなあ。

高校でそういう中国人の集まる教室ができて、そこで勉強したり、人に会うのもいやに休憩のときにみんなでそこにいたり、お弁当を食べたりする教室で。なって……そして中学校のときからある先生の紹介で中国の青年の人たちの集

中国語ができる先生
がいたけど……

まりがあって、そこに連れて行ってもらったり、在日朝鮮人の研究会とかに行ってたんですよ。で、こういう人たちもいるんだというのがわかったんですけど。それで私も何かやろうやろうと思ってて、高校に入ってクラブを作ろうといってできたんだけど。1年生のときは思うようにできたんですが、2年生になったときに学校に行けなくなつたんですよ。高2の2学期くらいから学校に行けなくなつたんです。

私はそれまで中国の生徒とあまりつき合ったことがないから、たとえば日本語を話せる中国の生徒と、日本に来てまだ1年くらいの生徒とかいて、17とか18くらいで来た中国の生徒がいるんだけど、そういう人たちの考え方と、来て長い人の考え方と違うんですよ。で、こっちはあんまり中国の言葉ができなくて、そっちは言葉ができる。どうもなにか、一緒にいるんだけど、あまり言葉のできない方が気にするというか、「あんたは日本に来て長いんだから」というのがあって、たとえば集まりをやろうと言ってみても、友達としてはいろんな話をするんだけど、集まりをやろうと言ったら、「じゃあがんばってね」と他人事みたいな感じで言われたり。

中国から来て1年くらいの生徒がいたんだけれど、その人は日本語ができなくて。で、私と仲の良かった女の先生がいて、ある日私に「あの子は日本に来てもう1年になるのに、平仮名がまだできないんだよ」と言ったんですよ。もし、全然中国の子どもと関わらない人だったらいいんだけど、何か馬鹿にしてるというか、あの子はできないんだよ、という感じで。あとは、中国語を変なふうに使う先生がいて。

それから少しずつ学校に行くのがいやになって、疲れて、先生もこうなのかなと思って。「私はまだ、この学校に来てそんなに経っていないから、いろいろと言えないんだよ」とか言って。どうもうわべだけ、この人は本心で私たちとつき合ってないというのがわかって。もちろんひとりだけ私たちのことをわからうとする先生がいて、そういう人だったらこっちはわかるし。でもそっちは違うの。

たとえばバレンタインのとき、誰かにあげたいと思ったら買ってあげるし。で、ある女の先生が自分でチョコレートを買ってきて「校長先生にあげて、教頭先生にあげて」という感じで、別にそうしたいと思ってるわけじゃないのに、何か違うと思ったんですよ。先生のことをここまで要求していいのかどうか私はわからないんですけど

ど、先生がもしひとりの人とつき合うとき、相手にちゃんとつき合っているのかつき合っていないのか。もし、先生として、やらなくちゃいけないと思うんだったら、つき合わなくていいと思うし。そこまで要求しちゃいけないのかな？

で、それから疲れて、どんどん学校に行けなくなって。何か、人に会うのもいやになってきて。そのころ、私がつき合っていた中国の人がいたんだけど、相手の行動とか考えてることが理解できなくなって、会うのもいやになって。中国の生徒がクラブにいますよね、ちゃんとした授業に出ない人がいて、で、ちゃんとやる人がいるんですよ。でも、どうもちゃんとやらない方が目立つというか。先生のイメージがありますよね、私はそれまで先生たちにとってはいい生徒だったというか、1年生のとき、1回も学校を休んだことがなかつたし、成績もまあまあ良かったし、たぶんあのときの私みたいな生徒が先生にとってはよかったですんだろうな。クラブの中にいろんな生徒がいて、私は理想的な生徒かな。でもだんだん学校に行けなくなつて、先生も私たちを避けるというか。

情けない生徒がいるんですよ、中国の子で。ちゃんと授業をやらないで。情けないというか、そのときは私は中国人として恥ずかしいと思っていたんです。ちゃんとやらない生徒はどんどん学校をやめていくし。2年生から3年生にあがるときは、もう、欠席がいっぱいあって。3年生にギリギリであがって、3年生になってもよく休んでて。最初の頃は喫茶店に行ったり、友達に会いに行ったりしてたんだけど、そのうちどこにも行かなくなつて、人と会うのもいやになつて。なんていうか、人のことがわからないというか、それまでは中国人に対してこうあるべきというか、中国に対して誇りがあつて、中国の生徒みんなに日本でがんばってほしいという気持ちがすごく強かった。がんばらないと日本人に馬鹿にされるから、そういう気持ちがすごく強かった。相手の気持ちちはわからないし、私はこうなのに何でそっちはそうじゃないんだ、と。たぶん自分の理想で、相手もこうあるべきなんだと思ってたんだと思う。で、相手の考え方を変えようとか、友達に対してそういうふうにしたこと也有つたんだけど。

今になって考えると、人はみんないろんな考え方があっていろんな生き方がある。自分の考えるようにならなくてはいけないといやだったんだろうな。いやだったというか、それをどういうふうに

自分で受け入れたらいいのかわからなくなつて、で、学校に行かなくなつて、ずっと家で親と話したりして。その頃は、日本にきて6年くらい経っていたんだけど、やっと親のことを考えるようになつて、はじめて親と話す機会が増えて、親も大変だったんだとその頃から思うようになりました。それまで親のことを憎んでばっかりいて、何で私を日本に連れてきたんだとか、親がもし、片方が日本人じゃなかったら、私はここにいないのに、とか。学校を休むようになって、親と話して、私もこういうことがあったんだよと。で、親も自分のことを少し話すようになって。

今もお母さんの方は続いてるんだけど、言葉ができないこと。仕事をしてて、すごい意地悪されるんですよ。うちのお母さんはアルバイトなんんですけど、お父さんは会社員で。

最初の頃は雪の降ってるすごい寒いときに、他の人は外の仕事をしないのに、外の仕事をやれっていう感じで、自分は我慢して外の仕事をやつたり。やっぱりそれが日本人と違うということですね。うちのお父さんはあまり言わないんですよ、中国に帰りたいとかも言わないし、自分は日本人で日本に来たいといって來たんだから、で、私たちついてきて。いつも黙ってというか、何も言わない。仕事は最初のころはアルバイトをやって、洗い場をやつたり。そういうところで自分がやるべき仕事じゃないのにやらされる、そういうのはやっぱりすごくいやな思いをするし。他の人がやるべきことなのに「お前やれよ」という感じで。

たとえば3人いて、日本人がいてお父さんがいて、本当はこの人がやるべきことなのに、この人がうちのお父さんに「やれよ」という感じで。うちのお父さんがやつたら、この人は上の人によく思われるじゃないですか。で、うちのお父さんが自分がやるべきじゃないのにやって、何も言われないというか。今の会社もやつと慣れてきたんだけど、最初の頃はそういうことがあったんだよ、と話してて。

うちのお母さんの場合は、昔はそれほどじやなかつたんだけど、すごい神経質で、身体も痛めてて、毎日毎日薬を飲んでいるんですよ、日本に来てから。でも別に悪いわけじゃないんですよ、どこかが。でも精神的なもので、病院に行っても、検査してもどこも悪くないし。でも背中が痛い、足が痛いとか。で、薬をもらって飲んで、

親に向き合う

一時期、顔がむくんじゃったことがあったんだけど。今はあんまり飲まないんだけど、でも神経質で。私たちがちょっと何か言うと、いろんなことを考えたりして。私が中国に行く前は、いつも話したりして。で、私が中国に行って、1年4ヶ月くらい。そうしたら私とあんまり話さないで。うちの姉とはちょっと話すんだけど、それまでは何か、中国の人にも話ができない。何か見栄みたいなのがあって、そういう弱みを絶対見せちゃいけないというか、日本の友達とか中国の友達に。そういうときはみんな自慢話というか、私はこういういい服を買ったとか、そういうのばっかりで。私は娘なんだけど、でももう娘じゃないという感じで。

向こうもいつも同じことを何回も何回も話すんです、3回も4回も話して。それで何となく気持ちが落ち着くというか。ただ細かいことですすごく神経質になるんですよ。たとえば「あれをやれ！」ときつい言い方で言われたとか。仕事は一生懸命やるんだけど、相手にそう思われなくてクビにされたこと也有って。今はアルバイトをやってないんだけど、もしやったら、毎日帰ってきて一日にあったことを全部話すの。いやなこととか、いやなことがあると何回も話さないと気がすまないというか。

母親も言い返すようにするんだけど、たとえば10時までということで最初入ったのに、10時前に終わったら、向こうが勝手にタイムカードを押しちゃうとか。そうしたら10時までの給料をもらえない。そういう細かいことなんだけど。

たとえば、みんながジュースを飲むのに私だけがお茶とか、そういう差別みたいな。そういうのは別に欲しいわけじゃないけど、やっぱりすごいいいやな思いしますよね。他の人みんな何か食べているのに、自分だけがもらえない。みんながご飯の量がいっぱいあって、自分だけが少ないと。そういうことがあるんですよ。毎日毎日あるみたい。で、いつも帰ってきてずっと話してる。洗い場とかはお店は夜だし、言葉ができないからできる仕事は限られる。

日本に来て11年になるけど、お母さんは辛い思いをしてるなあ、今でも。お母さんはすごくかわいそうだけど何もできないし、いつもついているわけにいかないし。家族なのに、ちょっと言うとすごい神経質で考えすぎるの。何もできなくて、話を聞いてあげることだけ。

日本にきたばかりの頃は、父と母はよくけんかしていたな。今はもう、あんまりしないんだけど。昔、喧嘩してるとときは子どもを考えてあげる余裕もなかったと思うんです。父は39才のとき日本に来たから、全部一から。ゼロだもの。中国にいるときは、最初結婚したときはゼロから築いて、ある程度ちゃんとした形があって。日本に来たときはなんにもない。たとえば最初なんかは、ものを買うとき、向こうで食べるときに気を使って食べるというのはなかったし、こっちでお魚を買ってお料理して、油をどれくらい使うかも気を使わなくちゃいけなかったし、最初はそうだった。そこからはじまつたんですよ、何もないから。節約して。原因でなんだろう、毎日喧嘩してたなあ。で、お父さんはだいたい黙っている方なんだけど、我慢しきれなくなると「もう、お前は中国に帰れ」とかになっちゃうの。で、お母さんはそこで泣きわめいて。原因はなんだろう、わかんない。今はもうしないけど……。

けんかもいっぱいしたな

で、3年生になって、やっぱりまた、進路のことになって。卒業する間際になって、大学に行きたいと思ったんだけど、それまでは行きたいと思わなくて。大学に行ってもやりたいことなかったし。それまでずっと、本を書きたいと思ってて、日本にいる中国の人と関わって、そういう仕事について日本で生きて行こうと思ってて。それだけなんだけど、実際何をどういうふうに行動していいのか、全然わからなくて。それで卒業して。今でも日本語がそんなに上手じゃないし、東南アジア系のしゃべり方だって言われるんです。もう中国語もあんまりできなくなっていたから。学校に中国の生徒がいても、日本語を話すことが多いです。最初の頃はすごく気にしてたんだけど、でもやっぱり日本語の方が自分の気持ちがうまく伝えられる。中国語だと、どうも半分くらいしか伝わらないんじゃないかなというふうに思うから。で、日本語で話すことが多かった。

中途半端な自分
—中国留学へ

それで高校を卒業して。言葉を勉強しようと思ったんですよ。でも、それは、別に中国に戻りたいとかじゃなくて、なんていうか、ずっと自分のことを中途半端だと思ってて、戦争の破片みたいなもので、日本人の父親と中国人の母親で、言葉がどっちも完全じゃないし、いつもそれを気にしてたし。私は生まれたのも中途半端で、元気なときは「私はこれでいいんだ」と思うし。元気なときは、「私は日本人もあるし、中国人もある。これはすごいことなん

だ。他の人と違うということは、他の人と違うものの見方をできる」
そういうふうに思えるけど、そうじゃないときは、「私は言葉も上手じゃないし、日本のこと知らないし、中国もわからない」自信を持てないときはそうなんですよ。高校を卒業して言葉を勉強しようと思ったんですよ。言葉ができれば、自分にも自信が持てるんじゃないかと思ったんです。

最初は日中学院に行こうと思って、ずっとアルバイトをやってお金をためて行こうと思ったの。そのうち、日本の日中学院に行くよりも中国に直接行って言葉を勉強して、日本に戻ってきたら自信を持って生きて行けるんじゃないか、というふうに思って。

それで1年間くらい仕事をして、中国に行って。そのとき行く前にも、ずっと中国に対して小さいときのイメージで。やっぱり中国の現実を見ていないから知らないし、中国の人はみんないい人だと。なんていうか、日本にいる中国人は、中国いる中国人とは別なんだと、そういうふうに考えないと中国に行けないというか。日本にいて、私とあわない中国人とも出会ったし、中国人だけじゃなくて二世とか。私たちは日本人でもあり中国人でもあるんだからこれは別、中国にいる人が中国人、と考えて。

「中国を好きなんだ」

で、自信をつけるために行って。山東省というところに行ったんだけど、うちの母親の生まれたところ。1年半くらい中国にいたんだけど、言葉を勉強して、去年の12月の末に戻ってきたんだけど、行ってすごくよかったです。中国に対して、昔の「好き」と今の「好き」は違うというか、今は少し中国を見てきて中国を好きなんだと。昔はただ夢みたいなところというか。それで最初は、行ってすごく嬉しかったんだけど、行ってからのことを全然考えなかったから、ただ行くことが目標だった。今中国の人たちの中で、日本とか、外国に行くのがブームというか、みんな外国に対してあこがれみたいなのがあって、たとえば日本だったら、日本の電化製品がいいとか、日本に行ったらもっとお金稼げるんじゃないかとか、そういうのが多いいんだけど、私は山東省の〇〇市というところにいたんだけど、そこに親戚の人がいて、その人は芸術学校で教師をやってて。絵を描いてるんですけど、その人を通していろんな中国の友達ができる。

日本にいるとき、就学生というのはいやだったんですよ。あんま

りつき合いたくなかったし、何か、その人たちの目的がわからないから。向こうに行って、その人たちすごくがんばっている人たちで、絵を描いていて、活動をやったり、展覧会をやったりして。それまでは中国の人が外国に行くのがいやだったので。この人たちちはお金儲けのために外国に行くんじゃないかと言われていたし。実際にその人たちに会って、考え方方が変わったんです。私の会った人たちは、外国に対してあこがれるというか、外国に行って勉強して、外国を見て、中国に帰ってからこうしようと。でもその人たちは、とりあえず私たちは今ここでがんばろう、という若い人たちなんだけど、20いくつで。その人たちのことをすごく話したいんだけど、うまく言えない。すごく好きな生き方して、それまで私は、絵を描く人の友達っていなかったんだけど、自分たちを表現して、展覧会とかも。中国の人で外国へ行ってお金儲けしようとする人がいて、外国のものばっかりいいと言う人たちがいるんですよ。でもその人たちはそうじゃなかったの。外国にもいいものがあるけど、中国のものも大事だと。そういうふうにちゃんと外国のものをなんでも取り入れるんじゃなくて、いいものを自分たちが取り入れて、自分たちはここでがんばろうという人たちで。絵を通して、いろんな人たちにここで頑張ってほしいというような、そういう人たちで。私もずっと一緒にいて、その人たちと展覧会をやったり。日本で報道されてるような就学生、でもそういう人たちはばかりじゃないということがわかったの。それですごく元気になって。いつも一緒にいて、いろんなところへ行って、で、彼（夫）もそういうときに知り合った人のだけれど。

中国人てなんていうか、すごく難しいですよ。難しいというか、わかりにくいというか。日本にいるときに知り合った中国の人がいて、その人たちの行動が昔は理解できなかった。何でこういうしゃべり方をするんだろうとか。この間「愛について——東京」という映画があったんですよ。中国人留学生の映画で。それを見て、その人たちの行動が昔だったら絶対理解できなかつたんですよ。で、今できるようになった。日本にずっといたから、物事はこうであるべきというふうに思っていたのかも知れない。

日本ですごく整理されている国というか、中国の日本人の留学生は日本人留学生とばかりいるんですよ。日本の留学生は日本のもの

すごく整理されている国——日本

を使わないとどうも気がすまないし、お鍋とかお箸とか日本から送るし、全部中国に送って日本のものを使うんですよ。お弁当箱とかもそうだし。食べ物なんかで日本のものが恋しくなるというのはわかるんだけど、何から何まで留学してるところに送って使う人がいるんだけど、いろんな人がいて、いろんな環境の中で生きているというのがわかって、ロシアの人がいて、ドイツの人がいて、みんな違うんですけど。私は今までの環境の中でこういう考え方をしているんだけど、でも違う環境に行ったら、違う考え方があるんですよ。そうしたら相手が考えていることが自分と違っても、別にそれでいいんじゃないかと思うようになった。理解できるというか、相手にもこういうふうにと要求しなくなつた、向こうに行ってから。日本人だっていい人がいて悪い人がいて、中国人だってそうなんだけど、でも今思うのは、留学から帰ってきてから思うのは、国なんか関係ないというか、自分と合う人は合うし、たとえば全然違う国の人で、お互い限られた言葉で話をするんだけど、でも気が合う人は合うし、どうもいやだという人はダメだし。だから昔はすごく区別していたんだけど、今は日本人とか国は関係ないというか、彼と結婚したのもそうだし、私は中国で生まれたから中国人と結婚したいと考えたこともないし、日本人にいじめられたから日本人と結婚するのは絶対いやだと思ったことはないし、だから今は日本人とか中国人じゃなくて、なんていうか、どこでも生きて行けるような人間になりたいと思う。

それから日本に戻ってきたら、昔は結構開き直っていたんだけど、言葉が下手っていうのはどこかすごく気を使って話すんですよ。丁寧な言葉はできないし、私は。で、言葉が下手だって言われるとすごくショックだし、彼と結婚して4ヶ月くらい中国にいたんだけど、よく中国に戻りたいと思うんですよ。たぶんそれは、私が中国で生まれたとかじゃなくて、そこが自分にあってるんじゃないかと思って。日本もいやじゃないけど、どうも何か軽いんじゃないかなと思うの。テレビを見ててもそうだし、ヘラヘラしてるんだもの。くだらないことを延々とやっているし、何日も何日もやっているから。今はとりあえず日本に戻ってきてまだ3ヶ月くらいなんだけど。彼は1週間くらい前に日本に来たんだけど、親に紹介しないで結婚したから、どうもあまりよく思ってなくて。だまされてるんじゃないかな、どうもそういう気持ちがあるんですよ。中国の就学生は日本

にいっぱい来てるから、何とか日本に残ろうとかする人がいて。みんなどうもそういう考え方があって、それはすごく悲しいことだし、彼が中国の国籍であるだけでそう思われちゃうんですよ。彼がそういう人であってもそういう人じゃなくても、最初にそういうふうに思う人が多いということに気がついて。多分、昔の私もそうだったと思うし。実際中国に行って、そうじゃないというのがわかって。今の中の若い人で、ちゃんとがんばろうとする人がいて、自分たちが何をやるべきなのか、そういう人たちがいるということがわかって。これからどうするのかまだ決まってないんだけど。日本人てどうも肌の黄色い人が好きじゃなくて、白い人が好きみたいなんだけど。彼と結婚したことによって、またいろんなことに気がついて。たとえ中国の人が、この人たちを利用するんじゃないとか、日本に来るために結婚したんじゃないとか。アパートさがしにいくと、外国人はダメですとか。それまではそういうことはなかったんですよ、私は。そういうのもあるんだなあと、日本にいる外国人はたいへんなんだなあと思うし。

私はこれからることはまだわからないんだけど、とりあえず日本について、そのうちに中国にまた行こうかな。でも子どもが生まれたらどうしようかなとも考えるし。今はとりあえず、生活が落ち着いてないから、落ち着いたら自分たちのことを、もっと日本人に知ってほしいと思う、こう最近思うようになったんだけど。日本人とずっと一緒にいたらダメなんだけど、中国人の、私と同じような立場の友達も必要だし、そういう場も必要だし、でも日本人とのつき合いも必要で。中国人だけと一緒にいたら取り残されちゃうんじゃないとか、日本人のことがわからなくなっちゃうから。だから、中国人とばかりいたら、日本人に対して偏見みたいなものが出てくるんじゃないのかなとか。で、日本人とばかりいたら、自分の苦しいときとか分かってほしいと思っても、それまで生活していた環境が違うから、想像しかないし、だから相手がわかってくれないとときは相手が冷たいとかじゃなくて、そういう環境じゃないから想像でしかないし。中国の二世の集まりもできたらいいなあと、最近思うんだけど。まだ生活が落ち着いてないからできないんだけど、ごめんなさい、いろんなことがあって、話せなかつたことがいっぱいあるんだけど。

もっと日本人に知
てほしい

「お父さんとは一緒にでかけない」

——定住難民として日本に生きる——

シンカムタン・レック

I. 祖国を離れる

ラオスという国は、ほんとうに小さい国です。まわりを国に囲まれ、海がなかったことがこの国の経済発展を妨げてきました。私は1945年にビエンチャンから東北に50キロくらい離れたところで生まれましたが、そのころから内戦始まっていました。内戦というのは、人民政権と共産主義政権のグループ、つまりラオス人とラオス人の戦いです。1954年から65年は学校に通いましたが、そのころは内戦といつても北ベトナムの国境あたりで、ビエンチャン周辺は外国の公館や大使館が多い事もありあまり影響がありませんでした。地方によっては学校からトラックで生徒たちをそのまま兵隊に出すようなところもありました。今振り返ると、私の時代は革命とかクーデターがあっても、順当に勉強ができるよい時代だったと思います。私くらいの年齢の人たちは、外国語として英語とフランス語が話せました。ですから政権が変わるまでは、卒業してから留学する学生も多かったのです。

わたしの生まれた国
ラオス

政権が変わって、カンボジアなどでは、ポルポト派が大勢の人を殺しました。ラオスでは総理大臣、王様までみな捕まりました。いっぺんではなく、少しづつ、今日はこの人、明日はこの人、といった感じです。捕まると1ヵ月、3ヵ月と政治教育に行かされていた。行ってしまったらもう家族とも連絡がとれない捕まり方でした。スパイであったらまず目をつれられました。残ったのは一般庶民だけでした。一方学校では、校長先生から普通の先生まで政治教育に連れて行かれました。そのために学校にはほとんど先生が残っていなくて、先生が1時間だけ授業をしてあとは畑仕事や、山の仕事で働いたのです。自分たちが食べられるように一生懸命でした。

政変の下で

政権が変わった1975年から、4年新政権のもとで働きました。今までの人民政権がすごくいやだったので、新政権になつたら正しい方向に国が戻ると思っていました。私は、共産主義の国からもらった物資を安く売るということをしていました。しかし、県や地方の責任者が集まって何を話すかというと、これから経済をどのように発展させるか、ということではなく、今度は誰が連れて行かれるかということばかりでした。私もいつ自分の番がまわってくるかすごく心配でした。殺されはしなくとも政治教育をさせられると思いました。それは海外の企業に勤めていた人たちは、すべて政治教育にかり出されたからです。私は約6年間日本の企業に勤め、政権の変わる直前の2年間はアメリカの企業で通訳や案内をしていたのです。私は、恐くて恐くてタイに渡る事を決意したのです。

今度は、誰がつれて行かれる

1965年に私は技術専門学校を卒業しました。私の専門技術はエンジン関係です。ちょうど1962年ごろから日本政府はラオス政府の水道局に援助を始めていますが、その水道に関するいろいろな技術をラオスの人たちに生かせるようにと研修生を受け入れました。私の専門とは全く違いますが、非常に卒業生が少なかったこと也有って、私は卒業してすぐ研修生として半年ほど日本に行きました。20才の時でした。そのあと国の水道局に3年間ほど勤めましたが、ダム工事が始まって、もちろん下請けは日本企業でしたから言葉が話せるということでそれに行きました。ビエンチャンから800キロほど離れたところで工事があったのですが、ダム工事というのは何年もかかるのです。結婚したのはその時、近くの村に遊びにいって知り合った女性です。

日本へ研修にいった

ラオスでは祭りがたくさんありますし、そうしたときに知り合うケースが多いですね。お寺の祭が多いのですが、長いと五日間ぐらい続きます。昼間はお年寄りなどが宗教の話などしますが、夜になると若者が集まっています。広場に踊りのステージなどがつくられて、踊りたい人は切符を買って入場します。これはお寺が年に一回お金を集めるために必ずします。これによってお寺の修繕をするためです。踊りは日本の盆踊りのようにみんなに共通するようなものです。

ラオスの結婚

ラオスでは、最初はだいたい男から女へ声をかけます。習慣として女性からだとえば「私はあなたが好きです」などということを言うのはタブーなのです。男性は直接好きという言葉を使わなくても「あなたの家に遊びに行きたい。いいですか」と言う。これが一番最初のプロポーズの言葉になります。女性は「いいですよ」と言います。私もそうでしたが「いいですよ」と言われたてはじめはそのまま信じられません。3回、4回目に「いいですよ」と言われたとき「じゃあ、今晚8時にいきます」というふうになるのです。で、その時間に行って女性がいれば「ああ、やったな」ということになるのです。時々女性は、「いいですよ」といっても居ないことがあります。日本のように正直に「いいえ、私は好きな人がいます」といって断る事は絶対にしません。行ってもいなかつたら、他に好きな人がいるということなんです。そういう習慣があるのです。

私の場合は1回目でOKでした。その時に会うのは、彼女だけです。女性は時に応じて家族に「今日はあの人遊びにくるから、早く御飯を食べて早く寝て下さい」ということを言います。そういう女性はすごく自分が好きなんだということでしょう。それから、たまに早くいくと家族がまだ皆起きていて顔を合わせるとぱっと他の部屋へ行ったりすることもあります。ただ、これは最初の話で、やはり親の目にそぐわないといけないので、回数を重ねるうちに親は相手のことを調べるようになります。どこから来たか、誰の子どもかとか……良くないということになれば親は娘にやめなさいとがんがん言います。娘がやめない場合には、親は2人の逢い引きの邪魔をするのです。

私はこうしてOKをもらってから結婚まで1年近くかかりました。早い人は会って3ヵ月、長くとも1年くらいで結婚します。1年かかったのは、2人でいろいろ話し合ったからです。話し合うことはカップルによって違いますが、私の場合は、私は結婚したら彼女を別の所に連れていくつもりだが親はそれでいいのか、兄弟は何人か、彼女は親を養う責任があるかどうか、などです。ラオスでは親の面倒を見る子どもは男女関係なく親が決めるからです。そういうことを全部調べてその後に親に連絡して、今度は親があつまっていろいろ意見交換します。お金とか居住地とか。

ラオスでは、婚約する時に日本のようにお金や物を送ったりすることは殆どありません。ただ、男性の両親や近い親族が、女性の家

に行って、昼御飯などを駆走になります。その時男性側は何も用意しません。そこで、結婚資金の相談をします。お金はどのくらいか、何が欲しいかなど女性側の要求を聞きます。初めは当人同志相談するのですが、女性の両親が二人で決めていた金額の倍を要求したりするのです。ここで婚約がだめになることもありますが、そうした場合は駆け落ちしてしまうこともあります。

結婚式は両親が相談して一緒に式を挙げるか別々にするかを決めます。ほとんどの場合は一緒に女性の所でします。その時は男性がどのくらい費用を負担するかはっきり決めます。お互いの村が離れているときは別々にやって、お祝いの式の時に男性が女性の所にいっておしまいです。

式は、仏教ですから一般的にお坊さんになったことのあるお年寄りにやってもらいます。ラオスでは男性は12才になると自由にお坊さんになります。一生のあいだ一度もお坊さんにならなかつた人は生身の人間といいます。死ぬまでお坊さんにならない人もいますが、少ないです。たとえば両親が亡くなると、男性なら頭を剃って黄色い僧衣を着て、女性なら白い服を着て、お坊さんと一緒に墓へ行きます。この1日だけでもお坊さんになったということになります。男性は20才になったら3日でも1週間でもお坊さんになって厄払いをする習慣があります。だいたい10人中8人はこれをします。20才以上の時は、完全に戒律を守らなくてはなりません。

メコン川を渡ってタイに行くことについては、家族に相談しました。妻は私の話を聞くと「いいですよ」といってくれました。彼女は外国で暮らした経験はまったくありませんでしたが、私にはそうした経験がありましたし、子どもの将来の教育のことがとても心配でしたから「もし、あなたが自分の力で日本までつれていってくれるのならいいです」というのが妻の意見でした。

私も子どもの将来の教育については、非常に心配でした。4年間、共産主義の中で教育のことについて一生懸命働きかけましたが、全然だめでした。最近のラオスの教育事情についてどうなっているのかはよくわかりません。しかし、私は日本に来てから長いので政権が代わってからラオスの子どもたちの教育がどうなって行ったのか、難民の一人ひとりに聞きました。高校を卒業しても、昔のように英語・フランス語は勉強していないし、ラオス語の読み書きもできな

新政権下での教育への不安・出国の決意

い。今の政権はできなくても小学校なら6年間、中学3年間、高校3年間を卒業して終わりです。できなくても関係ない。一人ひとりのレベルに合わせないので。こんな教育であつたら本当にもうダメじゃないかなと今も強く感じます。それから、国の教育に関する予算（学校建築や教員養成など）がきちんとでていませんね。今でも先生が半年、一年給料を貰っていないという話を聞きます。そういう状態で頑張っていられる先生がどれだけいるのでしょうか。そして、そのような中で子どもの教育のことを考えている親がどれだけいるのでしょうか。多分2割とか3割とかといった比率ではないでしょうか。

今でもラオスから留学する人はいます。その殆どがロシアとかベトナム、ヨーロッパではブルガリアとかハンガリーです。内容は音楽や美術などで、ラオスへ帰ってきても国のために力を発揮する事ができません。そういう人たちは、たとえば7、8年ロシアに行って帰ってきても、1年もたたないうちにメコン川を渡って行くのです。あんなに長い間留学して帰ってきても国のために何かしようという誇りがもてないのはどうしてだろうと思ってしまいます。

なにしろ、その時はこのままラオスにいても子どもの将来は絶対明るくならない、という感じがしていました。それで、一家でラオスを出ることを決めたのです。

その時は子どもを合わせて家族4人でしたが、家族4人で一度に渡って見つかったら、誰も助からないので先に私たち2人が行く事にしました。私は仕事の合間に自転車やバイクをメコン川沿いに走らせて、どこでなんじにパトロールが来るかといことを調べました。2ヵ月近くこれを続けました。そこはビエンチャンから約5～6キロの所なのですが、その周辺もよく調べておかないと共産主義の危険な村もありました。団体の場合は船で渡りますが、見つかりやすいことも確かです。

タイに渡る事を決めたその日、私たちは仕事を終えて家に帰って着替えて、これから畑に行くような格好をして自転車に乗って川の方へ行きました。暗くなって安全を確かめてから自転車から降りて、自転車のタイヤの中のチューブに空気をいれて浮き袋の代わりにして川を渡りました。7月ごろでしたから、川は増水して流れは速かったです。川は蛇行していますから、元の岸側に戻らない事だけを気をつ

メコン川を渡る

けて泳ぎます。泳ぐ距離は水が多ければ800メートルから1キロ、少なくとも600メートルでかなりありました。

正直に言うと、私はメコン川のほとりまできて、以前から計画はしていたものの、何故こんなにすぐにきめていたのだろうと悩みました。引き返そう、と思いました。しかし、せっかくここまできて、今引き返したら危ないと思い直しましたが、涙がボロボロ出ました。自分の生まれた土地を離れたくない。それが本当の気持ちです。今日本にこれだけ長く暮らしていても、これからラオスはどうなって行くんだろうと毎日悩みます。

でも、いくら考えても、いくら活動しても、私たちは今の政府には認められない。これが一番ショックです。東京の六本木にラオス大使館がありますね。大使館としてはラオスの人にできるだけ早く国に帰って欲しいといいます。ただ、大使館の人たちと話をしていると、アメリカやカナダからラオスに帰っても、アイディアや技術など、何も生かす事ができない。ポストは用意されているけれど政府の規則や命令どおり暮らさなくてはいけない。たとえば私が帰って、「日本の教育にはこのようなよい面があります」といってもまったく採用されません。そういうことです。私たちは今何とも言えないのです。

なんとか無事に渡れて、キャンプに入って登録をして、部屋をとつて安定したら家族に連絡をとることになりました。私がタイに逃げた事はラオス側にはわかっていて家族は厳しくマークされましたから、手紙といつても郵便を使う事はできませんでした。それでタイとラオスの間を行商で行き来する人たちに手紙を託しました。娘は6才、息子が2才で、皆で船を借りて団体で渡ってきました。こうして、私が渡って1ヵ月後に家族で合流する事ができました。

タイといつても、ラオスとの国境地帯ですから言葉には不自由しませんでした。ラオス人は中学校を卒業した人は殆どタイ語を話せます。ただ読み書きには個人差があります。このタイ語というのは、たとえばバンコクで話されているものとはだいぶ違います。つまり、国境に近い東北タイの二、三の地方の人たちは言葉も生活習慣も殆どラオスと同じなのです。1938年頃でしょうか、ラオス・タイ・ビ

祖国との別れ

タイの難民キャンプ

ルマ戦争がありました。メコン川を国境に決めたのはその戦争の後で、もともとイサーン（東北タイ）の周辺はラオスの領土だったのです。イサーンの人たちは、今でもバンコクにいくと「あなたはラオスでしょう」と言われ、ラオスに行くと「あなたはタイでしょう」といわれ困っていると聞きます。

タイの難民キャンプには、7月に入って、10月までの3ヵ月間いました。この期間は他の人たちにくらべると非常に短い。それは、日本の難民の受け入れ条件をクリアーしていたからです。面接も簡単に通りました。条件というのは、日本語が話せるか、日本に来た事があるか、ラオスの日本企業に勤めた事があるか、日本に親族がいるか、といったことでした。

キャンプの中でも日本に行きたいという人はほんの僅かでした。アメリカを希望する人が圧倒的に多かった。それから、カナダ、オーストラリア、フランス。この4つの国です。私の知り合いはアメリカを希望していたところ、お姉さんが日本にいたので日本にまわされました。キャンプにいるときの友人たちは、日本は働きすぎの国だし、生活習慣も厳しいから大変だといってアメリカやカナダと一緒に行こうといいました。日本はアメリカに比べて自由がないとも言っていました。私が欧米にいかなかったのは、食生活がまったく違う事、それから髪の色などがまったく違いますから、差別の問題を心配したからです。

私は長い間ラオスで日本企業に勤めていましたから日本人とのつき合いもたくさんありましたし、日本人の気性もよく分かっていました。水道局に勤めていた3年間は夜間に日本語学校に通っていました。そしてダム工事の時は日本語をたくさん勉強しましたから、日本語に自信がありました。それで日本行きを希望したのです。

II. 日本へ定住する

日本に来て、姫路市にある定住促進センターに3ヵ月入りました。定住促進センターの3ヵ月で日本のことや日本語を学ぶのです。3ヵ月では十分ではありません。センターで習う言葉は、センターの中では生活していけますが社会では通用しません。せいぜい挨拶ぐらいです。そういう問題もありセンターでの学習期間は今では3ヵ月から4ヵ月に延びました。その期間が終わっても仕事が見つからないときはもう

2カ月生活習慣などを学習する事ができます。全部でちょうど半年間センターにいられるわけですが、日本語学習は4カ月で終わります。今、どのくらいの期間日本語の学習をしたいかという質問に、ほとんどの人は6カ月から1年という希望が聞かれていますが。だから、家内にはセンターから出た後も、私が暇な時に日本語を教えました。今では会話には不自由しませんが、込み入った話はダメです。ふだん家内とはラオス語で話しています。

子どもの方は、センターに入るとすぐ近くの小学校に入れます。日本の学校へ入る親がセンターを離れるときに転校するわけです。中学・高校生はセンターのクラスで勉強して、卒業したら定住地の学校に入学しますが、手続きはセンターが行ないます。

娘は、センターから引っ越してからすぐに綾瀬市落合小学校の1年に入学しました。その時は近くにラオス人が住んでいなかったので、日本の子どもと遊んだりする機会はたくさんあってもラオス語を外で話す機会はほとんどありませんでした。

私たちは子どもの教育に関して、小学校1年から3年くらいまでは、ラオス語は家の中の会話だけ、4年生くらいからラオス語の勉強をきちんと始めればよいだろうと計画をたてていました。

それで、娘にラオス語を勉強しよう、と言ったら、いやだと言われました。なぜかと聞くと、娘は、「学校の勉強はとても大変だし、宿題もいっぱいある。その上中学校に入ったら英語の勉強もはじまる。ラオス語の勉強などしていて、学校の勉強がダメになつたら困る。それにラオス語など勉強しても将来使えないではないか」というように答えました。これはとてもショックでした。ラオス語を勉強することは将来きっとためになると私は思うのですが娘はそれが理解できません。

このことを通して私は事の重大さに気づき、仲間にこのままでいけないと相談してラオス語教室を始める考えました。それから、子どもの教育では、母親がラオス語で話すこと、ラオスのことをいろいろとかせることが大切なので、そのことを妻に話したところ、息子の時には妻も気をつけて教育しました。それで、娘と息子の違いがはっきりでてきました。息子はラオスに帰りたいとか、ラオスの食べ物が食べたいとか、おじいちゃんおばあちゃんはどん

ラオス語学習を拒否される

な人かとか、自分はどこでうまれたのかとか言います。息子は今高校2年生ですが、今年の夏はラオスに帰ろうと言っています。娘はそれを聞いて「あなたたちでどうぞ」と言っていますが。

娘は日本に来てすぐに学校に入ったのですが、友達もすぐできて、子どもの名前すごく日本に馴染んでいました。落合小学校では娘が初めての外国人ということで校長先生や担任の先生がいろいろなアドバイスをして下さいました。子どもは毎日喜んで学校に通っていましたし、休みの日には先生がいろいろな所に連れて行ってくださいました。

娘の名前は、カタカナでシンカムタム・オデットというのですが、高校に入るまで全然嫌がったりはしませんでした。彼女が「私の名前は誰が、どうしてつけたのか」と聞いたので教えたことがあります。彼女は自分の名前の意味をちゃんと知っていますし、友人にも名前のことをとてもほめられる（白鳥の湖の主人公と同じ）と言っていました。

しかし、高校（綾瀬高校）に入ってある時、担任の先生が私に「高校を卒業したら就職でしょう。このままの名前では就職の時不利ですよ。帰化はしないのですか」と言されました。私は「私たちは難民として政府に認められているのだから何も問題はない」と答えますと、「私はよく知らないが、できれば帰化して日本名にするのがよいのではないか」というのです。その後で娘が帰化しようと言い出しました。訳を聞いたら「担任の先生に聞いたでしょう」と言うのです。

娘は高校2年生の時に、長後駅前のアルバイトの面接から帰ってきて「ニイオカ・マサエに電話がかかってきたら、私のことだから」と言いました。どうしたのかと聞くと、アルバイト先ではまわりが皆日本人で、外国人は受け入れられないのではないかと思って自分でつけたと言うのです。実はニイオカというのは、私と妻がいつか帰化する時にと、寒川神社のお坊さんがくれた名前なのです。マサエというのは自分で考えたのでしょうか。私はそれはよくない事だから今度からは正直に名乗るように言いましたが。

息子が名前のこと気にしあじめたのは、小学5、6年の時です。彼が友達の名前の名札をつけていたので、話を聞くと、クラスの40人の中でカタカナの名前は自分一人で、目立つからというのです。学校でとくになにか言われた訳ではないけれども、なんとなく雰囲気

があまり良くないというのです。

息子は中学2年生の時に高校受験のために塾にいきたいといいはじめました。その時、私に「ニイオカ・ツバサ」という日本名で塾に通いたいと相談してきました。塾の生徒は殆ど同じ学校の子で、息子のことも知っているにのどうしてわざわざそうしたいのか、と聞きますと、知っている人はしかたないけれども、知らない人には知られたくない、というのです。私がいろいろ話して聞かせても、子どもは納得しませんでした。こうしたときに母親は私にすべて判断を任せていきました。子どもはどちらとも日本語がペラペラですが、母親はまだまだです、そのあたりの感覚の違いというのもありますし、こうした問題について子どもに何か言うことはありませんでした。

娘は、小学校6年生の頃から、反抗期ということもあるって、「おとうさんはしゃべる声も大きいし、外国人とすぐ分かるからいやだ」ということを言い始めました。私はすごくショックを受けて、娘はどうしてこういう考え方をするのだろう、なぜラオス人であることに誇りを持たないんだろうと思ってよく口げんかになりました。私は娘がもっと理解するように怒ったつもりでしたが、娘は「お父さんと一緒にでかけない。お父さんは顔を見たら外国人だということがすぐ分かるので、学校に来ないでほしい。できればお母さんが来てほしい」と言いました。しかし、妻が学校にいっても、先生と話すこともできませんので、やはり私が学校へ行っていましたが、娘に見られると家へ帰って文句を言わされました。娘が学校を卒業するまでこの口げんかは続きました。しかし、ある時娘は、「今は私は年頃なのでこんな風だけれど、いつか正直になれるから心配しないでほしい」といって、高校を卒業するときには正直になりました。今は21才で専門学校でビジネスの勉強をしています。

お父さんは外国人に見えるから

III. 日本の定住難民の生活を考える

私の子どもたちは私たちが感心するほどよく勉強していました。他の人の話では、子どもに義務教育は受けさせるけれども、高校進学を決めるところからは学校の担任に任せているようです。ラオス人の親たちは、子どもの望むところまで教育を受けさせてやりたいという希望をもっていますが、実際には日本の教育がどうなってい

子どもの教育

るのか全然分からないので自分で対応できないのです。教育費もどれくらいかかるのか自分では調べずに、「大変だ」という話を聞いてうろたえているのです。日本語ができないということもありますし、どうやって調べたらいいのかもわからない。進学を選ぶかどうかという以前の問題です。

その面からみると、私の場合は他のラオス人よりも多くの情報を持っているのかもしれません。ラオス人の子どもたちは皆日本人の友達がいますからいろいろなことをよく知っています。だからラオス語教室の生徒からはよく相談を持ちかけられます。この前もある子がいい高校に行くために塾にいきたいが月謝がかかるので親が許してくれないので、両親に話して欲しい、と泣いて頼まれました。話に行ってもなかなか理解してもららず、2、3時間して納得してもらいました。こうした事を親が理解することはとても難しいのです。私もそうしたことを一人ひとりの親に対してできるわけでもありませんし。

多くの親たちは、単純労働に就いていて帰りが遅かったり、休日も日曜だけで、仕事だけで精一杯、疲れているからなどといいますが、努力不足だという面もあると思います。このような状態を続けていれば、自分の勉強だけでなく、子どもにも目が行き届かないで子どもの勉強も進まなくなるのです。それで、私たちは仲間のグループと教育委員会、ボランティア団体と連携を取って、子どものラオス語教室をやっている日曜日の午前中の同じ時間、同じ場所で子どもはラオス語、親は日本語を勉強できるクラスを作りました。初めはたくさん的人が参加していましたが、だんだん数は減っています。理由は、疲れたから、買い物に行きたいから、友人と会うからなどです。私はもう少し頑張ればいいと思うのですが。それから、私たちは就職して1年たつと平塚市や泰野市の県営住宅に入れる資格が得られます。そちらに移ってクラスに来られなくなる場合もあります。

子どもたちがラオスから日本に来る場合、小学校低学年の場合はいいのですが、3年生以上の場合は日本の勉強についていけないことが多いのです。この場合結局中学校までしか進学できません。親が熱心なら就職訓練校にも行くことがあります。私立の高校なら

親の日本語学習

学校の中の子どもたち

なんとか行けるくらいの学力のある子どもでも、教育費の問題で殆ど進学しません。高校に進学できるのは、小学校1年から遅くとも3年から日本の学校に通っている子どもで、10%くらいです。3年以降に来た子で中学を卒業して職業訓練校に行くのは30%くらいで、あの子どもたちは働き始めます。働くところは、初めは親と同じ職場やアルバイトなどです。慣れてきたら自分で探したり友人や先輩の紹介で職につきます。

途中から編入する子どもが学校の授業についていくためには、それなりの特別の取り組みをしなくてはなりません。私が見たところ、小学校ではいくつかそのようなことをしてくれているところがあるようです。たとえば、落合小学校では、PTAでできれば国語と算数だけでも特別教室を作って欲しいと希望したところ、教育委員会からも了承されて、その結果綾瀬市内ではすべての小学校に特別クラスが作られました。中学校になるとこうしたところまでは手がまわらないようです。

子どもたちが、非行に走ったり、警察沙汰を起こしたりすることはよくあります。原因はさまざまだし、子どもの性格にもよると思いますが、まず、親が子どもをコントロールできないことがあげられます。それから、子ども自身、勉強ができないことが嫌であり、友だちが皆進学しても自分は高校にいけないことが嫌であり、ということもあります。

今は不況ということもありますし、日本でのラオスの人々の生活は厳しい。勤めている会社の倒産や残業がなくなったことにより収入が減って困っている人はたくさんいます。それによって子どもたちが働き始めていることもあります。子どもたちは正社員として採用されることは殆どなく、男の子は父親、女の子は母親と同じ職場ということが多いのですが、プラスチック関係や部品の組立のながれ作業、ラーメン屋などのアルバイトをしています。

離婚の問題も多いのですがその原因はまず、お金です。やりくりがうまくいかないとか、小遣いの多い少ないとか、ギャンブルとか。だいたい東南アジアの人たちは博打やトランプがとても好きなんです。国でやっていた感覚でお金を儲けますから、かなり莫大な金額になります。ギャンブルをするのは男性よりも女性が多い。夫婦がお互いに相談しないでそれぞれの親に送金をして問題になること

家庭の問題

もあります。それから、日本の生活に慣れてきた頃に、夫の帰りが遅いと妻が疑心暗鬼になるとか、その逆があります。

IV. 日本の社会に望むこと

中学校課程において、外国人のための教育制度を整備してほしい。外国人のための学校は大変でしょうが、せめて、国語や数学など大事な教科だけでも特別学級を作ってほしい。中学である程度勉強についていけば高校進学も問題なくなるでしょう。中学はとても大事です。オーストラリアの場合、渡豪したら現地校で困らないくらい英語力がつくまで年齢には無関係で準備校のようなところで勉強させてもらえるそうですが、日本にもそんなところがあればと思います。

日本の学校が変わつてほしい

それから、職業訓練校に入るのは、担任の先生がいろいろと努力してくれた場合なんです。訓練校は定員をオーバーしない限り受け入れてくれます。親は子どもが高校に進学できないのなら訓練校に行かせたい、子どもは手続きの仕方など全くわからないから、先生任せということになります。この進路指導にもう少し力を入れてやっていただきたい。

先生が意識をもって

綾瀬市と大和市では、県の教育委員会から予算をもらって綾瀬市では50万円で、私ともう1人の女性が、週2回市内のラオス人のいる小・中学校をまわっています。私たちは学校に行って先生に頼まれるプリントを翻訳したり、生徒のわからないところを解説したり、母親へ電話連絡したり、親と先生の話を通訳したりしますが、授業のことはしません。相模原市でも始まるそうですが、この予算が増えて、特別教室のようなことができたらいいと思います。それと、週に1回母国に関する事を何でもいいですから教えられたらと思います。人とお金の援助がないと難しいでしょう。

欧米などのいくつかの国では外国人が1人でもいればその生徒の母語や文化の保障をしてくれるようですが、日本の義務教育課程の中では難しいと思います。ただ、そのためのたとえば先生。私たちが努められればいいのですが、外国人の私たちが日本の学校の先生になれるかどうか……。その点、特別教室はとても現実的だし簡単だと思います。

それから、学校と親の意志の疎通をもっと計らなくてはならない
と思います。今まで学校では授業参観や面談会しか親が来る機会が
ありませんでしたが、できれば外国人の親に特別時間を設けて通訳
を呼んでくれるようにしてほしいです。先生は親を呼んで一生懸命
説明して親はハイハイといっていますが、実際半分以上わかっていない
のです。親の理解が子どもの教育には一番大切だと思います。
小学校でしたら、6年生、卒業する前くらいから、中学でしたら3
年生、月1回でも2回でもいいですから、説明会を開いて欲しい。
でないと日本の教育のルールが解りません。親が日本の教育のルー
ルを理解できればそれだけ子どもも進学できるようになると思
います。

- 日本語がわからないと、学校も生活もあまり楽しくないと思いま
すが、日本人は自分から声をかけるという事をしないと思いま
す。こうした日本人の冷たさについてどう思いますか。どうした
らしいと思いますか。

私が地域の自治会に出ていて、感じたことがあります。それは、日
本人は、外国人がもし何かわからないことがあれば自分から尋ねて
くるだろうと思っているようです。しかし、私たち外国人の方は、
何かおかしなことをやつたら注意してくれるだろうと思っているの
です。ラオスなど東南アジアの国民性、生活習慣では遠慮すること
は恥ずかしいことなのです。日本でも最近は少なくなってきたいる
とは思うのですが。

ただ、ここでも大きな壁となるのは言葉の問題です。言葉さえわ
かれば、生活、子どもの教育、その他のいろいろな面でもなんとか
うまくやっていくことができます。しかし、わからない場合は必ず
途中でがたがたしてたくさんの問題がでてくるのです。

注釈

※インドシナ定住難民

インドシナ三国とは、互いに隣接する東南アジアのベトナム、ラ
オス、カンボジアを指す。1975年のベトナム戦争終結後、引き続
く内乱などにより苦難を強いられた人々がボートピープル・ランド
ピープルとして近隣諸国に保護を求めていった。これらの人々を称

してインドシナ難民と呼んでいる。

難民問題の解決策として、自発的本国帰還、一時庇護国定住、第三国定住の3つの方法がある。インドシナ難民の場合は後者2つの方法が主流となっており、来日したインドシナ難民は「インドシナ定住難民」と呼ばれている。

1975年、ベトナム難民が来日した際、日本は「水難上陸許可」を与えることに留まっていたが1981年難民条約に加入してからは、難民認定制度が新設された。しかし、厳格な難民認定の申請と手続きを受けて条約上の難民として認定されている日本の定住インドシナ難民は200人程度である。残りの7,000名近くは、1975年の国連総会でU N H C R (国連難民高等弁務官事務所)がインドシナから脱出してくる人々を包括的に難民として受け入れ人道的に保護するようという申請を受けて、難民条約にいう難民に「準じて」処遇している。

※定住難民の受け入れ制度

日本に定住することを許可されたインドシナ難民は、(財)アジア福祉財団難民事業本部によって運営されている大和定住促進センター(神奈川県)、姫路定住促進センター(兵庫県)、国際救援センター(品川区)のどれかに入所し、4ヵ月の日本語教育(日本語で日本語を習う)を受ける。そのほかセンターでは、社会生活適応指導、職業指導、職業紹介、アフターケアを行なっている。平均して6ヵ月のセンターでの滞在をし、職を得て社会へ出していくという事になっている。

※ラオス語教室

ラオス語教室は、1989年、ラオス人定住難民の団体である在日ラオス人協会が民間団体の資金援助を得て始められ、1990年からは綾瀬市の綾瀬文化センターで開講されている。

教室は毎週日曜日午後1時から約3時間、神奈川県各地に暮らす約20名の子どもたちを車で送迎して集め、その親たちに対する日本語教室も開いた。

また、綾瀬文化センターと場所を同じくしている綾瀬市立図書館では、タイの難民キャンプで職業訓練の一環としてラオスの人たちが作ったラオス語の図書を1990年から置くようになった。置かれている本は小学校の教科書や諺・習慣に関する本、音楽の本や辞書などである。

「がんばって、がまんしなさい」はイヤ 日系南米人のアイデンティティと日本の学校

豊住マルシア

I. 日系ブラジル人2世の私と日本の出あい

私が日本にはじめて来たのは1970年のことです。留学生として日本福祉大学に来て、71年のおわりまでいました。ほとんど名古屋にいましたが、東京にも見学にきたりしました。ちょうど、70年に大學紛争があったときで、電車の駅のシャッターが下ろされて、なかに閉じこめられてしまい、夜中にバスを待っていたことがあります。そのときは学生の運動がさかんで、すごく燃えた時期ですよね。私たちも労働者たちといっしょにデモに2回ほど出たことがあるんです。日本での学生体験というのはすごく豊かなものでした。

私はブラジルで生れたのですが、父親は5才のとき、母は赤ちゃんのときブラジルにわたりました。おじいちゃん同士が日本時代からの友だちで、向こうに行って子どもたちを結婚させました。結婚するまで一回しか会ってなかったそうです。日本の文化がそのままブラジルで守られていて、そのまま変化なしで行なわれたんですね。私は大学に入ってから、ずっとずっと、日本人のイメージとか、自分が日本人であることにたいへん悩まされました。それ以後、いろいろな疑問をもって生きてきました。

留学生としてきたときちょうど大阪万博でした。日本は世界に向かっていろんなものを求めた時期で、すごく私たちを気持ちよく受け入れてくれました。学校のなかでも、南米からの留学生が2人いて、インドネシアの留学生も1人いました。留学生というのは最初先生たちとたいへん密着な関係をもつんですよね。日本語があんまり出来ないし、会話が英語になっちゃって、学生たちとの関係はなかなかむずかしいんです。だんだん日本語がわかるようになっても、先生に助けを求めなくては授業もついていけないことが多いですね。

日系ブラジル人2世の私

私はブラジルで精神薄弱児のことをやっていたんですが、その専門を日本で勉強したくて來たんです。当時、名古屋の福祉学校に行つたことがあります、いちばんびっくりしたのは精神薄弱施設が山奥にあったことです。また当時名古屋に福祉学級がいくつかあったんですが、そこで感じたことは、すごく暗いイメージでした。先生たちの机もすみっこにあって、互いに交流もなく、教室にいっても子どもたちがすごく暗かったです。それはブラジルでは考えられないことです。ブラジルでは、普通の子どもたちといっしょに生活して、助けあって生きていくような方針がとられていますが、日本ではそれが感じられなくて。当時、名古屋では「愛知コロニー」ができたばかりで、教育委員会でもそれを自慢して、私たちにすぐそこを見学させてくれました。でも、あんな山奥にあって、悲しかったですね。子どもは夜は泣くし。ブラジルでは全然そんなことはあってはならないことですよね。いくら設備がよくても。子どもを別にすることはないんです。

隔離された福祉施設
におどろく

私がブラジルいたころには、おじいちゃんおばあちゃんは日本の昔話はよく話してくれました。だけど、自分自身についてはたいしたこと話してくれなかつたですね。桃太郎のこととか、古い昔話とかはよく話してくれるんですけど。

移民の経緯を話してくれなかつた祖父母

母方のおじいちゃんはお寺で育てられたそうです。すごく貧しい家で、親が育てられなかつたのでお寺に預けたそうです。そこで大学までは行かなかつたけど、専門学校まで行かしてもらった。電気の技術が好きで。お坊さんの資格もとつたのかな。たとえば、ブラジルで誰かがなくなつたら、おじいちゃんを呼びにくるんですよね。おばあちゃんは、女学校を出て、飛騨高山で先生をしていました。だから、おばあちゃんからは、日本の先生のことについてよく話を聞きました。おじいちゃんは愛知県の山に囲まれたすごく小さい村の出身です。その話をあまりしないので、「どうしてブラジルにきたの」としつこく聞いたんですが、答えてくれなかつたです。すごく貧しいなかで、生活ができなくて移住したことを、あとから親戚の人聞いてわかりました。しかし、おじいちゃんは自分のプライドがついて、決して話してくれませんでした。

ブラジルの移民については、日本にきて日本語を読めるように ブラジル移住の歴史
なってからいろいろわかってきました。いろんな人から聞いたこと
や親から聞いた話から「あ、だから家ではこんなことをしたんだな」
と思いました。本にもいろいろ書かれているんですが、あんがい日
本の責任というのはこんなところには出でていないんだなと思います。

ブラジル移民は1908年にはじまります。南米の歴史をみると、ブ
ラジルのばあい、大きな農園が奴隸制度の下で発展したのですが、
1888年に奴隸解放をしました。そこで、奴隸から解放された人たち
が、大きな農園から町に流れこんでいく時期に、農村で働き手が足
りなくなって困っていた。そのときに日本からの移民が始まりまし
た。

ちょうどその時期、アメリカでは日本からの移民が制限された時
期です。しかし、移民を斡旋する会社はアメリカ移民希望者からお
金をもらっていたのです。でも、アメリカにはつれて行けないので、
結局南米に行くことになったのです。ブラジルには最初の船で791
人移民しました。ブラジルのコーヒー地主との契約によって労働者
として1,000人募集したけれど、集まらなくて791人になったのです。
ちょうど今から2年前に、初移民した人たちの最後の人がなくなり
ました。日本の新聞にも小さく出ていました。

ところで私は今、綾瀬で南米の子どもたちのお世話をしています。 日系アルゼンチン人
3つの学校をまわって、週だいたい4時間。1日2時間ずつ。子ど
もたちの悩みとか、連絡しなければならしないものは翻訳したり、学校
の勉強を助けたりしています。ブラジルの子どもたちがたくさんい
ますけれど、ペルーの子が6人、アルゼンチンの子どもが1人いま
す。

アルゼンチン日系人の子どもについては、私あまりよくわからな
いんですね。このまえ、その子のお母さんと話をしたことがあります
が、お母さんは沖縄からの日系人で、お父さんはイタリアか
らアルゼンチンに来た人で、その子どもは混血です。日系人である
お母さんが育つときは、やっぱり日本人だけで地域で固まって生活
していたそうです。田舎に散らばって生活していた日系人のひとた
ちはほとんど日本語忘れていました。反対にラプラタ地域の人たちは
日本語をよくしゃべっているといっていました。それ以上彼女も移
民のことはよく知らなくて、情報としてもそれしかないんです。

ペルーの話になりますが、ペルーの日系人にはすごく悲しい物語があります。いちばん最初のグループは、ブラジルのばあいより早くて、1899年です。ブラジルの第1回と1人しかいませんでした。最初はハワイに行くつもりだったのに、いつのまにかペルーだったんです。そのとき「帝国移住会社」というすごい名前の会社があって、その下に小さい斡旋会社が100くらいあって、そこがお金を持って、ハワイに着いたらお金を返す約束になっていたのです。でも、着いたところは約束とはちがうペルーで、しかも着いたら港にほったらかして、全然お金を返してくれない。なんにもない山の奥につれていかれて、馬小屋みたいなところで寝泊りして、すごく厳しい仕事の状況のなかで、何パーセントの人がなくなったというんですよね。

そして、ペルーの日系人の悲しい歴史は、第2次世界大戦のとき、もっと悲しくなったのです。そのときいっぺんにではないんですが、いろいろな宣言が出てきて、国籍をくれなくなつたんです。今まで生れてくる子どもたちは自然に国籍をもらつたんですが、それが、1941年から国籍をくれなくて「外国人」として差別、特別扱いをされたんです。そのあとは、財産を取り上げていくんです。生活もできなくなって、魚をつることもできなくて、鉄砲とか、狩りもすることができなくなって、危険なものは持つことができなかつたんです。アメリカの強制収容所に2,118人の日系ペルー人がつれていかれました。彼らの財産は国にとられ、ペルーに帰ることができなくなります。

ずっと後に、アメリカでは、あちらの移民たちが運動をして、あやまる形で日系人に補償がありました。ペルーでも大統領がお金ではなく、土地を広い土地を、日系人にあやまる気持ちで彼らに与えました。それが、いま大きな教育の施設になっています。

日本からのペルーへの移住については、日系人たちが1990年に作った本があります。この本には、日系人の生き方やアイデンティティの問題について書かれています。『ペルーの日本人』という本ですが、日系人が2世・3世になるにつれてどうかわったのかについて書かれた本です。もし、翻訳されたらいいと思いますが。これはスペイン語です。

これによると1899年が最初じゃなくて、1612年に21人がわたって行ったという書類があるんですね。スペインの船でわたっていった

んです。彼らはあっちでは、「日本人インディアン」として生活していたというんです。現地のネイティブのいうのは日本人と非常にしていますよね。だから、そう呼ばれていました。しかし、日本人は食べ物など文化が違ったので「日本人インディアン」と呼ばれたんだそうです。

おもしろいことには、ブラジルに移住した日本人たちは、各県ごとに集まるんですね。日本から出たからもっと大きなグループごとに集まるはずなのに、そうじゃなくて、小さいグループで集まるんですね。それについては私あんまり答がわかりません。九州とか南の方の人が多いんですが、広島とか、沖縄。沖縄は沖縄でまたたいへん差別されたりしているんですよね。ブラジルの沖縄の人たちは、沖縄以外の人を「内地の人」と呼んでいますけど、内地の人と結婚しようとすると、お互いの家が反対して、結局別れるか、親の反対を承知で結婚するかになるんです。だから、悲しい物語がたくさんあります。私のおばもそうです。おばあちゃんは静岡の人で、おじいちゃんは愛知の人で、このおばの結婚相手が沖縄人で。沖縄でも古い家の人が、内地の人と結婚することが許されなかつたんです。その反対を押し切って結婚したので、今でも夫の両親の方の家には行けないんですよね。まだ、嫁さんとして認めてくれないから。おばあちゃんとおじいちゃんがなくなったから夫の兄弟の間では行ったり来たりしているんですけど。おばあちゃんとおじいちゃんがまだ生きていたころには、行ったり来たりすることもできなかつたです。そのくらいはげしく差別が残って生きていたんですね。

これは、南米全体にいえることだと思いますが、日系人は一般社会の中にはとけこんでないですよね。日系人だけの学校とか、クラブとか、文化的施設というのかな、文化会館とか、図書館とかなんとか県人会など、みんな白人や現地人にオープンではないですね。そこでは、日本語しか話さないから、おもしろくないから日系人以外は誰も行かない。パーティーのときも日本人しか集まらない。食べ物もお寿司とか、お饅頭とかが出されるので、他の人々は食べられない。

そんなふうに、日本人と現地人は別々に生活しているんですが、

出身県ごとにかたまる日系人

閉鎖的傾向がつよい日本人社会

そのなかで、子どもたちがかわいそうです。小さいときは、家のなかでは、おじいちゃん・おばあちゃんたちは日本語で話をするんですね。私たちの言葉はポルトガル語ですけど、私たちはおじいちゃん・おばあちゃんの話がわかりますよね。しかし、おじいちゃんやおばあちゃんたちはポルトガル語を学ぼうとしなかったのですね。いまでも日本にきている子どもたちのおばあちゃんたちに会ってみると、日本語しかはなさないんですよね。

もちろん日本での生活にはそれがすごく役立つんです。すごくはやく日本語を覚えるんです。自分が知っていることを言うことですから早いです。耳でなれているんですから。おじいちゃん・おばあちゃんと生活していなかった子どもは、遅いんですね。彼らの2倍以上かかるんですよね。

II. 日系南米人のアイデンティティと日本の教育・学校

1990年12月に綾瀬市教育委員会から電話がありました。日系人の子どもたちがいるのだけれど、子どもも親も日本語がわからないし、子どもたちを学校に入れるか入れないか教育委員会もわからないので、通訳してほしいということでした。それで子どもたちと会いました。5人のうち、2人が学校に通っていました。1人は中学校で、1人が小学校。3人はまだ学校にいく気じゃなかったです。そのときまで、南米の日系人が日本に出稼ぎに来ていることを、テレビなどで見ていたのですが、そのときはじめて会いました。

それがきっかけで、日本語を教えはじめました。それからどんどん綾瀬に子どもたちがきました。89年から綾瀬には来ていたらしいんです。そのままブラジルにおいてくると、子どもたちにはあまりよくないということで、最初1人がつれてきました。それを見てだんだん3人から5人になって、ふえていきました。私が見てきた子どもたちは30何人で、ほかも合わせると今は50人になっています。

そのなかで、いじめの問題がすごくてきました。私はいつもは3つの学校しかまわらないんですけど、あるとき他の学校から通訳してほしいと頼まれました。子どもたちがすごく暴れるというんですね。不安で、誰も信用しなくなつて。暴れるようになると先生た

綾瀬市教育委員会からの通訳依頼

いじめの問題

ちも手をつけられなくなるんですよね。体も大きいし。女の子は学校に行かなくなるんですが、男の子は暴れちゃうんですよね。すごく目つきがきつくなって、悪いことしか言わないんですよね。ほんとうは、問題が起きる前に、その子どもたちと話ができる人がでてきたらいいんですけど。なかなかそうならない。それが重なってこじれてしまうんですね。

いじめるというのは、原因をいろいろさぐってみると、廊下で指をさしてわらったり、わけもなくモノを隠したり、給食のときその子だけ足りなくしたり全然配らないとか、そういうものです。それで女の子は登校拒否になり、男の子は暴れるんです。小学校の高学年になると、中学と同じようにいじめられると、登校拒否になるし、男の子は暴れるし、まったく精神的に中学校と同じ現象が見られます。

南米人の子どもたちに自分から積極的に友だちをつくるようにいくら言っても、非常に難しいんですよね。たとえば、そのノウハウがわからない。たとえば、3人日本人の子どもがいて南米人が1人いたばあい、その3人にどう話しかけるか。そのプロセスが私よくわからないんです。私、日本の学校について勉強したことがないし。子どもにはそのガイドがわからないです。とにかく、笑顔を忘れないようにするとか、できることから指導します。ものを拾ってあげて、「これあなたの？」と聞くとか。簡単な日本語を教てるんです。たとえば、朝のあいさつができるとか。

綾瀬では子どもたちを、住んでいる地域のところから、南米人が多い他の4つの学校に動かしました。小学校2つと中学校2つ。そのうちの小学校2つと中学校1つに私は行っています。

集中したことはよかったです。安心して勉強に取り組む余裕ができました。自分が教室でぼつんといいるよりはいっしょの国の人々が2人いた方がよい。日本の子どもはグループでやっていて、1人になると、すごく耐えられないというんですよね。どうしても1人はいやだと言っています。2人の場合はよく、2人でお互いに助け合ってやっています。1人がサインを出して、1人がするとか。1人が勇気づけられて1人がそれについていくとか。1人だと、学校をよく休みます。男の子どもと女の子ども2人でもかまわないです。男の子と女の子では、休み時間はいっしょには遊ばないんで

1クラスに複数の南米人がいるほうが多い

すけど、それでも2人がいいと言っています。先生にはせめて2人ということで、お願いしていて、気持ちよく入れてくれていますけれど。

今年、1年生が7人入りました。そうすると、できる人が他の子のめんどうをみてあげる。そういう広がりがでてきます。だから2人よりも3人、3人よりも4人の方がいいと思うんです。でも学校側はOKしてくれないんですね。「むずかしい」としかいわない。

「具体的にどういう点でもむずかしいですか」と聞いてもあまりはつきりした答はないんです。「2人だったらお互いに助け合うけど3人だったら仲間が割れる」とか「日本の子どもが入りにくい」とかで、具体的に、たとえば勉強についてはどうなのかという答はでてこないんですよね。「先生がいなくとも3人でなんとか楽しくやっていけるので、ほとんど日本語をはなさないで、おわっててしまう。だから3人はよくない」ということで、結論がでちゃったんですね。

この仕事をしていて悩むのは、学校との関係です。

最初の1年目は学校のやり方をそのまま子どもたちに伝えるだけだったのですが、しかし、そのやり方では、子どもたちがいろんな問題をもってくるんです。子どもたちが持ってくるのは、班の問題です。班の中で他の子どもにいじめられたとき、「先生に言ったけど先生は『がまんしなさい』という。でも自分はがまんできない」と、子どもたちが私に訴えるんですよね。だから、子どもたちは「がまん」とか「がんばる」とかのコトバがいちばん嫌いです。そのコトバによって、自分がいつも不利な立場にいなければならなくなるから。言葉ができると問題が解決できるかもしれないけど、言葉の壁があるからよけいむずかしい。

それで、私はそれを先生に伝えるのですが、子どもたちにたいして返ってくる答は、やっぱり、「がんばってがまんしなさい」というのです。

そんなふうに「がんばる」とか「がまん」とかを子どもに伝えるだけでは、私が子どもから信頼がなくなるんですね。話は聞いてくれるけれども、状況をえてはくれないのでから。私は子どもたちにがまんさせるために教育委員会の仕事をするようになっ

「がんばってがまんしなさい」という日本の学校

「がまん」するように説得することが補助講師の仕事ではない

たわけではないし、日本の教育制度を説得するために入ったのではないんです。教育委員会から仕事の依頼があったときにも、子どもたちにがまんさせる仕事だとはいいませんでした。

綾瀬には、私のように親と連絡とったり勉強を助けたりする人が、全部で7人います。その人たちも、問題をたくさん感じていて、「これはこうしてほしい」という希望をもっていたり、わたしと同じような悩みをもっているけれど、なかなかそれをいえないんです。それで、教育委員会にその問題をいいました。わたしは、参加しなかったんですけど。教育委員会も会議をひらいたと思います。

その結果協力者の位置づけというのがあるといふはっきりしました。でも、一般の教室にはいることが許されていないというのが、現状です。たとえば、教室で南米の子どもたちがどのようにやっているか見ることが必要なのです。教室を見ていれば、問題がおきるまえに「こうしたらどうですか」と先生に提案できるんです。たとえば、あの班に子どもを動かしてとか。しかし問題がおきてからでは遅いんです。子どもたちは傷ついているし、信頼を失っています。すごく大変です。でも、教室を見ることができないです。私たちが通訳以上のことを行うことは一般的には歓迎されていないようですね。教育委員会に何回も頼んでいるんですけど。まだ許可されないんですね。

一般の教室に入れない補助講師の処遇

先生たちが忙しすぎるということもあると思うのですが、私の印象では、日本人の先生はあんまり子どもたちと話をしていないと思うんです。私としては、一人ひとりの子どもをよく見てほしい。子どもがあって教科書があると思うんですよね。子どもをよくみてはじめて、何をその子どもに学んでほしいか、具体的に出てくると思います。その子どもに学ばせるためには、何がその子どもに必要なのかを探らなければいけないと思います。先生たちが子どもたちの背景についてどのくらいわかっているのか、すごく不安に思うんです。家庭訪問をするんですが、中学校の先生も小学校の先生も、「学校で困っていることはありますか」ときまった質問をします。その子どもがどんな子で、どんなことに困っているかをもっと具体的に聞いてもいいと思うんですよね。せっかくいいチャンスだから。でも全然聞かないことが多いですね。それで、私が聞くんです。「ブラジ

子どもたちをもっとよくみてほしい

ルでは何を勉強しましたか？」すると、子どもが見えてくるんです。おかあさんたちも子どもの勉強を心配しているからいろんな悩みを持っているんです。そうすれば、ブラジルでの生活や遊びなどがわかるんです。それで、できるだけの情報を親の方からきいて先生たちに伝えるんです。私も子どもを学校に通わせているんですが、ほとんど先生に聞かれたことがないんですよね。

日本には指導要録がありますよね。あれは全然子どもが見えてこないんですよね。子どもが見えれば、そのあと教科書をどういうふうに教えるか、具体化されるはずなんですよね。しかし、最近の先生たちは、子どもたちの高さに合わせることが苦手なようです。国際学級にドリルをもってきて子どもにやらせることになっていたんです。それで私は、教育委員会にも言ったんです。「私たち協力者が来ている時間をもっと大事に使いましょう」「ドリルは子どもが教室で勉強についていかれないとき、家に持つていってやってもできるから、この時間をもっと大事に使いましょう」って。国際学級に、教科書を生かす形でやればいいと思うんです。

それから、先生たちもブラジルという国やブラジル人についてもっと理解をもってもらえたたらと思います。ブラジルという国はいろんな人たちがいて、さまざまな文化のなかで自分がどう生きて行くかが問われているんです。だからみんな小さいときから自分を積極的にアピールする習慣をもっています。そういうことが苦手な日系人でも、日本人と比べるとそうです。だから、日本の学校のなかでも子どもたちは自分をアピールするんです。でもそれが、日本の学校や先生、子どもたちと合わないということになります。

ブラジルという国・
ブラジル人を理解し
てほしい

同時に、ブラジル人はいつも周りを気にします。それは日本と違った意味です。自分の命まで危ないことがありますから、小さい時から歩いていてもまわりに誰がくるか、車がくるか、いつも注意しています。小さいときからそうしないと、あんなに法律が守られていない国だから、生きて行けないですね。ブラジルでは自分を守らなければ生きて行けないです。だから、今でも、綾瀬でブラジル人の交通事故は1つもないんです。ブラジルですでに身についているからです。

でもそういう現実に目を向けないで、「交通安全」という研究授業がおこなわれたりします。私は、ブラジル人の子どもには「交通

安全」の研究授業は必要ないといって、手を引いたんです。ブラジル人の子どもにとってもっと必要なテーマがいくらでもあるのに、外国人だから交通安全教育が必要だときめてかかるのはよくないと思ったんです。きっと、先生たちにはそれがやりやすかったのだと思います。ブラジルという国はどんなところなのか、もっと私や子どもたちに聞いてくれればいいんですけど。

このことは多分、先生たちが子どもたちをすぐ「評価」したがることと関係があるのではないかでしょうか。たとえば、先生たちは日本系人の子どもにもテストを受けさせたいんです。参加するだけでいいというんです。でもそこには点数が出るから、子どもたちはいやがるんです。だって、日本語が読めないですから問題が読めないんです。そういうハンディキャップがあるのに、同じようにやらせて点数をつけて、比較・評価をしたがるんです。最初、子どもたちに「ちょっとやってみるのもいいじゃない」といって、やらせたんですが、子どもたちはいやがる。それで、いまでは点数ではなくコメントで出してくれるようになりました。

テストの評価はそんなふうに少し改善されたのですが、通信簿や指導要録の問題が残ります。英語がよくできる子もいますけど、問題が日本語ででたり、英語を日本語に翻訳するという問題がでるとこたえられないんです。でも、英語の成績は5とか4とか3がつくんですけど、あの教科はみんな1です。とっても矛盾を感じますね。通信簿などはコメントじゃなくてやっぱり数字なのです。

先生たちの悩みというのでしょうか、不満のひとつは、「せっかく教えても数年で帰ってしまうから教え甲斐がない」ということ。その反対に、「4、5年で帰る子どもたちだから、こんなにしてまでやらなくてもいいんじゃないかな」という声です。先生たちの気持ちはわかるんです。でもちょっと視点がちがうんじゃないかな、と思って言ったんです。「指導を変えなければいけないんじゃないですか」。

この子どもたちがブラジルに帰ったときに、日本についてどんな気持ちになるのか。そのことが大事だとおもうんです。将来、日本とブラジルあるいはペルー・アルゼンチンとつなぐ人になることができるかもしれないんです。それなのに「日本が嫌い」になって帰ったら、ほんとにマイナスでしょう。何のためにこの子たちを指導す

「評価」したがる日本の先生たち

数年で帰国する子どもたちに教える意味

るのか。もっとこの機会を生かしてゆく、ステップにしてゆく方法はないのか。

そのことを言ってわかってくれる先生もいました。やっぱりやさしい先生は熱心にやってくれるし、子どもの心を探ってくれるんですね。

帰国を考えるとポルトガル語やスペイン語の問題が大事です。ブラジルで学校へいったり働いたりするには使うわけですから。でも、ポルトガル語は全然学んでいないというのが現状です。親たちは働くのが忙しいから子どもたちのめんどうはなかなか見られないんです。もちろん会話はポルトガル語でしていますが。でも読み書きの練習はしていないんです。だから親たちから言われるんです。子どもたちが友達に手紙を書くときもスペリングがまちがったりしているから、勉強する場所がほしいって。でも、学ぶ場所がないんですよね。

それだけでなく、日本の学校には、「日本語で生活しなくてはいけない」「それ以外の言葉を使ってはいけない」という雰囲気がありますよね。さっきもいいましたけど、1クラスに3人以上ブラジル人がいると日本語を話さなくなるからだめだとか。ある学校でベトナム人の協力者がベトナム語で話したら全然ダメだと言われました。勉強のことは説明してもいいけど、世間ばなしは全然だめというのだそうです。

ラオス人の協力者のばあいですが、ラオスの子どもたちは日本生まれで日本の学校に入って、日本語には不自由しない子どもが多いんです。反対に母国語ができない子が多いんです。で、その協力者の人が「母国語でいいさつするから5分間だけ時間をください」といったら「ちょっと考えておきます」という答だったそうです。すごくおかしいと思って教育委員会にいって話しました。このままでは、ラオスの子どもたちは、自分の親とくに母親は日本語がじょうずじゃないことが多いので、親とも話ができなくなるから、といったんです。

日本語のことはもちろん大事なんですが、母国語のことも教育の問題としてちゃんと位置づけてほしいと思っています。

大切なポルトガル語 ・スペイン語の維持

日本語の問題でいうと、古い日本語をつかったとき笑わないでほしいということがあります。ブラジルの日本語はおじいちゃん・おばあちゃんから教わる昔の時代の日本語という面があります。だから「古い言葉」を話す子どもたちがいます。女の子でも「おれ」とか。そういう古い日本語を使うと笑われるんですね。日本の子どもから。だから、日本人の前では、日本語を話せても話さない子どもがいます。「自分の日本語まちがっているから」と思って。

古い日本語を話す子がいるというところに興味をもって、その子やおじいちゃんおばあちゃんたちの歴史に興味をもってくれればいいと思うんですけどね。ひとりひとりの日系人の子とていねいにふれあってくれれば、と思いますね。そうすれば、日系人は日本語を話すのが当たり前だという、もう一方の思いこみもなくなるんじゃないかな。

日本語ができるないと日本での進学はたいへんですね。

親の希望で、帰らないつもりで子どもたちの国籍を申し込んでいるケースがあるんです。その子は小学3年から入りました。おばあさんがいたときはおばあさんから日本語を教えてもらいました。テスト受けてもある程度ついてこれたんです、おばあさんがブラジルに帰ってからは難しくなりました。今年中学3年生で進学希望ですがなかなかたいへんです。これまでのケースでは、就職しました。先生と私と話をして、先生が就職口を探してくれました。進学の希望もあったんですが、学校は無理だと思って。塾で日本語を学ぶことも出来るんですが、費用が高すぎます。

そのときその子がいました。「私はどうして仕事をしなければならないの」。私は「あなたはもう15才だし、親も仕事していて下の兄弟は学校に行っているのに、自分だけ家にいていいの」といいました。そういうことをいうのはとてもいやでしたけれど。あとはその子の判断に任せました。今は、楽しく通っているらしいんです。入った会社も問題をわかってくれて。

夜の学校でもいいから学校に行きたいとその子は言ったんです。でもやっぱり日本語の問題が大きいんですよね。日本語を勉強するところがないんです。塾は高いし、ボランティアの人たちもいますけれど、学校の勉強についてゆく日本語まではなかなか難しいんです。

古い日本語・ブラジルの日本語を笑わないでほしい

閉ざされている日本での進学

特別資格の優先枠は大事です。以前、藤沢の湘南の定時制高校が1人受け入れてくれました。親は、最初下の子どもだけつれてきて上の子を国に残してきたのですが、寂しさと栄養失調で日本に来たとき病気だったので、大変だったので。その子は今、昼は仕事をして夜間学校に通っています。でも、一方で日本語をちゃんと教えてくれる制度ができないと、多くの日系人の子どもたちのばあい、高校入試で優先枠ができたとしても、そのあと、ついてゆくのが大変だと思うんです。少なくとも今のところ、昼間の学校はむずかしい。職業訓練校にもっと行ければとこのごろ思うんですけど、先生たちが教えてくれないとなかなかわからないんですね。行政の系統もちがうし。

だから、親たちはいまいろいろ悩んでいます。子どもの進路の問題で。中学校3年で帰るとか。今、経済不況で大変で、お金を貯めることができません。教育もお金がかかるし。切り目を今考えています。

日本の学校の組織は、すごく複雑だなと思います。たとえば、先生は自分が行きたいところをあまり選べないようですね。ブラジルでは、リストがあって、自分の成績によってその学校があいていればそれを調べます。日本の子どもだけの場合にはそれでもいいと思います。しかし、外国の子どもをかかえるときは先生に選択の余地が必要だと思います。先生に相談しないで、「あなたの教室にブラジル学生が入ります。日本語が出来ません」。それは、残酷だと思います。先生たちに準備が必要だと思うんですよね。

若い先生で、外国人のことに興味がある人、外国人の教育にかかりたい人、研究したい人がいますよね。そういう先生たちに選択の余地を与えることが必要だと思います。それを受け持つ先生にたいして、時間的な余裕を与えるとか、なにかの形で補償するとか。そうすると問題への取り組みが全然違うと思うんです。いま、ブラジル人の子どもたちも含めて、外国人の子どもたちは「問題児」扱いされていますけど、ひとりひとりの子どもたちをよくみて指導してくれるようになると思うんです。日本人の子どもとの関係もふくめて。

私もときどき、社会の先生とか、英語の先生、美術の先生なんかに「私はこんな資料を読みましたが、どうですか」とか積極的に話

意欲や関心のある先生に積極的にとりくんでほしい

しかけてみるんですけど、時代の変化を感じている先生たちもいるんですね。そういう先生たちとは一緒にやっていけるとおもうんですね。

学校でのことも大切なですが、学校の外でのとりくみも大切なですね。3月の末に、神奈川県の国際交流協会と私たち実行委員会の共催で、中国人・ベトナム人・カンボジア人・韓国人・日本人とブラジル人・ペルーアンダルゼンチン人などの青少年たち100人ほどで、2泊3日のキャンプをやったんです。そのキャンプでは日本語を話せない子も1人前に扱われるし、日本人の名前を使っている中国人の子どもや青年も「ほんとは自分は中国人なんだ」といつていましたし。カンボジア人もいるし、韓国人、ブラジル人などがあるなかで、「自分は中国人だ」といえる。韓国人の場合も、日本人のなかで韓国人とか朝鮮人ということを意識したんだけど、ベトナム人もいるし、中国人もいるし、というなかで、「すごくショックだったということ」ですよね。

そのキャンプが南米の子たちにとってもすごく楽しくて、3日目の全体会のとき、ペルーアンダルゼンチノのホセという子がみんなの前で、こういうことをいったんです。「ぼくは日本の学校に入って最初の日に、『ペルーからきました』と言ったら、みんなに笑われた。それで、こんな日本人とは絶対に友だちにはならないと心に決めた。でも、このキャンプにきたいろいろな国の子がいるし、日本人の子もとっても親切だった。とてもうれしかった」。スペイン語で言って私が通訳をしたんですけど、私も初めて聞いたんです。そうして、ホセがキャンプで100人の子どものまえでそのことを言ったあと、すごく彼が学校のなかで積極的になったといっていましたね。ホセはずっと暴れていたんです。殴る蹴るとほんとにひどかったです。でも自分を守るために守ったんですね。ホセにしてみれば。

でも変わったんです。「自分はペルーアンダルゼンチノ」といって当然の社会を体験して。日本のマイノリティといつてもいろいろなマイノリティがいて、みんな楽しく3日間を過ごしました。そうすると、力がつくんですよね。安心するというのかな。もっと日本を知ることというのかしらね。日本人がこわくなかったというんですね。だからキャンプの前と後ではずいぶん変わった。先生たちにももっと発言するようになりましたし、自分たちに対する自信につながりました

学校の外でのとりくみ——エスニック・キャンプの大切さ

た。こわくなくなればほんとうにいい関係になると思うんですよね。ホセみたいに。ほんとうは彼はこわくてしょうがなかったんですね、日本人が。

ですから、こういうことが日本のかでごくふつうに行われるようになるといいと思うんです。学校のなかでも、学校の外でも。そしてそれがつながってゆけば。

日系南米人は自分のアイデンティティについて、むずかしい問題をかかえているんですね。日系人は、その国に持っている文化に対するアイデンティティというのを、しっかりもっていないんです。日本人だったら、日本人の全部の背景をもった自分をもっているけれど。日系人の場合は、ちがうんです。閉鎖的な日系人社会のなかで小さいとき育てられて。しかし、中学・高校に入ると、ちがう社会に入る。中学・高校の友だちがふえると、日系人だけの社会ではダメなんだと、外の世界に目をむけちゃうんですよね。そういうなかで、2つの日系人社会ができるんです。

ひとつは、大学になると、日系人ということを拒否して、自分は友だちが生きている大きな影響の中で生活していくと判断して、結婚相手も他の民族、日系人じゃない人を選ぶんですね。日系人のガールフレンドも作らない。

もうひとつは、日系人社会でしか生活しなかった人たちですね。いま、日本にきている人たちは、日系人社会のなかでしか生活しなかった人たちが多いんです。だから、日本人のアイデンティティがブラジル人としてのアイデンティティよりは強いんです。それもタイムスリップした日本文化の中で生活したアイデンティティです。だから、彼らが日本にきて「外国人」と言わざると、すごく迷うんです。そのふたつのなかで、どうすればいいかということがでてくるんですね。

そうすると、いろんな問題が起こってくるんです。

私も国際結婚でありながらこの20年間すごく迷いましたよ。どっちをとるか。だけど、どっちを取るかの問題ではないんですね。自分が理想と思う社会とそのために、人がどんな人にならなければならないのか。そういうふうに自分を変えて行かなければいけない。そういう選択、個人の選択が大事と思うんですね。ここのいいところとこっちのいいところをとって。せっかくそのチャンスに会ったの

個性的な選択が必要な日系人のアイデンティティ

だからそれを生かして。そういうことが、個人の選択を重視して、一人ひとりが自分の歴史を背負いながら、個性的な人間になってゆくということが大事だと思うんですね。

III. 日本の教育とブラジルの教育をつなぐ

その点で、私はサンパウロ市の教育には期待がもてると思っています。私はブラジルに帰った子どもたちが向こうでどのようにやっているのかを心配して、向こうから資料を送ってもらいました。学校は知識を与えるのではなくて、地域を変えるものという考え方なんですね。パウロ・フレイレの考えです。彼の考えにたって、地域のセンターとして地域を変えていく場として。だから、学校の運営も上からくるんではなくて、先生と親と学生たちで運営していくことになっているんですよね。だけど、先生たちをすぐ変えていくのは難しいから、先生たちにオリエンテーションをしています。地域を変えるために学校が取り組まなければいけないことになっているんですね。サンパウロでは以前は集権的にやっていましたが、いまは、全部分散して行われています。だから、学校が身近かなものになって、地域を変えていく組織としてとらえられていますよね。

日本から帰った子が2人いるのですが、その子どもがすぐ、向こうの学校に入ったのです。ポルトガル語のテストを受けてそのレベルにあわせて1人は中学2年、1人は高校に入ることができました。もちろん、ブラジルの歴史などは親たちが勉強させる条件で、すぐ学校に入ることができたんです。私もほんとうに安心しました。

フレイレは長い間国を出なくてはならなかったんですよね。彼の弟子までも国から追われていたんですね。そういうきびしい状況の中でチャレンジする努力を続けて、学校の組織も変わっていったんですね。

私も日本で日系人の教育にかかるればかかるほど、ブラジルに帰ってこれに参加したいなという気持ちがつよくなります。

パウロ・フレイレがリードするサンパウロの教育

II 提起されている問題を考える

单一民族学校から民族共生の学校へ

マイノリティー、民族的少数者の側から日本の学校と社会を見ると、どのような問題点が浮かび上がってくるか、考えてみたいと思います。

なんといっても、日本の学校は、日本人の子どもを日本人に育てるという考え方方に貫かれているように思うんです。单一民族学校観が一般的です。

しかし、日本には日本人以外のいろいろな民族の子どもたちが住んでいる。日本の学校にもその子どもたちが通っているわけですから、その子らにとって、日本人の子どもだけを相手にする、いわば单一民族学校としての日本の学校は、どういうマイナスの役割を果たしているのかという問題を考えてみなければならない。

その問いに答えることを通して、日本人の子どもだけを教育する学校から、いろんな民族の子どもの存在と文化を認める民族共生の学校に変わっていく、それが今日の学校の課題になっていると思うわけです。

日本の近代教育史を振り返ってみると、日本人の学校の中に3回、3つの時期に、他民族の子どもたちが入ってきてています。

最初はアイヌ民族の子どもたちです。アイヌの子どもたちはアイヌ語で育って、アイヌの文化を身につけていたんですが、その子らに対して日本の政府は、アイヌ人小学校、政府の言葉を使えば、「旧土人学校」をつくって、日本の言葉、日本の歴史を教えて同化していく。これは1937年に廃止され、その後は知人の学校に入るのですが、その中で、北原さんの話にありましたように、アイヌを同化するのみでなく、アイヌと言っていじめて、アイヌを排除して

单一民族学校から
民族共生の学校へ

同化と排除の歴史と
構造

いく。そういう同化と排除の機能を日本の学校が持つようになった。

2番目の大規模な波は、1930年代に入ってからです。朝鮮人の子どもが日本の学校に入ってきたんですね。日本が朝鮮を植民地にして、朝鮮人が日本に渡ってくるようになった。その親たちと一緒に子どもたちも来て、1930年代には、日本の各地の学校に朝鮮人の子どもが姿をあらわすようになりました。その子どもの多くは、日本語が話せなかっただので、学校に入って日本語、日本文化を勉強したわけです。同時に、その子どもたちもまた「朝鮮人」、「キムチ、キムチ」と言つていじめられました。それ以降、同化と排除、同化といじめを在日朝鮮人の子どもたちも体験しつづけているわけです。ヒボンさんの娘、パンミさんとカリンさんの体験は、何度かお会いしているだけに、胸に刺さる痛みを覚えます。

第3の波は、1970年代以降に起っています。中国の帰国者の子どもたち、インドシナ難民の子どもたち、そして、日系南米人の子どもたちですね。その子らは日本語をよく知らないまま日本の学校に入りますが、ここでも、同じことが繰り返されようとしているわけです。この子どもたちに日本語を教えて同化すると同時に、この子どもたちをいじめ抜くという現象です。李鳳梅さんと任璞さんの話は、血を流しつづけた当人の体験であるだけに、涙なくして聞けませんでした。

学校の中に同化と排除、いじめという構造がずっと流れ続いているわけです。6人のお話は、わが身、わが子の体験をとおして、この構造の反人間的な作用を証言するものでした。マジョリティの日本人からはよく見えないけれど、差別されるマイノリティにとって死活にかかわる問題としてあることが、よくよくわかりました。

同化と排除の教育構造に対して、それを変えようという動きが高まっているのが今日の状況だろうと思うんですね。アイヌの人たちは、1970年代以降、アイヌの言葉や文化を子どもたちに教える運動を起こしています。在日朝鮮人も、日本の学校の中で自分たちの言葉や文化を教えることを望んでいるわけです。それを受けた全朝教、正式には全国在日朝鮮人教育研究協議会につどう先生たちが、在日朝鮮人の子を朝鮮人として起こす教育運動に取り組んでいる。そういう主体的力量の蓄積があるんですね。

その蓄積を活かして、今度こそ、ニューカマーの子どもたちに対

民族共生教育の歩み

して、同化の教育ではなくて、日本語を教えると同時にその子どもたちの民族的アイデンティティを育していく。その両方の教育を行わなければならない。

歴史の誤りを3度繰り返してはならんと思っています。今回は前2回の誤りを正すチャンスだろうと思うんですね。そういうチャンスを活かす教育的力量をアイヌの教育、在日朝鮮人教育運動にかかる人たちがつくり出しているので、そういう人々と力を合わせて、日教組を先頭にして、今までの同化教育をつくり直していきたいと思うんです。

今を逃すと日本の学校を同化と排除の場から民族共生への場につくり変えていく機会を逸してしまうのではないでしょか。

民族共生を必要とするという観点から、もう少し、今までの話を振り返ってみると、幾つかの心に残る言葉があるわけです。

その第一は、「子どもを産むのが心配だ」と言われていることです。北原さんにとっても、喜奉さんにとっても、子どもを産むときに悩み苦しむ。それは、生まれてくる子どもが日本の社会と学校の中で差別される辛い体験を持つであろうことを、自分の体験を通して予感するからです。大いに悩む。しかし、悩んだ末にが我子を産むわけです。

生まれてくる子どもが差別にあうから子どもを産むかどうかんと悩むということは、これはマジョリティである日本人の中にはなかなか起きない現象です。ですが、マイノリティの人びとは、被差別部落の人々も同じだと思いますけれども、親になるとき、このような苦しみを味あわざるをえない。

そのうえ、わが子が、父母の予感したとおりのいじめにあうというのは、さらに切ない話です。

子どもが学校に行く。マイノリティの子どもたちが最初に出会うのは、いじめられることでした。「アイヌ」といって石をもって追いかけられる。「韓国人だ」といって学校の返りに傘で突っつかれる。

「中国人帰れ」と、引き揚げの子どもたちが言われる。日系人の子どもたちも、給食を配らないとか、いろんないじめにあって暴れる。

日本人の子どもたちは、どうしていじめるのだろうか。お話を聞いて浮かんでくるのは、ただ一点、民族が違うからという理由です。

子どもを産むのが心配だ

民族的迫害

民族が違うということを理由にいじめられる体験がみんなに共通しています。それで喜奉さんの娘は心身症に陥る。中国帰国者の2人の娘は自殺することを考える。そこまで追い詰められていく。なのに、追いつめる側はそこまで思わない。自分がやっていることが他者をどれほど傷つけるか、想像する能力を失っている。

民族的な他者を排除していく、それがいじめとしてあらわれることが日本の大いな特徴だろうと思うんですね。他方、いじめられる側の子どもたちは、日本は怖い、日本人は怖いと思う。学校は子どもたちを幸福にする場、豊かな友情を育てるところでなければならない。けれども、現実は子どもが子どもを喰う場になり、差別—被差別の関係と意識を醸成しています。

学校におけるいじめの中で気になるいじめ方を一つ感じるのです。歴史意識の逆転佳林さんをいじめるときに、日本の子どもたちは「韓国人のおかげで日本は戦争に負けたんだ」と言う。同じように中国の任璞さんも、「日本が戦争に負けたのは中国人のおかげだ」と言われる。

これは逆転した歴史認識ですよね。そういう逆転した歴史認識を日本人の子どもがどうして持つようになったのかということは、歴史教育の問題として考えなければいけない問題ですが、ともあれ、アジアの歴史意識とは全く逆転した歴史意識を植えつけられ、それに基づいて、中国人や在日朝鮮人をいじめているのはすごく気になります。

いじめの反面、気になるのは、相変わらず、学校が同化の場になっているということですね。教師の多くも、知らず知らずのうちに、学校をマイノリティの子どもたちを日本人化する場所として考えているように思えます。

北原さんは中曾根発言を引いて、批判していました。中曾根首相は、日本の学力水準が高いのは日本は単一民族であることを一つの理由に挙げているわけです。黒人やヒスパニックがいないから、学力が高い。中曾根首相と同じ考え方が日本の学校に流れている。日本の学校では、他者の文化、他者の言葉を認めるのではなくて、日本の言葉、日本の文化を一方的に教えることになっているわけです。

教師はそういう同化教育を小さい時受けてきて、教師になって同

同化・帰化を勧める

じことをくり返すわけです。たとえば、レックさんの娘さんは、高校に入って、先生に、「帰化したらどうか、そして日本名を名乗ったらどうか」と勧められたということでした。日本名を使うのは当然という意識は、在日朝鮮人の子にたいしては、半世紀もつづいています。

教師が中曾根首相に代表されるような政府の同化イデオロギーに染まっていることは気になるんです。文部省の教育政策に対しては反対しても、マイノリティの教育については、知らず知らずのうちに日本人化の教育をする。そのほうが子どものためになるという意識を持っているのは、教師の意識のなかで反民主的な一番弱い部分であろうと思います。

单一民族社会、单一民族学校と重なってあるのが、学校はみんな一緒に足並み揃える場所であるという画一化の意識です。制服はそれを象徴するものです。

ですから、名前が違うと、とってもいやだ。レックさんの息子と娘がカタカナの名前を使っている。カタカナの名前だと、みんなから浮き上がって、違いが目立つ。企業に行っても、塾に行っても、カタカナの名前ではなくて日本の名前に変えたらと勧められる。このように、名前を日本名にするということの中にも、同化の意識と同時に、みんな一緒にいいんだという意識が流れていると思うんです。

みんなと一緒にいいということのうちには、意見も同じがいいということも入っているようです。パンミさんやカリンさんが韓国人であることを主張すると、叩かれる。韓国の歴史や文化のことを話すと、白い眼で見られる。個性的であることは足並みを乱すことと同義である。画一化は子どもの多様性をつぶして、非個性化をもたらします。

マルシアさんの話の中で、日本の学校とブラジルの学校はいろいろやりかたが違うという指摘がありました。日本では、学校にいる時間も長いし、教師もクラスも選べないしということでした。なかでも印象に残るのは、日本の学校では、子どもたちに「我慢しろ」ということを教える。「我慢して頑張れ」と発破をかける。

子どもたちに我慢を教える。しかも班を単位として行動すること

我慢して頑張れ

によって、班単位で我慢する、クラス単位で我慢する。集団として我慢する。学校は生徒に我慢を教え、自分を抑えることを覚えこませる場所なんですね。

我慢、我慢の中で追い詰められ、自分を抑えることに堪えきれなくなると、子どもたちが荒れたり自殺していくわけですが、それはマイノリティの子どもたちのみに起きることではなくて、日本人の子どもにもたくさん起きています。

日本の学校は、マイノリティの側から見ると、自分たちの存在を認めて、その民族的なアイデンティティを育てる場所になっていない。でも、これは同時に、日本人の子どもを個性化していかないということにつながっていきましょう。民族の共生と人間の個性化は、メタルの表と裏の関係にあることがよく見えてきます。

学校改造の方向

以上のような苦しみに加えて、日本語のできない子どもは学力の成績の中の最底辺に置かれるわけです。勉強のできない子とみなされていく。かつてはそれがアイヌの子どもでした。在日朝鮮人の子どももそういうめにあいました。それがいま、ニューカマーの子どもたちになっているんですね。

特別な修学保障を

レックさんは、小学校3年までに日本の学校に来ないと、もう日本の学校について行けないといつてました。それ以降になると、もうついて行けない。確かにそう思うんです。日本の子どもでさえ学力について行くのが大変です。ですから、日本語を覚えたばかりの子どもがついていけないのはあたりまえなんです。

子どもたちは生活語としての日本語は覚えて、学習語としての日本語を覚えるのはまた別の大変な苦労があります。ニューカマーの子どもたちにとって学習語としての日本語を覚えるというのは並大抵ではない。それを覚え切れないうちに学校に投げ込まれますから、授業が分からぬ。そうすると、否応なしに成績競争の最底辺に置かれるわけですね。そして高校に行きたくても行けない子どもがたくさん生じてくる。

日本にニューカマーの人たちが来る一つの大きな目的は、子どもたちに教育を受けさせたいということがあります。それが日本の学校の画一的な、新幹線並のスピード授業、受験競争の中で、その子どもたちは最底辺に落とされて、日本で教育を受けさせる、日本で

学ぶという親と子の希望を踏みにじられる現実が出ています。修学のための特別の手立てを考え、保障していかねばなりません。

マイノリティーの子どもにとって、日本の学校は、一口に言えば、共生が人間化への道地獄になっていると思うんです。それが三世代にわたって続いています。地獄である学校を、子どもたちにとって極楽としてある学校に変えて行かなければならぬと思います。

お話の中で、その芽が芽生えていることを知りました。北原さんの息子さんの属する柔道部でアイヌ語の単語が飛び出したり、喜奉さんの三番目の娘さんの担任が韓国人であることをかけがえのない個性と捉えようとしていたり。知らない言葉や文化にふれることは、とても楽しいことです。共生が人間化の道です。（小沢有作）

アイデンティティ崩壊の危機

わたしは、レポートでもお話ししました次女のことで、ここ1週間パニック状態の中にあります。きょうお話することをていねいに用意できていないのですが、発言させていただきます。

社会的構造から見ますと、私の場合は、被差別の立場になりますけれども、どのレポートにも自分の人生が重なるようで、何か、日本の最底辺の秩序づけを目のあたりにしたという思いがあります。やはり何といっても、基本的人権が侵されている。日本社会の最底辺に組み込まれていて自由権、生存権そのものが脅かされているという危機的状況に憤懣やるかたない思いが巡りました。

子どもの権利条約によれば、「すべての子どもは、どこに住んでいようと、発達権、学習権が保証される」とありますが、現状では救済されていない。放置されたままです。とくにニューカマーの子どもたちは、生活苦という中で、荒れ、学力不振、不登校などという問題を抱えていて、緊急避難が要ると思いました。やはり、何がそうさせるのか、差別の構造的暴力についてマジョリティは認識する必要があると思います。差別というのは、決して意識の持ち方の問題ではない、経済的な搾取と政治的な分断にあるということを知らなくてはならないと思います。

また、やり場のない憤りを覚えたのですけど、戦前からの異民族

であるアイヌ人、朝鮮人ばかりでなく、ニューカマーの人々も日本名を名乗っているという酷薄な事実。そこに私は日本社会の病理を見ました。私は、この日本名を焦点化しながら、日本の抑圧の構造について考えてみたいと思います。

日本人の多くは、日本名を名乗ることがみずからの選択であるようと思つて、何ら不思議に思わないようですが、その感性こそが病理であると思います。我が身に置きかえて想像力を伸ばしていただきたいんですね。出生のとき、親が名づけてくれた名前以外に、もう一つ名前を強制されるということがどういうことなのか。私たち在日朝鮮人の立場から説明させていただきますと、日本社会は、日本名を名乗らざるを得ない社会なんです。本名を名乗っては途端に生活の徒労に悩まされるというのが実際です。まず就職の問題があります。本名では採用しないというのが実状です。また、結婚においても壁になっています。在日朝鮮人の場合で言えば、零細の自営業が多いのですが、本名を名乗っては金融機関が取引をしてくれないという実状があります。また、生活上においても、各種ローンを組んでもらえないというのが現実です。かつて「ジャックス訴訟」というのがありましたが、それは、川崎のある朝鮮人部落で、数名のオモニたちが羽布団を購入したのですが、そのとき、通名の者にはローンを組み、本名の者は拒否されたというものです。ところで、この本名の問題は、帰化行政の実態を見れば一目瞭然であると思います。『民事月報 帰化と戸籍上の処理』にありますが、「日本国家が単一民族国家であることから、日本国民間には、日本国民を一つの血縁集団として観念する傾向が強い。

一中略一外見上、外国人あるいは帰化人と見られることは同化上の妨げとなる。また民族意識の発露として、ことさら外国人的な呼称の氏に固執するということになると、帰化により日本国民とするのにふさわしいものと言えないであろう」と書いてあります。つまり、このような意識に囲まれているというわけです。

今日では、在日朝鮮人も、大阪の一部を除いては、大半は分散しており、日本人住宅地の中に点在するようになりました。そこで、戦前とそう変わりのない差別と排外の意識に囲まれるわけです。苛まされながら、孤軍奮闘です。日本人の倍働く、日本人の倍勉強する、資格を取ろう、日本人に後ろ指さされぬよう細心の注意を払う……。けれども、時に、抜き差しならない場面に遭遇することがあ

ります。たいていは呑み込んでがまんしますが、あるときようやくの決心で、それは差別であると異議申し立てをするとします。すると、とたんに、日本社会は、渦になって、「文句があるのなら国へ帰れ」と言ってくるのです。社会的に孤立させられるわけです。そのような苦い体験を繰り返す中で、「とうてい1人ではかなわない、どんなに頑張っても、日本社会は変わらない」と諦観、無力感をつのらせていきます。

誰でも、逆境よりは順境が楽です。妥協をきめ込むよりほかありません。日本人と同じ程度の生活を望む、自分もまた日本社会のあらゆる領域で活躍したいと望んで、自己規制していきます。みずから個別性を押し殺して、全体に同化していくわけです。つまり、日本名は日本社会の抑圧の結果であるわけです。日本名を名乗り、日本人らしく振るまうためには、みずからの文化や母国語を否定していかざるを得ません。そのような屈折の中で、自分は何者なのか見えなくなっていく。それは自己喪失の危機であると思います。

アイヌの北原さんのお話の中にもありますが、「親はウタリ会に行くけれども、子どもは自分のことをアイヌと思っていない子も多い」とありました。また、中国引き揚げ者である任璞さんのお話にもありましたが、任璞さんは、今日では日本名を名乗っておりますが、「中国の国籍だと差別があるから、将来のことを思って帰化した。人並みに日本人みたいに、普通の人として生きていくのかなと思って」。そして、いま学校では、中国人であることを隠していると言っています。

外国人が日本名を名乗ることを単に便宜上と見るのは誤りであると思います。その背後には、「同化か、さもなくば追放」という日本の権力構造が力として働いています。先ほど「病理」と申しましたが、他者を抑圧している者が、全くみずからの足元に無頓着であるということ。自覚がないので、みずからが抱え込む鬱憤やもどかしさを今日でも、順次下へ下へと譲り渡していくという、ねじれた社会状況に、もうそろそろ危機感を持たなくてはならないのではと思います。

今日、学校の中で噴き出しているいじめの問題は、まさにその病理の投影であると思います。なぜ、違いをかけがえのない個性としてとらえることができないのでしょうか。国際化社会、ボーダレスの時代と言いながら、なぜ違いと共生できないのか。痛ましいとさ

え思います。日本は今日、国際貢献を声高らかに叫んでいるのですから、まずは日本の中のマイノリティを差別する、抑圧するという秩序づけの工作から、みずからを解放していかなくてはならないと思います。

(李 喜 奉)

- いまの話の一番初めにありました、「我が娘のパニック」の状況について、少し話をしてください。しばらく学校へ行ってないんですね。

李 そうです。

次女は、ここ20日間余り、登校拒否しております。いじめのまっただ中にはまり込んで、息絶え絶えの状態であります。本人が申しますのは、傍若無人に、人の足を踏んでかまわない、弱い者をいじめてもかまわないというクラスの状態に我慢がならないということで、随分以前よりレジスタンスをしていたということですが、それを周りの子どもたちから「あなたは意識しすぎる、皆がおもしろ半分で喜んでいるものを問題であると言うのはおかしい、うつとうしい」というように言われて、全くクラスの中で支持を得られず、潰れてしまったのだと思います。

- どういうふうにいじめられたんですか。北原さんも同じように、「あなたはアイヌであることを意識するから、アイヌ、アイヌというふうにいじめられるんだ」と言わっていましたよね。喜奉さんもいま同じような事情をお話ししてくださったんですが、周りの子どもたちはどうしてそういうふうになるのだと思いますか？

李 中学校に入学以来、佳林は、周りとの悶着が絶えなかったんですね。周りの子どもたちは、「君は日本人と変わらない。僕から見たら日本人である。君さえ日本人であると思ってくれるなら、みんな12歳、13歳の女の子として普通に仲良くできるんだ」というように言うのですけれどもそれは到底承服できないということで、そこに佳林のもがきがあったと思います。

佳林の違いを認めない子どもたちは、一方で、クラスの中に在籍する難聴児に対しても、違いをからかう、いじめることをするわけです。クラスの中に、さまざまな形でいじめが起伏しているのですけれど、娘は、その一つ一つのことを見逃すことができない。そこに割って入っていくわけですね。それに対してリアクションが起こるのでした。

そうこうしているうちに、その子どもたちのなかに力の序列がで
きていきますね。それにたじろぐ傷つく子どもたちは大勢いるわけ
ですが誰も立ち上がらない。佳林はそういう中で、我慢がならない、
おかしいじゃないか、やめてもらいたいとアクションを起こすわけ
です。それに対して、最近、力の強い子どもたちが、徒党を組むよ
うに、いじめをやってきたということがあったようです。それで佳
林は、「私にはたった一人の味方もいない。担任教師さえも私の理
解者にはならない。私は八方塞がりだ」ということで、学校に行か
れなくなってしまいました。

やる側もまた、実はもどかしさや葛藤を抱えているのですが、そ
のはけ口をマイノリティに吐き出していくという悪循環があると思
います。

学校は子どもたちをどう励ませるか

これまで証言を聞いて、幾つか改めて確認させられたことがあります。1つは、外国人の子どもたち、家族も含めて、その多くが学校は子どもたちをどう励ませるかいまなお学校以前の段階に置かれているということです。生活に脅かされている、そしてそれ以上に地域の中で存在そのものが奪われている実態が改めて確認されたような気がします。

それと同時に、多くの人たちの証言に共通してあったことですが、死と向き合わされるという、命の一本の糸でつながっているという、待ったなしの状態に子どもたちが置かれているということが、本当に深刻なまでに感じさせられました。

そうした危うい生活基盤を背景に子どもたちはいま学校の中に投
げ出されているわけですが、今度は学校でいわゆる教育以前の段階
に子どもたちが置かれていくということが、証言から浮き彫りにさ
れたように思います。いわゆる無権利状態の中に子どもたちがいる
わけです。たとえば高等学校の進学をとっても、一部の自治体の中国
から来た子どもたちに対する特別な手当て以外は、全く進路保障と
いう側面からは何ら保障されていない実態があります。教育の機会
均等が憲法でうたわれていながら、多くの外国人の子どもたちは、
日本に来たものの、というなかで大きな壁に直面させられ将来に不

安を抱き、言葉や文化の違いを理由に二次的、三次的進路選択を迫られているのです。

進路と同時に、外国人の子どもたちの学習要求に学校は全く何ら機能していない実態があります。先ほど小沢先生の「学習語」という言葉もございましたが、子どもたちが求めているのは単なる技術的な日本語だけではありません。学校のさまざまな勉強も含めて、子どもたちの学習要求はさまざまな領域にわたっているわけですけれども、それに応えるものとして、学校は全く機能してないのです。

それは行政の姿勢の中に如実にあらわれているわけです。10年ほど前、私ども教育行政と話し合いをしたときに、教育行政の幹部がこんなことを言っているんですね。「日本の義務教育は日本語ができることを前提としている。日本語ができない子どもたちは日本の義務教育の保障の範疇にはない」ということまで公言しているわけです。いまはそんなことは言えない状態にはあるけれども、そこに流れているものというのは、いまなお脈々と教育行政あるいは学校現場の中にあるのではないかという感じがします。

一昨年、昨年と、文部省が、外国から来た子どもたちの指導のために教員を特別に増やしていくという制度を設けているわけですけれども、私ども現場にいると、実際それがどう使われているかというと、ほとんどが流用されているんですね。わずかな子どもたちのために使うよりは、全体の子どもたちの生活指導であったり、あるいは受験学習強化の指導であったり、そういうことのために、実質上流用する形でやっていくという形がほとんどで、何ら、本来の趣旨は機能しない現場が、数多くあるように思います。もちろんそれは、子どもたちをどうとらえ、何をどう教えていくのか、ということが何も示されていないということによることもあります。否定できません。また、たとえば日本語教科書を文部省はつくったけれども、それを、有償でもそれでいいんだというような発想に見られるように、外国から来た子どもたちの教育は、いわゆる日本の教育の本筋から離れた、付帯物としての認識でしかない現実があるような感じがします。

日本語教室にしても、行政は日本語を教えることが必要だというコンセンサスによく達しているけれども、その日本語教室でも、たとえば、ひとつの市の中の子どもたちをどこかの学校に集めていくような、いわゆる地域の学校から子どもたちを離していくようなことで、子どもたちの日本語の学習の場を保障していくような発想が、

子どもたちを追い込む形に、一方でいっているのではないかという感じがします。

同時に、では、そうした制度や受け入れ体制が整えば、それで果して子どもたちは希望を持って学校生活が送れるのかというと、またそこで大きな壁があるような感じがします。東京では、先ほど申し上げたように、高等学校あたりでも受け入れ制度が全国的には先駆的なところですけれども、そんなに進んでいる東京の、たとえば高等学校受け入れ校が十何校あるわけですけれども、そこでどんなことがいま起こっているかというと、非常に残念なんですけれども、日本の学校と外国人の子どもが緊張、あるいは対立の構図が逆に浮き彫りにされていくような形で、高等学校の外国から来た子たちの受け入れ枠が機能してしまっているんです。

高校の先生の話の中にこんなことがあるわけです。「中国から来た子どもたちの教育は低学力対策である」あるいはもっと深刻な問題は、治安対策として、警察権力を含めて、学校がその子たちを見てしまっている。そして、「子どもたちにとって必要なのは適応指導である」ということをはばからない教育現場がいまなお根強い感じがします。そうしたときに、先ほど小沢先生のお話にあったように、同化と排除の機能が、いわゆる制度という形で逆に、公然と中国から来た子たちに迫っていく方向に学校が働いているのかなという感じがします。

いわゆる進路保障というのは、子どもたちが本当にこれからどうやって生きていくか、その生き方を励ます場を用意することでなければならないわけですけれども、全くそれとはかけ離れたところで実際の現場があるという感じがします。

私は、中国から来た子どもたちの日本語学級に長く携っていました。中国の子どもたちは、言葉あるいは学校の勉強を、当然求めており、それに応えることで子どもたちも非常に元気になっていくわけですけれども、それ以上に、子どもたちが辛いこと、苦しいことをたくさん抱えながらも、場面、場面で非常に開き切った輝きを見せる場面がたくさんありました。それは中国から来た子どもたちが中国の文化を日本の子たちに発表したり、あるいは中国語で仲間と語り合う場面であるわけですが、そういう子たちの輝きに、私たちが励まされていくということがたくさんありました。私たち教師は、理屈ぬきにそういうところから子どもたちとの接点をまず

持っていくべきじゃないのかという、一つの経験から来る感想があります。

どうしても、ハンディキャップを持っている子どもたちを励まさなければいけない。「頑張りなさい」、先ほどのお話の中にあったように、「我慢しなさい」ということで、日本の学校、日本の教育に引っ張り上げることに学校教育が必死になるような場面がどうしてもあるわけですけれども、もう一步そこで立ち止まって、子どもたちの願い、子どもたちの悩み、あるいは苦しみのところに、学校が、教師が、まず立つことから始めなければならないのかなということを自分の経験と証言の中から改めて感じます。

証言の中にもあったように、外国から来た子どもたちにとって、私たち日本の学校の教師、あるいは学校は、日本に来て初めての日本人であり、日本そのものであるんです。

子どもたちは、私たちが予想する以上に、かなり深いところで私たちをみているんですね。どうしても私たちは大上段に、中国あるいは朝鮮、あるいはアジアということの歴史的な事実とかということで、大きなところから子どもたちを見てしまうけれども、逆に子どもたちの側は、ありのままの自分をしっかり受け止めてほしいという、子どもたちの純粋な願いがこの証言の中にもいっぱいあって、私たちが立つべきところを逆に示されたのかなという感じがしています。

学校が子どもたちを排除する形で機能する前に、子どもたちを守る場所として、学校が立たなければいけないのかなという感じと同時に、教師自身が、この子どもたちから励まされる部分を大切にしていくような教育を、これから少しずつ切り開いていきたいなということを、強く感じました。

私たちの仲間の教師が子どもたちとの関係をうまく結べずに悩んでいたときに、ある中国の子どもが、こうその教師に声をかけました。「先生、中国人好きですか」。私は、これは多くの外国人の子どもたちの願いの凝縮されたことばだと思うんです。好きになること、このスタンスに私たちがまず立たなければいけないと思うんです。

(岩田 忠)

- 子どもたちがりのままの自分を受け入れてほしいと、先生や学校に願っているという話がありましたね。ありのままの自分として子どもたちを受け入れるというのは、具体的にはどうすること

なのでしょうね。その延長線上に、中国の引き揚げの子どもは中国の文化を、歌でも、太鼓でもやったときには目を輝かせたというふうに言わましたが、子どもたちが目を輝かせるのはどういう場面なのでしょうか。

岩田 その好きになるためには、まず知らなければいけないわけですが、そこに実は大きな壁があるようです。私自身が、子どもたちの姿や親の姿を見たときに突き付けられたのが、子どもたちとの出会いの私たちの最初でした。いわゆる歴史的な経緯も当然なんですけれども、中国から来た人たちの生活実態、あるいは中国で生活していた生活習慣であったり、中国人のものの考え方を含めて、いわゆる人間そのものを私たちが受け入れる回路を、実は私たちは身につけてないし、教わってないし、教育を受けていないということが、子どもたちと出会うときに、ゆがんだものとして子どもたちを見てしまっているなということがあります。

たとえば、子どもが何をして中国で遊んでいたのか、どんなものを食べていたのか、そんな単純な生活の基礎でさえ、実は私たちは知らされていない。と同時に、日本に来てからの厳しい生活実態でも、本当に家に行って親と何十回と会って話して初めて、親が、私たちに「いや、先生、大変なんだ」という話を話される機会が多いんです。子どもたちと、あるいは親との接点が実は、教師という地位とか、学校というものの中に、逆に閉ざされてしまっているのかなという感じがして、やはり我々が身につけさせられた殻を取って子どもたちの中に入っていく中で、子どもたちの姿を、生身の姿をきちんと受け止めるような回路を持たなければいけないのかなという感じがしました。

●子どもや親たちの生活してきた歩みというものを、教師の側がていねいに聞いていくことが、子どもを受け入れるということの第一歩になるわけですね。

岩田 そうですね。

それから、子どもを知るというとき、子どもたちの日本に来てからの変容は大きなカギになると思います。

子どもたちが悩む大きな壁、日本に来てからの子どもたちの変容の1つに、親とのあらがいが避けられない形で出てきているんです。日本に来て、父親、母親はなかなか仕事がみつからない。どうしても家庭の中でイライラする。ストレスがたまったり、あるいは親の

方は中国人ですから望郷の念もさらに強くなってくる中で、親自身の中の葛藤が子どもに投影されて、中国では信頼できる親であったのが、日本に来てから非常に歪んだ像としての親が映り、また親自身が日本の生活実態も知らないわけですから、子どもに目をかけられない、日本の社会の生き方を子どもに示せないという中で、親を否定していくような子どもたちが出てくる。その子どもたちにどう私たちが向き合い、あるいはそれを克服させていくかといふことが、私たちの日常の中で大きな課題として今でもあります。

マジョリティが変わる可能性

私がとくにこの問題に関わるようになったのは、比較的新しく、日本に入ってきた外国人の相談などを受けるようになったことがきっかけでした。今までいろいろな方々の話を伺ってきた間、非常に気になったことは、「日本人」という言葉が、たとえば「いじめられる」「差別される」という対象としては出てくるけれども、そこから一歩進んで「ともに何かをやっていきましょう」という相手としてはでてきづらいということです。

日本の子どもたちは、いつごろから異なる民族の子どもたちをいじめたり、差別するのだろうという話を以前にしましたが、その時、就学以前にはあまり聞かれなかったという記憶があります。それは、小さい子どもたちは「異なる」ことがわからないから、というわけでもなさそうです。幼稚園や保育園からの報告では、発語以前の段階、0才児であっても、民族の違う子どもたちが何人かいると固まるといいます。食べ物や育てられ方などそのようなところからくる違いをなんとなく肌で感じているのかもしれません。それから、少し成長するとその違いは、たとえば、リズム感や体の動かし方などにはっきり現れてくる。ただ、まわりの子は、違うことに対してそれが悪いんだという認識はない。ある時は日本の子どもたちが圧倒されて日本の子どもたちがマイノリティになってしまい、ということも聞きました。違いが排除の理由になっていくのは、幼稚園から小学校にあがるころからかもしれません。子どもたちで仲間をつくりたり、言葉がだいぶ話せるようになると、何が悪いというわけでは

なくて、「〇〇人」という言い合いをして、言われている方がそれをだんだんいやだと思うようになる過程がある。これにマイナスのイメージがついていくのでしょう。さらに、「学校教育」の中で子どもたちは日本の社会や親の考え方を受け継いで行く。自分とは異なった者に対して、いじめだとか排除や同化をする。皆さんのお話の中でも、それが年齢が上がるに従って目に見えないような形でエスカレートしているような印象を受けました。それは、何よりも私たち大人の作っている社会を子どもたちが具現化していく過程を示しているように感じて恐くなりました。

外国人の相談を受けている中で、真夜中に、「電話が壊れたからなんとかして欲しい」と頼まれたことがあります。ある日本語のボランティアでかかわっていた人から、(その方は遠方に住んでおられたのですが) 電話で「ガスの元栓がしまっているかどうか見て欲しい」と頼まれたという話を聞きました。その時に気になったのは、お隣の人、あるいは近くの日本人たちは彼らをどのように見ているのかということです。もし、少しでも近所づきあいがあれば、もし、地域の中で彼らがカウントされていれば、地域で解決できたり支えていける問題はもっとあるのではないかと思うのです。

とくにニューカマーの人たちは、仕事に追われている人も多くて、なかなか地域の人々に顔を合わせることが少ない。まわりの日本人たちは、どうも「いる」ようだ、何か自分たちと文化や生活習慣が違うようだ、という位置づけをする。よくわからないから、恐いとか、危ないとか、怪しいといった見方がでてくる。そこで危惧されるのは、何か起こったときに多分まっ先に流言蜚語の対象にされたり、スケープゴートとして攻撃されるのではないだろうか、ということです。それは、歴史を振り返って、今まで日本の中で異民族として暮らしてきた人々が遭遇してきたことと重なってくるだろうという気がします。

それでは私たちが彼らを受け入れていくチャンスがあるのかということについて、いくつかのことを考えてみました。

一つは、来日した外国人たちも、年を重ねるに従って日本に基盤をもって生活し始めているということです。つまり、結婚したり子どもが生まれたり、あるいは家族をよびよせたりするわけです。そ

の中で、子どもという共通性がある場合、親にとっては、日本の社会、日本の親たちを通して日本の社会に参加できるきっかけとなるはずです。

とくに幼児教育の時点で、保育園とか幼稚園という地域的にも限定されているし生活レベルで話ができる所で、親同志で、女性同志で出会える可能性があるのではないか。ある保健所では外国籍のお母さんたちのグループを作る取り組みをしました。日本に来ている、同国の花嫁さんたちであっても、地域では孤立していることが多い。保健所という共通の場を通して初めてこんなに近くに住んでいるの、という出会いがあったと聞いています。子育てをしていくという所で今まででは孤立状態であった外国人女性たちが、同じ問題を抱えているのだということを知って、赤ちゃんという共通点に立って自主的なグループ作りへと発展していったという、よい例ですが。

ただ、実際は女性であるということや、言葉ができないからと、お母さんたちが積極的にかかわらない状況もあるように思います。とくにアジアなどでは男女の力関係も強くて、女性はマイノリティの中のマイノリティとして、まだまだ地域に出かけていけない。そう考えると、同じ幼稚園などに子どもを持つ日本人の女性、親たちがどのような意識をもって彼らを位置づけていくかは大きな課題だと思います。ある保育園で、子どもを通して地域でその親と接しているはずであるのに、親に直接ものが言えないために保育園の先生を通してその親に子どものことを注意してもらっている、と聞きましたが、これはなにか象徴的な感じがしました。

次に、学校段階で親同志が出会えるのか、というと、これは非常に難しくなってくる。学校は保育園や幼稚園といった具体的な生活よりも抽象化され記号化された事柄の習得が評価されるところであるし、親もそれを意識すると思います。学校の敷居がとても高くなるわけです。学校に呼び出されるという時、良い意味にはとられないのでしょう。親は学校には足を運ばないようになってしまふ。これは、学校側なり P T A などがよほど意識して積極的に取り組まないとならない課題だと思います。

二つ目には、いま外国人がたくさん日本に暮らしていると言われている中で、日本人が日本語教育を通して外国人にボランティアと

して関わる機会が増えていることがあります。たとえば関東の方では地域で日本語教授法の講座などをくむと、たとえば100人位の定員の所に300人、400人と主婦のボランティアの申し込みがあるそうです。逆にたとえば「地域の外国人が抱える問題について話しましょう」という講座に対しては、20人、30人という枠内の人しか集まらないと聞きました。今、地域の中の主婦が中心となっている日本語ボランティアは、外国人に日本語を教えるという、スマートで響きの良いものに映っているようです。それは入り口としては広くて、入りやすいのですが、日本語を通して関わったその後に、日本人がどのように変わっていけるのかというのが一つの機会となるのではないでしょうか。

神奈川県にインドネシア定住難民の日本語ボランティアから始まった「葦の会」というグループがあります。このグループは日本語を教えるということから始まって、人間関係ができていった中で、たとえば、付き添いで予防接種を受けにいったが親が問診表をかかなかつたために子どもが熱を出す。これはボランティアの責任として負いかねない命に関わる問題だ、ということで母国語の問診表の設置運動をするのです。相模原市では全国に先駆けてこれが設置されます。それから、就学案内。学齢を過ぎた子どもが家にいるのを見て驚くわけです。どれもこれはおかしい、彼らがこういうサービスが言葉の問題で受けられない、外国人だから受けられないというのはおかしい、と日本人が気づいていく機会に発展していく。それは、日本人が彼らに関わって人間関係ができるって、そこから相手の問題をいかに考え、いかに日本社会（日本人）の問題であると考えていかれるかということだと思うのです。また、それが、N G Oといわれている民間団体やボランティアという、一般市民にとっては広い窓口から入っていった場合にどのように変わられるのかということが問題だと思います。

そして、最後にもう一つだけ言いたいのは、自分たちとは異なる者に関わっていく時に、初めは興味や好奇心、困っているから助けようというところから入っていった人々が、その後たとえば力関係が自分たちと対等になっていったときにどのように位置づけをしていくかということが私たちに問われていると思うのです。一緒にやっていく、共存するというときに、もう一度私たちがマジョリティ社会の方を再考察する作業が必要ではないでしょうか。たとえば「差

別」ということもそうですが、差別する側がそれをどのように定義していくことができるのか、その必要性を感じます。同じ住民として何に接点を見いだしていけるのか、その努力を私たちができるのかということが一番問われている問題ではないか、と非常に感じました。

(榎井 縁)

国民の論理・住民の論理

——アジア共同体づくりの視野のもとで

私は5人の方のお話を聞いてあらためて日本社会がもっている。他民族に対して同化を強いる体質というものを実感させられました。これまで部分的には聞いたことがありましたが、こうして、まとめうかがったのは初めてです。その意味で、小沢先生が言わされたこと、李さんが言わされたことについて同感です。そのうえのことですが、ていねいな議論が必要だなと思いました。「民族共生の教育」について、スローガンとして全く賛成なんです。しかし、それを具体的にどういうふうに実践していくかと考えたときに、もう少し複雑になるんじゃないかなという気がしています。

いわゆる社会教育というところで現場とタッチしたりしながらものを考えたりしていますと、権利論レベルで、「住民」という論理を前に出すことによってかなりいろんなことができるという感じがあるのです。

さっき榎井さんも言っていたように、日本語ボランティアのこと、そこに落とし穴があるからやらないようにしようというのではなく、できるだけその可能性を生かす努力は必要なんじゃないか。そのなかで「おとし穴」も克服してゆけないだろうか、と思うのです。そういうことは保健所や保育園、病院など、さまざまなところにあります。何も公民館などの文部省系統の施設だけではなくて。そういう可能性を追求している自治体の職員もまたいる。いくつかの自治体は、「外国人教育方針」を、実際にそれがどこまで機能しているかどうかは別として、持っている。

そういう努力をどういうふうにつなぐか。そう考えたとき、教育についての権利論レベルは、学習権論の蓄積とどうつないでいくか

外国籍住民の人権実現と地方自治法の積極的解釈

ということが大問題となります。従来ずっとやってきた「国民の学習権」論に、決して外国人の学習権を排除しようという意図があつたのでないことは明白です。しかし、外国人の学習権を積極的に論理として組み込むことにはなってこなかったのも、事実だろうと思います。

ところが、私たちは「国民の学習権」という言葉も使ってきたけれども、それと同じくらいに、あるいは具体的な実践の場面では「住民の学習権」という言葉の方を積極的に使ってきました。「住民」というのは、地方自治法の規定では国籍と関係のある規定ではありません。もちろん日本国憲法の国民ということが論理的に言えば外国人を排除しているとは言えなくて、憲法草案では外国人の権利ということが明記されていたといふいきさつもあります。しかしそれに加えて、実務的レベルというか実践的レベルで考えたときに、地方自治法の「住民」という規定はすごく大事な規定だと思うんです。そこでは少なくとも、選挙権の問題、公務員の採用などを除いて、自治体のサービスを享受するという意味では、国籍とは関係なく「市町村の区域内に住所を有するもの」はすべての人が「住民」となるとされている。自治体はそのようにしなきゃならないということになっている。そういうことをもっともっとていねいに解釈し、運用方法も工夫し、その経験を総括するという作業が大事なんじゃないかと私は思います。

学校における教師と生徒の出会い、生徒同士の出会い、あるいは父母と教師との出会いの大切さが提起されていたと思いますが、それをもっと地域という生活空間の中での共同のとりくみの一つとして位置づけてゆけないのかと思います。「地域」自体は簡単に「これが地域」というのではなくて重層的につかまえる必要があると思いますが、生活空間としての地域の中でのそれぞれの取り組みの共同化が大事なんじゃないか。つまり、学校の中では非常に通りにくいことでも、コミュニティだったら通りやすいという場合もあるし、あるいはコミュニティだったら通りにくいけど学校だったら通りやすいということもある。

そこはもっと積極的に相互に入り組んでやっていく方向をうちだすべきじゃないかという気がします。

それを考えるにつけても具体的な個人と個人の出会いの意味をあ

差別克服のエネルギーとしての具体的な出会い——その場としての「地域」

らためて感じました。さっき岩田さんも「制度は大事だけど制度だけではない」とおっしゃられたが、やっぱり具体的な個人と個人の出会いというものが持つ意味をもっと大事にしていかないと、差別を克服するエネルギーは出てこないんじゃないかな。

この5人の話の中でも、これは重要な論点だと思ったのは、夫と妻の関係という問題です。李さんの子どもさんのことについてのエネルギーもそうですよね。一世である自分の両親の、非常に辛い状況、娘の立場から見るとかなりきつい状況があった。そしてそれをこえてゆこうとする自分と夫との恋愛・結婚。たぶんこれがなければ娘のことにそんなにエネルギーは出てこないんじゃないかなという気がする。北原さんの場合も典型的にそのことは出ていた。シャモである夫とアイヌである彼女とは、最初は夫の側がファインダーを通してだったでしょうけど、彼女のにある美しさを見、そして北原さんもそういう自分をきちんと受けとめてくれる夫と一緒に生きていこうと思った。それが息子や他のアイヌの子たちのことによりくむエネルギーになっているんじゃないかな。豊住マルシアさんのところは具体的に聞かなかつたけど、きっとそういうことがあるんじゃないかなと、推測するんです。夫は日本人で、彼女は日系ブラジル人二世ですよね。

もうひとつは友だちです。北原さんの息子さんが、中学のときは排除されたけれども、高校の柔道友だちが、息子さんがアイヌ文化についてユーカラを語ることなどに対して、共感を持って自分もやりたいと思う。頭で「アイヌの文化を尊重しなきゃいけない」と彼の友だちが考えた面もあるだろうけど、自分の友だちが好きで、その友だちが好きなことに興味を持つ経路が中心なんだろうと思います。そういうのがマルシアさんの話の中でも少し出していた。3月末の8つくらいの民族の子が集まった合同キャンプで、そこではそれみんな、中国人であっていいし、ブラジル人であっていいし、ペルー人であっていいし、韓国人であっていい。それが当然だった。そういう中に、一つのマイノリティグループとして日本人もいる。そこで具体的な出会いがあって、そこは名前も全部自分の名前だし、日本名を持っている中国人の若者たちも、実は中国名はこうなんだと言える。そしてまた、韓国人や中国人の子たちが韓国人・朝鮮人の運動をふまえて話をしていく。そして友だちになってゆく。そういう広がりを実践的につくっていく芽が出ていたように思うんで

す。

そのことと同時に、そういう出会いを支える「常識」の変化もあるように感じました。この間、岩田さんがおっしゃっていた。「今度移った学校の中で、わりとサラッと日本人の子が中国人の子に『これはどうなの?』と聞く。それは単にものめずらしさだけでもないような感じがする」と。ここにいるすべての人たちや実践家・研究者、ごく一般的な市民の努力、そして、マスコミで働く人々の努力などによって、この間、日本の常識も変わり始めた。一人ひとりの常識も変わり始めている。もちろんそれが大局を動かすところまでは到底いっていないし、下手をするとファンションで流れる危険性もある。しかし、その常識の変化が具体的な出会いを促進しているのも事実だと思います。大きいんじゃないかなとおもいます。

3番目に、そういうことを考えた場合に、近代「国民国家」とか近代「国民教育」というものをトータルにもう1回見直す目を意識的に持つ必要があるんじゃないかと私は思います。これにはおそらく異論ができる、あるいは「おまえはわかっていない」と批判されると思いますが、あえて言ってみたいと思います。

国民国家がスタートして、国民教育というものが明治10年代半ばくらいにスタートする。そのプロセスで同化政策がとられていくわけですが、同化されていったのは少数民族だけだったのかどうかという問題を考えてみたい。同化というのは民族的同化だけなのかどうかということですね。

さっき「女同士のつながりが難しい」という話が出たけれども、実は同化させられ排除させられてきたという意味で言えば、女人も典型的な同化と排除の中にあったのではないか。たとえば、これは個人的なことですが、私の父親は、私が子どもの頃は母親によく「女のくせに」と言っていた。「女のくせに」、そこでおしまいですよ。今でも、「父兄会」とかいう言葉が現実にはまだ残っています。その「父兄会」とか「父兄の皆様」という言葉を使うのは、当のお母さんたちなんですね。ちょっとかしこまると、「ご父兄の皆様」なんて平気で使う。女人もまた、同化と排除の中に、この100年少し、やはりあったと思うんですね。それはある意味では、江戸時代の古さを引き継ぎながら、もっと過酷になった面もあると思います。母親としての素直な感情、たとえば「子どもは殺したくない」。

「ポスト国民教育」の模索——「民族共生の教育」の具体像

それは軍国の母として泣いてはいけない、喜ばなきやいけないという感性を、少なくとも表向きは持たなければいけない。

農民とか「地方」もそうですよね。「なんだ田舎者のくせに」と言えば、それはそこでおしまいですよね。そして男も、「男は涙を見せちゃいけない」とか「笑っちゃいけない」とか。そういうようなこともどうだったのだろうか。

つまり、「日本人」というものに同化することだったのだと思いますが、その「日本人」というものは、当の日本国籍を持っている日本の民衆が既にそうあった日本人とは限らない。むしろ、実態としては別の日本人であったんだけれども、国家にとってあるべき「日本人」にならなければいけない。そこにむかって女も男も子どもも同化させられてきたという面もある。民族が違うと、国家的なバックグランドの違いということがとくに朝鮮人の場合にあり、しかも日本より古く、江戸時代まで日本より文化的に上とされてきたから、抵抗も大きかった。だから民族の場合は一番過酷な同化政策がとられることになった。そういう文脈の中で朝鮮人の女の人は朝鮮人という面と女性という面と二重の同化・排除の圧力が加わったように思われるのです。

そうすると、「民族共生の教育」という場合に、女同士がつながれるかどうかが、大きなカギの一つになる。女同士がつながらなきやいけない。母親同士がつながれるはず。しかし女人もまた専業主婦という弱い立場、職場の中でも弱い立場にいたりすると、なかなかそうかんたんにはいかない。夫は学歴があまり高くなくて収入も多くない。息子は学歴を高くして収入を多く得てもらわなきや困るという意識をもっている場合が少なくない。そのことは否定できない。そうすると、学校の成績が関心の中心にいって、そこから今度は母親が「○○ちゃんは○○人じゃない」という排除の言葉を発するという構造があるような気がするんです。李さんの話の中でも、塾通いでストレスのたまっている日本人の子がいじめるとか、そういう話が多かったですよね。

だから「民族共生の教育」というスローガンを掲げること自体にはすごく共感をするのですが、実践的にやっていくとなるとたとえば「男女共生の教育」との重ねあわせをふくめて、もう少し複雑になるのではないでしょうか。

最後にこういうことは、近隣でも、日本だけでなく、台湾でも、住民の論理を軸とした韓国でも問題としては出始めている。だから日本だけの問題として、それからすぐアメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアと飛ぶのではなく、その視野を広げ深めつつも、もう少し隣近所の国々とこの問題について一緒に考えていくこともまた必要なことではないか。それぞれの国民国家・国民教育はそうかんたんにはなくならない。だからそれぞれの国民国家・国民教育を、外国籍住民や日本籍でも民族的背景の異なる人々の学習権をきちんと位置づけた住民の学習権を軸に弾力化してゆく努力をすすめる。それは「ポスト国民教育」の模索といってよいと思います。そして、そういうことを一つの軸にして、韓国・台湾など同様の課題をかかえている国々の人たちと共に感・連帯が広がっていったときに、日本の国民教育というのもも近隣の国々の国民教育とともに徐々に次の段階にいけるのでしょうか。民族的マイノリティの学習権を軸にした「アジア学習権共同体」「アジア太平洋学習権共同体」の可能性ということを感じています。

(笹川 孝一)

住民の論理を軸とした「アジア学習権共同体」の可能性——
ポスト国民教育の模索

討 論

小沢 笹川さんの話のおわりの方のところ、日本人への同化、日本の国民教育というものは日本に住む人間を全部国家イデオロギーに同化する、それがもとにあるのではないかというのは、そのとおりなんですよ。つまり、日本の学校というのは国家イデオロギーに子どもたちを同化していく、その同化された子どもが今度はまた他民族の子どもを日本人と見ていくような同化の見方を持っていくというつながりになっていくわけですからね、それはおっしゃるとおりなんですよ。そういう論議が大事な観点なんですね。

ちょっと補足してほしいのは、住民の論理に立つとどういうことができるのか、どうして住民の論理に立つとそういうことができるのか、その点についてもう少しお話をしてください。

笹川 さっき「葦の会」の話が出たので、それと多少重なるような例を一つあげますと、「S A Yの会」というのが厚木にあるんです。日本語を教えるグループで、文法面とか語彙とか、かなり細かくやってきたグループですが、この2月末に「外国人の暮らしと言葉を考

えるシンポジウム」を開いた。そこには8カ国くらいの外国人たち、日本語を教えている日本人も来て、仕事のこと、病気のこと、お医者さんのこと、言葉のこと、子どもの学校のこと、住宅のこと、さまざまな生活問題を出して、その中で、言葉というものはどういう意味を持つのだろうか、というふうに議論した。そうすると言葉を学ぶことの手助けは、生活の現実をぬきにできないということが見えてくる。もちろん言葉の論理はあるけれど、生活との関係を抜きにした言葉の論理というものもないんじゃないかなとなってくる。そこで出てくるのはいわば生活者の論理なんです。つまり、外国人は具体的に何で困っているのか、どういう手助けが欲しいのか、それに対して日本人は何をしてあげられるのか、何はできないのか、何を制度問題としてとりくんでいかなきゃいけないのか。そしてまたそういうプロセスを通じて、これも一様ではないにしても、日本人である自分は何がわかったのか、何がおもしろいのか。そして外国人といつても、外国人同士がそこでたくさん接するわけですから、言葉の壁がまた外国人同士でもあります、中国人やブラジル人・カンボジア人などの違いや共通点もまたそこで発見していく。

そういう中で、ぜひこういうところには弁護士さんとお医者さんと不動産屋さんに同席してほしいという希望もでてくる。

そういう動きは、少しずつですけど、最初は日本語を教えるということだけでスタートしたグループではあるけれども、かなり広がりを持ってきている。この集まりは、県の外郭団体である神奈川県の社会福祉協議会が後援している。

こういう生活者の論理が「住民の論理」と言えると思います。「住民」というものを生活者レベルでとらえて、具体的にその生活がよくなるために援助をしていくというのが地方自治法の本来の精神の一つだろうと思います。国家の論理はインテグレーションの論理だと思うんですね。全体として統括して一つの集団としてまとめていく。それが、今まで少なくとも国家の論理だった。それに対して、住民の論理というのは、具体的な生活の事実からスタートして何が必要であるのか、そして制度としてはどうなるのか、国家はどうあるべきなのかというところに積み上げていく。そういう違いがあるんじゃないかなという気がしてます。

小沢 それが地域の中の共同の取り組みとしてあるわけでしょう。その共同の取り組みというのは、誰が声を一番初めに出して、誰が

組織するものなんですか。それはニューカマーの人たちなのか、日本人なのか。日本人であれば、どういう人たちが声を出してこれを組織していくのか。片方で、声をかけている日本人がいるわけですが、声をかけられない日本人もいっぱいいるわけですよ。

笹川 一つの特徴としては、外国生活の体験のある人が多い。アメリカで生活をしていた、オーストラリアで生活をしていた。夫が商社員でいきなり行くことになった、そういうときに、行った先の国で、言葉をおしえてくれる場所があった。あるいは親切に声をかけてくれるその国の人たちがいる。そういう体験を持っている人たちが自分たちにも何かできることはないかと動き出すというのが、最近の一つ特徴としてあると思いますね。

もう一つは、自治体職員の中にそういう発想を持っている人たちが、必ずしも少なくない。たとえば具体的に言えば、川崎・中原市民館のSさんとかYさんという人は、「平和講座」で戦争と平和の問題で陸軍の登戸研究所の調査を歴教協の人たちの協力を得ながら、市民のとりくみとしておこなった。そこの担当職員です。その調査の中で、日本陸軍の歴史や朝鮮人の強制連行の歴史、そしてそこへの個々の日本人のかかわりなど、いろいろ出てくる。ずっと聞き取り証言をやっていくんですね。それが一つきっかけになって、いま身の周りにいる人たちにそれと同じようなことを繰り返してはいけないんじゃないかなと、中原市民館の日本語教室をスタートさせていった。

中原市民館では「日本語教室（識字教室）」と必ず入れています。それは、日本語を教えればいいということではなくて、一緒に生きていくためのお互いの自立のための場所であるという位置づけからです。それは市民の権利であるから、当然それは保障していくということでスタートさせていった。そしてその前提には、川崎での朝鮮人の運動の成果でもある「在日外国人教育方針」やそれにもとづく「ふれあい館」の活動などもある。また「ふれあい館」のHさんたちと協力しあって、在日朝鮮人一世のハルモニたちとフィリピン人の「花嫁」さんやブラジル人たちも含めて、経験交流をする「識字のつどい」を開いたりもしてきています。こういうSさんやYさんのような職員たちも結構いますね。

李 笹川さんのお話を聞いていて疑問に思うことがあります。「住民の学習権」論を巻き起こすといつても、そこにマイノリティ

の人権、社会教育権を視野にいれていくというのはたやすいことではないと思います。具体的に言えば、私が横浜市緑区で生涯教育講座の委員として応募したときに、「あなたは通名をもっているはずである。通名を使ってもらいたい」と言わされました。

小沢 それは教育委員会ですか。

李 区民館の生涯教育講座の代表に言わされたんです。その人も応募した人ですが、私と違って嘱託を受けてチーフをやっているわけです。間接的には行政の側で、その方にはお給料が出るんだと思いますが。大変厳しいやり取りがありました。

それから、自治体のサービスは享受できるとおっしゃるけど、現実としては部分的にしか適用されていないということはわかっていますが。大変厳しいやり取りがありました。

笹川 享受できることに法律はなっているということを言っているんです。だからそこをもっと活用して、その法の解釈とか実際の運用などをすすめてゆく必要がある。

李 たとえば障害者手帳はくれませんね。これは訴訟を起こしていますね。それから、厚生年金の中途加入した在日に対する取り消しが行われています。もっと深刻なことがありますよ。たとえば、外国人登録法126というのがありますね。これは戦前より居住していた者たちが登録するナンバーです。この人たちにはかなりのものが享受されるのですが、そのとき朝鮮籍の人は依然として排除されているわけです。「韓国籍のみ」との規定が大半です。朝鮮籍は大勢おりますけれど、地方自治体でいまだに国民健康保険に加入させないところがあるんですよ。

日本の常識が変わり始めたとは感じています。少数ではありますが目覚めた意識で、日本人の問題としてとりくもうという日本人ができました。それは私たちもたいへん期待を持ってながめているところです。けれどもやはり「何がそれをもたらしたのか」を知つてもらいたいというのがあります。やはりこれは、非常に不遜な言い方であるかもしれないけれども、マイノリティのレジスタンスがあって、そのたたかいによって獲得されたものだと思います。

5人の人たちが報告したわけですが、それは本当に血を流すたたかいであったわけですね。口に出すのも堪えがたい、ぬぐい去ってしまいたい記憶をたぐり寄せて告発していく。それによって衝きうごかされて覚醒する意識で受けとめていく日本人がいたということ。

でも私の側から申し上げれば、もう気づいたのです、やはりこれからは日本人の側からノックしてほしい、アクションを起こしてほしいということが、私は願いとしてあるわけね。

それから、国民・国家の同化の論理について、日本は異民族だけを同化と排除の論理で縛りあげてきたわけではないと言われたわけですが、確かにそれは厳密に言えばそうなんですが、ここでは構造的暴力というものについての意識をきっちりはめ込んでもらいたいというのがあるわけです。というのは、外国籍の者に対して、制度として差別しているというのが現実です。

やはりまず制度において差別をなくしていただきたい。意識における差別の問題というのは、その先の問題とおもうんですが。

笹川 李さんが「住民の学習権」とか地方自治法の「住民」規定とかいっても、現実には保障されていないという事実が多く、あるんじゃないかと言われた。僕も実態としてそうだと思うんです。しかし、そうであるからこそ、地方自治法の「住民」規定というものをもっと意識的に位置づけていくことが必要なのではないかと思うのです。行政というものを変えるためには、法にのっとってきちんとつめていくことが必要だと思うんです。福祉事務所の職員とか保健所の保健婦さんとか、お医者さんとか。個人的には外国籍の人々、民族的背景の異なる人たちのためにしたいんだけど、上からの厚生省の通達などでバサバサ切られていっちゃう。それを何によって反撃していくかというときに、さっきのことが大事だと。

小沢 そこで笹川さんに希望したいのは、そういう地方自治法にかいてあることを実現させていく力はどこにあったのか。そのときに在日朝鮮人の歩みをていねいに見てほしいわけです。そこで彼らが何を一つ一つ問題提起してかちとってきたのか。その上に現在がある。つまり、たたかい取ったものである。地方自治法をていねいに解釈したから生まれてきたものじゃない。とくに在日朝鮮を中心にしてそれにつながる全国的な人たちが立ち上がって訴訟して、そのなかでもぎ取ってきたものですね。そこの経過をもう少しついでに、それを踏まえて議論してほしいですね。そういう注文でもあったと思う。

笹川 そういう意味で、マイノリティのレジスタンスがあって日本人が目覚めたのだというのは、私個人についてもそうだと思います。複雑な経過はありますが、それは私の一番弱いところ、勉強の

足らないところと思っています。

もう一つ、女性の問題。「構造的暴力として」という場合は、「『社会構造に埋めこまれた暴力』によって人間の自己実現の可能性が人為的に低くさせられる」というのが一つの重要な点だと思います。同時にそれらが複合的に連鎖としてある、というのがもう一つの大変な点だと思います。つまり、民族の問題とともに女性なら女性の問題をもふくめてそうなっていたというところが実は構造的暴力の問題点の一つだと思うんです。

さっき、制度による差別ではなくて意識の差別だと言ったけど、そうではなくて戦前の女性の地位も制度的に徹底的に排除されていたわけですね。選挙権、学校、親権、戸主の問題など、女性は制度的に排除されていた。たしかに少数民族、植民地支配をした民族の同化は「構造的暴力」として存在してきた。しかしながら、女性についても、「構造的暴力」として存在してきた。その複合したものはどういう形であったのかということをていねいに見ることが、エネルギーを結集していくときに大事なんじゃないか。そのときに、構造的暴力の複合ということを言うことによって在日朝鮮人問題を結果的に軽視したり、あまり勉強しなくてもわかったようなつもりになるという危険性があることを、私自身について感じはするのですが。

李 そこがはしょられていると思うわけです。

榎井 誰がイニシアティブをというところでもう一つだけ付け加えたいのですが、在日韓国・朝鮮の方々の歴史的な経緯と比べて、今のマイノリティに置かれている外国人は数的に非常に少ないということと、コミュニティとして組織ができにくいというなかで、自分たちの権利を自覚してかちとつていこうという力を持つまでには至っていないというのが現状です。そのちがいは押えておく必要があるのではないかでしょうか。

小沢 だからこそ在日朝鮮人の人たちともつながらなければいけないし、アイヌの人たちとも、支援する人たちともつながらなければいけないということですね。おたがいに。

III 資 料

(1) 日教組方針

1992年度運動の総括

1、憲法・教育基本法にもとづき、人権・平和・民主主義を確立し、国民合意の教育改革をすすめるとりくみ

3、「人権教育指針」「子どもの権利条約」を基本として、あらゆる差別に反対し、すべての子どもたちに教育を保障するとりくみ

(3) 在日外国人の子どもの教育保障は緊急の課題になっています。三重県教組の「国際教育協会」のとりくみをはじめ、各県では就学条件の整備、日本語教育などのとりくみもすすめられています。しかし、言葉も文化も異なる子どもたちの教育をすすめるためには、子どもや親の希望、進学・就職の問題、編入学年や滞在期間など、さらにきめ細かい調査ととりくみが重要です。引きつづき調査をすすめ課題と要求を整理する必要があります。

1993年度運動の方針

具体的な運動のすすめ方

1、憲法・教育基本法にもとづき、平和・人権・環境を守る民主教育の確立と、国民合意の教育改革をすすめるとりくみ

2、教育課程の編成権は学校にあることを基本に、平和・人権・環境を守る民主教育の創造のために自主編成運動にとりくみます。

② 文部省、県・地教委に対し、「同和教育」「障害児教育」「在日外国人教育」などの人権教育の視点にたった基本方針を作成するよう求めます。

(4) 民族差別をなくし、民族文化を尊重しながら、アイヌ民族、在日韓国・朝鮮人、外国人

労働者、帰国・渡日の子どもたちの教育・進路を保障するとりくみをすすめます。

4、義務教育費国庫負担制度の堅持と教職員定数の改善を中心とした94年度教育予算の大幅増額について具体的な要求を提出し、改善を求めて運動をすすめます。

(2) 基本的人権としての識字を保障するため、「国際識字年推進中央実行委員会」とともに夜間中学の増設、日本語学級、識字教室などの条件整備と制度化をすすめます。

3、平和・人権・環境と民主主義を守り、国際連帯を深めるとりくみ

2、平和・人権と民主主義を守り、核兵器の廃絶、軍縮をすすめます。

(8) 外国人登録法の抜本改正、教職員採用試験の国籍条項廃止に向けたとりくみをすすめます。また、朝鮮高級学校の高体連加盟、JR定期券割引改善、大学入試改善に努めます。

(11) 1993年「国際先住民年」の運動として、反差別国際運動の発展を期し、人権を守り、差別を許さないとりくみをすすめます。世界人権宣言、世界人権会議の成功に努めます。また、「アイヌ新法」についての学習を深め、制定にむけてとりくみます。

(2) 日韓外相会議「覚書」 教育協定

覚書

日本国政府及び大韓民国政府は、1965年6月22日に東京で署名された日本国に居住する大韓民国国民の法的地位及び待遇に関する日本国と大韓民国との間の協定（以下「法的地位協定」）

という。) 第2条1の規定に基づき、法的地位協定第1条の規定に従い日本国で永住することを許可されている者(以下「在日韓国人一世及び二世」という。)の直系卑属として日本国で出生した大韓民国国民(以下「在日韓国人三世以下の子孫」という。)の日本国における居住について、1988年12月23日の第1回公式協議以来累次にわたり協議を重ねてきた。

また、大韓民国政府は、1990年5月24日の盧泰愚大統領と海部俊樹総理大臣との間で行われた首脳会談等累次の機会において、1990年4月30日の日韓外相定期協議の際に日本国政府が明らかにした「対処方針」(以下「1990年4月30日の対処方針」という。)の中で示された在日韓国人三世以下の子孫についての解決の方向性を、在日韓国人一世及び二世に対しても適用してほしいとの要望を表明し、日本国政府は、第15回日韓定期閣僚会議等の場において、かかる要望に対しても適切な対応を行うことを表明した。

1991年1月9日及び10日の海部俊樹日本国内閣総理大臣の大韓民国訪問の際、日本側は、在日韓国人の有する歴史的経緯及び定住性を考慮し、これらの在日韓国人が日本国でより安定した生活を営むことができるようになることが重要であるという認識に立ち、かつ、これまでの協議の結果を踏まえ、日本国政府として今後本件については下記の方針で対処する旨を表明した。なお、双方は、これをもって法的地位協定第2条1の規定に基づく協議を終了させ、今後は本協議の開始に伴い開催を見合っていた両国外交当局間の局長レベルの協議を年1回程度を目途に再開し、在日韓国人の法的地位及び待遇について両政府間で協議すべき事項のある場合は、同協議の場で取り上げていくことを確認した。

記

1. 入管法関係の各事項については、1990年4月30日の対処方針を踏まえ、在日韓国人三世以下の子孫に対し日本国政府として次の措置をと

るため、所要の改正法案を今通常国会に提出するよう最大限努力する。この場合、(2)及び(3)については、在日韓国人一世及び二世に対しても在日韓国人三世以下の子孫と同様の措置を講ずることとする。

- (1) 簡素化した手続きで羈束的に永住を認める。
- (2) 退去強制事由は、内乱、外患の罪、国交、外交上の利益に係る罪及びこれに準ずる重大な犯罪に限定する。
- (3) 再入国許可については、出国期間を最大限5年とする。

2. 外国人登録法関係の各事項については、1990年4月30日の対処方針を踏まえ、次の措置をとることとする。

- (1) 指紋押捺については、指紋押捺に代わる手段を出来る限り早期に開発し、これによって在日韓国人三世以下の子孫はもとより、在日韓国人一世及び二世についても指紋押捺を行わないこととする。このため、今後2年内に指紋押捺に代わる措置を実施することができるよう所要の改正法案を次期通常国会に提出することに最大限努力する。指紋押捺に代わる手段については、写真、署名及び外国人登録に家族事項を加味することを中心に検討する。
- (2) 外国人登録証の携帯制度については、運用の在り方も含め適切な解決策について引き続き検討する。同制度の運用については、今後とも、在日韓国人の立場に配慮した、常識的かつ弾力的な運用をより徹底するよう努力する。

3. 教育問題については次の方向で対処する。

- (1) 日本社会において韓国語等の民族の伝統及び文化を保持したいとの在日韓国人社会の希望を理解し、現在、地方自治体の判断により学校の課外で行われている韓国語や韓国文化等の学習が今後も支障なく行われるよう日本国政府として配慮する。
- (2) 日本人と同様の教育機会を確保するため、保護者に対し就学案内を発給することについて、全国的な指導を行うこととする。

4. 公立学校の教員への採用については、その

途をひらき、日本人と同じ一般の教員採用試験の受験を認めるよう各都道府県を指導する。この場合において、公務員任用に関する国籍による合理的な差異を踏まえた日本国政府の法的見解を前提としつつ、身分の安定や待遇についても配慮する。

5. 地方公務員への採用については、公務員任用に関する国籍による合理的な差異を踏まえた日本国政府の法的見解を前提としつつ、採用機会の拡大が図られるよう地方公共団体を指導していく。

なお、地方自治体選挙権については、大韓民国政府より要望が表明された。

(署名)

中山太郎 日本国外務大臣

(署名)

李相玉 大韓民国外務部長官

1991年1月10日 ソウル

(3) 地方自治法

〔地方公共団体の事務〕

第二条 地方公共団体は、法人とする。

2 普通地方公共団体は、その公共事務及び法律又はこれに基く政令により普通地方公共団体に属するものの外、その区域内におけるその他の行政事務で国の事務に属しないものを処理する。

3 前項の事務を例示すると、概ね次の通りである。但し、法律又はこれに基く政令に特別の定があるときは、この限りでない。

一 地方公共の秩序を維持し、住民及び滞在者の安全、健康及び福祉を保持すること。

二 公園、運動場、広場、緑地、道路、橋梁、

河川、運河、溜池、用排水路、堤防等を設置し若しくは管理し、又はこれらを使用する権利を規制すること。

五 学校、研究所、試験場、図書館、公民館、博物館、体育館、美術館、物品陳列所、公会堂、劇場、音楽堂その他の教育、学術、文化、勧業に関する施設を設置し若しくは管理し、又はこれらを使用する権利を規制し、その他教育、学術、文化、勧業、情報処理又は電気通信に関する事務を行うこと。

六 病院、隔離病舎、療養所、消毒所、産院、住宅、宿泊所、食堂、浴場、共同便所、公益質屋、授産施設、救護施設等の保護施設、保育所、擁護施設、教護院等の児童福祉施設、老人ホーム等の老人福祉施設、身体障害者更生援護施設、留置場、屠場、じんかい処理場、汚物処理場、火葬場、墓地その他の保健衛生、社会福祉等に関する施設を設置し若しくは管理し、又はこれらを使用する権利を規制すること。

九 未成年者、生活困窮者、病人、老衰者、寡婦、身体障害者、浮浪者、精神異常者、めいてい者等を救助し、援護し若しくは看護し、又は更生させること。

十 労働組合、労働争議の調整、労働教育その他労働関係に関する事務を行うこと。

第二章 住民

〔住民の資格及び権利義務〕

第一〇条 市町村の区域内に住所を有する者は、当該市町村及びこれを包括する都道府県の住民とする。

② 住民は、法律の定めるところにより、その属する普通地方公共団体の役務の提供をひとしく受ける権利を有し、その負担を分任する義務を負う。

(4) 自治体の外国人教育方針リスト

在日外国人教育方針および指導指針等

制定年月日	制定(発出)者	表題 一 副題一
1970	大阪市教育委員会	「外国人教育」(学校教育指針内)
1974	大阪市教育委員会	「外国人子弟(主として在日する韓国人・朝鮮人子弟)の教育」(「初めて教壇に立つ人のために」)
1974	高槻市教育委員会	「在日朝鮮人問題に関する教育方針」
1978	大阪市教育委員会	「在日外国子女教育」—主として在日する韓国人・朝鮮人の子どもー(冊子)
1979	大阪府教育委員会	(市町村教委への要望事項10)「在日外国人の教育について配慮すること」
1980.9.19	豊中市教育委員会	「豊中市在日外国人教育基本方針—主として韓国・朝鮮人児童・生徒の教育」
1981.3.23	東京都教育庁指導部長	「公立学校に在学する在日外国人児童・生徒にかかる教育指導について」
1981.10	京都市外国人教育研究推進委員会	「外国人教育の基本方針」(試案)
1982.4.1	東大阪市教育委員会	「在日外国人園児・児童・生徒に関する教育方針—主として、在日韓国・朝鮮人園児・児童・生徒ー」
1982.4	摂津市教育委員会	「在日朝鮮人(韓国籍・朝鮮籍を含む)児童・生徒に関する教育指針」
1982.5.6	高槻市教育委員会	「在日韓国・朝鮮人問題取り組みについての教育基本方針」
1983.3.31	上福岡市教育委員会	「上福岡市在日韓国・朝鮮人児童にかかる教育基本方針について」
1983.5.19	吹田市教育委員会	「吹田市在日外国人教育指針—主として韓国・朝鮮人児童・生徒の教育ー」
1984.4.1	貝塚市教育委員会	「在日外国人(主として韓国・朝鮮人)教育に関する教育指針」
1985.4.5	川崎市教育委員会	「川崎市外国人教育基本方針」(試案) —主として在日韓国・朝鮮人教育ー
1986.6.6	奈良県教育委員会	「在日外国人(主として韓国・朝鮮人)児童・生徒に関する教育指針」
1987.4.20	広島県教育委員会	「在日外国人児童生徒の教育に関する基本的な考え方について」
1987.6.20	広島県教育委員会	「在日外国人児童生徒の教育について(案)」 —主として在日韓国・朝鮮人児童生徒の教育を中心に—

制定年月日	制定(発出)者	表題一 副題
1988.3	神奈川県国際理解研究協議会	「学校における今後の国際理解教育の推進について」 －在日外国人(主として韓国・朝鮮人)児童生徒にかかる教育を中心に
1988.4.1	宝塚市教育委員会	(宝塚の教育－指導助言の方針)「在日外国人教育について」
1988.6	高砂市教育委員会	「在日外国人に対する偏見をなくすために」
1988.7	大阪府教育委員会	「在日韓国・朝鮮人問題に関する指導のために」
1989.4.1	茨木市教育委員会	「在日外国人教育基本方針」－主として韓国・朝鮮人児童・生徒の教育－
1990.1.26	加古川市教育委員会	「在日韓国・朝鮮人(在日外国人)児童・生徒に関する教育の指針について」
1990.3.5	神奈川県立高等学校	「川崎高校在日外国人(主として韓国・朝鮮人)生徒教育基本方針」
1990.3	大東市教育委員会	「在日韓国・朝鮮人教育に関する基本指針」
1990.3.23	神奈川県教育委員会	「在日外国人(主として韓国・朝鮮人)生徒教育基本方針」
1990.3.30	摂津市教育委員会	「摂津市在日外国人教育基本方針」 －主として在日する韓国・朝鮮人児童・生徒の教育－
1990.4.1	池田市教育委員会	「池田市外国人教育指針」－主として在日韓国・朝鮮人児童・生徒の教育－
1990.6	八尾市教育委員会	「八尾市在日外国人教育基本指針」
1991.6.11	横浜市教育委員会	「在日外国人(主として韓国・朝鮮人)にかかる教育の基本方針」
1991.9	神戸市教育委員会	「在日外国人児童生徒にかかる指導について」(冊子)

上記の表内にはのりませんでしたが大阪市教育委員会のように学校教育指針等の中に明記されているところとして、三重県、青森県、兵庫県などがあげられている。

(5) 国際条約

① 国際人権規約

経済的、社会的および文化的権利に関する国際規約(A規約)

第2部(一般規定)

第2条(国家の一般的義務)

2 この規約の締結国は、この規約に規定する権利が人権、皮膚の色、性、言語、宗教、政治

的意見その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、出生又はその他の地位によるいかなる差別もなしに試行されることを保障することを約束する。

第13条(教育)

1 この規約の締結国は、教育についてのすべての者の権利を認める。締結国は、教育が人格の完成および人格の尊厳についての意識の十分な発達を指向し並びに人権及び基本的自由の尊重を強化すべきことに同意する。更に、締結国は、教育が、すべての者に対し、自由な社会に

効果的に参加すること、諸国民の間および人種的、種族的又は宗教的集団の間の理解、寛容、及び友好を促進すること並びに平和の維持のための国際連合の活動を助長することを可能にすべきことに同意する。

2 この規約の締結国は、1の権利の完全な実現を達成するため次のことを認める。

(a) 初等教育は、義務的なものとし、すべての者に対して無償のものとすること。

(b) 種々の形態の中等教育（技術的及び職業的中等教育を含む。）は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、一般的に利用可能であり、かつすべての者に対して機会が与えられるものとすること。

(c) 高等教育は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、能力に応じ、すべての者に対して均等に機会が与えられるものとすること。

(d) 基礎教育は、初等教育を受けなかった者又はその全課程を修了しなかった者のため、できる限り奨励され又強化されること。

(e) すべての段階にわたる学校制度の発展を積極的に追求し、適当な奨学金制度を設立し及び教育職員の物質的条件を不斷に改善すること。
3 この規約の締結国は、父母及び場合により法定保護者が、公の機関によって設置される学校以外の学校であって国によって定められ又は承認される最低限度の教育上の基準に適合するものを児童のために選択する自由並びに自己の信念に従って児童の宗教的及び道徳的教育を確保する自由を有することを尊重することを約束する。

4 この条約のいかなる規定も、個人及び団体が教育機関を設置し及び管理する自由を妨げるものとして解してはならない。ただし、常に、1に定める原則が遵守されること及び当該教育機関において行われる教育が国によって定められる最低限度の基準に適合することを条件とする。

市民的および政治的権利に関する国際規約

（B 規約）

第3部（実態規定）

第24条（児童の権利）

1 すべての児童は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、国民的若しくは社会的出身、財産又は出生によるいかなる差別もなしに、未成年者としての地位に必要とされる保護の措置であつて家族、社会及び国による措置についての権利を有する。

2 すべての児童は、出生の後直ちに登録され、かつ、氏名を有する。

3 すべての児童は、国籍を取得する権利を有する。

第26条（法律の前の平等）

すべての者は、法律の前に平等であり、いかなる差別もなしに法律による平等の保護を受ける権利を有する。このため、法律はあらゆる差別を禁止し及び人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国際的若しくは社会的出身、財産、出生又は他の地位等のいかなる理由による差別に対しても平等かつ効果的な保護をすべての者に保障する。

第27条（少数民族の権利）

種族的、宗教的又は言語的少数民族が存在する国において、当該少数民族に属する者は、その集団の他の構成員とともに自己の文化を享有し、自己の宗教を信仰しつつ実践し又は自己の言語を使用する権利を否定されない。

② 人種差別撤廃条約

あらゆる形態の人種差別撤廃に関する国際条約（人種差別撤廃条約）

第1部（実体規定）

第1条（人種差別の定義）

1 この条約において、「人種差別」とは、人種、皮膚の色、門地又は国民的出身若しくは種族的出身に基づくあらゆる区別、排除、制限又は特恵であつて、政治的、経済的、社会的、文化的又はその他すべての公的生活分野における人権

及び基本的自由の平等な立場における承認、享有又は講師を無効にし若しくは害する目的又は効果を有するものをいう。

2 この条約は、この条約の締結国が市民権を持つ者と持たない者の間に設ける区別、排除、制限または特恵については適用しない。

3 この条約のいかなる定規も、国籍、市民権又は帰化に関する締結国の法規にいかなる影響を及ぼすものと解することはできない。ただし、そのような法規が、特定の国籍に対して差別していない場合に限る。

4 人権及び基本的自由の平等な享有又は行使を確保するために、必要な保護を求めている特定の人種的若しくは種族的集団又は個人の十分な進歩をもたらすことを唯一の目的として取られる特別措置は、人種差別とみなされない。ただし、そのような措置は、その結果として、異なる人種的集団に別個の権利を維持させることにならず、その目的が達成された後は継続させてはならない。

第2条〔締約国の差別撤廃義務〕 1 締約国は、人種差別を非難し、かつ、あらゆる形態の人種差別を撤廃し、及び、すべての人種間の理解を促進する政策を、あらゆる適切な手段により遅滞なく遂行することを約束する。このため、

(a) 各締約国は、個人、個人の集団又は機関に対する人種差別のいかなる行為又は慣行にも従事しないこと、並びに、国及び地方のすべての公の当局及び公の機関がこの義務に従って行動することを確保することを約束する。

(b) 各締約国は、いかなる個人又は団体による人種差別も後援し、擁護し又は支持しないことを約束する。

(c) 各締約国は、政府、国及び地方の政策を再検討し、並びに、いかなる場所であれ人種差別を創出し又は永続化する効果を有する法律及び規則を改正し、廃止し又は無効にするため、効果的な措置をとる。

(d) 各締約国は、あらゆる適当な手段（事情

により必要なときは立法を含む。）により、いかなる個人、集団又は団体による人種差別をも、禁止し、かつ、終らせる。

(e) 各締約国は、適當な場合には、人種融合を目的とする多人種間の団体及び運動並びに人種間の障壁を除去するための他の手段を奨励し、かつ、人種的分断を強化するいかなる動きも抑止することを約束する。

2 締約国は、事情が正当化する場合には、締約国に属する特定の人種的集団又は個人に人種及び基本的自由の完全かつ平等な享有を保障することを目的として、社会的、経済的、文化的その他の分野において、その集団又は個人の十分な発展及び保護を確保する特別のかつ具体的な措置をとる。ただし、これらの措置は、いかなる場合にも、その結果として、目的が達成された後、異なる人種的集団に対して不平等な又は別個の権利を維持させることになってはならない。

第5条〔法律の前の平等、権利享有の無差別〕

締約国は、この条約の第2条に定める基本的義務に従い、あらゆる形態の人種差別を禁止しかつ撤廃し、及び、人種、皮膚の色、国民的又は種族的出身による差別なく、特に次の諸権利の享有について、すべての者の法律の前の平等の権利を保障することを約束する。

(a) 法廷その他すべての司法機関において平等な取扱いを受ける権利

(b) 公務員又はいかなる個人集団若しくは団体のいずれによって加えられるかを問わず、暴力行為又は身体への危害に対して国家による身体の安全及び保護を受ける権利

(c) 政治的権利、特に、普通かつ平等の選挙権に基づき、投票及び立候補によって選挙に参加し、政府並びにすべての段階における政治に参与し、公務に平等につく権利

(d) その他の市民的権利、特に、

(I) 国境内における移動及び居住の自由についての権利

(II) いずれの国（自国を含む。）からも

- 離れ、及び、自国に戻る権利
- (III) 国籍についての権利
- (IV) 婚姻及び配偶者の選択についての権利
- (V) 単独で又は他の者と共同して財産を所有する権利
- (VI) 相続する権利
- (VII) 思想、良心及び宗教の自由についての権利
- (VIII) 言論及び表現の自由についての権利
- (IX) 平和的集会及び結社の自由についての権利
- (e) 経済的、社会的及び文化的権利、特に、
 - (I) 労働、職業の自由な選択、公正かつ良好な労働条件、失業に対する保護、同一の労働に対する同一の報酬及び公正かつ有利な報酬についての権利
 - (II) 労働組合を結成し加入する権利
 - (III) 住宅についての権利
 - (IV) 公衆衛生、医療、社会保障及び社会奉仕についての権利
 - (V) 教育及び訓練を受ける権利
 - (VI) 文化的活動に平等に参加する権利
- (f) 交通運輸機関、ホテル、飲食店、喫茶店、劇場、及び公園などの一般公衆による使用を目的とするあらゆる場所又は役務を利用する権利

第6条 [人種差別に対する救済]

締約国は、その管轄内にあるすべての者に対し、権限のある国内裁判所及びその他の国家機関によって、この条約に反して人種及び基本的自由を侵すあらゆる人種差別行為に対する効果的な保護及び救済措置、並びに、そのような差別の結果被ったあらゆる損害に対する正当かつ十分な補償又は賠償を求める権利を保障する。

第7条 [人種差別に対する闘いと教育]

締約国は、人種差別に導く偏見と闘い、諸国家間及び人種的又は種族的集団の間における理解、寛容及び友好を促進し、並びに国際連合憲章の目的と原則、世界人権宣言、あらゆる形態

の人種差別撤廃に関する国際連合宣言及びこの条約を普及させるために、特に、授業、教育、文化及び情報の分野において即時のかつ効果的な措置をとることを約束する。

③ 教育における差別を禁止する条約

1960年12月14日

第11回ユネスコ総会採択

第1条 1 本条約の適用上、「差別」とは、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的もしくは社会的出身、経済条件または出生に基づいて、教育における取扱いの均等を無にしたまは損なう目的または効果、およびとくに次の目的または効果を有するあらゆる区別、除外、制約または優先を含む。

(a) いずれかの人または人の集団にいずれかの種類または段階の教育を受ける機会を奪うこと。

(b) いずれかの人または人の集団に劣等な水準の教育の機会しか与えないこと。

(d) いずれかの人または人の集団に人間の尊厳と両立しない条件を課すこと。

第3条 本条約の意味における差別を撤廃し防止するために、本条約当事国は次のことを約束する。

(a) 教育における差別を含蓄するいかなる法令上の規定およびいかなる行政上の訓令をも廃止しあつそうしたいかなる行政上の慣行をも中止すること。

(b) 必要なときは立法によって、教育機関への生徒の受け入れについて無差別を保障すること。

(d) 公の当局が教育機関に供与するいかなる形式の援助についても、生徒が特定の集団に属するという理由のみによって行ういかなる制約または優先をも許さないこと。

(e) 自国領域内に居住する外国人に自国民に与えると同一の教育上の機会を与えること。

第4条 本条約当事国はさらに、情況と国内的

慣例とに適した方法により、教育に関する機会と取扱いとの平等を助長しつゝに次のことをめざす国の政策を策定し、発展させおよび適用することを約束する。

(a) 初等教育を無償で義務的なものとし、異なる形式の中等教育を一般にすべての者が利用できかつ受けができるようにし、高等教育を個人的能力に基づいてすべての者が平等に受けができるようにし、法律によって定められた就学義務にすべての者が従うことを保障すること。

(b) 教育水準が同一段階のすべての公立の教育機関において同等であり、かつ授けられる教育の質に関する条件もまた同等であることを保障すること。

(c) いかなる初等教育も受けていないか初等教育の全課程を終了してはいない者の教育および個人的能力に基づくその教育の継続を適当な方法によって奨励しおよび強化すること。

(d) 教職のための訓練を差別なく与えること。
第5条 1 本条約当事国は次のこととに同意する。

(c) 民族的少数者に属する者が、自己の教育活動（学校の維持、および、各国の教育政策のいかんによっては、自己の言語の使用または教授を含む）を行う権利を承認することが肝要であること。ただし、

(I) この権利は、この少数者に属する者が社会全体の文化および言語を理解しその活動に参加することを妨げ、または国家主権を害するような方法では行使されず、

(II) 教育水準は権限ある当局が規定または承認する一般的水準より低くなく、かつ

(III)かかる学校への就学は任意的であるものとする。

④ 子どもの権利条約

第1条（子どもの定義）

この条約の適用上、子どもとは、18才未満の

すべての者をいう。ただし、子どもに適用される法律の下でより早く成年に達する場合は、この限りでない。

第2条（差別の禁止）

1 締約国は、その管轄内にある子ども一人一人に対して、子どもまたは親もしくは法定保護者の人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的、民族的もしくは社会的出身、財産、障害、出生またはその他の地位にかかわらず、いかなる種類の差別もなしに、この条約に掲げる権利を尊重しつゝ確保する。

2 締約国は、子どもが、親、法定保護者または家族構成員の地位、活動、表明した意見または信条を根拠とするあらゆる形態の差別または処罰からも保護されることを確保するためにあらゆる適当な措置をとる。

第7条（名前・国籍を得る権利、親を知り養育される権利）

1 子どもは、出生の後直ちに登録される。子どもは、出生の時から名前を持つ権利および国籍を取得する権利を有し、かつ、できるかぎりその親を知る権利および親によって養育される権利を有する。

2 締約国は、とくに何らかの措置をとらなければ子どもが無国籍になる場合には、国内法および当該分野の関連する国際文書に基づく自国の義務に従い、これらの権利の実施を確保する。

第10条（家族再会のための出入国）

1 家族再会を目的とする子どもまたは親の出入国の申請は、第9条1に基づく締約国の義務に従い、締約国によって積極的、人道的および迅速な方法で取扱われる。締約国は、さらに、当該申請の提出が申請者および家族の構成員にいかなる不利な結果もたらさないことを確保する。

2 異なる国々に居住する親をもつ子どもは、例外的な状況を除き、定期的に親双方との個人的関係および直接の接触を保つ権利を有する。締約国は、この目的のため、第9条1に基づく締約国の義務に従い、子どもおよび親が自国を

含むいずれの国からも離れ、自国へ戻る権利を尊重する。いずれの国からも離れる権利は、法律で定める制限であって、国の安全、公の秩序、公衆の健康もしくは道徳、または他の者の権利および自由の保護のために必要とされ、かつこの条約において認められる他の権利と抵触しない制限のみに服する。

第17条（適切な情報へのアクセス）

締約国は、マスメディアの果たす重要な機能を認め、かつ、子どもが多様な国内的および国際的な情報源からの情報および資料、とくに自己の社会的、精神的および道徳的福祉ならびに心身の健康の促進を目的とした情報および資料へアクセスすることを確保する。この目的のため、締約国は、次のことをする。

- (a) マスメディアが、子どもにとって社会的および文化的利益があり、かつ第29条の精神と合致する情報および資料を普及する事を奨励すること。
- (b) 多様な文化的、国内的および国際的な情報源からの当該情報および資料の作成、交換および普及について国際協力を奨励すること。
- (c) 子ども用図書の製作および普及を奨励すること。
- (d) マスメディアが、少数民族集団に属する子どもまたは先住民である子どもの言語上のニーズをとくに配慮することを奨励すること。
- (e) 第13条および第18条の諸条項に留意し、子どもの福祉に有害な情報および資料から子どもを保護するための適当な指針の発展を奨励すること。

第22条（難民の子どもの保護・援助）

1 締約国は、難民の地位を得ようとする子ども、または、適用可能な国際法および国際手続または国内法および国内手続に従って難民とみなされる子どもが、親または他の者の同伴の有無にかかわらず、この条約および自国が締約国となっている他の国際人権文書または国際人道文書に掲げられた適用可能な権利を享受するにあたって、適当な保護および人道的な援助を受け

ることを確保するために適当な措置をとる。

2 この目的のため、締約国は、適当と認める場合、国際連合および他の権限ある政府間組織または国際連合と協力関係にある非政府組織が、このような子どもを保護しあつ援助するためのいかなる努力にも、および、家族との再会に必要な情報を得るために難民たる子どもの親または家族の他の構成員を追跡するためのいかなる努力にも、協力をする。親または家族の他の構成員を見つけることができない場合には、子どもは、何らかの理由により恒常にまたは一時的に家庭環境を奪われた子どもと同一の、この条約に掲げられた保護が与えられる。

第28条（教育への権利）

1 締約国は、子どもの教育への権利を認め、かつ、漸進的および平等な機会に基づいてこの権利を達成するために、とくに次のことをする。

- (a) 初等教育を義務的なものとし、かつすべての者に対して無償とすること。
- (b) 一般教育および職業教育を含む種々の形態の中等教育の発展を奨励し、すべての子どもが利用可能でありかつアクセスできるようにし、ならびに、無償教育の導入および必要な場合には財政的援助の提供などの適当な措置をとること。
- (c) 高等教育を、すべての適当な方法により、能力に基づいてすべての者がアクセスできるものとすること。

(d) 教育上および職業上の情報ならびに指導を、すべての子どもが利用可能でありかつアクセスできるものとすること。

(e) 学校への定期的な出席および中途退学率の減少を奨励するための措置をとること。

2 締約国は、学校懲戒が子どもの人間の尊厳と一致する方法で、かつこの条約に従って行われることを確保するためにあらゆる適当な措置をとる。

3 締約国は、とくに、世界中の無知および非識字の根絶に貢献するために、かつ科学的およ

び技術的知識ならびに最新の教育方法へのアクセスを助長するために、教育に関する問題について国際協力を促進しあつ奨励する。この点については、発展途上国のニーズに特別の考慮を払う。

第29条（教育の目的）

1 締約国は、子どもの教育が次の目的で行われることに同意する。

(a) 子どもの人格、才能ならびに精神的および身体的能力を最大限可能なまで発達させること。

(b) 人権および基本的自由の尊重ならびに国際連合憲章に定める諸原則の尊重を発展させること。

(c) 子どもの親、子ども自身の文化的アイデンティティ、言語および価値の尊重、子どもが居住している国および子どもの出身国の国民的価値の尊重、ならびに自己の文明と異なる文明の尊重を発展させること。

(d) すべての諸人民間、民族的、国民的および宗教的集団間ならびに先住民間の理解、平和、寛容、性の平等および友好の精神の下で、子どもが自由な社会において責任ある生活を送れるようにすること。

(e) 自然環境の尊重を発展させること。

2 この条または第28条のいかなる規定も、個人および団体が教育機関を設置しあつ管理する自由を妨げるものと解してはならない。ただし、つねに、この条の1に定める原則が遵守されること、および当該教育機関において行われる教育が国によって定められる最低限度の基準に適合することを条件とする。

第30条（少数者・先住民の子どもの権利）

民俗上、宗教上もしくは言語上の少数者、または先住民が存在する国においては、当該少数者または先住民に属する子どもは、自己の集団の他の構成員とともに、自己の文化を享受し、自己の宗教を信仰しあつ実践し、または自己の言語を使用する権利を否定されない。

⑤ 移住労働者とその家族の人権保護条約

第24条 あらゆる移住労働者とその家族は、すべての場所において、法律の前に人として認められる権利を有する。

第29条 移住労働者の子どもは、氏名、生誕の登録、国籍に対する権利を有する。

第30条 移住労働者の子どもは、その国の国民と平等な待遇を基礎に教育を受ける基本的な権利を有する。その者の公立幼稚園及び学校への入学の要求は、両親のいずれかの在留ないし就業が不正規であることまたは就業国でのその子どもの在留が不正規であることを理由に拒否されなければならない。

第31条 1 締約国は、移住労働者とその家族の文化的独自性の尊重を確保する措置をとるとともに、その者たちが出身国との文化的つながりを維持することを妨げてはならない。

2 締約国は、この努力を助長し、促進させる適切な措置をとる。

第32条 移住労働者とその家族は、就業国での在留が終了したときに、所得、貯蓄及び、国内法に従うことの条件として、家財及び所持品を移送する権利を有する。

第33条 1 移住労働者とその家族は、以下の事項に関する、出身国、就業国、通過国のうちの関係する国から、情報の告知を受ける権利を有する。

(a) この条約により生じる権利

(b) その国における入国の条件、その者の権利と義務、法律と慣習並びにその者が行政手続きその他の手続きに従うこと可能にするためのその他の事項

2 締約国は、前項の情報の普及または雇用者、労働組合及びその他の適切な団体や組織による情報提供を確保するのにふさわしいあらゆる措置をとらねばならない。適切な場合には、他の関係国と協力するものとする。

3 移住労働者とその家族が要求したときは、

適切な情報が無償で与えられなければならず、可能な限り、その者の理解できる言語で提供されるものとする。

第45条 1 移住労働者の家族は、以下のものの利用、参加について、就業国の国民と平等に待遇されるものとする。

(a) 教育施設及び教育事業。これは当該施設及び事業の入学要件及びその他の規則に従うことを条件とする。

(b) 職業指導並びに職業訓練施設及び制度。これは参加資格に適合することを条件とする。

(c) 社会、保険事業。これは当該事業の参加資格に適合することを条件とする。

(d) 文化活動事業

2 就業国は適切な場合は出身国と協力して、移住労働者の子どもが地域の学校に入学し、とくに地域の言語を学ぶことを容易にする政策を遂行することとする。

3 就業国は、移住労働者の子どもに対する母語及び出身国の文化の教育を促進するよう努力し、出身国は適切な場合いつでもこれに協力するものとする。

4 就業国は、必要なときは出身国の協力を得て、移住労働者の子ども向けに、母語による特別教育課程を設けることができる。

教育総研 理論フォーラム

No. 1	「世界の激動の中で、いま日本の教育を問う」 日高六郎 鎌倉孝夫 増田裕司 海老原治善 銀林浩 小沢有作 嶺井正也	
No. 2	「家庭と子ども・青年の文化」 第1委員会 <子どもと文化、家庭と学校のかかわり> 中間報告	
No. 3	「学びの原点から見直す—学校5日制と教育課程」 第2委員会 <学校5日制と教育課程> 中間報告	
No. 4	「『豊かな社会』と学校間格差の中で—現代日本の高校教育」 第3委員会 <高校・大学教育改革と入試改善> 中間報告	
No. 5	「公教育費確保の新たな枠組みづくりを求めて」 第4委員会 <教育条件改善と行財政> 中間報告	
		No. 1～5 各1000円
No. 6	「学校・家庭・文化を衝く 子どもたちの現在」 第1委員会最終報告	1500円
No. 7	「学びの原点に近づく—これならいける学校5日制」 第2委員会最終報告	1500円
No. 8	「変貌する社会と高校教育改革」 第3委員会最終報告	1700円
No. 9	「教育地方自治確立をめざして—教育行財政システムの改革—」 第4委員会最終報告	1200円
No. 10	「E C統合と教育改革」 調査団報告	価格未定
No. 11	「せんせい、私たちの気持ちをよく聞いて」—民族的少数者からの提言 <国際教育研究委員会> 中間報告	2500円
No. 12	「地域からの教育改革」 <地域教育改革研究委員会> 中間報告	1500円